
生まれ変わって恐暴竜？

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わって恐暴竜？

【Nコード】

N9674V

【作者名】

フランク・ホリガン

【あらすじ】

とあるマヌケな神さまのミスで、青年がしょうもない死に方をしてしまいました

申し訳なく思った神さまは、青年を、青年が望む世界に転生させることを約束しました

青年は大好きなモンスターハンターを選び、神さまはそれを承諾して、青年を狩りの世界へと転生させました

青年は期待感を膨らませ、いざハンター生活を開始する決意をしました

なのに……

は……ハンターではなくて、モンスター!?

しかも何故に恐暴竜イビルジョー!?

ユクモ村でハンターちゃんとの混浴の野望は!?
体デカくて入れない!

ポケケ村でキリン装備ハンターちゃんとの触れ合いは!?

当然無理!

触れ合うどころか、命を賭けた殺し合いになるわ！

第一話：転生

ふと目が覚めると、俺は真っ白の部屋にいた

どこまでも続く真っ白な空間に俺は困惑したが、結局夢だろうと結論づけてもう一寝入りすることにした

『夢やあらへんで。』

『ここはあの世とこの世の境目や。』

へえへえ、それはたいそうな夢ですね……って、誰の声？

俺はその場から飛び起き、声がした方を見ると、白装束のちっこい幼女が、杖を持って佇んでいた

『…お前今ウチのことバカにしたやろ？
ウチこつ見えてな、神さまの一員なんやで？』

この歳で自分を神さまだと勘違いしてるのか…
そうだね、神さまはきつとどこかにいるよ

『お前信じてないやろ…』。

まあええ、お前なんぞに信用されようがされまいが、ウチにはどうでもええしな。

さて、本題や。

実をいうとな、自分さっき死んだんや。』

なんだこのクソガキは…自分が今まで会ったなかで、最高に生意気だ

…って今コイツなんて言った？

俺が死んだ？

『せや、自分がマヌケ面で寝てるはりに、ダンスの角に頭ぶつけてお陀仏や。』

ハハハハ、この幼子は何を言ってるんだい？

俺はこんなにもピンピンしてるじゃないか

とか思っていると、神さまは俺に大きな鏡を向けて来た

その鏡に映った自分の体を見て、俺は心臓が飛び出るくらい驚いた
鏡に映っていたのは俺の人間の体でなく、黄緑色の火の玉みたいな
物体だった

俺「ギャアアアア！
なんじゃこりゃー!?!」

俺は絶叫して慌てふためき、その場をグルグルと走り回る（浮かび
回る？）

試しにもう一度鏡を見てみたが、変わらず黄緑色の火の玉であった

俺「マジで俺死んじゃったの？

この若さで死ぬなんて、未練ありまくりだよ？

まだワンピ スの結末見てないし、FF全部クリアしてないよ!？」

『ちっさい未練やなあ。』

それもこれも、全部ウチが悪いんやけどな。

許したって?』

神さまとやらはいきなり俺に謝ってきたが、俺は分けが分からず戸惑う

さっきの生意気な態度と変わって、神さまはスゴく申し訳なさそうに謝罪してくるが、話しが分からないので事情を説明してもらおう

『ウチら神さまの世界には、運命の糸うちゅう…まあ、命を繋いどく糸があんねや。』

糸はそいつの寿命を迎えたら勝手に切れるんやけど、ウチが間違っ
てすつ転んで一本切れたんやわ…。』

俺「その一本が…俺の糸だったわけ?」

神さまはたいそう申し訳なさそうにこくつと頷いた

こんな有り得ない話しは信用出来なかったが、鏡で見た自分の姿と、さつき床にぶつかった痛みが、夢ではないことを証明していた

自分が死んだという実感を持ってない俺だったが、胸に穴が空いたよ
うなひどい喪失感を覚えた

神さまはそんな俺を見かねてか、ある解決案を持ち出してきた

『自分死んだのはウチの責任やからな…。
詫びとして、自分が大好きな世界に転生させたるわ！

こん中から選んでな！』

絶望に沈んでいた俺に、神さまは精いっぱい笑顔を向け、どこか
らか風呂敷を取り出した

神さまは風呂敷の中身である、漫画やゲームソフトを雑にぶちまけた

あれ？どれもこれも見覚えあるぞ？

北斗 拳にるろ に剣心、キン肉 ン、G T AにF a i l l o u t 3
だと？

全部俺の部屋にあったもんじゃねえか！

『おう、自分に合ったもんウチが選り抜いてきたわ。
参考になる現物あった方が、転生もしやすくてな！』

分かった…勝手に持ち出してきたことは不問にしよう…

だけど、選り抜いた作品全部物騒な世界観じゃねえかああ！

北斗 拳…ラ ウとサウ ーに瞬殺されるわ！

るろ に剣心…一太刀で斬られるのがオチだ！

キン肉 ン…悪 将軍に地獄の断頭台されるか、ネプ ユー ンマン
のクロ ボンバーくらうわ！

G T A…車パクって刑務所行きか！？

つてか、こんな現実世界でもやろうとすれば出来るわ！
絶対やらないけど…

Failout3…まだクリアしてないから分からんけど、変わらず物騒だ！

俺「他にもあつたじゃないか！
穏やかな世界観のヤツとか、何より美少女がいるような作品が！」

『ん？　ウチの趣味や。』

俺の願望は神さまに一蹴され、俺はガツクリとうなだれた

ふと、風呂敷の端に隠れていた未確認のゲームソフトがあった

モンスターハンターポータブル

人間であるハンターが、自分よりも大きく強力なモンスターを狩るという、俺が最もはまったゲームの一つだった

友人のすすめで俺は2ndからやり始め、その後の3rdまでかなりやり込んだ

これも他と同じように物騒といえば物騒だが、俺には大きな魅力があった

一部女性ハンターの装備が、とてもセクシーなのだ

2ndから2ndGまではキリン装備に興奮し、なんと3rdには
混浴風呂があるではないか！

こんなにもおいしい世界を忘れていたとは！

俺は迷わずモンハンのソフトを引っ張り出し、神さまに見せつけた

『お、モンハンやん。』

ウチもちよつとやらしてもらったんやけど、けっこつおもろかった
で！

ヨッシャ、これならウチもやりがいがあるってもんや！』

ヒヤッホー！

モンハンの世界に行けるなら、現実世界の未練なんて砂の小粒ほどだ！

待ってるよキリン娘ちゃん！

ポケ村からユクモ村に連れて行って、混浴風呂に入ってるぜ！

『なんやよう分からんけど、えらい意気込みやな！

…せや、詫びの品追加するわ。

自分があっち行って苦労せんよう、身体能力その他もろもろ強くしたる！

ただチート臭いほどじゃなくて、程よく最強やから注意したってな？

ほな、眩しいから目瞑ってちょうだいな。

次目覚めたら…転生や。』

俺は言われた通りに目をつむると、全身が光に包まれてポカポカしていくのを感じた

そして、徐々に意識は薄れていった

『一仕事完了やな！』

……しもつた！

何に転生さすか決めてなかったわ、どうしよう!？

まあええか、なんに転生したかて腕っぷしは強いさかい。

……さ、ナルガ倒しても行ってこよ。』

第二話：スパルタ親父の息子

海にプカプカと浮かんでいるような、心地よい感覚を抱いてウトウトしている、甘い感覚が一気に叩き落とされる

全身にだるさを感じながら目を開けるが、光が少しもなく、目には闇しか映らなかった

状況を確認すべく立とうとしたが、脳天が硬い壁のようなものにぶつかり、とてつもない痛みを感じた

しかしそのおかげで、壁のようなものに亀裂が入り、そこから明るい光が差し込んできた

「一体何だっただ？声の調子もおかしいし…。」

この時俺は気づいてなかった

俺の喉から発せられたその声が、今まで使い慣れていた声ではないことを…

俺は亀裂が入った壁を蹴り破り、そこから頭を突き出した

周囲は白い岩石で覆われた、大きな洞窟だった

しばらく呆けて洞窟を見つめていたが、頭上から妙な音がしたので見上げてみると……

グルルルル……

凶悪な顔立ちで黒緑の体色をした、恐竜みたいなデカイモンスターが、唾液を垂れ流して俺を見つめていた

「（ギヤアアアア！！
出たあああ！

いきなりモンスター出たあ！！」

俺はその場から一気に飛び出すと、光の差し込む洞窟出口に一目散

に駆け出した

俺は足下の尖った石にかまわず、懸命に逃げたが、ちっこい俺はあえなく捕まって元の場所に戻されてしまった

(よ、よく見たらイビルジョーじゃねえかよ……。怖いよう、俺の転生人生いきなりお終いかよお！？)

俺は目の前の恐ろしいモンスターに恐怖し、ガタガタと震え上がっていた

イビルジョーは俺を保存食としてとっているのか、いたぶって反応を楽しんでいるのか、満足げに眺めている

どちらにしても、殺る時はひとおもいに仕留めて欲しかった

しばらくその状態が続き、イビルジョーが俺でなく、俺を含めたその周りを眺めていることに気付いた

恐怖でイビルジョーからなかなか目を離せなかったが、徐々に自分の周りへと視線を向けた

そこには、ゴツい形状の卵が、数個乱雑してあった

俺をエサにする気だ　　そう思った時にはすでに遅く、卵にひびが入り始めた

『ギャー、ギャーギャー!!』

卵から次々とイビルジョーベイビーが誕生していき、金切り声のような産声をあげていった

イビルジョーの凶悪な面構えはしっかり受け継いでおり、お世辞にも可愛いとは決して言えない

俺は邪悪な赤子から後ずさりしていくが、背後の親玉を思い出し、
反射的に振り返る

イビルジョーは子どもたちを満足げに眺めた後、わきにいる生け捕
りにした草食獣を踏み殺す

そしてその肉を喰い干切ると、何故かその肉を俺とベイビーたちの
間に放り投げてきた

たったいま殺したばかりの獣の肉は、新鮮な血が滴り落ちていた

しかしその時の俺には、何故かその生肉が、とても美味そうに見え
たのだった

そして、抑えきれない食欲に俺は負け、がむしゃらに肉にかぶりつ
いた

噛めば噛むほどに血が滲み出るが、それすらも美味に感じ、あつと

いう間に食べ終えてしまった

肉を食べ終えた俺に、イビルジョーは即座に新たな肉を放り投げた
きた

俺の腹は肉ひとかけらで満足してはなく、その投げられた肉をも食べようとしたが、頭が覚醒したベイビーたちが先にその肉にかぶりつく

目の前の食料を奪われた俺は、今まで抱いたことが内ほどの怒りを感じた

怒りに突き動かされ、肉を喰うベイビーに強力な体当たりを浴びせた

一匹が吹き飛ばされ、生まれたてのヤワな体に大きな衝撃をくらったために、首を折って絶命した

食事を邪魔された他の二体が怒るが、ほとんど残っていない肉を見て、さらに俺は激怒した

俺に襲いかかってきた二頭のベイビーの喉を、目にも止まらぬ速さで喰い干切る

俺は遣された僅かな肉を一口で喰い、あるうことが今殺したばかりのベイビーまでを貪り喰い始めた

三頭目を喰い荒らし始めた頃にようやく俺の食欲はおさまっていき、そして自分が口に行っているモノを見て驚愕した

俺「(ウゲツ！何を喰ってんだ俺は！？
イビルジョーの子ども！?)」

喰い荒らされて臓器がバラバラになったベイビーを見て、俺は吐き気を催していたが、もっと恐ろしいことに気付いてしまった

俺が喰ったのは子ども、子どもには親がいる…

コイツらの親はイビルジョー、そしてそのイビルジョーは今俺の背後にいる

俺はバツと振り返ると、イビルジョーがとても嬉しそうに嘯き、さつき以上の肉を喰い干切ると、今度はくわえたまま俺に近づけてきた。やはり肉は美味そうに見えてしまい、その肉に食い付いてしまったが、今回は恐怖心が残っていた。

肉を食べ終えた俺を、イビルジョーはいろいろな角度から眺めだした。時折顔を近づけるが、匂いだけを嗅いで何もしない。

イビルジョーの不思議な行動のおかげで恐怖心は和らいできたが、イビルジョーが何故自分を襲わないのか不安を覚えた。

『(どつや)ら異常は無いらしい。』

さて、よくぞ生存競争を生き延びたな！

肉を独占するだけでなく、兄弟を皆殺しにするとは……かつてない快拳だ！

俺は誇らしいぞ、息子よ！』

このイビルジョー親父は生存競争をさせていたのか？
子どもが死んだってのに喜ぶなんて、頭イかれてるのか？

ん？ 息子？

ナンダツテ？

俺が目をぱちくりさせていると、『水飲みに行くぞ』とか言って俺をくわえて拉致っていく

イビルジョー親父は河原に辿り着くと、俺を容赦なく落として、水をがぶ飲みし始めた

俺も喉が渴いていたので、ケツの痛みを我慢して水面を覗く

そして驚愕した

水面に映し出されてるのは、人間の顔などではなく、黒緑色の鋭い牙がならぶ凶悪な顔

そしてそれは、先ほど自分が殺したイビルジョーベイビーの顔立ちと酷似していた

まさかと思い水面から離れ、恐る恐る覗き込むが変わらずイビルジョーの顔が映る

試しに右を向いたり、首を傾げたりしてみたが、水面のイビルジョーはそれに合わせて動いている

混乱する頭を無理やり鎮めると、俺はその場に座って情報を整理する

俺死んだから、神さまが転生させてくれた

転生先はモンハンの世界

いきなりイビルジョー出現、俺が子どもを殺してしまった

そのイビルジョーが俺を息子と呼んだ

……え？俺ってハンターじゃなくて、モンスターに転生しちゃったの？

俺は水面の自分の顔、横のイビルジョー親父の顔を交互に見つめた

俺の淡い希望はどんどん崩れていき、酷な現実を頭が理解していく

24

「（あのエセ神！！

とんでもないモンスターに転生させやがって！！

どうしてくれんじゃあ！！）」

俺は悔しさにもものすごい勢いで地団駄を踏みまくる

そうしていると、背後からカサカサと何かが近づいてくる音が聞こえ、振り返ろうとしたら鋭利な何かで尻をひっつかかれた

「（痛つてえー!!）
俺のケツを痛めつけるのは、どこのどいつだ!?!）」

振り返って目に飛び込んで来たのは、甲虫オルタロスだった

なんだオルタロスか　と油断していると、また爪でひっかかれた

「（虫のくせに生意気だなこの野郎!!
あれ…結構素早いな。）」

ゲームでは一撃で粉々になるザコだが、実際に戦ってみると、チヨロチヨロと複雑な動きをしてくる

俺はオルタロスの動きに惑わされてクルクル回り、目を回して川に
転んでしまった

『(虫相手になりに遊んでるんだ…歩けるならついて来い。)]

イビルジョー親父はオルタロスをあつさり踏み殺し、洞窟がある方向へと進んでいった

イビルジョー親父の歩幅は俺と比べ物にならず、走ってイビルジョー親父の後を付いていった

今俺は目覚めた洞窟に戻り、イビルジョー親父と向き合って家族会議みたいなものが始まるうとしていた

家族会議じゃねえええ!!

そんな悠長なことしてられっか！！転生先がモンスターってどうい
う嫌がらせ！？

しかもよりによって恐暴竜イビルジョー！？冗談じゃない！

ユクモ村の混浴風呂で美女と入る夢は！？

体デカくて入れねえ！！

キリン装備のハンターちゃんと戯れ合うというのは！？

絶対に無理！

モンスターの俺がハンターに会ったら、戯れ合うというより、殺し
合いになるわ！！

どうして俺なんか生んだんだクソ親父！！

俺の人生台無しじゃねえか！！

とは威圧感たっぷりなイビルジョー親父に言えるはずもなく、
俺は心の奥で愚痴をこぼしている

『（ ）ビビりかと思っていたが、あんなに暴力的だったとはな！
チビの頃の俺とそっくりだ！』

この親父は親を誉めてるのだろうか、ちっとも嬉しくはない

モンスターといえど、自分の兄弟を殺して喰ったのだから、罪悪感が物凄いある

今気付いたのだが、俺は何故イビルジョーの言葉を理解出来るのだろうか？

自分では普通に日本語喋ってるつもりだが、相手は俺の言葉を理解し、俺も親父の言葉が理解出来ている

転生する時にエセ神がいろいろ強化してくれたらしいから、たぶんそのおかげなのかな？

『オイ、俺の話は最後までしっかり聞きやがれ！！』

親父は生まれたての俺を、容赦なくひっぱたいた

たぶん加減してくれたのだろうが、物凄く痛かった

そこからは、イビルジョー親父の自然界における哲学やらなにやらの講釈が始まった

…イビルジョーってこんなに賢かったの？

親父はまず最初に、俺を含む息子にさせた選別とやらの説明をしてくれた

選別は、生まれた子どもの中から一番強い子どもを見つけ出し、それを育てるといふものらしい

そしてそれは、より強い個体を見つけ、種の繁栄のための儀式だといふ

中には、親の目に止まるような子が出来なかった時には、選別を生き抜いたとしても見捨てる場合もあると、教えてくれた

生まれた子どもを見捨てるなんて、酷い習性だと思うが、結果として凶悪なイビルジョーの数が制限されると思えば、しぶしぶ納得出来た

それから、俺も親父に対して質問を交えながら会話を進める

それによると、飛竜種や獣竜種といった大型のモンスターは、頻繁に見かけるものではなく、普段は人里離れた場所に棲んでいるらしい

古龍種に至っては、伝説のような存在であり、極稀にその痕跡を見つけれられるくらいで、ほぼ人の目には触れない

自分が転生したイビルジョーという種は、個体数も少なく同じ場所に止まらないため、古龍ほどではないがとても珍しい存在なのだろう

ゲームの感覚では、大型のモンスターを狩りまくっていたが、あれだけのモンスターが実際にいたら人間はお終いだ

そしてハンター自体も、やたらめったらいるわけではなく、多くもなく少なくともないという程度だ

それと余談だが、この親父は稀に見るバカだ

だって、生まれて間もない子どもが、まだ存在も知らない飛竜とかハンターの話しをするんだぜ？

それに何の疑問も持たないで、むしろ質問されて嬉しそうに答える

この脳筋バカの息子で俺は大丈夫なのだろうか？

俺は一抹の不安を覚えた

』とまあ、そんなことだな。
後のことはその都度教えてやるからよ。

さて、明日から俺がお前をビシバシ鍛え上げてやるから、今日のところはもう寝ておけ。

俺は狩りに行くから、てきとうな場所で寝てる。』

親父は言いたいことを言っつて、とつとと洞窟から出て行ってしまった

俺は途方にくれたあと、付近の枯れ草んかき集めてベッドを作り、そこに横になる

ハア……キリンちゃんの夢があ……混浴風呂があ……

俺は叶わなくなった夢を嘆き悲しんでいたが、肉を食べた満腹感と様々な疲労感により、徐々に眠りへといざなわれていた

第二話：スパルタ親父の息子（後書き）

お次からイビルジョー親父のスパルタ教育が始まります（笑）

第三話・教育という名の暴力を受ける日々

おはようございます皆さん

イビルジョーに転生してしまった薄幸の俺です

今回はイビルジョー親父による、愛のムチと自然界に出るための特訓を実況中継したいと思う

はい、俺はイビルジョー親父の言い付けで毎朝早起きしています

起きてまですることは……寝覚めの最悪な親父を起こすこと

簡単なことなのだが、命を落とす危険のある恐ろしい行動だ

「（親父…朝だよ、起きておくれよ。」

『グガアアゴオオ……。』

う…うるせえ

いびきかいて寝てるよこの親父…

このやかましいいびきで、何回眠りを妨げられたことか…！

今日こそ寝込みを襲って、ボコボコに…など未熟な俺に出来るはずもなく、俺は今日も優しく親父を起こすのだった

「（親父イ…早く起きろよ。お日様が登っちゃっよ。」

『（……っせえ……朝っぱらからうるせえんだボケ…！）』

「ギャンツ…！」

寝起きの親父の尻尾をまともにくらい、俺の小さな体は軽々と吹っ飛んでいく

今日は割とラッキーな方だ
いつもならかじられたり、叩きつけられたり……最悪の場合には、
ブレスを吐かれる時もある

『もう少し穏やかに起こしやがれバカ息子』

親父よ…お前はもう少し穏やかに起きやがれ

かすかに残る眠気を親父に吹き飛ばされた後は、近くの河川に向
いて水分補給と顔洗いに行くのだが、ここでも親父の暴力性が発揮
される

まず親父が水浴びをするのを待ち、次に俺の番だが……

『(どうした、早くしろ。
見張ってやるから安心しろ。)
』

いやいや、俺が一番危惧するのはお前だよ親父!!

リオレウスと対峙するより、アンタに背中を見せる方が恐ろしいわ
!!

とは言えず、俺は警戒しながら川で水浴びをする

警戒していると親父はそこらを徘徊して遊んでる……警戒を解き童
心に帰って水浴びに興じていると…

『(隙だらけだ息子よ!)
』

親父は音もなく忍び寄り、俺を川に放り投げるのだ

川の流れは速くないが、親父は俺を深い場所へ的確に投げ込む

小さい体をばたつかせて岸に戻っても油断は出来ない

気を抜いていると、親父はまた俺を川に沈めるからだ

幸い今日のところは親父の追撃をかわせた

そして水浴びの次は楽しみの食事なのだが、まだチビの俺は親父に頼らなければ肉にありつけない

俺はいつも草むらに隠れ、親父の狩りを見つめている

親父の狩りはまさに圧巻だ

対象となる草食獣アプトノスを見つけ出すと、その巨体に似合わない速さで近寄り、驚くアプトノスを一噛みで仕留め、可能ならその場のアプトノスを全部仕留めてみせるのだ

親父が仕留めた獲物には俺の分もあるが、親父は俺に構わず肉に食いつく

俺は親父の仕留めた肉を食べにいくのだが、注意しなければならぬことがある

それは親父がただでは食わせてくれないことだ

肉を食べようとすれば吹っ飛ばしたり、噛み付いてこようとすると

俺は親父の攻撃をかいくぐって肉をとるが、モタモタ出来ないために微量の肉しかとれない

腹を満たすためには何度も突撃しなければならぬが、これによって素早い身のこなしと、肉を瞬時に喰い干切る顎の筋肉が鍛えられる

そして食事を終えた俺を、親父は洞窟を進んで行って島の一番高いところにまで連れて行く

最近気付いたが、俺と親父がいるこの場所は《孤島》だということに気付いた

崖の上に来たら、1日で最も辛く痛い特訓が始まるのだ

親父は容赦なく俺を崖から蹴落とし、俺は堅い岩と尖った岩肌を転げ落ちていく

島の下にまで落ちれば俺の体はズタズタだが、すぐさま体を起こして再び島の最上部に移動する

途中にいるジャギイの群れをかわし、時には抗戦し、自力で親父のいる最上部に辿り着くのだ

もちろん親父が俺にねぎらいの言葉をかけるはずなく、言うことと
いえば『早く行け』だ

俺は再び崖から飛び降りていき、傷を増やしていく

それを1日に何回も行うのだ

過酷な特訓を終えた後は川で体を洗い、薬草を採取して傷を癒やす

すでに全身にはおびただしい傷跡が残るが、特訓を繰り返すことに俺の体は頑丈になり、特訓でつく傷も少しずつ少なくなっていく

特訓が終われば腹が減ってくるが、今度は親父には頼れない

親父はジャギイを捕獲すると、俺と対決させる

親父がいるとジャギイがビビって使えないため、親父は洞窟の奥で様子を見ている

まだジャギイの群れに突っ込んで勝てるほど強くないが、ジャギイ一匹程度なら俺でも倒せる

狗竜『ギャオツ!!!』

「（ジャギイ一匹なんか、チヨロいもんだぜ！）」

しかし親父がそんなことを許すはずもなく、今日はジャギイを二匹投入してきた

さっきまでビビっていたジャギイは、仲間が増えたことで勢いづく

俺はかまわずジャギイの一匹に向かっていくが、別のジャギイがさせまいと俺に体当たりをする

ジャギイの体当たり自体は痛くないが、崖で出来た傷が物凄く痛い

ジャギイの素早い身のこなしに翻弄される俺は、徐々に追い詰められていくが、痛めつけられたことでフツフツと煮えたぎる感情が高まっていく

ジャギイが鈍くなった俺に噛み付いた時、それは爆発した

俺の筋肉が大きく隆起し、俺に噛み付いていたジャギイの牙をへし

折った

牙を折られて苦しむジャギイの喉笛に食らいつき、骨ごと食いちぎる

残ったジャギイは逃げようとするが、出て来た親父にビビり、引き返して俺に立ち向かってくる

「（よくもやりやがったな、これでもくらえ！！）」

俺は大きく息を吸い込み、内に溜まる怒りをブレスに変えた

親父のブレスに比べればまだまだ未熟だが、ジャギイ一匹を即死させるには十分すぎる威力があった

俺は倒した二体のジャギイを美味しくいただき、親父から今日初めてのお褒めの言葉をいただく

ここまでくると親父は極端に優しくなり、俺も残りの過酷な特訓が苦ではなくなる

特訓を全て終える頃には夕方となって、孤島は夕焼け空に変わる

特訓が終わると、親父は親を連れて孤島の探検に連れて行ってくれる

親父と並んでいれば、自分より大きいモンスターも逃げていくのだ

ドスジャギイやアオアシラは一目散に逃げ、ロアルドロスなんかは雌たちを置いて逃げ去っていく

俺はそんな光景が愉快で楽しく、何より厳しかった親父と並んで歩いているのが好きだった

人間の時だった俺には、飲んだくれで何もしない親父と、不倫を続けるお袋しかいなかった

親の愛情もありがたみも知らない俺だったが、俺は初めて親という存在を好きになれた

イビルジョー親父は厳しくもあるが、優しい親父であった

理不尽で暴力的な親父だが、一緒に特訓して、食事して…一緒に寝るこの親父が好きだし、親父も俺に精いっぱい愛情を施してくれた

探検が終わった後は寝る支度をし、親父のわきで添い寝する

親の温もりを感じられる今が至福の時であり、その温もりに包まれながら俺はその日を終えるのだ

第三話・教育という名の暴力を受ける日々（後書き）

なんか最後、イビルジョー親父スパルタでも何でもなくなりましたね（笑）

さて、次回は主人公の二年後であり旅立ちの時です

何故二年後かって？

一年では短すぎるし、三年では長すぎる!!

誰もそんなこと聞いてませんね……

第四話：巣立ちの時

今日も穏やかな1日を迎える孤島

朝日が登り草食獣たちが餌を探しに歩き回り、それを狙う肉食獣も目を光らせている

いつもの自然界の風景だ

そんな孤島の河川の一つに、緑色を基調とした極彩色の翼が降り立つ

妙な形のユニークなクチバシと鮮やかな羽を持つ、彩鳥クルペッコだ

このクルペッコは、最近この孤島にたどり着いた流れ者で、穏やかな環境の孤島を気に入って棲み着いたのだ

クルペッコは川岸を移動し、餌となる魚を探していた

いつも魚を捕る時に邪魔をするジャギイたちもいなく、水流の音しか聴こえない河川に、クルペッコは満足していた

しかし、この彩鳥はまだ分かっていなかった

この孤島において生命の気配が消え去ったという意味を……

邪魔な肉食獣が消えた時、獲物の魚も一匹ずつ去っていき、クルペッコは少し苛立った

その時、背後で河原の石を力強く踏みしめる音が聞こえ、クルペッコは訝しげに振り返った

そこには、自分より一回りも二回りも大きな体躯の、一目で格上と分かる凶悪な竜が、今まさに自分を襲おうとしていた

驚いたクルペッコは後ずさりして転ぶが、そのおかげで竜の恐ろしい一撃から、即死することを回避した

ただ完全に回避出来たわけではなく、飛行のための片翼が噛み挟られた

彩鳥「ギャーギャー!!」

竜は苦しみに悶えるクルペッコのもう片翼を食いちぎり、その大木ほどもある尻尾でクルペッコを殴りつけた

クルペッコは二転三転して吹き飛ぶが、竜は息つく隙も与えず、飛びかかって体を押さえつけた

そして、竜はその禍々しい口を大きく開き、彩鳥を残酷に噛み殺した

俺はイビルジョーに転生して、初めて大型モンスターを仕留めた

正確には中型程度のモンスターなのだが…

イビルジョー親父にスパルタ教育を施された俺は、この二年の間に逞しい成長ぶりをみせた

体の表面を覆う鱗と皮は、並大抵のことでは傷つけることなど出来なく、その鋭く尖った牙と強靱な顎は、飛竜の堅牢な甲殻でさえも噛み砕くにまで鍛えられた

さらに親父との特訓で気配を察する能力を強くし、人間の賢さもが強力な武器となった

『（息子よ、手際よい狩りだったぞ！！）』

クルペッコを仕留めた俺のところに、イビルジョー親父が嬉しそうにやってきた

俺の体はまだまだ親父にかなわないが、今では親父の半分くらいの

大きさだ

二年でこれだけの成長は驚きだが、イビルジョーが1日に食べる量を考えれば、この驚異的な成長にも頷ける

「（親父に教えてもらったとおり、翼をやってやったら簡単だったぜ！

一撃で仕留められなかったのが残念だけど。」

親父に教えてもらったのは対飛竜戦法で、飛ぶための翼をまず徹底的に狙うことだ

翼を破壊出来なくても、転ばせて翼を踏みつけることもある

「（だがなかなか気配を消すのがうまくいったじゃないか。もっとも、図体のデカい我らにはちと無理があるがな！！）」

親父は大きな声で笑う

『（ほら、早速仕留めた獲物を喰えよ。
勝者の特権だ！）』

「（コイツは巢に持って帰って喰うよ。
それより…親父に話したいことがあるんだ）」

イビルジョー親父は俺の真剣そうな口調に気付き、笑いを引っ込めた

『（ああ……一旦巢に戻ろう、そこで話しを聞く。）』

親父と俺は、クルペッコを引きずって巢の洞窟へと向かっていった

洞窟に着くと、クルペッコを岩の上に置いて、親父と向き合った

いつもならふざけた会話を始めるが、今日はそんな雰囲気ではなかった

『(で……話したのはなんなんだ?)』

話しをなかなか切り出さない俺の代わりに、親父が話しをふりだした

「(前々から思ってたことなんだけど……俺が大きくなるにつれ、ずいぶん食べる量が増えたる?)」

「(ただ、隔離されたこの孤島でそんなに捕食しまくってたら、生態系がいかれちまう。)」

これは親父も分かりきっていることだ

「イビルジョーという獣竜種は、高い体温を保つために頻繁に捕食しなければならぬという」

「幼子だった俺ならともかく、今では親父と同じかそれに近い量を捕食している」

このまま親父と一緒に捕食を続ければ、この島は生物の墓場と化す
だろう

親父は俺が何を言いたいのか分かっているのだろう、低く唸っていた

「俺も親父のおかげで、誰にも頼らずに生きていけるようになったよ。

…だから。」

『（ここを出るってのか？）』

俺は親父が言ったことに、少し間をおいてから頷いた

本音を言えば俺は親父の元から離れたくはなかったし、親父も心からそれを望んでいないだろう

ただ、俺がここに残ることで親父に迷惑をかけたくはない

親父は俺のことを迷惑だなんて思っていないだろうが、俺のせいで親父が死ぬのは絶対に嫌だった

『(…それは、本気で決心したことなのか?)』

俺は親父の目をしっかり見つめ、ゆっくりと頷いてみせた

『(…分かった、どこへでも好きな所に行くといい。)]』

親父は予想外に、俺を引き止めることはなく、後押しする発言をしてくれた

驚きながら見つめる俺に、親父は明るく笑ってみせる

「（思えば…お前がこの俺に願い事をして来たのは、今日が初めてだったな。」

俺がお前にしてやったことは何も無いが、せめて最初の願いは聞き入れてやる。」

今俺は猛烈に感動している

今までは行動から親父の愛情を感じとっていたが、今日言葉で親父からの愛情を受け止められた

「（お…親父イ…俺は親父から…いろんなこと教えてもらったよ…。
厳しくて…おっかなかったけど…俺は親父の子どもに生まれて良かったよ…。」

俺は感動のあまり、涙や鼻水、唾液を垂れ流ししていた

他から見れば汚いかもしれないが、俺たちにとっては神聖な体液だ

『泣くんじゃねえよ。』

ほら、クルペッコでも喰って落ち着けや。』

「（親父イ…それ俺が捕った獲物だつてえ…。）」

泣きじゃくる俺につられ、親父の目にも涙がたまっていたが、涙がこぼれないよう…

息子の独り立ちを祝すべく、上を向いて雄叫びをあげた

孤島を旅立つのは翌日明け方、満潮の海が干潮になる時間帯だ

満潮から干潮になる引き潮を狙って、孤島から泳いでいきやすくなるためだ

俺と親父は孤島の砂浜に来ていて、大陸のある水平線の彼方を見つめていた

こうやって親子肩を並べるのも、今日が最後だ

『（引き潮に任せて、潮の流れに乗っていけば《水没林》に辿り着けるはずだ。

どうだ…忘れものとかは無いか？）』

俺の首には、仲の良かったメラルーに作ってもらった頑丈な小袋があった

その中に、初めて狩った彩鳥の羽、非常食の生肉…それから親父の大牙と鉤爪が入っていた

「（大丈夫だよ親父。忘れ物は無いよ。

袋が破れなければいいけど…。」

そんなことを言っていると、突然その袋からひょっこり顔を出す者がいた

「大丈夫だニヤ！」

旦那さんの頑丈な皮を縫って、頑丈性と耐水性は抜群なのニヤ！！」

この袋から頭を出すメラルーこそが、この袋を作った本人であり、俺たち親子と家族ぐるみの生活をしてきたメラルーだ
名前を《モモ》という

「（ありがたいけど……モモまで一緒に来なくても）」

実はこのメラルーも、仲間たちから離れて俺と一緒に行くというのだ

「オイラは旦那さんに惚れたのニヤ！
どこまでもついてくニヤ！！」

どうしよう…と親父に顔を向けたが、親父は笑うだけだった

俺は困り果てていたが、多分断つたとしても無理やり着いてくるだろうと、諦めて連れて行くことにした

『（息子よ、そろそろ時間だ。）』

砂浜に打ち寄せる波は徐々に引いていき、干潮の時間帯となっていた

60

「（じゃあ親父…俺行くよ。）

二年しかいられなかったけど…俺、親父と一緒にいれて良かったよ。

」

『（分かっているわ！

早いとこ行ってしまえ！）』

親父は気恥ずかしさを隠すため、荒っぽい口調になっていた

俺は親父の視線を背に受けながら海に浸かっていく

朝早くの海水はとても冷たかったが、半分浸かった頃、俺の胸に熱いものがこみ上げてきた

俺はバツと振り返ると、勢い良く頭を下げた

「（親父！未熟な俺をここまで育てていただき……ありがとうございまして！！）」

それから俺はがむしゃらに海を進んでいき、背後から大きな雄叫びが聞こえてきた

第四話・巣立ちの時（後書き）

……やっと旅立っていったか

今まで育てた中で最高に強く、楽しいやつだったな……

息子の姿がどんどん小さくなっていき、ついにはその姿が見えなくなってしまうた

…息子の旅立ちには喜ばしいことだが、物悲しいな…

…ん？

息子が泳いでいったあの方角……大嵐か？

まあ、頑丈な息子なら嵐くらいは大丈夫だな……

しかしあの嵐……今まで以上に大きい……

まるで……古龍に引きつられてるみたいだな

なんていったっけな？

……そつだ《嵐龍アマツマガツチ》だったな

まあ、古龍がこんな所に来るはずないし、ただの大嵐だろうな

今日あたり洞窟にこもってれば、なんともないだろう……

第五話・なんてこつたいこはどこ!? え、見知らぬ地方? (前書き)

転生した主人公はあつちの場所に行つてしまいます (笑)

第五話…なんてこつたいこはどこ!? え、見知らぬ地方？

こんにちは……一年の歳月を経て、イビルジョー親父の元から巣立ちした転生者でございます

うう……まだ気分が悪い

孤島を出た俺たちは引き潮にのり、そのまま潮の流れにのることが出来ていた

しかし、そこに有り得ない規模の大嵐が俺の進行を妨害し、潮の流れもメチャメチャにくれてくれたのだ

大波と強風に揉みくちやにされ、俺は水面から頭を出して呼吸するのがやっとだったが、そのうち溺れてしまった

そんで気付いたら、見知らぬ砂浜に打ち上げられていたのだ

砂浜の向かい側には木々が生い茂るジャングルだったが、当初の予定の水没林ではないことは分かる

ただ今はそれ以上考えられなく、海を漂流したことによる、著しい体力の低下を回復することを始めた

幸い、小袋の中の相棒と生肉などは、耐水性素材のおかげで無事だった

メラルーのモモも気分が悪いのか、砂浜に寝そべってダウンしている

俺は日光浴と食事で体温を上げていき、徐々に冷静さを取り戻していく

「（まずここがどこなのか確かめないとな。モモ、移動出来るか？）」

「まだ駄目なのニャ…。」

仕方なくモモを背中に乗せ、俺は付近を徘徊して回る

いくら歩いても森の木々しかなく、しかも方向感覚が狂いそうだ

歩き回って少しくたびれた所で、突如開けた場所に出た

小さな雲の泳ぐ空の下には、広大な緑の草原が広がっており、遠くの彼方には丘のようなものが見えた

「（すげえ…当たりじゃねえか！

環境も過ごしやすそうだし、食い物にも困らなそうだぞ…！）」

「ニャニャ…旦那さんうるさいのニャ！」

…ニヤツ!?
なんて素晴らしい場所なのニヤ!!

飛び起きたモモも、気分が悪いのも忘れて、雄大なこの地に目を奪われていた

過ごしやすい温暖な気候と豊かな土地、その豊かな土地に群れる草食種の多さといったら、イビルジョーである自分が少し欲を出しても平気なくらいだった

俺とモモの心でここに棲みつく決心が固まりかけた時、モモが遙か上空の大きな物体に気付いた

「旦那さん、大変ニヤ!!
あれを見るニヤ!!

モモが指差した先をたどっていつてみると、大空を力強く飛翔する赤い竜を見た

「（なんてこった！）

ありゃ飛竜リオレウスじゃねえかよ！！

つてことは、この場所はやつ縄張りか！！」

上空を飛びリオレウスは一瞬こちらを見たが、まだ草原に足を踏み出していない俺を、無害として無視した

ただ一応俺を警戒しているらしく、旋回しながら俺の様子を窺っていた

しばらくリオレウスを見上げていたが、この場は俺が引くことにした

モモは反対したが、飛竜相手…しかもリオレウスには分が悪かった

親父に対飛竜戦法は習ったが、それはあくまで同じ地上に立つ飛竜だけにしか使えない

リオレウスは大空の王と言っただけあって、飛行しながらの戦闘を得意とする

近接戦で負ける気はしないが、飛べない俺に、上空からの攻撃は大きな弱点となる

俺も弱点を補って余りある戦闘力はあるが、不確実な戦いをするほどバカではない

そのことを話すと、騒いでいたモモもしぶしぶ理解してくれた

諦めた俺たちはジャングルに引き返していったが、俺はすぐさま異変に気付いた

自分を取り囲む無数の気配と、自分に向けられた敵意

肉食獣だ

姿勢を低くして臨戦態勢を取る俺に合わせ、モモも自作の棍棒を手にとる

俺の視界を避け、森の木々に隠れる肉食獣を確認出来なかったが、包囲を縮めたのを感じ取った俺は、尻尾で森の木々ごとなぎ倒した

何体かはよけたが、数体は直撃して断末魔の声をあげた

素早く振り返って襲撃者の姿を確認すると、俺とモモは見慣れない姿の襲撃者に驚いた

いつもの肉食獣であるジャギイには小さいながらも、エリマキがあったが、この肉食獣は変わりにトサかのようなものがあった

色もジャギイの薄紫色の鱗ではなく、青い鱗だった

しばらく戸惑っていた俺だったが、それは俺がよく知るモンスターであつた

「(な…なんでランポスがここにいるの!?)
ジャギイに変わられていないんじゃないのか!?)」

「ニヤ!? 旦那さんこのモンスターを知ってるのかニヤ!?!」

知ってるも何も、モンスターハンターではこのランポスがジャギイより先に登場し、2ndから始めた俺には印象に残るモンスターだった

ただ、今まで俺が戦ってきた相手は全部3rdのモンスターだったし、転生した俺も3rdのモンスターだ

『ギャオツ！ギャギャツ！！』

ランポスは俺に悩み考えることをさせじと、一斉に飛びかかってきた

群れの中には一際大きな、ドスランポスがいたが、結局は俺にかなうはずはなかった

考えるのを止めた俺は、小さなランポスを瞬殺し、怯むドスランポスをモモが脳天をひっぱたいて仕留めた

俺とモモは、砂浜に戻って仕留めたランポスを食べていた

モモは初めて見たモンスターの肉を、美味しそうに食べるが、俺は腑に落ちない様子で食べている

なんでランポスがここにいるんだ？

ランポス含む、他の鳥竜種は3rdギアノス・ゲネボス・イーオスに出てこない…

…モンスターハンターの世界に転生したから、いてもおかしくないけど…

コイツらが3rdの地方に迷い込んだのか…
あるいは…

「ニヤーツー!!」

突然モモが悲鳴をあげ、ジャングルの奥を指差していた

モモの示すジャングルの奥から、ゆっくりと大きな何か近づいて来る

俺も一応警戒していると、その大きな何かはゆっくりと姿を現してきた

白いしま模様が入った赤い甲殻のそのモンスターは、俺に近づくと長く伸びた触覚でつつき、続いて大きな爪でつついてきた

な……なぜコイツまで!?

有り得ない、有り得ない!

ダイミョウザザミが目の前にいるなんて、絶対に信じないぞ!!

立て続けに見る馴れないモンスターに、俺の頭はパンクしそうだ

ダイミョウザザミも初めて見る俺に興味を持っているらしく、執拗に触覚でつつきまわす

何もしなければ襲ってこなそうなのでしばらく様子を見ると、やがて砂浜に赴いて食事を始めた

しばらく呆然とダイミヨウザザミを見つめている俺だったが、ここで疑念は確信へと変わった

奴らが3rdに来たんじゃなくて、俺が2ndの地方に流れ着いたんじゃねえかー！！

そついやさつき行つた草原……《森丘》だしよ！！

なんてことだ、折角ジンオウガとかウラガンキン対策してたのに意味ねええ！！

しかも2ndっていったら、ガノトトスとかグラビモス……最悪ラージャンがいるだろうがあー！！

誰か助けてえ……

俺の計画が無惨に崩れていき、ダイミヨウザザミはうなだれる俺を不思議そうに見つめている

「旦那さん、なんだかよく分からないけど、何とかなるニヤ。」

やっぱりモモを連れて来て良かった……一人だったら心細くて死んじやうよ…

「（そうだな…もともと独り立ちのために出たんだし、これくらいで動じちゃいけねえな。）」

「その通りニヤ！」

旦那さんが使い物にならなかつたら、着いて来た意味がないのニヤ
！）」

「（お前今本音言つたら？

さてはお前…俺に寄生して楽するつもりか？）」

俺が薄目で睨んでいると、モモは首が千切れそうな勢いで振り始めた

「ニヤニヤツ！言葉のあやだニヤツ！！

オイラは旦那さんをそんな風に思ったりしないニヤ！」

この野郎…油断出来ないな、やっぱりメラルーだ

とりあえずここにいても仕方ないので、ここ以外の場所に向かって縄張りを探すことにした

モモを背中に乗せ、その場を立ち去ろうとした時だった……

それまで大人しかったダイミヨウザザミが、素早く俺の前に立ちふさがってきた

「（えっと…何かご用？）」

俺が尋ねてみると、ダイミヨウザザミはカチカチと爪を打ち鳴らし、口から泡を吹き出した

やっぱりこうなるのね……

その後、俺とモモで新鮮な蟹料理を美味しくいただきました

第五話：なんてこつたいここはどこ！？え、見知らぬ地方？（後書き）

こっちの地方を選んだ理由は、モンスターが多様なこと

砦蟹と老山龍にやる砦攻防、風翔龍の街襲撃などの防衛戦に参戦出来るからです（笑）

多分、なかなか実現しないと思いますが…

（ジエンモーランは大砂漠だから無理）

第六話：寝床発見！しかしそこには…（前書き）

モンスターハンターの小説で、アイルーを見かけることはあっても、
アイツらなかなか見えないな…

と思ったので、アイツら登場です（笑）

第六話：寝床発見！しかしそこには…

イビルジョーことこの俺と、あくどいメラルーのモモは、当初の予定を外れ、モンスターハンター2ndの領域にやって来てしまった

見知らぬフィールドに、初めて接触する凶暴なモンスターたち…

それらを主に俺の力で克服しながら、俺とモモは安住の地を探し求めていた

先日この密林でダイミョウザミと接触し、これを撃退して以来、注意するようなモンスターには遭遇していない

ただ何も襲ってこないわけではなく、こっちを見れば直ぐに突撃するブルファンゴ、何よりも厄介なランゴスタがいた

俺が育った孤島にはブナハブラという甲虫がいたが、このランゴスタはそれ以上に数が多かった

俺は素早く小さく、飛行能力を持つこの甲虫は苦手であり、これに限ってはモモの毒けむり玉を利用させてもらっている

「（密林は餌が豊富でいいけど、邪魔者も多いから嫌いだな……。どこか条件の良い場所無いものかねえ？）」

人間の賢さを持つ俺は、イビルジョーの旺盛すぎる食欲で他の動物を死滅させまいと、色々な対策を考えていた

イビルジョーの驚異的な食欲の要因は、すばり体温調節のためであり、高い体温を保つために補食が多い……と、どこかで見た気がする

それならばと、できるだけ体温が低下する寒い地方……ここでは《雪山》や《沼地》を避けることにした

そうなると条件的に密林の熱帯雨林気候は、体温低下を抑えるし、食料も多かった

ただし、この密林にはランゴスタやカンタロスら甲虫がわんさかおり、俺が個人的な理由で却下した

そうなると残るは《砂漠》 《火山》 《樹海》がある

ただし樹海はこの密林から正反対の方角にあり、間には人間の街があつて到達はほぼ不可能

最後に火山と砂漠が残り、俺の体温低下の欠点は回避出来るが、これらの不毛な地で食料を見つけるのは困難だった
おまけに砂漠の夜は、よく冷える……

そんな俺の悩み事など意に介さないように、モモは俺の背中で昼寝をしている

俺が甲虫を我慢すれば、住処を密林に選んで解決なのだが、元々人間だった俺には、あの巨大な虫を生理的に受け付けられない

宛もなく放浪しているうち、日がいつの間にか傾いていた

寢床の決まらない俺達は毎夜野宿していたが、いつも夜行性の虫たち
ちに悩まされている

虫を回避出来ればと、あまり餌の豊富でない砂漠へと向かおうと諦
めていた時だった

不意に、ジャングルの向こうからいくつかの視線を感じた

ランポスかと思って耳を済ませたが、ランポス特有の唸りや足音は
無く… 変わりに、子どもがはしゃぐような声が聞こえる

俺は慌てて他の気配を探ったが、自分を見る小さな気配しか感じら
れない

俺は改めて小さな気配を発する方向を見つめる

姿は見えないが、おそらくは人間の子どもだろう…

俺が様子見をしていると、小さな気配はゆっくりと去っていく……
まるで、俺を誘うかのように

俺の直感が危険だと悟ったが、小さな者たちが自分を誘うわけを知りたく、俺は好奇心のままに気配を追っていた

気配のした場所に行ってみると、採取でもしていたのだろうか…キノコや小さなかぼちゃが、いくつか落ちていた

俺はさらに興味がわき、小さな気配をたどって獣道を進んでいった

獣道を進んでいくとジャングルから抜け、草原に出ていた

森丘に来てしまったのでは、と危惧したが、森丘ほど草原は広くなく、小高い山があるだけだった

獣道を進んでいるうちに気配は消えてしまったが、おそらくは目の前の山にでも登ったのだらうと、俺は何も考えずに山に入っていった

山の中腹には果物を生やす木、綺麗な清流があり、転生前の世界である日本の山に似ていた

俺がどこか懐かしい感傷にふけっていると、大きなほら穴があり、とりあえず入ってみた

ほら穴の中はかなり広く、周りにあるいくつかの穴から光が差し込み、ほら穴の中は明るかった

さらにほら穴の端には、俺でも歩ける広さに螺旋状の坂が出来ており、どうやら山の頂上にそれでいけるらしい

…素晴らしい物件だな！

温暖で豊かな土地だし、何より虫がないぜ！

あれ？でもこんないい場所にモンスターがないのはおかしいぞ？

…と俺が感づいた時には遅く、俺は無数の気配に囲まれていた

俺は慌てて臨戦態勢をとって威嚇したが、無数の気配たちからは敵意が全く感じられなく、むしろ友好的に感じる

俺が威嚇を止めると、洞窟の暗がりから、気配の正体が姿を現してきた

最初はアイルーたちが姿を見せたが、後に現れた者たちは初めて見る存在だった

背の高さや体はアイルーら獣人種に似ていてチビだが、頭の部分が一番特徴的だった……

俺が目を丸くしていると、一匹のアイルーがおずおずとやって来て、何やら話しかけてきた

「驚かせてごめんなさいニヤ。

ボクたちはアンタを襲う気は無いニヤ。

だからアンタもボクたちを襲わないでほしいのニヤ。」

俺は分けが分からず首を傾げただけで、そのアイルーはビクツとしていた

「（ああ…うん。

別にアイルーを襲うことはしないけど…。

というか…俺の言葉分かる?）」

今まではモモと何となく話せていたが、俺の言葉が通じているか不安だったので聞いてみた

「聞き取りづらいけど、何とか分かるニヤ。」

「（分かったよ……なら聞くけど、どうして俺をここに誘うことをしたんだい？）」

俺はアイルーに対し、率直な意見を投げかけてみる

「アンタにボクたちを助けて欲しかったのニヤ。」

俺はますます分からなくなる

「ボクたちは前からここに住んでたのニヤけど、最近ここを狙うデツカいやツが増えて困ってたのニヤ！」

そこで強そうなアンタを見つけて、ボクたちを守ってくれるよう、お願いしようとしたのニヤ。

ちなみに、アンタがメラルーと仲良くしてたから、前から頼もつと様子を見てたニヤ。」

俺がアイルーの話しを吟味していると、付け足して報酬の話しを出してきた

大型のモンスターから守ってくれれば、ここに住むのを許可するし、身の回りの世話をしてやるニヤ!!
つまり俺は用心棒だな？

悪い条件ではなかったので、俺はあっさりとアイルーの提案を受け入れた

アイルーたちはニヤニヤツと喜び合い、隣の奇妙な者たちもはしゃいでいた

「(ところで…アイルーたちは知ってるんだけど、そっちのかぼちやかぶってるのは何者なんだい?)」

「ニヤ?アンタ奇面族を知らないのかニヤ?
ボクらと同じ獣人種の、チャチャブーだニヤ!」

奇面族？

高 ブー？魔 ブウ…違うか

チャチャ……ブーだと！？

俺が口を開けてマヌケな顔で驚いていると、かぼちゃ頭の奇面族は
キーキー喚きだす

「奇面族を知らニヤいなんて、アンタはどここの田舎からやって来た
ニヤ？」

「（いや……知ってたけど、初めて見たから驚いてただけかな？）」

ようやくチャチャブーのことを思い出せたが、あまりいい思い出は
ない

ゲームでは擬態していきなり飛び出すし、地味に攻撃が強いから……

ただ、友好的なチャチャブーを実際に見てみると、案外可愛かったりする

「ニヤんだから知らニヤいけど、アンタを頼りにするニヤ！」

「（おう、俺に任せときな！）」

俺はこのかわいそうな獣人種の用心棒としてだが、この世界に来て初めて自分の住処を得ることが出来た

一人で暮らすよりも、このチビっこたちと暮らせるのはいいし、狩り場も近くて最高の場所だった

だが、この用心棒としてつとめるのがどんなに大変か、俺はまだ知らなかった…

第六話：寝床発見！しかしそこには…（後書き）

はい、奇面族チャチャブーの登場です

設定としてアイルーたちが家事などを…チャチャブーたちが衛兵の
役目で、集落を運営しています

第七話：掟破りの大連続狩猟（前書き）

タイトル通り、イビルジョーとその仲間による大連続狩猟です

といっても強いモンスターは出ません

第七話：掟破りの大連続狩獵

この世界で偶然見つけた豊かな土地

しかしそこにはアイルー族や奇面族のねぐらでもあった

獣人種たちは時たま来る猛獣に頭を悩ませており、俺はそれらの猛獣から獣人種を守る代わりに、この豊かな地に住処を構えさせてもらうことになった

俺はアイルーたちと対話し、襲って来る猛獣の種類、数、それが何処からやって来るのかを教えてもらっている

話しによると、猛獣は不定期に色々な方角からやって来て、最悪の場合には数種類の猛獣が鉢合わせになり、それが暴れて被害が拡大するとか…

今まではチャチャブーたちの奮闘で解決していたらしいが、最近は猛獣の種類も襲う頻度も多く困っていたらしい

ちなみに今、洞窟にあった螺旋坂を登り、山頂に上がって風景を見ているが、どうりで猛獣の集中攻撃を浴びるはずだった…

俺がいるこの場所は盆地のようになっており、草原の中心に今いる小高い山がある

そしてこの盆地の四方八方が、特殊なフィールドとなっていた

東には自分がさまよっていた《密林》、南東に焦土の広がる《火山地帯》、西には大きな砂丘のある《砂漠》…そして北には山頂が白い雪に覆われた《雪山》があり、その方角からは綺麗な川が流れてきていて、湖が出来ていた

それらの中心にあるフィールドがここであり、過酷な環境で飢えたモンスターが、豊かな地であるここを狙うのは必然であった

幸いこの盆地はそこまで広くなく、小高い山のおかげで侵入者がいればすぐに分かる

「というわけなのニヤ……デッカいヤツいくら返り討ちにしても、

次から次へと来るニヤ！」

「（なるほどね……なら、ここに来るのが嫌になるくらい、ボロボロにすればいいんだな？）」

「そういうことニヤ。

ニヤ……早速侵入者が来たみたいなのニヤ！」

アイルーが東の密林を指差して騒ぎ出した

見ると、青い体色のランポスを率いるドスランポスが、キョロキョロと周囲を見渡している

「ボクたちはここから監視するから、頼んだニヤ用心棒さん！」

俺は元気よく返事をし、モモを連れて東の密林に向けて移動を開始する

あと、何故かチャチャブーたちが俺の背に飛び乗り、キーキー戦いの雄叫びをあげた

「（オラオラー……！
みんなの庭を荒らすヤツはぶっとばしてやる！」

山から駆け下り、一直線に突撃してきた俺を見て、ランポスたちは慌てふためいた

一方のドスランポスはというと、群れの長なだけあって落ち着いている……. と思ったら、俺に気づかないであらぬ方向を見ていた

バカかコイツは？

そう思いながら突撃
ドスランポスはやっとこちらに気付いたがすでに遅く、俺の尻尾で密林の彼方へぶっ飛ばされた

「キー！キヤキヤー！」

俺の背中から奇面族たちが飛び降り、残ったランポスたちをタコ殴りする

下っ端ランポスは俺が手を出すまでもなく、チャチャブーらにやられて逃げ帰っていった

「ニヤハハハ！！」

このモモ様が来れば、ヤツらごときちよちよいのちよいニヤ！」

「（お前は何もしてないだろが！！）」

そうモモにツッコミを入れてみると、山の頂上から茶色の煙が上がった

「茶色は……砂漠方面だから、西ニヤ！」

旦那さん、西に向かうニヤ！」

アイルーたちが頂上から焚いた煙は、俺への合図であり、煙の色に

よって侵入者の方角を示している

茶色が《砂漠》、緑色が《密林》、赤色が《火山》、白色は《雪山》だ

奇面族もすぐさま俺の背によじ登り、俺は西の砂漠に駆けていく

足が速い俺はすぐに砂漠の入り口についたが、そこにモンスターの姿はなかった

間違いかと思っただが、頂上からはすっかり茶色の煙が立ちのぼっている

「（ありゃ？モンスターはどこにいるんだ？）」

俺が辺りを見回していると、突然何かが地中から突き出てきて、俺の横顔をかすった

襲撃者はすぐに砂中に戻ったが、一撃目を予測してその場から飛び退く

俺の予想は的中し、襲撃者は俺がいた場所を、鋭い角で突き上げ、ようやくその正体をさらけ出してきた

「（ウゲツ…またダイミヨウザザミかよ！
しかも前より大きいし！！）」

ダイミヨウザザミは口から激しく泡を吹き、何故かお怒りの様子だ

盾蟹の怒りのわけを知らないが、こっちは負けるわけにはいかない

先手必勝とばかりに俺は突っ込んでいくが、盾蟹は俺の顔面に勢いよく泡を吹きかけてきた

視界を奪われた俺の攻撃は空振りし、盾蟹の堅い甲殻にぶつかってしまった

頭に痛烈な痛みを感じるが、逆に俺の石頭がぶつかった盾蟹も怯んでいる

奇面族とモモは怯む盾蟹を見逃さず、俺の背から跳び、盾蟹に張り付いていく

「アレをコイツにくくりつけるのニヤ！
爆破はオイラがするニヤ！」

奇面族は盾蟹の体にタル爆弾をくくりつけていく

ひとつおり爆弾をつけた後、再び俺の背に戻り、モモが盾蟹に向けて小タル爆弾を投げた

小タル爆弾はダイミヨウザザミの隣で炸裂し、それが引火してくくりつけられた爆弾が連鎖爆発していく

爆弾の威力は凄まじく、ダイミヨウザザミの殻を吹き飛ばし、堅い甲殻も焼け焦げていた

モモと奇面族は歓声をあげて騒ぎ出し、俺はダメージで倒れる盾蟹の背後にまわり、殻の一部の長い立派な角をへし折ってやった

「（へへッ、真紅の角ゲットだぜ！

これにこりたら、二度とここらをつろつかないことだな！）」

ダイミョウザザミは痛々しそうに動き出し、一目散に逃げ出していた

俺は盾蟹から獲った真紅の角……一角竜モノブロスの角を、誇らしげに眺めた

104

「旦那さん、あの蟹からの戦利品かニヤ？」

「（おうよ、なかなか貴重な素材なんだよコレ。

状態もいいし、何かの役にたつかもしれないな！）」

奇面族も交えて真紅の角を眺めていると、山の頂上から煙が再び立ちのぼった

次は白色…雪山からの襲撃らしい

俺は真紅の角を体に縛り付けてもらい、次なる襲撃者に向けて疾走していく

雪山から流れる川をさかのぼっていくと、草原から徐々に雪原へと変わっていく

その雪原に、息を荒げて暴れる襲撃者…ブルファンゴと首領のドスファンゴがいた

ダイミョウザザミよりは格下である襲撃者を見て、俺と仲間たちは余裕綽々の態度でいたが、その甘い考えはすぐに打ち砕かれた

俺たちを威嚇するファンゴの背後……

正確には雪山の方角から、飛来してくる奇妙な物体が見えた

その物体が近づいてくるにつれ、だんだんと、その不気味な姿がきちんと確認出来るようになる

それは飛竜の特徴である二つの翼があるが、他の飛竜のような甲殻は無く、表面は白いぬめりのある皮だった

頭部には目が無く、鋭い牙の並ぶ気味の悪い大きな口が目立つ

「ニヤニヤ!!」

あの気持ちの悪いモンスターはなんだニヤツ!？」

「(…フ…フルフルだあ!!)」

実物で見るフルフルはとてもグロテスクで、獲物を探すように鼻をひくつかせる音は、俺とモモに悪寒を感じさせる

巨大な体躯の俺を見れば、大抵のモンスターは怖じ気づくが、退化して目の見えないフルフルは、俺に一切恐怖を感じていない

俺たちはしばらく固まっていたが、もう片方の襲撃者であるファンゴたちは、自分らを見殺しされたことに怒り出した

怒りに突進してくるファンゴを見て、俺は我に帰った

突進してきたファンゴをかわして蹴りとばし、続いた突撃してきたのを尻尾で吹き飛ばす

俺とファンゴの体格差は歴然であり、ブルファンゴたちは面白いように返り討ちにあい、一匹ずつのびていく

残ったドスファンゴは仲間をやられたことで怒り、俺に向けて突撃してきた

なんなく返り討ちにしようとしたが、突如俺の体に衝撃が走り、動きが止まった

「ゲギヤッ!!」

隙だらけの腹部に、弾丸のようなドスファンゴが当たり、俺は胃の

内容物を吐き出してしまおうところだった

「(ゲホツ！ゲホツ！！

い…一体何が！？)」

ドスファンゴから後ずさり、あの急に受けた衝撃を考えていると、思い当たる節が一つあった…

俺は気付いてもう一体の襲撃者を見据えたが、すでに第二射はされていた

「(ちよっ…待っ！

ギヤアアア！！)」

フルフルの口内から放たれた、青白い光の球体は地面を伝って、俺に容赦なく直撃

電流が俺の体中を駆け巡り、またもや体の自由を奪われた

そしてそこへドスファンゴの突進…痛すぎるコンボだ

「だ、旦那さんしっかりするニヤ！」

龍と雷の属性に弱い俺は、フルフルの電撃ブレスを浴び、意識がとびそうな程のダメージを受けた

しかし、体が倒れそうになるのを防ぎ、俺はなんとか踏みとどまった

「旦那さん！

無事だったニャ！？」

「（ああ…電撃浴びたおかげで、頭が冴えるな。

こっからは反撃！

モモ、こやし玉を投げつけてやれ！！」

モモは俺の真意を分からないでいたが、とりあえずポーチの中の、イタズラ用こやし玉をフルフルにぶつけた

するとどうだろうか……

今までのように匂いを嗅いだフルフルは、こやし玉の匂いに苦しみだし、くしゃみを始めた

「ニャ…ニャんだかしらニャいけど、上手くいったのニャ！」

苦しみ悶えるフルフルに勝機を見だし、モモと奇面族はフルフルに飛びかかっていく

「これでもくらうニヤツ!」

「キヤツキヤツ!」

モモたちは一斉にこやし玉をフルフルにぶつけ、匂いまみれにしていく

フルフルの真珠色の滑らかな皮は、こやし玉の茶色に汚染され、当分は臭いがとれないくらい臭くなった

こやし玉でボコボコにされたフルフルは、苦しそうな悲鳴をあげ、逃げ去っていった

その際、フルフルの頭部から何かが落ち、モモはすかさずそれをビンにおさめた

「(わはははは!」

昔の知識が役に立つとはな!

さてあとは...。)」

俺は最後の襲撃者に視線を向けるが、すでにドスファンゴは逃げ支

度をし、足をせつせと動かして雪山に逃げ帰っていく

「旦那さん、やったのニヤ！」

気味悪いヤツとムサイ猪に勝ったニヤ！

やったニヤ！」

奇面族たちも高らかに勝ち鬨をあげ、打ち上げタル爆弾を花火のよう
うにあげている

山の頂上を見ても煙は無く、どうやらこれ以上の襲撃者はもういな
いようだ

「いつもこれくらいなら、オイラたちに負けはないニヤ！」

「（そうだな…ん？」

モモ、そのビンに入ってるのはなんだ？」

モモの腰にぶら下がるビンには、透明感のある綺麗な液体が入って
いた

「これがニヤ？」

さっきあの竜から出たやつで、とってみただけど…。

いらないから旦那さんにやるのニヤ！」

モモから半ば強引にピンを押し付けられたが、中身の液体は綺麗で
気に入ったので、ありがたくもらっておいた

それから俺たちは住処の洞窟に戻ると、アイルーたち獣人種の賞賛
を受けた

アイルーは笛やらなにやらを吹きまくり、奇面族は鉞を危なしげに
持って、妙な踊りをする

騒いでいるうちにいつしか宴が始まり、洞窟の中は飲んだくれの獣
人たちで溢れてしまった

今回の働きで獣人種たちに信用され、家族同然の仲となった俺は、
今日以降みんなから頼りにされる人気者となり、一緒に戦ったモモ
は、メスのアイルーにモテるようになった

俺の勇敢さは奇面族にも認められ、普通は会えないという奇面王キングチャチャブーにも会えたのだった…

余談だが…キングチャチャブーは本当に頭に焼き肉セットをのせていた

第七話：掟破りの大連続狩猟（後書き）

最後にガノトトスを出したかったのですが、世界観がおかしくなってしまうので中止

ギャグ要素の話ですので、モンスターは一匹も死んでません

こんなはかない文章である小説をお読みいただき、ありがとうございます！

読者様からの感想も励みになります！

表現力に乏しい作品ではありますが、これからもよろしくお願います！

第八話：恐暴竜のお使い

住処にやってくる襲撃者を返り討ちにしてから、半月程が経った

その間、幾度となくモンスターが襲撃してきたが、俺の奮闘によりすべてを追い払っていた

俺は出来る限りモンスターを酷い目に合わせ、殺しまではしないものの、ボコボコにして満身創痍の状態で追い返す

外から戻ったアイルーの話によると、モンスターたちの間で、この豊かな地は禁断の魔境として噂されているらしい

草食獣も水も、果実を実らせる木々がある楽園だが…そこに悪鬼羅刹の如き巨竜が棲み着き、獣人種以外のモンスターを血祭りにあげるよ…

「巨竜は逃げる者も容赦なく喰い、いたぶりながら殺すニヤ。見つかったらお終い、逃げてみずと追いかけてくるどころか…逃

げ帰った巢の同族を一匹残らず喰い荒らすニヤ！

……ってなのが、外界のヤツらが旦那さんに持つ印象みたいだニヤ。

「

一言言わせてもらおう……

俺そんなことしてないよ？

少々強めに追い払ったりもして、こやし玉ぶつけて酷い目にあわせただけど……

俺一度もいたぶったことないし、殺してないよ！？

巢まで追いかけて喰うって……俺一度も食べたことないよ！？

だって、草食獣の方が断然美味いから！！

しかもなに？

悪鬼羅刹の如き巨竜って？

少しカツコイって思っちゃったじゃないのさ

外界からの悪評に俺はへこたれるが、メスの美人アイルーたちが俺を励ましてくれる

奇面族はしょぼくれる俺を見て、大爆笑している

それにイラっときた俺だが、ちょうどアイルーの村長が来たので、お仕置きは次回に持ち越した

ヨチヨチ歩いてきた村長は、俺の隣に腰掛けると、にこやかに笑いかける

「噂なんて気にしちゃいかんニヤ兄弟。

外界の暴れん坊から見たら、兄弟は確かに畏怖の対象かもしれニヤいが…。

ボクらは兄弟を頼りにしてるし、大事な仲間だと思ってるニヤ。」

「（兄弟…。）」

村長は俺を励ましてくれ、俺は感動のあまり涙やら涎を零す

下にいたアイルーは、俺の強酸性の唾液を慌ててかわしていく

俺はアイルールの村長から兄弟と呼ばれており、対等の付き合いをさせてもらっている

他のアイルールたちは俺を親分と呼び、モモは叔父貴と呼ばれている…

なにやら仁侠っぽいが…この獣人種は仁義を重んじ、みんなが固い絆で結ばれている

奇面族のチャチャブーなどは基本自由人が多いが、首領のキングチャチャブーの影響でとても義理堅い一団だ

最初はアイルールたちと利害が一致しただけで住処を共にしたらしいが、今では集落の防衛を受け持ち、危険な外界に出て物資を調達してくる

そんなチャチャブーたちの首領、奇面王は俺のことを気に入り、時々俺と一緒に襲撃者を追い払うこともある

普通はみんなの前に出て来ない、所謂集落内の大物らしいのだが、それが嘘みたいにしよっちゅう会いにくる

この集落の大物は事実上、俺・村長・奇面王だが…集落の運営を担う者がもう一人いる

「およ、ここにいたのかい村長さん。」

アイルーたちより少し背が高いくらいの翁が、杖をついてやって来たこの優しそうな老人は竜人族であり、この村で日用品から武器までを造る鍛冶屋だ

「（やあ爺さん、今日も元気そうだな！）」

「あれま、お前さんもいたのじゃな。

デカすぎて見えなかつたわい……ちょうどいい、お前さんも聞きなさい。」

俺と村長は顔を見合わせ、翁の持って来た話しに耳を傾ける

老人は咳を一つすると、ゆったりとした口調で話し出す

「奇面族の調査隊からの情報じゃが……。

砂漠に住んでおったアイルー族が、この場所に移住したいらしくての……調査隊の奇面族にお願いしてきたらしい。」

「そつなのかニヤ？」

別に断る理由はニヤいし、仲間は多いにこしたことはニヤいのニヤ

「！」

「さすが村長さん…。」

「じゃが、砂漠から移住するには道中の安全を確保せねばなるまい…。
そこでじゃ。」

翁は俺の方を向いてきた

「お前さんに砂漠に行ってもらい、アイルーたちが安全に移住出来るようにしてもらいたいのじゃ。」

俺は少しだけ迷ったが、砂漠に行くのは初めてだし、どんな場所なのか興味があったので、快く承諾した

「（やいモモ！

モモはどこだ！？）」

俺は洞窟内部を歩き回り、相棒のモモを探して回る

すると、洞窟の奥からマタタビをくわえてぶらついているモモを発見した

「ニヤニヤ〜」。

旦那さんニヤ〜、旦那さんが回ってるニヤ〜。」

よほどハイになってるようで、目を回して俺の方に歩み寄ってくる

俺は盛大にため息をこぼし、端で戯れている奇面族に視線を送る

俺の視線に気付いた奇面族は遊びを止め、何やら道具を持ち出してモモを取り囲む

「キキイー!!」

奇面族は様々な道具を使ってモモをこてんぱにし、水を浴びせかけたり、トウガラシを口に突っ込んだりした

これはこの奇面族が考案した、アイルーをマタタビから醒ませる荒っぽい治療だ

「(どうだ目が醒めたか?)」

「ウニヤ〜……完つつ全に目が醒めたのニヤ。」

モモは酷い顔つきであり、奇面族の治療がいかに凄惨だったかを物語っている

「ところで…話してなんだニヤ？」

不機嫌そうに睨んでくるが、毎日親父にシバかれた俺にはちっとも恐くない

モモに砂漠の移民の話をし、その護衛するからお前も来いと言ったが、モモはのらりくらり分けの分からないことを言う

つまり、面倒くさいから行きたくない……だ

「(ほづほづ……そんなに俺と行きたくないか。いいだろう、お前は留守番でもしてろ。)」

モモはニヤリと笑う俺を見て、言いようもない不安にかられる

モモとは幼少期からずっと慣れ親しんだ仲だ

良い部分や悪い部分、頑張っていた姿も見ていた……もちろん、人前では決して言えないようは出来事も

「(その代わり……俺の口は軽いから、うっかり昔話をしちまうかもな。

初めて俺と会った時、お前は俺にビビって『ニヤニヤ!』それはダメニヤ!』……クククク、それから今日みたいにマタタビに酔った勢いで親父に絡んで『分かったニヤ!分かったから止めてニヤ!』(」

俺がバラそうとしたことは、全てモモの黒歴史であり、他にもいくつか弱味を握っている

今モモの周りにはアイルーの女の子が集まっているが、そんな時に俺が秘密を暴露したら、女の子たちはモモに愛想を尽かして離れるだろう

そして、モモはそれを絶対に回避しなければならなかった

「い、行くのニヤ！」

旦那さんが行くなら、地獄の果てまでついていくのニヤ!!」

「（ワハハハ!!）

そうかそうか、実は俺と行きたかったのか！

素直じゃないなお前は!!）」

（この旦那さん…もう嫌ニヤ）

俺はモモの気が変わる前に、モモを背中に乗せて西の砂漠に疾走していった

地平線の彼方まで広がる砂の海、上空にはキラキラとした灼熱の太陽：
陽：

太陽から降り注ぐ熱と砂からの照り返しが、とてつもない暑さをつくる砂漠に、イビルジョーこと俺は来ていた

以前、俺はイビルジョーの生態を考察し、捕食の数を出るだけ減らそうとし、気温の高い火山や砂漠に棲む気でしたが：撤回する

砂漠の気温は俺の体温を遥かに超え、暑さによる体力消耗で捕食の回数はむしろ増えている気がする

砂漠は夜になれば一気に冷え込むため、それが一層拍車をかけている

俺の背には、すでに暑さでくたばったモモがミイラ化し、移動している俺も限界に近かった

意識朦朧とする中、俺の視界にキラリと光が反射した

俺の中に一つの希望が芽生え、俺は光が反射した方向に、気力を振り絞って駆けていく

俺が走っていった先には、俺が期待していたとおり、水のあるオアシスがあった

俺は走っている勢いをそのままに、オアシスの水に飛び込んだ

失っていた水分を補給し、ついでに水際のアプケロスに噛みつき、水中に引きずり込む

「ふう…生き返ったぜ！」

水とアプケロスの肉を腹におさめた俺は、出発前の瑞々しさを取り戻す

ミイラ化していたモモも、がむしゃらに水を飲んでいて、いつしか水で腹が膨れたデブになっていた

「ふう…生き返ったぜニヤ！」

「（真似するんじゃない！）」

「ギニヤツ！！」

モモに制裁を加えた俺は、水から上がって周囲の状況を確認する

このオアシスはあまり知名度が低いのか、数頭の草食獣以外いなく、その草食獣も俺を見て逃げていった

砂漠の暑さは俺の体についた水分を瞬時に気化させたが、俺は自分の身に起きた変化に気付く

砂漠に入ったばかりの俺はすぐに暑さにやられたが、今はそこまで

暑さを感じない

極限にまで追い込まれた俺は、体力を回復させた後に、暑さに対する抵抗力が出来たのだ

温暖な気候でしか活動しなかった俺だが、イビルジョーの俺は驚異的な早さで、砂漠の環境に適応してみせた

ふむふむ…過酷な環境に身を置いてこそ、俺の強さは増大していくのか…

以前神さまは、俺が自然界で困らないよう適度に最強と言ってたが、最初から強いわけではなく、修羅場を潜り抜けた時に得る経験が、おそらく俺は倍以上なのだろう

「（へへ…あの神さまに感謝しとかないとな。」

「は…ハクシヨン…!!」

はあ…ウチの噂しとるんは、どこのボンクラや…ったく。

しもつたわ!!

ウラガンキンごときに、三死してもつた!!

ああもつ!今日は厄日やな!」

「ところで旦那さん、移民のアイルーたちの所には、いつ辿り着くニヤ?」

モモの問いかけに俺も気になり、寝そべっていた体を起こし、地図を広げてみた

俺の天性の方向感覚でここまで来れたが、水浴びをしていたら方向感覚がリセットされてしまった

仕方無く地図を広げてみたのだったが…

うん、意味不明だね

俺が地図の見方が分からないわけではなく、この地図が摩訶不思議なのだ

この地図は拠点のアイルーが作ったもので、当然のごとく”アイルー用”であり、ぶっちゃけた話したただの落書きにしか見えない

ただそこは相棒のモモがフォローしてくれる

モモはメラルーなだけあって、この古代文字以上に難解な、アイルーの落書きを理解してくれた

「旦那さんが砂漠に入って真っ直ぐに来たなら、今はこのオアシスニヤ。」

そんで目的の場所は…ここを北に少し行った場所、もうすぐ着くのニヤー！」

相棒：お前を連れて来て本当に良かったぜ…

…などと、感謝の言葉を言いつと調子に乗るので、適当に相づちをうつてサッサと出立する

俺は砂漠の暑さはもう平気だったが、体毛のある…そしてメラルーで黒毛のために、熱を吸収して早々にくたばった

そう何度もめんどろは見られないので、俺は比較的湿度の低い岩場に入った

岩場に入ってすぐに生き返ったモモに呆れていたが、岩場にポツカリ空いた穴を見つけた

モモに確認を入れてみると、どうやらそこがアイルーたちの住処だったらしい

「(ヨッシャ！
早速話しをつけてこい！)」

「はい、なのニャー！」

俺は身体が大きすぎて入れないため、代わりにモモを住処に向かわ

せた

しばらく待っていると、楽しそうなモモを先頭に、十数人のアイルーが出てきた

アイルーの数はそこまで多くなく、これなら途中敵に襲われても、問題なく護衛出来る

アイルーたちは最初俺を見て怯えていたが、モモと親しく触れ合う俺を見て、警戒を解いた

俺はモモとアイルーたちを背に乗せ、任務通りに移民たちを拠点に運ぶため、帰路につく

順調だった…

簡単に終わる任務のはずだった…

その時俺には……いや、砂漠に足を踏み入れた時点でもしれない

この砂漠に棲みし悪魔、
”砂漠の暴君”と謳われし最凶の竜が忍び
寄っていたのだった…

第八話：恐暴竜のお使い（後書き）

次回、この小説で初めてモンスター同士の激突が起こります

敵はヤツが出ますが、二次創作だとして、控えめに見てやって下さい

第九話：恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君

アイルーたちを運ぶ俺は、背に乗るアイルーに暑さの影響を与えぬよう、日陰の岩場を突き進んでいる

実のところをいうと、暑さにくたばるのはモモだけで、移民のアイルーは砂漠で暮らしていただけであり、少しの弱音も吐かない

岩場は遠回りになると思いきや、移民アイルーたちは拠点への近道を熟知しており、来たときよりも早く帰れるらしい

最後には結局砂漠を通るらしいが……

「いやだニヤいやだニヤ！

砂漠はもうコリゴリニヤ！

涼しい岩場の方がいいのニヤ！」

この話を聞いたモモは、まるで子どものように駄々をこねる始末だ

少しの辛抱だ、とさとしかけても変わらず文句をたれる

「（ああそうかい！
ならお前はここで降りやがれ！
その代わり、お前が苦しもうが野垂れ死にしようが、俺は一切責任をとらん！）」

こうまで言われても諦めないモモに、俺は具体例を挙げて脅しをかける

「（この砂漠にはゲネポスっていう鳥竜種がいてな…。
ヤツらの牙には麻痺性の毒があつて、噛まれば手足が麻痺して動かなくなり、次第に呼吸をするのも困難になる…。」

完全に動かなくなったら、ヤツらは鋭い牙で肉を貪り、あっという間に骨だけにしちまう。）」

「や、やですよ旦那さん。」

冗談に決まってるじゃニヤいですか…ニヤハハ…。」

本当にこのメラルーは調子のいいヤツだ

これでも文句を言っていたら、本当に置き去りにするところだった

モモもそのことに気づいてるのか、気持ち悪いくらい、俺のご機嫌
とりを始めた

岩場を通る途中洞窟に入り、砂漠の地底湖なるものがあつたが、そ
この気温が低かつたので急いで後にした

地底湖を抜けた先は気温の安定した洞窟だったが……

「旦那さん…壁の穴に、何かいるのニヤ。」

「（俺も見えた…。」

あれがさつき言った、麻痺牙を持つゲネポスだ。」

俺は背に乗るアイルーたちに注意を呼びかけ、俺自身もいつ飛びか
かられてもいいよう、警戒しながら進む

洞窟を進むにつれ、穴から顔を出すゲネポスが増えていき、いつしか周りを取り囲むほどの数にまでなった

俺たちの緊張感が高まっていくが、不思議なことに、ゲネポスたちはこちらの様子を見るだけで、襲ってくる様子は全く無かった

「旦那さん、ゲネポスたちは一体何がしたいニヤ？」

「（全く分からない…。」

それにリーダー格の、ドスゲネポスが見当たらない。」

小型の鳥竜種には群れ一つにリーダー格がいる

ランポスだったらドスランポス、ジャギイだったらドスジャギイといった大型の雄がいるはず…

しかしこのゲネポスたちには、群れの首領たるドスゲネポスが見あたらなく、統率の取れていない烏合の衆だ

さらに気付いた事だが、ゲネポスが俺を見る眼は、何かに期待してするように見えた

俺の背に乗るアイルーたちを食べたいのではなく、何かから守って欲しい…そういった心情が感じられる

ゲネポスたちの心情が気になるが、烏竜種とはコミュニケーションがとれなく、何よりも移民を運ぶという仕事があるため、心を鬼にしてその場を立ち去る

「ニヤハハハハ！！
ゲネポスとやらも大したことないのニヤ！ビビって襲いもしニヤいとは、弱っちいのニヤ！」

さっきまでビクビクしていたモモが、洞窟を出た瞬間にまるで自分の手柄のように騒ぐ

コイツのこのどうしようもない性格、いずれ叩き直さなければと思う俺だ…

「（つたく……それよりも警戒しろ。
新しい襲撃者どもだぞ。）」

「ニヤ！？どニヤ！？」

旦那さん、早くやつつけるのニヤ！…」

もはや何も言つまい…

諦めた俺が見据える砂原の先には、砂の海を裂きながら接近する、黒いヒレ…

砂中を泳ぎ回り、集団で獲物を追い詰めていく砂漠のハンター《ガレオス》だ

ガレオスはその特性を活かし砂中からの奇襲を得意とし、また砂に隠れているために姿を視認し辛く、砂漠を進む商隊が最も警戒するモンスターでもある

ガレオスの一匹が、泳いできた勢いをそのままに飛びかかってくる
そのガレオスは俺の大きく開かれた口に噛まれ、そのまま俺の胃袋へと流れた

「（砂でジャリジャリして最悪だ。喰うのには値しないな…。」

ガレオスの食感に不快感を示す俺に対し、仲間を一撃でやられたガレオスは、俺の周りを遊泳する

ガレオスの数は数体と、残念ながら俺を相手するには心許ない

ガレオスは俺の隙を狙っているのだろうが、毎日親父の奇襲を受けた俺には、隙や油断などといった概念は存在しない

普通なら襲撃を諦めるところだが、ガレオスたちは何が何でも食事でありつきたいようで、執拗に付きまってくる

「（いくらなんでもおかしすぎるぞ…。ゲネポスの首領はいないし、ガレオスたちは飢えている…おまけにガレオスの首領もないじゃないか。」

もしかして、君たちが移民したい理由も何か関係するの？」

モモが俺の言葉を通訳して聞かせると、移民アイルーたちはギクツとした

怪しいと踏んだモモが問い詰めると、移民アイルーは思い口を開く

「…最近までボクたちは暮らしに満足していて、特に不自由なかつたのニヤ。」

「最近まで？」

何があつたニヤ？」

俺もモモも、移民アイルーの話しを真剣に聞く

「ボクたちは砂漠のモンスターから素材を頂いて生計をたててたのニヤ。」

小型じゃ儲からないから、中型から大型のモンスターニヤ。

それが…最近猛烈に強いデカイ奴が現れて、他のモンスターを一匹残らず縄張りから追い出したのニヤ。」

「それで…砂漠で暮らすのが無理になったから、オイラたちの村にニヤ？」

移民アイルはコクつと頷いて見せると、自分たちが住んでいた村を寂しそうに見つめた

「（ふうん……。」

ところで、その現れたモンスターってのはどんなヤツなんだ？」

「そうだニヤ…… 沙漠を物凄い勢いで駆け回って、とんでもなく力の強い竜ニヤ。」

身体は用心棒さんくらい大きいニヤ。

でも、同種の竜と少し変わってて……ニヤ!？」

突如沙漠の向こうで大地を揺るがす、大きな雄叫びが轟いた

異変のあった方向をすぐさま確認すると、巨大な”何か”が砂塵を巻き起こしながら、真っ直ぐに俺たちに向かってくる

俺は本能的に危険を感知し、その場から慌てて立ち退いた

以前、俺は地中から盾蟹の突き上げる角を避けたことがある

しかしこのモンスターが地中から飛び出した時、その時の倍以上の砂が巻き上がり、避けた俺の右頬を鋭利な角が掠めた

それもあまりの勢いで、傷口から出た血液は飛沫のように噴出した
反応があと少しでも遅れたのなら、俺の頭部は容易く貫かれていた
だろう

舞い上がる砂塵が晴れていき、徐々に襲撃者の全貌が明らかとなっ
ていく

棘の付いた襟飾はまるで強固な装甲、頭部から聳える二本のねじれ
た鋭利な角

一目で凶悪と分かるその風貌は、俺の脳裏にも鮮明に焼き付いている

飛竜種の中でも上位の強さをほこり、その恐ろしい角で縄張りを侵す、数多の不屈き者を仕留めてきた

通称

” 砂漠の暴君・ディアブロス ”

「（なる程…コイツが棲み着いたってんなら、納得だぜ…。
しかし、コイツは一体なんなんだ？
黒い亜種は知ってるけど…。」

朱色のディアブロスなんて、俺は知らないぞ？」

一般的なディアブロスの甲殻は砂漠と同色の土色のはずだ

雌の固体は繁殖期に警戒色として甲殻が黒くなり、これが亜種とされる……と、どこかで見えた気がする

だが俺の目の前にいるコイツはなんだ？

甲殻は土色ではなく、砂漠では異質ともいえる朱色の甲殻に覆われている

自分の知らない亜種なのか、あるいは希少種：はたまた突然変異の全く別の竜か

そんな思案を巡らせる俺に隙が生まれてしまい、様子を窺っていたガレオスが飛びかかってきた

とっさに一匹をかわしたが、そのせいで背のアイルーが落ちそうになる

アイルーを気にして動けない俺に、ガレオスはここぞとばかりに襲う

146

ガレオスの襲撃をかわす行動の中で微かに見えた光景に、俺はとっさに叫ぶ

「（耳を押さえる！！）」

そして、俺の叫びをも掻き消す大きな咆哮が響き渡った

その咆哮は広大な砂漠に響き渡り、俺も大気の振動を身体でビリビ

りと感じた

幸い俺の叫びはアイルーたちに届き、耳の保護を済ませて俺も耐えられた

しかし、前兆もなしにいきなり…それも聴覚の発達したガレオスたちには大ダメージとなり、ガレオスは残らず全滅した

邪魔者を片付けたディアブ羅斯は、改めて俺を見据える

直感が俺に告げた

コイツは危険だ…

「(モモ…移民たちを連れて、ゆっくり背から降りる。そして、俺に構わず拠点へと向かえ。)」

「旦那さん何を……わ、分かったのニヤ。」

俺と角竜のただならぬ雰囲気を感じ、モモは素直に応じた

モモたちは角竜を刺激しないよう、ゆっくりと背から降りていく

俺とアイルーたちの焦りとは裏腹に、角竜は俺だけを睨みながら見据えている

(狙いは最初から俺か。)

モモたちが十分に離れたのを確認した俺は、角竜の様子を窺うべくゆっくり回り込もうとすると、角竜も俺の動きに合わせる

俺と角竜は円を描きながら距離を詰めていく

接近するにつれ緊張感が高まり、角竜の威圧感も大きくなっていく

この世界に転生して、二度目の飛竜との戦い

最初のフルフルは辛くも撃退したが、このディアブ羅斯はそれを遙かに凌駕する飛竜だ

飛行能力が乏しい角竜と、翼自体が無い獣竜種は同じ土俵で戦えるが、はつきりいってこのディアブ羅斯は俺よりも強い

恐暴竜と角竜といったら、恐暴竜の方が強いかもしれない

しかし、それは成長しきった成体同士の話しであり、今の俺は僅か二年生きただけでまだ未熟な部分がある

対してこの角竜は、俺よりも長い年月を生きてきたことが感じられ、俺よりも実戦経験は遙かに多いはずだ

何より、この亜種とも希少種とも格付けし難い朱色の角竜の力は未知数だ

お互いに睨み合っていたが、角竜の唸り声と共に、熾烈な闘争が始まった

最初に動きを起こした角竜は、身体を反転させ遠心力を活かし尻尾を振る

俺も間髪入れず尻尾で応戦し、互いの尻尾が激突して大きな衝突音が鳴る

尻尾の面積は俺の方が大きかったが、角竜の尻尾は圧倒的な強度としなやかさで、威力はほぼ同等…むしろ角竜の方が若干上手だった

鈍感なはずの尻尾から伝わる痛みにも苦悶するが、角竜は逆方向に反転し、容赦なく尻尾をぶつけてきた

直前で防御したが、身体の側面を襲った衝撃に、俺は二、三步後退りした

さらに角竜は追撃を加えるべく、二本の角を振りかざして突進してくる

攻撃の面に出遅れた俺だったが、角竜の突進を紙一重でかわし、角竜の側面に強烈な体当たりを敢行する

横からの衝撃によろけて転倒する角竜…

俺は親父に教わった対飛竜戦法、翼を鉤爪で押さえての攻撃をすべく、倒れる角竜に接近した

俺がその場を跳んで一気に距離を詰めると、角竜はすぐさま立ち上がって迎撃、宙に浮いていた俺を角竜は頭突きでふっ飛ばす

崖からの転落で鍛えた俺だったが、その時の痛みとは比べ物にならない激痛が、比較的柔らかい腹部を襲う

あまりの激痛に悶える俺に対し、角竜は容赦ない追撃をする

倒れる俺に向けて必殺の突進、俺はすんでのところで立ち回避でき、角竜は勢いを殺しきれず砂を滑っていく

俺が時間稼ぎをしたおかげでモモたちは見えなくなり、作戦はとりあえず成功した

このまま戦っても俺に勝ち目はない

後はこの角竜を撒き、安全に村へ帰還するだけだ

逃げ腰に見えるかもしれないが、親父に教わった教訓の一つ……”勝てない戦いはするな、自然界では生き延びた者が勝者だ”この親父の言葉が、しっかりと俺の中で生きていた

角竜が突進の後でもたついている隙に、俺は逃走をはかるべく走った

152

背後で凄まじい雄叫びが聞こえたが、俺は構わず走りつづける

今までに無いくらい全力で走る俺は、内心かなり焦っていた

目の前で逃走した俺に角竜は怒ったらしく、凄まじい速さで俺を追い掛けてきて、今では俺の真横を併走している

角竜は走りながら身体をぶつけてきて、俺もなんとか応戦するも、勢いは角竜の方が強い

進行上の岩場に入れば、いくらか地形を活かした戦いが出来るが、これではその前にお陀仏だ

焦る脳で対処法を考える俺に、賭けに等しい苦肉の策を思い付く

俺は今ある力をさらに振り絞り、走る速さを加速していく

角竜もそれに合わせ加速、後は角竜の体当たりを待つ

俺の目に大きな岩が見えた時、俺はわざと角竜に疲労の色を見せ付ける

角竜はそれを見逃さず俺に体当たりをし、俺は力一杯それに対抗する

そして大きな岩に近づいた時、俺は抵抗を止めて左に逸れていく

力のやり場を失った角竜は俺の動きに流されていき、俺はそこで身

を捻り尻尾で角竜の動きを後押しし、眼前の岩に角竜を叩き付けた
頭部を激突させることは失敗したが、角竜自身の突進と俺の力が加
わり、凄まじい威力になったはずだ

俺は角竜に追撃をすることも、様子を見ることもせず、すぐさま岩
場に入って行って身を隠した

「グッ……グガアアア……！」

今まで味わったことのない屈辱……

角竜は憤怒の暴君と化し、砂漠の砂を掘り起こし、その巨大を砂中
にうずめていった……

はあ……はあ……かなり危なかった、あのままいつてたらマジヤバかったな！

とっさの作戦が成功して良かったぜ……。

なんとか追撃をかわした俺は、岩場に溜まった水溜まりの元で、疲れを癒やしていた

腹……減ったな。

あの激戦でかなり体力を消耗したようで、腹の虫が騒いでいる

水溜まりには草食獣がいたのだが、俺が来たためにいつの間にか逃げってしまった

キョロキョロ周囲を見渡しても見つからないので、仕方なくこの場

を移動する

角竜があの後どうなったか知らないが、少なくとも死んではないだろう

となると、砂漠を進んで拠点に帰るのは危険なので、北の雪山方面を迂回して帰ることにした
それでも少しは砂漠を通るが……

メシィ……メシ……草食獣はどこにいる？

北に向かうついでにエサたるモンスターを探すが、一匹も見つからない

いたのは大嫌いなランゴスタだけだった

前に食べたのは数時間前だが、イビルジョーの俺から言わせてもらうと……人間にして丸一日何も食べないのと一緒だ

何も獲られないまま岩場を抜け、悪魔の棲み着く砂漠に出てしまった

空腹のまま角竜に遭遇したら、今度こそやられてしまう

俺はしばし躊躇したが、日影のところろで砂がモフモフしていたので、
つい好奇心にかられて岩場を出た

もぞもぞと動く砂の所をほじくってみると、甲殻種の《ヤオザミ》
がいた

成長すれば盾蟹となる固体で、前に盾蟹を食べた時はなかなかうま
かった

俺はヤオザミを捕獲し、殻ごと食べてみた

盾蟹の幼体なだけあってなかなか美味だが、なにぶん小さいので、
ちっとも腹の足しにならない

俺は他にもいないか探してみたが、見つからなかった

俺は諦めて北へと向かっていく

途中底の見えない谷間が現れ、高所恐怖症の俺はゾツとした谷の下からは水の音が聞こえるため、どうやら川があるようだ深さの程は知らないが……

ああもう…マズくてもいいから、ガレオスか何かこないかな？

俺の切なる願いが叶ったのか、俺の背後から何かが近づいてくる
ただし、それは俺が望んでいたものではなく、今最も望まないモン
スターだった

「ガアアアアアア！！！！！！」

俺の目の前に現れたのは、命懸けで撃退したはずの朱色の角竜…

大変お怒りのご様子で、眼が殺人的なまでにぎらつき、口からは黒い息を激しく噴出している

俺の前には怒れる暴君、背後には闇の裂け谷…

行くも地獄、退くも地獄である

確実に追い詰められた俺だが、この状況は不思議にも、俺に冷静さを取り戻させた

窮鼠猫を噛む、背水の陣…今の俺にはこのことわざが当てはまるはずだ

怒り狂う角竜はさっきみたいに様子見などせず、真っ正面から突進する

「（ウリヤアアア！！）」

俺は角竜の突進に真っ向から受け止め、全身の筋肉と脚の鉤爪を駆使し、角竜に負けない力を見せ付ける

角竜は一度後ろに下がり再び突進、今度は角で突き刺すつもりらしい

俺は瞬時に片方の角にかじりついたが、もう片方の角が俺の首に突き刺さる

首に激痛が走り、血がドクドクと溢れるが、俺は牙を噛む力を強くしていく

俺の噛む力と牙により、角竜の角が軋みヒビが入り、最後に力を入れて遂に角竜の角がへし折れた

だが角をへし折ったために角竜は自由となり、俺の頭部を突き上げ、身体を反転させて強固な尻尾で俺の頭を打ち抜いた

今まで味わったことのない衝撃が襲い、脳震とうを起こした俺はフラつく

倒れそうになるのを、辛うじて踏みとどまってはいるが、もう戦える余力は無い

角竜は自慢の角を一本折られたのみで、身体はほぼ無傷…

角竜の角は真っ直ぐ俺の心臓を狙っており、次の突進をくれば確実に死ぬ…

角竜は容赦なく俺に突進してきたが、俺が谷の端に立つと、角竜は慌てて止まり、尻尾を地面に叩きつけて雄々しく吼える

俺が突進をかわせば角竜は谷底に落下する

”正々堂々、前に出て戦え”…そう角竜は言いたいのだろうが、俺にはそんな卑怯な考えはまるで無かった…

俺は純粹にこの圧倒的な強さを持つ角竜を賞賛していた

かといって、このまま無残にもやられるつもりもない

俺の帰りを待つモモや村長のためにも、生きて帰らなければならぬ

そして俺が唯一生き延びる可能性は、これしか無かった…

「（生きて逢えたら…また戦おうぜ。

それまで…無敵でいてくれよな…あばよ。」

俺はニヤリと笑い、足場のない背後に後ずさった

最後に角竜と眼が合い、そこには怒りや憎悪の色など無く、俺への敬意があった気がした

俺は角竜に認められた満足感に浸り、暗闇の底へと落下していった

……

「（天晴れなり……いずれ我が強敵として立ちはだかること、心より愉しみにしておるぞ。」

この朱色の角竜こそが、後に生涯のライバルになると共に、唯一無二の親友となる竜であった…

恐暴竜と片角の暴君、この二体が様々な伝説を作ることなど…今は誰も知らない

第九話：恐暴竜の奮戦、憤怒の暴君（後書き）

はい……

漫画読んだことも無いのに、片角のマオウ出していました…

きっかけはディアソルテ装備を眺めてて、朱色のディアブロスかっこいいかな？

…と思ったからです

漫画を読んだこと無いので登場人物までは出せません

朱色の角竜はしばらく出番無いと思いますが、そのうち小説の重要な役柄につくかもしれません

補足

主人公は角竜にボロクソにやられたように思われるかもしれませんが、挙げましたとおり経験不足と年齢の差です

一番大きな要因は、怒りによる肉体の強化が出来なかったこと

人間の心を持つ主人公には、野生同士の戦いでは怒りに徹しきれな

いのです

第十話：少女と恐暴竜の邂逅

転生して溺れたのは二度目…

最初は島を出る時嵐に遭遇し、激しい波と風雨にもみくちゃにされ、呆気なく溺れた

俺は”砂漠の暴君”と死闘を演じ、この世界に転生して初めて苦戦を強いられた

角竜の重い攻撃を何度も身に受け、鋭い角に肉をえぐられた
最後に角竜の片角をへし折ったが、その後の一撃をかわせず…結果は惨敗

角竜の猛攻でボロボロになっていた俺は、深い谷に落下することで逃走し、幸いに谷の川は深く、深い水が落下の衝撃を消してくれた

ただ、激流の中で何度も岩にぶつかり、その度に傷口から血を流した…普通なら死んでしまうような怪我だが、俺は死ななかつた

それは恐暴竜の持って生まれた耐久力と、親父に厳しく鍛えられた肉体と精神力があったからだろう…

からくも生き延びた俺は、緩やかな浅瀬に流れ着いた

俺は意識を保ちながら立ち上がろうとするが、足を滑らして転倒した

角竜につけられた傷、激流の川で新たにできた傷、それらから多量の血が流れており、今の俺には満足に歩ける体力は残っていない

今すぐに何かを捕食し、安らかな睡眠とで体力を回復しなければ…
…俺は朦朧とする意識の中でそう考え、川のそばにある針葉樹の森へと入っていった

針葉樹林に入っすぐ、俺は獲物となる草食種のモニターを見つけた

発見したモニターは”ポポ”、振り返った大きな牙を持ち毛皮に覆われているが、その肉はとても上手く、またポポの舌は珍味と言われている

俺はポポの群に忍び寄るが、獲物にありつきたいという強い気持ち
が滲み出てしまい、離れた位置でポポに察知されてしまった

ポポは一斉に逃げていき、焦る俺は慌ててその後を追うが、怪我の
ために足を引きずっている

ポポの群から一匹が遅れ、俺はそのポポに狙いを定め、一気に詰め
寄って噛みついた

怪我で体力が低下しているとはいえ、俺の鋭い牙はポポを貫き、強
靱な顎はポポの剛毛ごと食いちぎった

仕留めたポポをほぼ丸呑みにし、逃げるポポを追撃……大きなポポ
を二頭仕留め、その二体を喰った

ポポを三頭喰ってもまだ空腹感が残っていたが、すでに残りのポポ
はいなく、騒ぎでそれ以外の草食種も一匹残らず逃げていた

ただ傷がある上に……今気付いたが、自分がいる地面は白く雪に覆わ
れ、空からも雪が降っている

こんな状況で獲物を探せば、空腹と捕食のいたちごっこがいつまで

も続く

俺は雪の積もらない大木の下に移動し、満身創痍の身体を横にする
ここまで傷ついた身体を動かしてきたのはほぼ気合い、それを解いて
気持ちを緩めた俺は、一気に押し寄せる疲労感と眠気に負け、す
ぐに深い眠りに落ちていった……

《雪山・麓の村》

極寒の雪山の麓に位置する、小さな集落

近くにあるポツケ村に比べると知名度は無いが、寒さをモノともし
ない逞しい人間が住んでいた

村が麓にあってモンスターがあまり来ないと、ポツケ村のハンタ
ーが活躍してくれるため、モンスターによる被害は無い

村の人々は雪山で採れる特産品を街で売り、雪山では手に入らない
物資を買い、他は自給自足でまかなっている

「ママ！」

畑仕事が終わったなら、雪山草採りに行ってもいい!？」

村の畑で、少女の明るく健気な声が響く

少女は毛皮の暖かそうな衣服に身を包み、となりで畑仕事をする母親らしき女性も同様の衣服だ

「構わないけど、行く時はちゃんと準備して、ギアノスたちに気をつけるのよ?」

母親は畑を耕す手を止め、我が子の頭を撫でるが、少女は不満そうに頬を膨らます

「もう十二歳になったんだから、子ども扱いしないでよ!」

「はいはい、十二歳にもなって一人で寝れないのはどこの子かな?」

母親が笑いながら言うと、少女は慌てて周りの目を気にする

畑仕事をしていた農夫たちは母親の話しを耳に入れており、皆少女を笑いながら見つめていた

「雪山草採りに行く!!」

顔を真っ赤にした少女は、畑の横のかごを引つたくり、針葉樹林めがけ走り去っていった

「わはははは!!」

相変わらずマリナちゃんは元気いっぱいだな!

畑から作物を引き抜いていた農夫が、少女の消えた針葉樹林を見て大笑いする

「畑仕事を手伝ったりしてくれませんが、まだまだ子どもですからねえ。」

ああやって、元気に走り回っている方がいいんです。」

母親は慈愛に満ちた笑みを浮かべた

《針葉樹林》

全く…みんなしてマリナのこと子ども扱いして！

確かに…確かに夜は怖くて一人じゃ眠れないけど、一人でおトイレに行けるよ！

それにこうやって一人で村の外に行けるし、外に出れない友達よりもずっと大人だもん！

この前なんか、追いかけてきたギアノスと駆けっこして勝ったもんね！

針葉樹林に入った少女”マリナ”は、誰もいないにも関わらず、自己主張を口にする

マリナの長所はその活発な性格と、ギアノスからも逃げ切れる優れた運動神経

大人でさえも手をやくギアノスに対し、幼いマリナは大人顔負けの動きでギアノスを相手取り、調子がいいときは逆に打ち負かす

マリナが村の外に出たがる理由はこれであり、ギアノス以外にもブルランゴをからかに雪山に行く

ただ今の時期は山に行く道が雪で閉ざされているため、雪山草を採るついでに針葉樹林に入ったのだ
針葉樹林は稀にギアノスが来る時以外、草食種ばかりがいる平和な森だ

マリナは針葉樹林に來ると、ポポの群れに混じって遊ぶのだが、今日に限ってポポたちが一頭もない

森を歩き回ってみたが、ポポの姿はおるか痕跡が見当たらない

しばらく歩き回って諦めかけた時、雪面に残るポポの足跡を見つけ、マリナは期待に顔をほころばす

足跡の数はかなりあり、また何度も踏み荒らされてどっちに向かったか分からないので、自分の勘で辿ってみた

マリナは足跡を見下ろしながら進んでいくと、視界の端にポポの毛が映り、顔を上げた

しかしそれはポポだったもの……毛皮を喰い破られ、血で雪面を赤

く染めるポポの亡骸だった

マリナが最初に見つけた亡骸のそばに、同じく喰い荒らされたポポの死体……遠くに赤黒い物体が見えたが、それもポポの死体

突如モンスターの死体を見たマリナは腰を抜き、雪の上に尻餅をつく

な、なんなのこれ……？

なんでポポが死んで……るの？

誰がこんな……もしかして……

マリナの頭に浮かんだのは、凶暴な肉食獣

ギアノスたちにはこんなに喰い荒らせないし、ドスギアノスにも無理
ブランゴはそもそも肉食ではない

残す可能性は飛竜種……だが、ここらで確認出来る飛竜は”フルフル”しかない

しかしフルフルは麓に下りてまで、大きな体のポポを捕食しに来ない

だとすれば誰も知らない、未知の肉食獣……

マリナは得体の知れないモンスターを想像し、その恐怖に体を震わした

今まで相手にしてきたギアノスやブランゴとは、格が違う
ポポを襲ったモンスターが現れたら、自分ごとき簡単に捕まえ、喰
つてしまう

マリナには森の静けさが不気味に感じられ、モンスターが自分を狙
っていないか周囲を見渡してみると、一つ目を引くものを見つけた

見つけたのは、ポポの亡骸の脇から地面に残る血痕

一見、ポポが引きずられて出た血に見えるが、地面の雪はえぐれて
いない……
そしてそこには、大きな足跡があり、足跡と血痕は針葉樹林の奥ま
で続いていた

マリナはモンスターへ恐怖を感じていたが、未知のモンスターを見
たいという好奇心が強まり、ゆっくりその足跡を辿ってみた

針葉樹林を進んでいくと、一際大きな針葉樹に辿り着く
巨大な針葉樹の下には雪が積もってなく、足跡はそこを通ったらしく足跡は消えていた

マリナがため息をつき、ふと横を見ると、大木の横には黒緑の巨大なモンスターがいた

マリナは悲鳴をあげそうになるのを、手で口を覆って止めた

幸いモンスターは寝ているようで、マリナに気付かず静かな寝息をたてている

マリナは慎重に近付き、その凶暴そうなモンスターの姿を見る

牙獣種であれば体毛があつて四肢が発達しているが、このモンスターは後ろ脚のみが発達している

飛竜種であればつがいの翼があるが、このモンスターにはそれが無い

こんな特徴を持つモンスターは見たことがないし、聞いたこともない…

マリナが自分の知識を思い返していると、一つ思い付くものがあった

モンスターにはそれぞれ特徴があり、二本の足で歩き翼を持つ竜を飛竜種、牙があり哺乳類型の獣を牙獣種、飛竜の翼の代わりにヒレを持つ魚竜種など…自然界に生息するモンスターは、学者や研究者の決めた分類に当てはめられるが、中にはそれらに当てはめるのが難しいモンスターがいる

あらゆる生態系から逸脱し、強大な力と驚異的な生命力を持つ生物…それらはまとめて”古龍”と呼ばれている

目の前にいる竜は、マリナが今まで見たモンスターとは異なる構造をし、また知る限りの分類には当てはまらない

さらにさらに、もしかしたらこの竜は新種の古龍で、それを見つけた自分は大発見をして有名になるのでは？

…と胸を踊らせていたが、改めてこの竜を見ると痛々しい傷が無数についていることに気付く

傷口から微量の血が流れ、雪山の寒さがこの竜に一層負担をかけているようだ

このまま放置したら、この竜は死んでしまつかもしれない……マリナはいてもたってもいらねず、目の前の竜に近づいていった

傷は最近出来たもののように、傷口が真新しい

マリナはかごから雪山草と一緒に採れた薬草を出し、それをすりつぶして竜の傷口に塗っていく

時折竜がピクリと動き、そのたびにマリナはビビるが、起こさないよう慎重に傷を癒やしていく

薬草が無くならないうちに治療を終え、竜も起きることはなかった。ただ傷を癒やした後の竜は、治療する前より心地良さそうに寝息をたてており、一仕事終えたマリナは満足げだった

後はこの竜が起きてくるのを離れて見ていたが、結局起きず、日没が近づいてきたので一旦帰ることにしたが……

「（ありがとう……。）」

「……え……誰？」

突然聞こえた言葉に、マリナは声の主を探してキョロキョロと辺りを見回す

「……気のせいかな？」

ここにはマリナとこの子しかいな……。」「

マリナが竜に振り返ると、竜も同じくマリナを見つめていた

緊急事態にマリナが固まっていると、竜はゆっくり口を動かした

「（怯えないでくれ……俺は君を襲いはしない。）」

今度ははっきりと、竜の口から言葉を聞いた

しかしそれは有り得ないこと……モンスターが人間の言葉を理解することも、人間がモンスターの言葉を聞くなど不可思議なことだ

「き……君は、人と話せるの？」

マリナが竜に問い掛けると、竜は首を振って否定した

「(すまない…今は答えられそうもない。

少し…休ませてくれ。)」

竜は持ち上げていた首を下ろし、静かに瞼を綴じてしまった

竜がとても疲れていることは分かっており、マリナも帰らなければならぬので、聞きたいことはまた今度にしようと思った

「また来るから…ちゃんと休んで傷を治してね？

バイバイ。」

マリナは寝てしまった竜に手を振り、急いで村の方角へと走っていった

手負いの竜は少女の後ろ姿を見据えていたが、やがて竜は深い眠りへと戻っていった

第十話・少女と恐暴竜の邂逅（後書き）

次も似たような…感じ？

第十一話・俺ロリコンじゃないよ? (前書き)

150・805PVだって!?

いつの間にこんなに…感動です

第十一話：俺ロリコンじゃないよ？

「ママ！！」

「今日も雪山草採ってくる！」

麓の村の元気少女は、畑仕事をする母親の後ろ姿にそう叫び、返事も待たずに針葉樹林へと走っていった

母親が娘に振り返る時には、すでに娘の姿は小さくなっており、針葉樹林に入っていくところだった

娘のわんぱくぶりに母親は呆れてため息をつき、切り株に腰かけて休憩する

休む母親にもとに、数人の村人が軽いおつまみを持って来た

母親はありがたく村人の厚意に甘え、村人たちもまじえて小休憩する

人が集まると会話が生まれるが、娘であるマリナの話がほとんどだ
マリナのわんぱくぶりと親孝行は村で有名である

また、幼いながらも顔立ちはすでに良く、同年代や稀に大人たちをメロメロにしている

もちろん大人は決して手を出さないが、同年代の少年たちはマリナ

の気をひこうと、あれやこれやアピールするも玉碎

普段マリナは、畑仕事を手伝いつているためその邪魔を出来ないし、マリナの大人びた性格に少年たちはなかなか絡んでいけない。さらにマリナは暇さえあれば外界に出るが、少年たちは怖くて出れない…これらが男友達に興味を示さない理由でもある

マリナは自分より劣る異性には決してなびかない、気高く孤高の存在…と、マリナ自身が言っていた

村人たちはマリナに突撃し、打ちのめされて帰って来る少年たちを見て笑い、よく少年たちを慰めている

「あの勢いでやってたら、すぐ百人斬り達成しちゃうんじゃないか？」

村人の一人が、マリナの愛の告白を蹴る様子をたとえると、他の村人や母親は笑った

「そうなりそうで怖いですが…機会を見逃して欲しくくないです。」

母親は遠い目をする

成人を迎えていない今だから笑えるが、大人になってもこのまま生きていけば、婚期というものを見逃してしまうかもしれない

「わはははは！」

大丈夫ですよ、まだ異性を意識しないだけで、十五にもなれば立派な女の子になりますよ！」

「そうだといいですが…」。

それにしても、最近マリナはよく外に行きたがるわね。」

「ありゃ？」

奥さんがマリナちゃんをお願いしてるんじゃないんですか？」

村人が意外そうな表情を浮かべたのに対し、母親は首を横に振る

「雪山草を採ってきてくれて助かるんですが、ただ心配で…」。

「マリナちゃんのことだから大丈夫だと思いますけど、今日は森に用事がありますんで、その時は様子を見てきますよ。」

「すみません、よろしくお願いします…」。

《針葉樹林》

長く降っていた雪は止み、針葉樹の葉と地面は美しい雪景色に様変わりした

ただ針葉樹に降り積もった雪も、先ほどから森に起きる振動で、パラパラと地面に落ちていく

森の中心には木々の背丈と同等の体格を持ち、強靱な足で力強く大地を踏みつける竜…

数日前にこの雪山のフィールドに流れ着いた俺は、空腹を僅かに満たし、寒さを感じながら無理に睡眠をとっていた

傷と寒さで体力を消耗していく中、俺は一人の少女に出会った

俺の傷を癒やしてくれた少女を見ると、恐怖に固まっていたが、俺は穏やかな声をかけて少女を安心させた

体力が無い俺はすぐに寝てしまったが、少女はまた来ると約束し、帰っていった

翌日、少女は言った約束した通り俺のもとにやって来た
まだ俺に怯えていたが、昨日同様優しく声をかけると、緊張をほぐしてくれた

それから少女は、傷ついた俺のために薬草を採り、たまに調合した回復薬までくれる
動けない俺のため、かき集めた食料を持ってきてくれて、寒い日には辛い食べ物までくれた

少女の看病のおかげで俺の傷はあっという間に癒え、数日もすればもとのように動けるまでに回復した

今俺は、鈍った体をほぐすように動かし、走ったり地面を踏みならしたりしている
瀕死に追い込まれた後回復した俺は、以前よりも強くなった気がしたが、俺の考え通りであった

足を上げて大地を踏みつけると、凄まじい地響きと亀裂が生じた他、衝撃波で積もっていた雪までも吹き飛んだ

死に際から復活して強くなるなんて、どこのサ ヤ人もとい、このバ ダックだよとツッコミをいれる
おそらく俺を転生させてくれた神さまが、オマケで付けてくれた能力なのだろう

俺は現状の力に満足し、次に太めの大木を見据える
近寄って首を傾け、大木の幹を軽く噛んでみると、まるでチーズを噛むかのように簡単に噛み千切った

次に尻尾を振るって大木に当ててみると、大木は簡単に折れ、その抵抗の無さから小枝に思えた

「モンスターさん！」

自分の実力を確認中に少女の声が聞こえ、俺は声の聞こえた方角に首を傾け、少女の呼び声に応えるべく鳴いた

どうやら死に際からの強化は俺の肺活量までに及んだため、鳴いたというより吠えたで、無意識に普段の咆哮くらい大きかった

俺の大きな声のせいで森が揺れ、走ってきた少女は驚いて前のめりに転倒する

これからは力を制御しなければ……そう思っていると、起き上がった

た少女が俺を睨んできた

「いきなり大きな声出さないでよ！
驚いて転んじやっただじゃない！」

「(すまんすまん…人間相手には初めてだから、手加減出来なかった。)」

俺が素直に謝ると、少女はニコツと笑い機嫌を戻した

「謝ってくれたから許してあげる！
でも、次やったら許さないからね？」

少女は腰に手を当てて上目で見つめてくる

おや？

なんなんでしょう……この少女の仕草と上目遣い、見てるとなんか
こっ……胸の鼓動が高まってくる感じだ

俺は首をブンブン振り、この感覚は単に小さい子どもと遊んで楽し
いからだ、と思い込む

「それより、もう体は動かして大丈夫なの？」

「（おう、嬢ちゃんの看病のおかげでこの通りだ！）」

元気なことを見せ付けようと地面を踏みつけると、衝撃で木に降り積もった雪が少女に落ちた

雪に半身埋もれた状態で少女は白々しい目で、無言の圧力を当ててくる

泣かれたり騒がれたりしたらと、俺は慌てて全力で謝罪する

「全く…ワザとやってるなら、本気で怒るよ？」

「（め、面目ない…。。）」

少女は俺が謝ると快く許してくれる
優しいのか？

「（それより、嬢ちゃんは『マリナ！』…は？）」

少女は俺の話しを遮ると、なにやら誇らしげに…無い胸を誇張する

ふむ……自分はこだわり持ってなかったが、貧しいのもなかなか……って、何考えてんだ俺は？

「私は嬢ちゃんじゃなくて、マリナっていう名前があるの！だからマリナって呼んで！」

「（ああ分かったよ嬢ちゃ……じゃなくて、マリナちゃん。）」

俺が少女をマリナと呼ぶと、少女はやはり機嫌良さそうに笑うあと、名前の後に”ちゃん”を付けることも拒否された理由は子ども扱いされてるみたいだから……と

少女の言いなりになってる俺って……世間からどう見られるんでしょう？

「（続きの話しだけど、毎日俺のところに来て、マリナの家族は心配してないの？）」

「うん、大丈夫大丈夫！」

雪山草採りに来てるって言うてるから、何の心配もないよ!」

「（ありゃ、そうなの?）」

心配をする俺に対し、マリナは笑いながら言う

話を聞くとマリナは家の手伝いとして、特産の雪山草を採ってくるらしい

こんな歳で親孝行なんて大した子どもだ

そういえば俺は親孝行どころか、親父のスパルタ教育で忙しく、それすら考えたこと無かった

元の親はどうでもいいが、こっちのイビルジョー親父に何かしてやりたい、そう切実に思う俺だった

「（親孝行なんて、今時珍しいことだな。大した心掛けだよ。）」

「うん。」

マリナがパパの代わりにママのお手伝いするんだ!」

スゴいな……父ちゃんはどうか出稼ぎにでも行ってるのかな？

「パパは街の方でも結構有名で、とっても強いハンターだったんだ！」

なぬ……”ハンター”ですと!？

”ハンター”

言わずと知れた大自然を相手にする狩人のこと

植物を採集して魚釣りをしてるならまだしも、ハンターは俺たちのような、所謂大型モンスターに挑んで来るので、お互いに敵視している

俺はまだハンターとは遭遇してないが、太刀やらハンマーでタコ殴りなんてまっぴらなので、出来れば一生会いたくないと思っていた

そのハンマーさんが、目の前にいる少女の父親だと!？

コイツはマズい……もし親父さんがやって来て、ハンターにまとめて

かかられたらボコボコにされて剥ぎ取られちまう！

そんであれか！？

ヤツパリ俺の素材は装備に使われて、自分を殺した奴の身体を守る
つてのか！？

か、神さま助けて！！

「アハハ！

そんな顔しなくても大丈夫だよ！

パパはもうこの世にいないから、モンスターさんが狩られたりしないよ！」

俺はマリナの言葉を聞いて安心したが……サラツとマリナはとんでもないことを言った気がする

「うちのパパは何年か前、モンスターとの戦いに負けて、帰らぬ人になったの。」

マリナはまるで父親の死が何ともないかのように、笑いながら語っている

俺が笑顔で語る理由を尋ねると、マリナはこう返した

「パパが死んだって聞いた時は悲しかったけど、いつまでも悲しんでいられなかったの。だって私にはママがいるし、パパの代わりに私がママを支えないといけないから。」

この娘はとても強い…

普通なら父親を無くせば悲しみにくれ、頼れる存在である母親に泣きつくはずだ

それがこの娘はどうだろう？

母親にすがりつくどころか、悲しみを克服し、母親を支えていたというのだ

「それにパパは人間の領域の外：弱肉強食の世界を相手にしてたんだから、命を落としても恨み辛みは無しだよ！」

弱肉強食か……どこぞの包帯姿の大悪党も言ってた気がする

弱ければ死に、強いものは生き残る

人間同士ではどうしても私怨が生まれるかもしれないが、異種族間では食うか食われるかであり、生存競争である

モンスターにやられたからといって、モンスターを恨むのは筋違い領域を犯し自然界に入ったからには、人間も弱肉強食の世界に足を踏み入れたことになるからだ

本当によく出来た娘だ…

俺がまだ覚悟してないようなことを、幼子のマリナは既に身に付けているのだから

「（うんうん…マリナはたくましい娘だね。

お兄さん感心しちゃうよ。）」

俺はマリナの心構えを純粹に讚え、誉め上げたつもりだったが…

どす黒い殺気と何かがブチッと切れる音が聞こえ、俺は恐る恐る顔をあげる

目の前にいるのは可愛らしい少女のマリナなどではない！

笑顔だが頬を引きつらせ、背後に鬼の姿が浮かんできそうな夜叉だ！

「（あの…マリナさん？

なぜそんなに素敵すぎる笑顔を浮かべているのです？）」

「あんだ今子ども扱いしたでしょ？」

マリナはね……子ども扱いされるのが、ごはん盗られる次にイラつくの！」

「(ま、待て！

俺がいつ子ども扱いし』問答無用！！』

イタいいたい！

雪玉を投げないで！！

プツンしたマリナは雪を力強く握り、固くなった雪玉を俺めがけ投げまくる

なんだか知らないが、親父のスパルタ特訓による防御力は大抵の攻撃を弾くが、幼女の怒りの攻撃にはなすすべもないようだ

雪玉でボコボコにされた俺をよそに、マリナは雪だるまを作って遊んでいる

全く…雪だるまを作って遊ぶなんて、どう見たって子どもじゃないか

「ねえ…今マリナのこと馬鹿にしたでしょ？」

「（！？）

「イイエ…ソナナコトハ。」

俺の心を読んだかのように言うマリナに、俺は心臓が飛び出る思いをした

竜だから冷や汗はかかないが、人間であったのなら滝のように流れていることだろう幼児体型マリナが俺に向けてくる蔑むような目つき……

これはなかなかクセに……ハッ!?

いかんいかん、何だか最近俺の中身がおかしくなってるな

妙な感情を打ち消そうと首を左右に振っていると、マリナに小枝で刺された

「全く…みんなしてマリナのこと子ども扱いするんだから!」

「（いやいや、実際まだまだ子どもでしょ?）」

俺が笑いながら穏やかに言うと、今度は十分に殺気のコもった睨みをくれました

ハハ…この娘がハンターにでもなったら、古龍をソコ狩りしちゃいそうですね

「そういうアンタはどうなの!？」

モンスターだから分からないけど、せいぜい二歳くらいでしょ!？」

マリナの言った言葉に俺はとぼけてみせたが、本当はかなり動揺していた

前世の年齢と合わせれば二十代の俺だが、転生後は生まれてまだ二年

モンスターが何年生きたかなど、動けなくして十分に調べなければ分からない

さらに、モンスターの専門知識を持つ学者やハンター以外には、皆目見当がつかないはずだ

そういえば、マリナはハンターの娘だと言っていた

もしかして、父親からモンスターの年齢を読み取る方法を伝授されたのでは？

…と思い問い詰めたところ『カン』だそうだ

いやはや…この年齢で女のカンを身に付けているとは、ますますただ者ではないな

「結局のところモンスターさんは何歳なの？」

「やっぱり二歳？」

ここで下手なこと言うと見破られるが、年下だと明かせば絶対に調

子に乗るので…

「（俺は二十年以上生きてるかな？

詳しい年齢は忘れた。）」

嘘は言っていないはずだ…

俺は転生してからの年月と、転生前の年齢を合わせた数を言った
詳細な年齢は本当に忘れたが、年齢は二十代のはずだ… たぶん

「ふうん…二十代ねえ。

それにしても身体が若々しい気がするけど、モンスターと人間とじ
や常識違つもんね。」

とりあえず信用してくれたみたいで、ホッと胸をなで下ろす

「マリナより年上なら…今日からモンスターさんは私の兄ちゃんだ
ね！」

「（は？兄ちゃん？）」

マリナはとびつきりの笑顔を俺に向けてくる

「（いやいや…何で俺が兄ちゃんなの！？）」

「だってモンスターさんは私より年上だから、それにお兄ちゃん欲しかったし。」

「（いやそれにしたって『だめかな？』うぐっ！？）」

マリナの涙ぐんだ上目が、俺の精神に直接攻撃！

先ほどの夜叉とは打って変わって、まるで小動物のように佇む

俺はつぶらな瞳で見上げてくるマリナを、今すぐ抱き締めてお持ち帰りしたかったが、生憎イビルジョーの俺は手が短い！！

声を出さずに悶絶する俺

対してマリナは、俺に拒絶されたと思ったのか、表情がだんだん泣き顔に変わっていく

「（俺が悪かった！！）

兄ちゃんって呼んでいいから、泣かないでくれ！」

恐暴竜にしては情けない状況だが、女は泣かせるな……と、親父が言っただよような気がしてたので、俺は慌ててマリナをあやした

あの親父のこと……言いつけを守らなかつたら、感知して殴りに来そうだ

「グスッ……ごめんね。」

もう馴れ馴れしくしない……でも、マリナのこと嫌いにならないで
?」

「もう兄ちゃんでもいい!

好きに呼んで……いや、兄ちゃんって呼んでくれ!」

何かがおかしくなってる気がするが、これ以上子犬のようなマリナ
を見ていたら、俺の理性が持たなくなる

プライドを捨てた俺の行動が功をそうし、マリナは泣くのを止めた

俺は泣き止んでくれたマリナを見て安心する

涙を拭かずに笑顔を向けてきたため、マリナの目尻には涙が溜まり、
それから綺麗な雫となって頬を伝う

少女の放つ純真無垢な笑顔を見た直後、俺の胸は高鳴った……

この胸の高鳴り、ときめき……これが《鯉》というものか!!

《鯉》とは何か……

俺は前世でそれを確かめるために、雷オヤジ邸の池に忍び込んだ!
結果は惨敗!

《鯉》とやらを知る前に、雷オヤジの脅威を知ったぜ!

《鯉》とは魚であり、モンハンの世界でいうところの《春夜鯉》だな!!

「兄ちゃん、何一人でぶつくさ言ってるの？
変な風に見られるよ？」

「（ありゃ？
夢でも見てたのかな？）」

見れば、マリナの表情は元に戻り、さつき感じていたときめきもきれいサツパリ無くなっている

「（ん）、俺って何言ってたんだ？」

「兄ちゃんが知らないならマリナも知らないよ。」

俺は首を傾げていると、森の奥から雪を踏みしめる音が聞こえた
とっさにその方角を見てみると、白い防寒着を着用した人間が数人
いた

人間は俺とマリナを見て驚き、手に持った農具を構えて叫ぶ

「マリナちゃん!!
そいつから離れるんだ!」

「(ヤバっ!!
とうとう見つかった!)」

俺の声を聞いた村人はさらに焦り、急いでマリナのそばに駆け寄った
そして村人はマリナをかばうように、俺と対峙する

「おじさん!?
なにしてるの!?!」

「なにつて…目の前のモンスターが見えないのか!?!
それにコイツ…見たこともないモンスターだぞ!」

村人たちもいくらかモンスターを見てきたが、目の前の竜は飛竜種
とも牙獣種とも違う体つきをしている
飛竜のような翼は無いが、強靱な後ろ脚と水竜に匹敵する体躯…そ
して首のあたりまで裂けた大きな口と、そこに並ぶ凶悪な牙に村人
たちは戦慄する

村人たちは固まって、俺はどうしていいか分からず動かないでいる
動いたものといえば、村人を押しつけて前に出るマリナだけだ

「全く…おじさん、兄ちゃんに迷惑かけないでよ。」

マリナは恐れることなく俺の元に歩み寄り、首を撫でて危険でない
ことを見せ付ける

凶悪な竜に慣れ親しむマリナを見て、村人たちは驚きのあまり絶句
する

「マ、マリナちゃん…き、危険じゃないのかい!？」

「大丈夫だよ。」

兄ちゃんはこっちから手を出さなければ、襲ってこないよ。」

マリナは俺の体を撫でながら語るが、モンスターが人間と…まして
や肉食獣と仲良くするなんて、村人たちは信じられないだろう

「え、そうなのかい？」

てつきり…マリナちゃんを食べようとしたのかと。」

「兄ちゃんはポポ以外食べないから安心して！」

「わはははは！」

マリナちゃんが言うなら、そうなんだろうな！」

この村人たちはお人好しなのだろうか？

マリナが言うなら……って、どういう理由だよ！？

目の前の俺に喰われるとか、ああマリナは頭がイかれてるんだ、
と思わないのか？

その他もろもろあるが、マリナに睨まれてるので止めた

そしてその後聞いた言葉に、今度は俺が驚愕する

「マリナちゃんの友達なら、村人みんなの仲間だ！

よっしゃ、村に戻って歓迎会だ！」

「良かったね、兄ちゃん！」

今日から晴れてマリナのお友達だね！」

マリナと村人は狼狽える俺を無理やり村へと引っ張っていく

これは悪い夢だ：

モンスターがこんなに人間に受け入れられるはずがない！！

やはり俺は、村中のハンターにボコボコにされるんだ！！

クツ、なんでこうなった！？

そうだ、恐暴竜に転生させたあの偽神さまのせいだ！

神さまの大バカ野郎！！

アオアシラにやられちまえ！！

神「ブワックション！！

ちくしょう…。」

天使「どうしたの、ちゃん。」

神「なんや知らんけど、めっちゃ腹立つわ。」

ウチの噂しとるんは、誰や一体…ったく。」

天使「　　ちゃんも大変だね…あ。」

神「なんや…あ!？」

このポケアオアシラ!

なんでオドレが罫にはまんねん!

どっか行つとれやカス!!

んなつ!？」

天使「ごめ〜ん、ジンオウガにやられちゃった。」

神「やられたつて…三乙やないかい!!

どないな弱さやねん!」

天使「二回やられたのは　　ちゃんですよ!」

神「や、やかましい!

ウチは何回やられてもエエんや!」

天使「うわっ…ズルいです!」

神「うっさい！」

オドレは隅で八チミツでも採集しとれや！」

今日も神さまと、愉快的な仲間は平穩だった…

第十一話：俺ロリコンじゃないよ？（後書き）

更新遅れてすみません

やっぱり主人公を適当に遊ばせとくのが、一番書きやすいですね

余談ですが……

神さまは上位ランクに上がれました

第十二話・恐暴竜の弟子？（前書き）

なんか……主人公がいい具合に変態化してる気が……

第十二話：恐暴竜の弟子？

「竜ちゃん、今度はこつちを頼むよ。」

「ギャウー!!」

麓の村から少し離れた位置にある針葉樹林

そこでは数人の村人が木を伐採し、それを手助けする巨大な竜がいた

死を覚悟して村に案内された俺だったが、予想外に村人は俺を殺そうとはしなかった

最初は俺を恐怖の眼差しで見っていたが、マリナの話しを聞いて警戒を解いてくれた

逆に俺は、そのお人好しな態度が怖かった
俺が油断した隙に襲いかかってくるのでは…と、俺はいるはずのないハンターに怯えていたのだ

そんな俺の不安を一蹴してくれたのは、初めて会った人間のマリナだった

マリナは俺を村に馴染ませようと、いろいろ画策してくれた

マリナの純粹さと村人たちの暖かい歓迎に、俺は少しずつ警戒を解いていったのだ

人間に馴れた後は、ただ何もしていないのは癩なので、木々の伐採を手助けしている

太い木を一噛みでへし折り、何本もの木々を引っ張る俺は、村人からかなり頼られていた

ただし、いつまでもここに居るわけにはいかなかった……

「（そろそろ潮時かな……。）」

最初は気にとめてなかったが、最近では深刻な事態となっていたそれは……捕食対象であるポポが激減したこと

理由は勿論、恐暴竜である俺の暴食が原因だ

俺の知性と理性が過激な捕食を防いでいるが、寒さでスタミナの減るこの地域では、否応無しに捕食回数が増えていた

1日に5頭、多い時には10頭以上も捕食する

ポポだけでなく、ガウシカやファンゴですらも捕食するが、腹を満たすには圧倒的に足りない

本来俺のような竜は、テリトリーを持たずに広い地域を移動し、同じ地域に長くいてはならなかった
それは恐暴竜が食欲を満たすために捕食を続け、最悪の場合にはその地域の生物を絶滅させるからだ

幸いこの近くはまだ壊滅していないが、時間の問題だ

一度ふざけて村を離れ、捕食しなかったらどうなるか試してみたが
……あんな体験は二度とごめんだ

雪山の寒さが体力低下に拍車をかけ、数時間も経たないうち空腹感がおとずれる

それから全身に苦痛が襲った

目は血走り、口からは強酸性の唾液が溢れる

半日もすれば意識朦朧の状態となったため、俺は危険だと感じて急いで捕食した

あのまま日没まで捕食しなかったら、理性が消え去り、目に映る全てを喰らい尽くす恐ろしい捕食者と化していただろう

これ以上止まったら、村人ですら喰ってしまうかもしれない
それに、俺の帰りを待つ猫たちのこともある…

俺の考え通り……そろそろ潮時だった

「エエエエエ!？」

村を出ていつちゃうの!？」

マリナは俺の言葉を聞いてとても驚いた

マリナよ、驚いたとはいえ大口を開けて…その、可愛い顔が台無しだぞ？

今俺は村人の集まる広場において、対話するマリナと俺を、村人がぐるりと囲んでいる

ちなみに、俺の言葉が分かるのはマリナただけだ

ずいぶん都合のいいことだが、おそらくあの神さまが何かしたのだろっ

「なんで!？」

せっかく仲良くなったんだから、もっと一緒にいようよ!」

そう言われても…ねえ？

村人たちに目を向けると、揃って頷いてみせた

村人たちには前もって、身振り手振りで出て行きたい理由を告げていた

モンスターの身振りで理解するって…都合の良すぎる話したが、この際無視だ！

ポポは村人にとっても無くてはならない存在だ

ポポの毛皮・肉・牙は村人の衣食住に使われるためだ

俺がここに居座れば、どっちにしろ村に被害がくる

いくらマリナでも、そういった事情はまだ分からない

マリナは村人たちに説得するよう頼むが、村人たちは皆難しい顔をする

村人たちも俺が出て行くことを望んでいないが、村の存亡とは引き換えられない

何より、これは俺が決めたことだ

誰にも止められない

村人たちに説得してもらおうのを諦めたマリナは、涙目になって俺を見つめる

そんな目で見ないでくれ……これはマリナのためでもあるんだ

「（二度と会えないわけじゃないんだから心配すんな！
ちよっくら気ままに旅するだけだからさ！）」

「ウソだ……。」

「（俺がウソついたことあるか？）」

「何回もある……。」

ガクッ　俺はずっこけそうになるのを耐えた
マリナよ、そこは普通肯定するところだぞ？

「兄ちゃんは何を旅して何を……？」

「（ん）気ままに、目的もなく、おもいついた行動のままに……かな？」

正確には拠点のアイルーたちを守りながら、モモと一緒にだかな

「なら、マリナも兄ちゃんについて行く！」

「(なにい!?)」

マリナのその言葉に、俺だけでなく村人たちも驚愕する

ただ一人、村人に混じるマリナの母親だけは、険しい表情をしていた

「(待て待てい!!」

なんでマリナまでついてくる話しになるの!?)」

「せっかく仲良くなった兄ちゃんと離れたくないから。」

クツ…なかなか嬉しいこと言ってくれるじゃないか

困った俺は、村人の顔を眺め回してマリナの母親を捜すが、母親の姿はなかった

母親に何とかして言いくるめて欲しかったが、いないなら無理だ

仕方ないな……

「(ダメだ、マリナは連れて行けない。)」

「なんでよ、外を旅するくらいいいじゃない!」

「(ダメだ!!)」

俺は今まで発したことがない、怒気を含んだ声で怒鳴る
マリナは俺のただならぬ雰囲気、開いていた口を閉じる

「(外を旅するくらい…?)

外の世界は、そんな生ぬるい考えで生き残れる世界じゃないんだ。
弱ければ死に、強者のみが生きること許される、弱肉強食の世界だ。

この地では俺が一番強いかもしれないが、外には俺を超える強さの
化け物が腐る程いる!」

マリナは俺を治療した時に見て、感じたはずだ
こんな強そうな、恐ろしい竜にこんな深手を負わせる存在がいるの
か…と

「(外にはお前が相手にしてきた、ギアノスやブランゴなど霞むく
らい、遥かに強力なモンスターがいる。

仮にお前が無理やり付いて来たとしても、俺は自分の事で手一杯…
お前を助ける程の余裕はない。)」

俺はマリナに厳しい現実を叩きつける

幼い少女にはキツイ言い方もしれないが…

俺の目から見て、マリナが自然界に出て生き残れるとは到底思えない

強靱な体躯を持つモンスターならともかく、マリナはロクに鍛えられていない華奢な少女だ
外に出たら真っ先に死ぬ

俺がここまで強く否定するのは、マリナに死んでほしくないからだ

マリナは何も言い返せず、黙って俯く

ここまで言えば、マリナも考えを改めてくれるだろう

見てみると、さっきまでいなかった母親も姿を見せた
後は、母親が娘に言い聞かせてくれるはずだ

母親はマリナのそばに歩み寄ると、そっと肩に手を触れる

「グスツ……ママ？」

「…あなたが外の世界に憧れるのは分かるわ。
だけど、外はマリナが思ってる以上に危険な場所なのよ？」

うんうん…もつと言ったれママさん！

俺は母親の言葉に頷きながら、母親を心の中で応援する

「マリナが命を落とすのは、私も父さんも望んでいないわ。だから……これを持っていきなさい。」

いいぞもつとや……なに？

俺が一瞬理解出来ないでいると、母親はマリナに何かを渡した布に入って分からないが、それは細くとても長いものだ

「ママ…これは？」

「父さんの形見よ。持っていていれば、父さんも見守ってくれるわ。」

マリナは母親の顔を見上げた後、重く長いものを包む布をとる

現れたのは、身の丈を遥かに超える長さの武器
蒼い鞘に紫の帯が絡みつき、鞘から引き抜いた刃は銀色に煌めいて
いた

武器を見て驚く娘を満足げに見つめた後、母親は俺の方に近づいて
来た

「せっかく引き止めてくれたのに…ごめんなさいね竜ちゃん。ただ、マリナはあんなったらもう止まらないのよ。」

「ガウッ！」

「反省するわ…：…だけど、無理を承知で頼みたいの。

マリナを…父さんが見続けてきた世界に連れて行ってもらえないかしら…。」

どうやらマリナのママさんは、マリナが外に出ることを後押ししてくれているようだ

娘の後押しをする母親、感動ものだね…：…って違アアアう…！

なにやっちゃってんのママさん!?

言葉分からなくても、今までの雰囲気分かるでしょ!?

俺はマリナに危険がないように、厳しいこと言ってまで止めたんだよ!?

「ママ…ありがとう。」

父さんの武器があれば勇気を持てるし、頑張れる気がしてきた!」

いや…勇気を持たなくても頑張らなくてもいいんだよ？

あれ…？

なにこの雰囲気？

いつの間にか村人たちは、抱き合う親子を囲んでいた
それはまるで、母親から旅立とうとするマリナを祝うかのような…
実際そうなのかもしれない

マリナはそつと母親から離れると、なんとも晴れ晴れとした表情で
俺を見る

他の村人たちは、”頼んだぞ”とでもいいかげんな視線を向けてくる

あら…？

ここでまたマリナを拒否したら、俺が悪者になるのは気のせいか…
…気のせいじゃないな

さっき母親が言った通りなら、断ってもマリナは無理やりついてくるな

俺は盛大にため息をこぼし、とうとう折れた

「（分かったよ…選択間違えたら、寝覚めが悪くなる。しゃあない、連れて行ってやるよ。）」

途端にマリナは歓喜し、弾丸のように俺に抱きついてきた

抱きついてきたというより体当たりで、俺の腹部を強烈に痛めつけた

「（ウググ……た、ただし条件があるぞ？

外では勝手な行動は控えること！

それから……三年間俺の元で修行し、強くなってから自然界に出ることだ！）」

224

腹の痛みを耐えて、何とか言葉を絞り出す

マリナを強くするというのは、やはりマリナを死なせないため

自分のことで手一杯とはいえ、何もしないでマリナを見捨てるほど薄情ではない

せめて、マリナが一人でも戦えるくらいは強くしてみせる

「うん！兄ちゃんに強くしてもらえるなら、マリナはどんなハンターよりも強くなっちゃうからね！」

諦めた俺はマリナを不本意ながら引き取る

その日のうちにマリナは出立の準備を済ませる

マリナを乗せた俺は村人たちに見送られ、内心かなり後悔しながら拠点へと旅立つ

「エへへ…楽しみだね、兄ちゃん！」

マリナよ、俺はかなり鬱だぞ

背中ではしゃぐマリナとは対照的に、俺は暗く沈んでいた

マリナに何かあったらどうしよう？

怪我をしたら、病気になったら、いなくなっちゃったらどうしよう？

マリナにもしものことがあったらと思つと、俺の胃がキリキリ痛む

はあ……せめてハンターくらい強くなることを祈ろつ

……ハンター？

悩む俺の頭に、一つひらめきがおとずれた
現状を嘆くよりも、それをポジティブに考える

俺の背には幼い少女のマリナがいる
俺はロリコンじゃないが、マリナはかなり可愛いと思つ……もう一度言つ、俺はロリコンじゃない！

三年も経てばいい女の子になるはず
そして俺が思い浮かべたハンターという存在……

俺の夢はユクモ村で美女と混浴風呂に入ること
これは俺が恐暴竜に転生したために、叶わなくなった

もう一つはキリン装備のハンターちゃんとイチャイチャすること
これもモンスターに転生したために挫折
人間ならまだしも、モンスターの俺がハンターちゃんの前に出たら、

十中八九戦闘開始だ

モンスターと仲良くできるハンターちゃんがいれば、と半ば挫折しかけていたが…

もうお分かりのはずだ

背にいるマリナは俺に懐いてくれている

そして、マリナはハンターの素質がある…

つまり……マリナを育てて、キリン装備のハンターちゃんにすればいいんじゃない？

…という結論に至った

そう考えた俺は、先ほどまでの悩みが全て嘘のように消えた

夢が叶う……興奮した俺は、知らず知らず大地を疾走していた

いきなり走った俺に驚き、マリナは必死になって俺にしがみつぎ、当然マリナの胸部が背にあたる

慣れ親しんだこのまな板も、数年もすれば立派なものになる

俺はこの貴重な体験を忘れないよう、堪能しながら大地を駆け抜け

ていった……

神さま……最後にありがとう！

第十二話：恐暴竜の弟子？（後書き）

神「ぶえつくし!!」

うう…：なんや今度は悪寒がするわ。

そついや、あん時の青年は何してんやろな？

まさか、幼女たぶらかしてよからぬ事企んでへんやろな？」

天使「あ、ちゃん！

わたし、火竜の紅玉とれた！」

神「なんやと!？」

天使「あ、またとれた！

わたしついてるね！」

神「なんでや!？」

なんで毎回オドレばかりがとれんねん！

報酬にも無いわ！

ええい、もう一回付き合わんかい!!」

無限ループ……

第十三話：光陰矢の如し…？（前書き）

三年経っちゃいました（、、）

特訓風景書きたかったけど、イビルジョー親父と同じになりそうなので止めました

第十三話：光陰矢の如し…？

俺が転生してからはや五年が経っていた…

最初の二年を親父のスパルタ教育を受け、その後に強者が闊歩する大自然へと踏み出した

その後は、まあ……波に攫われるわ、見知らぬ場所に流れ着くわ、角竜にボコボコにされるわ……正直に言つと、良いことなど何一つ無かった

そんな過酷な毎日を過ごしていた時、俺は天使に出逢ったんだ…

まだ年端もいかない少女だったが、未発達の胸が…ゲフンゲフン、整った顔立ちと風になびく金髪が印象的な可愛い少女だ

少女は敵にボロボロにされた俺を健気に治療してくれた
俺は恩返しにと、少女の村で木こり仕事を手伝っていた

しかし、俺のとある事情で村にとどまることは出来なかった

折角巡り会えた少女と離れるのは辛いと思つたが、ここで思わぬ誤算が……

なんと、少女が村を出る俺に付いて来ると言ったのだ

少女を連れて行くか行かないかで、少々いざこざがあったがここでは割愛…

結果、少女は連れて行くことになった

…が、このまま自然界に連れて行ったら危険なので、少女が一人前になるまで育てることにしたのだ

少女が立派に育ったら一緒に風呂に…ゲフンゲフン、キリン装備にしてニヤンニヤ…ゴホンゴホン……
まあ、立派になって欲しかったな

住処に帰還した俺は、仲間の猫たちと再会し、新たな仲間となる少女を紹介した

人間が俺たちの住処に来たのは初めてだったが、住人たちは少女を大歓迎した

少女も住処を気に入り、住人たちと仲良くなったところで、俺による特訓が始まった

少女は日頃から駆け回り、猛獣と戯れていたおかげか、類い希なる

運動能力を持っていた
瞬発力・俊敏性といったものが優れていたが、中でも持久力が最も優れていた
まるで強走薬でも飲んだかのように、どこまでも走り続ける体力を持っていた

俺は少女の才能に目を付け、素早さと豊富な体力を活かした戦闘法を教えこんだ

基礎体力がほとんど完成していたが、唯一筋力が劣っていたので、他の才能で補えるまでに成長させる

ある程度の力がついてから、武器の扱いや身のこなし方、更なる高みを目指す訓練をした

これら全ては、俺と実戦さながらに対峙しての特訓だった

世間一般のハンターが、どのように訓練をして狩人になるかは知らない
ない

ただモンスターの俺と訓練する少女は、初心者ハンターが得られない経験を得ているはずだ

実戦に出て訓練することも可能だが、自然界のモンスターたちは、俺のように加減はしてくれない

武器を握ったばかりの初心者でも、モンスターは容赦なく襲い、殺す

俺は少女の成長力に合わせ、少しずつ力を上げていく

最初は緩やかだったのが、次第に速く、力強く、巧妙な動きへと…
…もちろん、少女がギリギリでかわせる力でだ

少女は、元々の素質に特訓による成長も相まって、メキメキと戦闘技術を上達させていったのだ…

《密林・とある湖の端》

フィールドの大部分がジャングルに覆われる密林
そして、そこにある大きな湖

湖と陸地の境界線には白い砂浜と、そこに打ち寄せる穏やかな波
砂浜には波を受けて餌を探す盾蟹の幼体、ヤオザミ

いつもの密林の風景だ

ただいつもと違うことといえば、砂浜から少し離れた位置に、桃毛
獣と物々しい人間が対峙していることだ

ピンク色の体毛と、頭にある極彩色の毛が印象的な桃毛獣は、全身傷だらけで荒々しく息をしている

対峙する人間は、橙と青の縞模様の防具に身を包み、背丈ほどの太刀を構えていた

桃毛獣とは対照的に、人間の息は乱れていなく、鋭い二つの眼光が桃毛獣を見据えていた

人間は背丈ほどもある太刀を、目横で水平に構え、右手は太刀の腹に添えられていた

そのまま長い膠着が続いていたが、互いの間を一陣の風が吹き、人間の長い金髪がたなびいた

それと同時に、人間が地面が抉れる程の勢いで駆け出した

手負いの桃毛獣は一瞬ビクツとしたが、すぐに迎え撃つべく腕を振り上げる

それに対し人間は、背に付けていた面積の広い布を投げつけ、桃毛獣の視界を奪う

怒り状態の桃毛獣は、お構いなしに布ごと殴ったが感触はなく、人間の姿も無かった

桃毛獣は急に消えた人間を捜そうとすると、下部から小さな笑い声が聞こえた

声を辿って下を覗いた時、桃毛獣には銀色に輝く刃が見え、そしてそれが最期に見た光景だった

「（見事だ！なかなか良い太刀捌きだったぞ！）」

恐暴竜こと俺は、豪快に笑いながら桃毛獣の傍らに立つ女性に近付く

「あ、兄ちゃん。

我ながらうまくやれたと思うけど、大型モンスターはやっぱりタフだな。

まだまだ力不足だよ。」

「（そうか？

十分強いと思うけどな。

まあ、マリナは素早さと身のこなしを活かした方がいいのかもな。）

」

マリナはどうも腑に落ちない様子で、太刀を肩に担ぐ

雪山の村の元氣娘^{マリナ}は、この三年で見違える程の成長を遂げた

小さかった身体は三年でスラツとした、無駄のない容姿へと変わった
髪も伸ばし、光沢のある金髪は背中まである

さらに俺との訓練のおかげで、戦闘技術も格段に上達した

最初は闇雲に武器を振り回していたのが、洗練された技巧的な太刀
筋へと変わった

さらに力不足を素早さで補う中、マリナは我流の剣術を身に付けた
のだ

太刀の切れ味を活かした斬撃でなく、相手の弱点を的確に射抜く刺
突技だ

マリナは天性の観察眼で、モンスターの甲殻の継ぎ目、骨の間など
を見抜き、そこに強力な刺突技を叩き込む

無論、斬る・薙ぐといった剣技も扱えるが、一点集中の刺突技が最
も強力だった

一対多には向かないが、集団で向かってくるのはほとんど小型の鳥
竜種で、大抵一撃で仕留める

どこの”牙突”だよと思うかもしれないが……構えも攻撃もそれに
近い

斎藤のソレに比べれば劣るかもしれないが、モンスターを相手にす

るには十分な威力だ

身体的にも技術的にも成長したマリナだが、一番変わったのは……
性格だと思う

出会った時のマリナは、まだ子どもっぽい所が多々あった
それが今では、一つ一つの言動がすっかり大人びている

そして何より……

「（狩りも終わったことだし、一緒に遊ぼうぜ！）」

「忙しいから無理、モモとでも遊んでなさい。」

結果を言うと……マリナはツンになりました

何時の頃からか分からないが、マリナがツンツンし出したのだ

いやツンデレというやつならいいよ!?

普段ツンツンしてるのに、時たまデレる……

そういうギャップがあるならまだしも……マリナはなかなかデレてくれません

アイルーたちには天使のような微笑みを見せるのに、俺にはそんなものありません
あるとすれば、俺がマリナにハチミツをあげる時くらいです…

日中は特訓の日々で、それ以外の時間はエリア移動してるので会えず…
時間を見つけて会いに行けば…

「そんなに暇なの？
たまには捕食以外に、畑仕事でもしたら？」

グスン……
遊びに行けば冷ややかな目つきでなじられる
違う意味で癖になり……とにかく、悲しいのだ！

「……兄ちゃん、なに涙浮かべてため息ついてるの？
トウガラシあげようか？」

慰めにトウガラシって……好きだから貰うけど

ここ最近の俺の野望は、混浴やキリン装備よりも、マリナのデレを見てみたい！に変わったのだ
…けどマリナのデレを見るなど、天鱗や紅玉をとるくらいレアだ

ああ、悲しい……

重いため息をつく俺の横で、マリナは困ったように眉を歪める

「もう……そんなに落ち込まないでよ。

私がこの後色々やらなきゃならないの分かるでしょ？」

マリナの村での立ち位置は、俺と同じ用心棒だ

だが、狩り以外にも色々出来るマリナは、猫たちに混じって畑仕事や採取に行ったりする

俺がフィールドを駆け回って捕食している間、拠点の防衛をするのはマリナの役目だ

それは俺も分かっているが、たまには息抜きして遊びたいものだ…

「はあ……分かった。

やること終わって時間があつたら、一緒に遊んであげるわよ。」

「（マジで!?!）」

「ヤッター!!!」

俺は歡喜の叫び声をあげ、巨大な咆哮がジャングルを揺らす

「ああもう、ウツサイ!!」

その代わり、今日こそ畑仕事を手伝いなさいよ!!」

「(了解!!!!)」

ぶっちゃけ、ツンデレの女の子なんて俺は見たことがない

なので、今まで何度かデレていたが、気づかなかったのかもしれない

まあ、そんなことはどうでもいい!!

マリナの仕事をちゃちゃっと終わらせて、心ゆくまで遊び尽くして

やるぜ!!

あ……腹減った

俺は無意識のうちに桃毛獣を喰ってしまい、マリナにこっぴどく叱られた……

第十三話：光陰矢の如し…？（後書き）

《マリナ・設定》

武器：鬼神斬破刀

*通常の三分の二の長さ

*親父さんの形見

防具：レックス一式

*テイガは主人公と一緒に狩猟

*防具は竜人族の翁が制作

*下位装備

発動スキル

千里眼

食事

天賦のスキル

（防具無しでも発動）

ランナー

体術+2

見切り+1

戦い方は、まんま”るろ剣”の斎藤

牙突は使わないが、突き技主体の攻撃
気刃斬りと気刃大回転斬りも使えるが、滅多に使わない

主人公が教育しなかったら、絶対に畏と閃光玉でごり押ししてた人

異名

”無限ランナー”

”調合率0%”

”ドリンク忘れる人”

”ツンデレ?”

第十四話：軟弱者！！（前書き）

マリナが絡むと、主人公がとんでもないことに…

第十四話：軟弱者！！

どうも、イビルジョーに転生した薄幸の青年こと”俺”です

いやはや、うちのマリナもずいぶん成長してくれましたよ
成長し過ぎて、目のやりどころに困っちゃいますよ（笑）

三年で幼児体型からこんなにエロい……けしからん身体に育っちゃ
って

一度マリナが入浴中のスキについて胴装備を拝借したら……

推測だけどこはあったね、うん
俺の最終目標はキリン装備だけど、レックス装備もなかなか乙だと
感じてきた

ティガの牙とか甲殻でゴツい外観だけど、腰装備のすき間から引き
締まった足が見えるんだ

あのちょっとだけ見えるっつのが、最近俺の感動だね……

「コラ、兄ちゃん！！」

サボってないで手伝いなさいよね！！」

「あ、はいはい。」

マリナの一喝で俺は妄想で止めていた仕事を再開する
仕事を終わらせればすぐ遊べるため、俺は身体に縄で付けられた農
具を引っ張っていく

俺が通ったあとの畑は農具で耕されていく
つい調子に乗って疾走し、滅茶苦茶にしまつのは定番だ

今日はマリナの機嫌を損ねたらいけないので、比較的真面目に畑仕
事をする

畑仕事を終えた俺は泥で汚れた体を洗おうと、湖へと向かった
途中アプトノスが数匹いたので、全部仕留めて捕食する

体を洗い流し空腹を癒やした俺は、湖に半身浸かりながら空を見上
げる
日は真上に昇ってから少し傾いてるくらいなので、遊べる時間はま
だまだある

何して遊ぼうか…俺がにやけていると、足に小さな刺激を感じた

下を覗いてみると、ちょうど蒼色の奇妙な頭部が現れる

「シャー！」

「（お、水竜の坊主！
元気だったか？）」

人間の腰の位置くらいの水竜は、俺の声を聞いて嬉しそうに飛び跳ねる

俺の足にしがみつくとコイツは、湖に棲んでいたらしい《水竜・ガノトトス》の子どもだ
物知りアイルーが言うには、支流のどれかから卵が運ばれ、この湖で産まれとのことだ

俺がこの水竜と出会ったのは、この拠点に来て数ヶ月くらいの時だ
水浴びしていた俺のもとにヒョコヒョコ近寄り、黙視してきたのだ
どうしていいか分からず見ていたら、何故か懐いてきた

食べても美味くなさそうなので、とりあえず面倒を見ることにしたのだ

ガノトトスといってもまだ子どもで、魚を食べていること以外、迷惑はない

俺もマリナも三年で随分成長したのに対し、この水竜は一回り大きくなっただけ

水竜の成長は遅いようだ

この水竜が大人になったら俺よりも大きくなが、ここまで人懐っこいなら、多分問題ないだろう…

若い水竜に軽く別れを告げ、俺は平野の小高い山へと向かっていく

「これに これを入れて。

…あ、旦那さんニヤ！」

山の洞窟に入っていくと、なにやら怪しげな煙りを立ち上らせる鍋と、モモの元氣そうな声が出迎える

「（おう……ところで、何やってんだ？）」

灰色の煙を出し小刻みに揺れる鍋を訝しげに見ると、モモはよくぞ聞いてくれた…とばかりに説明する

「ニヤハハハ！」

この鍋は《オイラ製調合鍋》なのニヤ！

コイツがあれば、調合書・入門編だけで何でも作れるのニヤ！

”コンガ”みたいに馬鹿じゃニヤければ、絶対に上手くいくのニヤ！

ちなみに、今は”特産キノコキムチ”を調合中ニヤ。」

「（良く分からないけど、スゴい発明品なんだな？

ところで、マリナはどこだ？）」

「ニヤ…マリ姉はいつもの部屋にいると思うニヤ。」

モモが指差したのは洞窟の一角、入り口を灰白色のカーテンで覆われた場所だ

「（サンキュー。）」

礼を言うと、モモは片手を挙げて答えた

「（おーい、マリナ？
準備出来たか？）」

俺はそのその部屋となる場所に歩いていき、のんきに呼びかける
すると、カーテンの奥からなにやら騒がしい音が聞こえる

「（マリナ！？どうした、何かあったのか！？）」

「に、兄ちゃん！？

今は入ってこないで！」

「（な、一体何があった！？

カントロスでもいたのか！？）」

「と、とにかく入っちゃダメ！」

カーテンの奥からはいまだに、バタバタと駆け回る音がする

そういえば先日、洞窟内でカントロスが湧き出して、大騒動になった

虫嫌いのマリナは悲鳴をあげて逃げ回っていた…

カントロスは俺と奇面族で排除したが、何匹か生き残って、それが
マリナの部屋に入りこんだのかもしれない

そう考えた俺は、急いでカーテンに頭を突っ込み、マリナの名を叫ぶ

「(マリナー!)」
大丈夫k『着替え中に入ってくるな変態!!』　グヘアッ!?!?」
頭を突っ込んだ瞬間、鼻先にとんでもない衝撃と痛みが襲い、俺は
後ろに吹っ飛ぶ

吹っ飛んだ俺の身体は、部屋の前にいたモモの近くを転げた

「ニャー!?!?」

オイラの”特産キノコキムチ”がああ!!

旦那さん、何てことしてくれるのニャア!?!?」

モモは泣きべそかいて俺をポコポコ殴りつける

「(痛っ…一体何が?)」

ヨロヨロと立ち上がった俺は、まばたきしながら周囲を見回す

すると灰白色のカーテンが開き、マリナが現れる

……訂正、夜叉が現れた

夜叉ことマリナは、素晴らしく不機嫌そうな顔で、まるで聖帝や拳

王みたいなオーラを纏って近づいてくる

俺の体を叩く感触が無くなったということは、モモは逃げたのだろ
う…

マリナさんは俺の目の前に立つと、左手で”鬼神斬破刀”を握り、
右手で俺の顎を掴む

「（ああ…マリナさん？

えと、怒った顔も綺麗ですね。

あの、お茶でもどうですか？」

「ありがとう…だけど、その前にやることがあるの。」

そう言うと右手の力が強まり、俺の顎を力強く握りつぶそうとする

「（あのマリナさん？

とつても痛いんですが。」

「痛くしてるもの。」

苦悶を浮かべる俺に対し、マリナはお構いなしに力を加えていく

あれ…？

こんなに力ありましたっけ？

顎を締め付けられるのは痛いんですが、それよりも左手の方が怖い
です…

あ、今太刀抜きました

「…何か言い残すことは？」

銀色の刃を地面と水平にし、鋭い先端で俺の額を貫くよう構えている

一度”牙突”を間近で見たいって思ってたけど、何だろう…
願いが叶ったのに、全然嬉しくないや！

「もう一度言う、言い残す言葉は？」

「（えっと…最後にマリナさんとお風呂に入りたいです。）」

「…却下。」

一人で…逝け。」

最後に凍てつくような声で呟き、地面を蹴って左手の太刀を突き刺す

「冗談よ。」

「（は、はい？）」

マリナは呆れたようにため息をこぼし、太刀を鞘におさめる

「全く…女の子の着替えを覗くなんて、信じられない。」

「（うう…ごめん。」

カンタロスがいるのかと思った……。」「

「ふうん……許す。」

けど、次はないからね。」

俺は素直に反省し、シユンとなる
今度からはノックをしよう

「それにしても……派手に壊したわね。」

俺が無理に頭を突っ込んだために、マリナの部屋はかなり荒れていた部屋を直すのに数時間かかるため、遊びの約束は吹き飛んでしまった

俺がしょぼくれてその場を立ち去ろうとすると、マリナに尻尾をつかまれた

「これだけ壊されたんじゃ、部屋を直しても今日は眠れないじゃない……い……。

責任……とつてよね。」

ドキツとして振り返ってみたが、マリナはただ部屋を見据えているただ、少しだけ見えた頬は微かに赤みがかっていた

「猫ちゃんの寝床じゃ小さいから、兄ちゃんのところまで寝るしかないじゃない!」

俺はその言葉に歓喜した

遊ぶなくなるのは残念だが、代わりにマリナと一緒に寝れる

まさにねがったりかなったりだ

「やったあー！嬉しいぞマリナー！！」

お前もなかなか可愛いところあるじゃないか！」

「かわいい…っ!？」

か、勘違いしないでよ!

寝る場所がないから…仕方なくなんだからね！」

ああ、ツンデレってのは見たことがないけど、こっぴうものをいうんだろっな

俺はマリナの貴重な一面を垣間見たことを、満足していた

第十四話：軟弱者！！（後書き）

主人公の変態ぶりがエスカレート中

でも次あたりからは、少しシリアスになる……かもです

第十五話：悪食の恐王（前書き）

更新するたびに皆様のご感想がとどき、私もついつい歓喜しています

さて、感想の中になりました《主人公がガキすぎる》ですが…

あれは主人公が、マリナを大好きに思っている描写です
ただ、やりすぎたことは反省しています

なので、今回は少し様変わりしました

気分直した、どうぞ…

第十五話：悪食の恐王

「……んん……。」

洞窟のすき間から差し込む朝日を顔に浴び、深い眠りから覚めるマリナ

寝ぼけ眼をこすり大きなあくびをし、しばしそのままボーっとする

「……兄ちゃん？」

いまだ醒めきらない様子で声を発する
しかし、マリナが呼び掛けた者の姿は周囲にいなかった

早朝の寒さから身を守るため、マリナは毛布をかぶりながら洞窟内を散策する

洞窟内のアイルーのほとんどが就寝中で、奇面族も頭だけ出して地面に埋まっていた

ふいに地面を見てみると、割と新しい大きな足跡があり、洞窟の外まで続いていた

早起きのアイルーたちに挨拶をすまし、洞窟の外に出てみると……昨日同様、モモが怪しげな鍋で何かしていた脇にはトウガラシと、にが虫があった

「おはよう、モモ。」

「ニヤ…おはようなのニヤ。」

モモもまだ眠いのか、目を半開きにしながら、棒で鍋をかき混ぜている

「今朝は寒いニヤ…。
ホットドリンクなのニヤ。
飲むといいニヤ。」

モモは怪しい煙を出す鍋から液体をすくい、コップに移してマリナに差し出す

差し出されたコップを受け取り、口に含む
ホットドリンクがのどを通った途端、体がポカポカと暖かくなり、朝の寒さを感じなくなった

「兄ちゃんの姿見当たらないけど…どこに行ったの？」

「今朝早くに、密林のある方角に向かったのニヤ。物凄い殺気だったから…例の”アレ”ニヤ。」

モモは鍋をかき回すのを止め、鍋の中の液体を全て容器に流し込み、栓をした

調査の後片付けをするモモの横で、マリナはぼんやりと東に広がるジャングルを眺めた

「…もうそんな時期か。
兄ちゃん…大丈夫かな？」

生い茂る草を踏み潰し、乱立する樹木をなぎ倒しながら駆け抜ける、黒緑の巨大な竜
竜が通った後にはなぎ倒された木々と、食い荒らされたモンスターの姿があった…

今俺は、密林の木々を無惨に破壊しながら疾走している
立ち止まるうちに、自分の意思では止まらない

それから視界で動いたものがあれば、それがなんだろうと襲いかかり、凶悪な牙で噛み砕いて喰ってきた

いくら喰っても俺の食欲はおさまりそうになく、獲物を探して広大な密林を徘徊していた

俺のこの本来の恐暴竜さながらの食欲は、今に始まったことではない

最初にこの状態に陥ったのは、マリナと出会い、拠点に戻った数ヶ月後だ

ある日俺は、今まで感じたこともない空腹感に目覚めた

おさえようもない空腹感と、肉に餓えた俺の肉体が突発的に動き、身の回りの動物を喰いだしたのだ

幸い、その時はイルーの住処ではなく、マリナもいなかった
だが、雪山近くの森にいた動物たちは、全て喰い尽くしてしまったのだ

それからというものの、俺は年に何回かこの状態に陥り、その度にフィールドを徘徊し補食を繰り返してしまった

これは俺の推測だが、俺のこの破壊的な補食は今まで抑えてきた食欲のツケだ

人間だった俺の理性が、恐暴竜本来の食欲は抑えられていたが、完全に消えていたわけではなく、体内に餓えが蓄積されていたのだ

それに加え、最近の俺は雪山などの寒いエリアに出掛ける

それが俺の餓えに拍車をかけ、何かの拍子に一気に解放されるのだと思う

貪欲な餓えに支配された俺は、目に付くもの全てを補食し、餓えが満たされるまで補食を繰り返すのだ…

どれくらい疾走しただろうか？

俺の通り道には食い散らかされた残骸があり、俺の口は喰ってきたものの血で染まっていた

だいぶ食欲はおさまってきたが、あと一つ何かを喰いたい気分だ

理性が戻ってきた俺は、もはや小型のモンスターなどには目もくれず、大きな獲物を狙って徘徊していた

大きな獲物…つまりは、牙獣種や飛竜種といった大型で喰いがいのある獲物だ

といつても大型モンスターなど、そう簡単に見付かるものではない
最近では怪鳥や桃毛獣を補食していた
しかし、密林は他のエリアより頻繁に訪れるため、それらはほとんど逃げてしまった

大型の獲物を補食するには、密林のさらに奥にある《森丘》、《沼地》、《樹海》に赴かなければならない

そこまで何があるのか分からないのと、たんに面倒くさいから行かないが…

どっちにしろ、恐暴竜の貪欲な食欲が表面化してきた今は、生息範囲を広げるしかないだろう

先のことは後で考えるとして、今は食欲を満たすために大型モンスターを探すことにした…

密林を徘徊して数時間…

大型モンスターがなかなか見つからないため、諦めて小型モンスターを補食しようとした時だった…

突如密林の奥から竜の咆哮が響き渡る

俺はすぐさま大地を駆け抜け、声のしたエリアへと向かう

声の先には行く手を阻む大きな岩があったが、俺はそれを体当たりで粉碎する

岩の向こうは開けた場所であり、その中央に俺が求めていたものがあった

深緑の甲殻と鱗に覆われ、皮膚のついた大きな二つの翼……恐暴竜ほどではないが、脚力も発達している

見覚えあるその竜の名は《雌火竜・リオレイア》だ

雌火竜は岩を砕いて現れた俺を見て驚いたが、すぐに威嚇してきた

大型モンスター同士が自然界で接触する事態は、あまり多くはない出会ったとしても、せいぜい縄張り争いになるだけ

威嚇しあい、噛みつきあい、体をぶつけ合う
敗者は身を退き、勝者はその縄張りを獲得することができる

だが、雌火竜が対峙しているのは、縄張りを持たず広い範囲を徘徊し、動物全てを喰う恐暴竜……いわば、天敵に近い存在

本来の恐暴竜がいる地方なら、俺を見た瞬間逃げるだろうが、この地方では恐暴竜など初見の竜だ

俺なら普段は見逃すところだが、生憎今の俺には理性があまりないよって、雌火竜を見た瞬間、俺は勢い良く突進していた

大口を開きながら突進する俺に、雌火竜は火球を放って応戦する
何発かは外れたが、一発が開かれた口に当たり、中で激しく爆発した

雌火竜は勝機とばかりに向かってきたが、逆に大木のような尻尾に殴られ、横転した

すぐさま立ち上がって相手を睨む雌火竜だったが、異様な光景に動きを止めた

自分が相手していた竜の全身の筋肉が盛り上がった
何より目を引くのは、竜の身体に浮かび上がった無数の傷痕

それらは赤く光っており、傷によっては隆起した筋肉の影響で傷口が開き、鮮血が吹き出していた

そして竜は、雌火竜の何倍以上もの、木々が軋みだすほどの巨大な咆哮をあげた

自分が相手出来るような存在ではない 本能で察した雌火竜は飛び立とうとしたが、空中で脚に噛み付かれ、地面に叩き付けられた

竜は地面で悶える雌火竜に対し、屈強な脚を上げ、雌火竜の翼を踏み潰す

激痛に悲鳴をあげるも、竜は容赦しない

竜は雌火竜の首に食らいつき、首をしながら雌火竜の巨体を投げ飛ばした

雌火竜はほとんど虫の息だったが……竜は最後の攻撃をくわえる
飛竜自慢の翼を脚で押さえつけ、竜は大きく息を吸い込み、口内から赤黒いガス状のプレスを放った

恐暴竜の龍属性プレスは、雌火竜を即死させた

竜は仕留めた雌火竜を、甲殻ごと噛み砕き、肉一つ残さず喰らいきった

残ったものといえば、背と尻尾にある毒性の針だけだ

飛竜を補食して理性が戻った俺は、自分が食い荒らした雌火竜を見る

もはや原型などなく、針のついた甲殻と、散らばった鱗しかない

毎度この状態になると暴れまわってしまっが、今回は今まで以上だったな…

前にモモから聞いたことだが、俺のこの暴走は、近隣のアイルーや人間たちには有名らしい

人間にもアイルーにも手を出さないから大丈夫だが、そんな俺に新たな呼び名が出来たらしい

《悪食の恐王》

それが今の俺の呼び名だ

少しだけカツコイいな、と満足しながら帰っていく俺だった…

恐暴竜と雌火竜の闘いを見ていた者がいるともしらずに…

第十五話：悪食の恐王（後書き）

戦闘描写短い気もしますが…

現時点での主人公にとって、雌火竜は敵ではありません
対等に闘えるのは、大型の、

《ガノトトス》

《ディアブロス》

《グラビモス》

あとは《ティガレックス》と、

空を飛ぶ《リオレウス》くらいですね

《ラージャン》もいい勝負してくれそうですが、どう扱っていいか
分からないので未定…

271

それから、主人公の暴走っぷりですが、

食欲を理性で抑えていた反動という設定で、作者の勝手なオリジナ
ルです

恐暴竜が補食を我慢するのは若干無理があるので、時たま《暴食期》
《》として定期的に暴れさせたいです

第十五話：番外編（前書き）

いよいよお待ちかね、モンハンの主役の登場…ですね

それにしても、一日二話投稿キツイ…

第十五話：番外編

私の名は《カナメ》

ドンドルマの街でとある獵団の団長をつとめる、上位ハンターの人だ

獵団では主に後輩育成、ギルドから請ける依頼を組織的にこなしているのだ

私は今回、ハンター育成として一人の後輩を連れ、密林に来ていた

目標は怪鳥イヤンクック、後輩の腕を試すには良い相手で、私の後輩も危なっかしい場面があったものの、なんとか勝利した

だが今……私たちはかなり危機的な状況に直面している

太刀を構えて睨む私、恐怖に体を震わせる新米の後輩…

そして目の前で対峙するのは……《陸の女王・リオレイア》

普段の私はソロでも雌火竜におくれはとらないのだが、怪鳥相手にあまり物資を持って来なかったのと、新米の後輩を守り抜くので力

を發揮できない

雌火竜の攻撃で後輩が負傷し、かくいう私もいくらか怪我をしている

雌火竜は今にも襲ってきそうな勢いで、私たちに威嚇する

緊張感による手汗で太刀の柄が滑るが、一瞬の隙も見せられない

非常用として閃光玉が一つあるが、確実に命中させなければならなかったため、今は使用できない

やがて痺れをきらした雌火竜が、大きな咆哮をあげる

密林の遠くまで響き渡るような咆哮だ

だがこちらとしては好都合：雌火竜が冷静さを欠いてくれれば、閃光玉を命中させる隙が生まれる

私は太刀を背の鞘にしまうと、右手に閃光玉を持つ

後輩をいつでも連れていけるよう、左手で後輩の肩を抱いた

「イリス、私が閃光玉を投げたら直ぐに走るぞ。」

後輩は震えながらゆっくり頷いてくれた

思えばこの私も、初めてモンスターと対峙した時、同じように怯えていたものだ…

それが今では獵団の団長で、ギルド内でも上の位置にいるとはな…

こんな状況であるにも関わらず、ふと昔のことを思い出して笑みを浮かべていた

「せ…先輩？」

笑う私の顔を見たイリスが不安そうな声を出した

私は雌火竜に目を向けながら、肩を抱く力を強めた

次の瞬間、雌火竜が私たちに向けて突進してきた

私は冷静に対応し、ギリギリのところ…紙一重で突進をかわす

「イリス！！目を隠している！」

私は閃光玉の栓を抜き、雌火竜に向けて投げつけた

雌火竜が振り返った時に炸裂し、まばゆい閃光が放たれた

私は閃光玉が効いたかなど確認せず、後方に向かって走り出し、人が入れる洞穴に滑りこんだ

私はバツと背後の雌火竜を確認する
イリスも一緒になって覗くが、私は彼女の頭を押さえる

どうやら閃光玉はしっかりと命中したようで、雌火竜は足元が覚束なく、不自然な動きをしていた

雌火竜はやがて目を慣れさせていったが、私たちを完全に見失った
いまだに安心出来ない状況ではあるが、私は窮地を脱したことで、
少し力が抜けてしまった

「あう……すみません、先輩。
私のせいで……」

こんな状況に陥ったことを自分の所為だと思ったのか、イリスは泣きながら私に謝ってきた

雌火竜は未だ私たちを見つけていない　確認した私は、後輩に微笑みかけ、優しく撫でてやる

「お前の所為ではない……詳細を把握出来ていなかった、私の責任だ。」

私を見上げるイリスの目は、涙で潤んでいた
それからイリスを抱き締めてやると、イリスは小さく震えながら、
私の胸で泣いた

それにしてもマズいな…

雌火竜はまだ私たちを捜しているようで、隠れていそうな場所を、
手当たり次第に探っている

「クツ……やはり無理に頼んでも、”ヴラド”に協力を要請すべき
だったか？」

私が後悔の念にとらわれている時だった……

突如、視界の端にあった岩が粉碎された
イリスはその大きな音に怯え、私の腕の中でビクツと震えた

私と雌火竜はほぼ同時に、異変のあった方向に目を向ける

その先にいたのは、私がこれまで狩りをした中で、見たこともない
モンスターだ

飛竜でも牙獣種でもないそのモンスターは、黒緑の巨体と裂けた大
口を持っていた

私が呆気にとられていると、謎のモンスターは雌火竜を見るなり、草木を踏み潰しながら向かっていく
謎の竜が地を踏みしめることに、大地は揺れる

謎の竜は大口をこれでもかというくらいに開き、雌火竜に食らいつくべく突進する

それに対し雌火竜はブレスで応戦し、三発放ったうちの一発が竜の大口に直撃し、大爆発を起こす

私は一瞬勝負が決まったと思ったが、なんと雌火竜の方が、突然横に倒れた

何が起きたのか理解出来ないでいると、竜は片足をあげ、雌火竜の翼を踏み砕いた

雌火竜の悲鳴が密林にこだまするが、竜に喉笛を噛み付かれ、悲鳴は鈍い声に変わった

竜は喉笛に喰らいついたまま雌火竜を持ち上げ、後方の地面に叩きつける

私は今まで見たことがない、モンスター同士の鬭いに、いつの間にか魅入ってしまった

首を噛まれ無理やり投げ飛ばされたことで、雌火竜の声帯は潰れ、首

の骨はへし折れたらしい

勝負は完全に決まったが……竜はさらなる追撃を浴びせる

雌火竜の両翼を脚で踏み、大きく息を吸い込み……一気に吐き出した

竜が吐き出した”ソレ”は一目でプレスと分かるが、そのプレスも私が初めて見るようなタイプだ

赤黒い稲妻を纏ったガス状のプレスは、雌火竜の身体に触れると、バチバチと音をたてる

そして謎の竜は、あろうことか死んだ雌火竜に噛み付き、その肉を食い始めた

私はその光景を、息を飲んで見守っていた

大型モンスター同士が接触し、縄張り争いをするのは分かるが……喰うために襲うなんて、聞いたことがない

やがて雌火竜は残骸を残すのみとなり、謎の竜は満足げに雄叫びをあげ、密林の奥深くへと消えていった

謎の竜がいなくなっただけでしばらく待った後、私はイリスの手をひいて、洞穴から抜け出す

「えと、飛竜は一体どこへ？」

「突然他のモンスターが現れてな……この通りさ。」

私が示した先には、僅かな甲殻と鱗を残すのみとなった、雌火竜だったもの

雌火竜の凄惨な死体に、イリスは顔をしかめた

私たちは言葉を発さず、ただ雌火竜の残骸を眺めていた

そこで、私はあることに気が付いた
それは残された甲殻……

鱗が散らばっているのは、喰い荒らされたせいでと片付けられるが、甲殻の方は違った……

残された甲殻には鋭く尖った黒い棘があり、残骸にあるのは背中と尻尾の部分だ

雌火竜が有するこの棘は、猛毒を持つと知られている

棘に傷つけられれば、人間など数時間で死に至る

雌火竜は尻尾にあるこの棘を活用し、”サマーソルト”という尻尾攻撃をしてくる

雌火竜の強力な尻尾の一撃と猛毒で、直撃すれば大抵のハンターは死ぬ

雌火竜の毒針はもちろん大型モンスターにも有効で、こんな棘を喰おうものなら、たとえ巨大なモンスターでも命を落とすだろう

謎の竜は雌火竜を喰ったが、この棘の部分だけはキレイに残してあるこれは偶然などでは片付けられなく、あの謎の竜は、少なくとも雌火竜の毒針を知っていた
そこから考えられることは一つ

あの竜は”知能を有している”だ

私は雌火竜の残骸を残らずかき集め、持っていたレポート用紙にその時の様子を書き込む

竜の容姿、特徴、攻撃方法……そして、凶暴性を

私の名は”カナメ”…
ドンドルマのとある猟団の団長だ

広大な密林の奥深くで見たこの竜の存在を、一刻も早くギルドに伝えなければ…

第十五話：番外編（後書き）

なかなか良い描写が出来ない

力不足で分かり難かったら、ごめんなさい！！

では、久々に神様ほのぼのモンハンプレイをどうぞ

神「ふう……やつと雷狼竜の碧玉とれた……。
一体…何頭めや？」

天使「15頭だね！

ちゃん、よく頑張ったね！

碧玉とれるのはとっても珍しいよー！」

神「うっさいわボケ！

碧玉8個もとったオドレに言われると、むっちゃ腹立つわ！

もうええ、お前なんか貼れや!」

天使「はいはい!」

じゃあ、これでどう?」

神「どれどれ……ん?

こんなクエスト、ウチは知らんで?」

天使「実はこれ、ダウンロードクエストって言うのだ!」

神「だうんろーどくえすと?

何やねんソレ?」

天使「これは、カクカクシカジカ…なんだよ!」

神「へえ、おもしろそやな!

よっしゃ、ウチもダウンロードしたるで!」

後日…

神「お……アクセスポイント発見!!
早速やるか!

………なんや?

…パスワード?

知るかいな!!

ええい、次や次!!」

移動……

神「な、何でや!?

どこもかしこも、パスワードだらげやん!

別に悪さするわけやないんやから、アクセスするぐらいええやん
泣」

結局、神さまは天使ちゃんのお宅でダウンロードしましたとき(笑)

第十六話：ニューフロンティア・その巻（前書き）

途中、主人公非道いかも

第十六話：ニューフロンティア・その巻

どうも…マリナです

私の村での役目は、主に畑仕事と見回り、そして外敵への対処です。普段は兄ちゃんが外敵を返り討ちにするんですが、今朝起きたらいなかったので、私が外敵に対処します

昨日は《暴食期》…とかいう、年に何回か暴れる日でしたので、今日は普通の捕食でしょう

今日の私の仕事は、盆地の湖に棲み着いたヤオザミの駆除です。湖は私たちも使っていますが、ヤオザミが巣くって危ないため、私が出向きました

ぶっちゃけ、ヤオザミを湖に棲ませたのは兄ちゃんです。兄ちゃんが『蟹は美味しい!』とか言うから渋々許可したんですが、いつの間にか増えてとんでもないことになりました

あのバカ兄のせいで、私が無駄な時間を過ごさんです(怒)

今日は数十匹ヤオザミを倒しました

その途中、湖にガノトトスに会ったんですが…

この子、私に懐かないんです！

私を見た瞬間、鳴くわ暴れるわ、水吐いてくるわ…酷い目に合います

それが兄ちゃんには懐いてるんですから、腹が立ちます
いいんです……私にはアイルーたちがいますから（泣）

時刻は昼前、そろそろ兄ちゃんも帰ってきていい頃です
そつえば、兄ちゃんの相方のモモもいません

痺れをきらした私は、近くを通りかかったアイルーに聞いてみまし
た…すると

「聞いてなかったニヤ？」

用心棒さんとモモは、新しい土地に行くとか言って、東の方角に行
ったのニヤ。

あ、それから伝言があるニヤ。」

マリナよ、俺はとある諸事情でモモと密林の奥、《沼地》と《樹海》
《》をしてくる

最近のお前は俺を邪険にしていたが、しばらく離れれば…俺がいる
ありがたみが分かるだろう
つてなわけで、モモと小旅行行ってくるわ！
ワハハハハハ！！

「つてなわけ…ニヤ！？」

伝言を伝えたアイルーは、恐ろしい殺気にあてられ、気絶した

「あの…腐れ£¢ 野郎！！」

帰ってきたら××を八つ裂きにして、ヤオザミの餌にしてやる！！

ああ！！

もう、あのF* k野郎！帰ったら、地獄が生ぬるく感じるくらい、
酷い目見させてやる！！」

マリナの口から放たれる、形容し難い罵声の数々…

普段では想像出来ない程汚れた言葉からは、マリナの激昂ぶりが
伺える……

主人公の運命やいかに！？

「(……………っ!?)」

「旦那さん、どうしたニヤ？」

「(なんか……………凄まじい悪寒が。)」

モモを背に乗せた俺は、何処からか届く恐ろしい殺意に、挙動不審になる

「気のせいニヤ！」

それよりも……………目的地に着いたのニヤ!！」

モモの元気過ぎる声に、俺は思案することを止める

俺たちの前には陰気な湿気に覆われる、広大な沼地
降り続く雨により、空気はじめじめしている

さらに夕チの悪いことに、雨が止んだ夜には、毒沼が姿を現す

食料事情が切迫していなければ、決して訪れない場所だ

密林ほど獲物は多くないが、雪山や火山などよりは幾分マシだ

火山に行くのは極めて稀で、強力なモンスターも多い

砂漠については言わずもがな……雪山は体力消耗の方が多い

そのため消去法で密林にばかり行っていたが、獲物の減りが激しすぎた

そしてモモと話し合った結果、密林の東の《沼地》、南東の《樹海》、南の《森丘》を活動範囲とすることを決めた

沼地は下見程度で済まして、サツサと次の場所に行こうとしたのだが……

「ニャー！！」

ノヴァクリスタル、とれたのニャー！」

「（俺は白水晶の原石がこんなに発掘したぞ！？）」

たまたま訪れた洞窟で大当たりしていた……

沼地を下見して次の場所へ向かうはずだったが、帰り道でモモがまだ見ていない洞窟を発見したのだ

洞窟に入ってみたら、採掘出来そうな場所を見つけ……モモがピツケル、俺が体当たりで採掘…後は見ての通りだ

ねじり鉢巻きをして一心不乱にピツケルを振るモモと、体当たりするたびに洞窟を揺らす俺……

周囲のイーオスたちは、面白そうに俺たちを眺めていた

俺とモモの前に置かれた、ゴツゴツとした出っ張りのある大きな袋中に入っているのは勿論、洞窟で採掘した鉱石の数々だ

俺とモモは洞窟にある採掘場所から…それこそ本来あった鉱石を溜めさせるくらい、大量に採掘してやった

後に来たハンターがいれば、根こそぎ鉱石を持ってかれた洞窟を見て嘆くはずだ

「こんだけあれば、村も活性化するのニヤ！
女の子にモテるのニヤ！」

俺は下心まる出しのモモは捨て置き、俺は足下に置かれた透き通るような鉱石を見つめる

ピュアクリスタル…

最後に渾身の一撃で壁を粉碎した時に、たまたま見つけた鉱石だ

感傷に浸る俺ではないが、このクリスタルはあまりにも美しかったので、マリナにプレゼントすることにした

鉱石に魅入っていると、俺の腹の虫が騒ぎ出した

採掘に夢中で捕食していなかったので、かなりの飢餓感が襲ってきた

このままだとモモでさえも喰ってしまいそうだったので、俺は急いで洞窟を出て行った

「ガアアアア!!!」

「……ブヒィ!?!」

きのこを探るモスの悲鳴が沼地に響き渡る

もちろん、恐暴竜である俺に襲われたためだ

最初のモスをくわえたまま、一匹、二匹と餌食にしていき…最終的には五匹のモスをくわえる形となる

モスたちはもがいて抜け出そうとするが、鋭い牙と強力な顎の力の

前では徒勞にすぎない

モスの一匹が噛まれたことは別の刺激に、ひときわ大きな悲鳴をあげた

おそらく口の中で強酸性の唾液に触れたためだが、結果的にそれが自分たちの寿命を縮めることになった

捕食時で、一種の興奮状態になつてゐる俺は、その叫びに刺激される
モスの柔らかい肉質は容易に牙を通す
そして鮮血を吹き出した後に丸飲みされる

僅かではあるが、丸飲みにした方が腹持ちがいいので、俺は小さい獲物は丸飲みをしている

モス五匹を捕食しただけでは、俺の空腹は満たされない
舌なめずりに周囲を見回すと、哀れなコンガが数体…

俺の視線を受けてビクツとしたが、すでに遅し
全て俺の糧となった

腹を満たして戻った俺を迎えたのは、目を回してダウンしているモモだった

外傷は無さそうなので、近くの水溜まりから水を汲み、浴びせかける

俺の唾液を含んだ……弱酸性の水を浴びて、モモは一発で飛び起きる

そして、騒ぎ出す……

「あの変な頭のデカイヤツはなんなのニャ!?

ギャーギャー騒いで走り回って、変な液体吐いてたのニャ!!

それから」

らちがあかないので、一旦モモを落ち着かせ、改めて話しを聞く

まとめると……

俺の留守中に変な頭におかしな尻尾を持ち、ばかみたいに走り回って毒液を吐く怪鳥……

カチカチ鳴らしたと思ったたら光って、そこから意識が無いらしい……

うん……十中八九アイツだね

モモが襲われて気絶させられただけならまだ許せるが……

「ニヤ!？」

旦那さんが採掘したクリスタルが無いニヤ!!
きつとあのバカ鳥が盗んだに違いないのニヤ!!」

俺の抹殺リストに一匹追加された

逃亡者VS追跡者

沼地を舞台にした、史上稀に見る逃走劇と追跡劇の始まりだ

第十六話：ニューフロンティア・その巻（後書き）

次回、

狂走VS恐暴

*この小説での怪鳥は、おふぞけキャラになりそう…

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！（前書き）

ちよつとグダグダ？

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！

「（うらあー！！）

クリスタル返せ、この盗つ人野郎！！」

「グギヤーギヤー！」

日が落ちて雨が止み、沼地には新たに毒の沼気を放つ毒沼が現れた

その毒沼に足を踏み入れるのもお構いなしに、巨大な竜とそれより小さな怪鳥が走り回っている

歩幅で負ける怪鳥だったが、それ以上に逃げ足は速く、疲れを知らない走りを見せる

大事な物を奪われて激昂した俺は、沼地のエリアを隈無く探し回った相方のモモも、「ヤツ」にやられて大変ご立腹のご様子で、目をぎらつかせている

俺たちは沼地を駆け回り、エリアの境界をぶち壊しながら、怨敵を

探し求めた

そして沼地から離れた、俺の膝丈まである草が一面にあるエリアに、
”ヤツ”はいたのだ

体の表皮は灰色で、今まで見てきた表皮とは質感が違って見える
何より、ヤツのヘンなくちばしとおかしなトサカが目を引き

俺たちが探し回っていたお騒がせ者は”ゲリヨス”

驚異的な持久力を利用し、毒を吐き散らしながら走り回る怪鳥

そして光る鉱石を盗んでいく、迷惑極まりないバカ鳥だ

普通、ゲリヨスは他のモンスターに比べて臆病な個体で、自分より
格上が現れたら真っ先に逃げるはずだ

だが、俺たちが相対するゲリヨスは、怯えるどころかふてぶてしい
態度で挑発している

ゲリヨスのくちばしの間には、貢ぎ物のピュアクリスタルが輝いて
いた

そしてゲリヨスは、そのピュアクリスタルを飲み込んでしまった
正確には、喉の奥にしまったのだが、それを理解出来ない俺はブチ
切れて突撃した

「（死にやがれバカ鳥！）」

スカッ…ズドン！！

俺の渾身の一撃はいとも簡単にかわされ、勢いあまった俺は、正面の岩に頭を激突させた

ゲリヨスはとても臆病であり、とても狡猾な怪鳥だ
閃光、窮地には逃げる、死んだふりからの騙し討ち……そして今や
ったような、相手をわざと突っ込ませて倒す方法だ

毒怪鳥は悠々と背後を振り返るが、一瞬にして余裕が消えた

「（やってくれるじゃねえかバカ鳥めが！
ゴム皮剥いで、焼き鳥にして喰ってやる！！）」

ぶつかり合って粉碎したのは岩、俺は額の薄皮が切れたただけだ

ゲリヨスは焦っているのか、飛び跳ねながら後ずさっていく

じわりじわりと、ゲリヨスを壁際に追い詰めていくと…

突然その場で暴れ出し、両翼を広げてくちばしとトサカを強く打ちつけて……俺の目の前で強烈な閃光を発した

至近距離で閃光を浴びて目が眩んだが、俺はひるまず攻撃する

しかし目が見えないために闇雲になり、攻撃が当たった感触は一つもない

そんな中で聞き取れたのは、俺のマヌケな姿を見て、楽しそうにはしゃぐゲリヨスの声だった

目がなおったので、憎たらしい毒怪鳥を探す

毒怪鳥はすぐに見つかったが、間合いから遠く離れた場所で、挑発するように飛び跳ねていた

毒怪鳥の行動に苛ついた俺は、大きく吠えて走り出す

ゲリヨスは再び楽しそうにはしゃぎだし、首を大袈裟に振り乱しながら、俺に負けない速さで逃げ出し……今に至るのだ

毒怪鳥が誇る”狂走エキス”

無限に等しい持久力を生み出すそのエキスのおかげで、ヤツは全速力で走り抜けていく

俺と毒怪鳥の速さは互角だが、スタミナの面ではヤツに劣る

全速力で走ることによって距離を維持していたが、無限のスタミナの前では、徐々に距離を離されていく

そして距離が開くと毒怪鳥は立ち止まり、俺の方を向いて……挑発する

距離が縮まれば再び走り出す

そう、ヤツは俺相手に楽しんでいるのだ

毒怪鳥の苛立たしい行動に、俺の脳の血管がブチ切れそうだ
おまけに、怒りで膨張し過ぎた筋肉もブチ切れそうだ

それでも切れないのは、少しばかりの冷静さがあるためだ

ただ追いかけているだけではなく、さり気なく、慎重にヤツを狭い場所に追い詰めているのだ

沼地の地形は、昼間に練り歩いた敵に鮮明に記憶した

普通なら誘導されていることに気付きそうだが、ヤツは俺をからかって楽しんでいるため、全く気付いてないようだ

それにしても、どこまでヤツは走るのだろうか？

ふと疑問に思っていると、ゲリヨスがまた立ち止まった

今度のは挑発のためではなく、角を曲がったところで岩壁に遭遇したからだ

追い詰められて焦るかと思ったが、意外に、ヤツは冷静だった

じわりじわりと距離を縮める俺と、改造ピッケルを片手に黒い笑みを浮かべるモモ

「今こそ復讐の時ニヤー!!」

「（観念しやがれ!!）」

「ギョアー!!」

いきり立って襲い掛かる俺とモモ、しかし……

ズドン!!

俺たちの攻撃はむなしく空振り、逆に俺たちが岩壁にぶつかるはめになった

さっき当たった岩と違い、しっかりとした岩壁はとても堅く、痛かった

ゲリヨスはというと……俺たちの頭上を羽ばたきながら、楽しそうにわめいていた

「（グウウ…その手があったか…。）」

冷静さを欠いていたのは俺のほうだった

ヤツが飛べることなど容易く考えられることだ

しかも、ヤツは俺の企みにのった上で、それを利用したのだ

どうやら、ヤツと俺とでは、ヤツの方が策士らしい

ゲリヨスは俺の後方に降り立つと、挑発してから再び逃げ出した

モモは脳天をぶつけて失神、目を回してたばっている

最初から期待はしていなかったが、ここからは俺だけでヤツを捕まえるようだ

「（くそっ、あのバカ鳥どこに消えたんだ!?!）」

開けた場所に出てから、ゲリヨスを見失ってしまった
足跡を探して見つけたところだが、再び降り出した雨により、怪
鳥の足跡など消えて無くなった

ゲリヨスが隠れていそうな場所を探していると、カチカチと、あの
忌々しい音が雨の中から聞こえた

音を辿って振り返った矢先に閃光が放たれたが、幸い離れていたた
めに効果は無かった

もしかしたら、わざと閃光を発して居場所を教えたのかもしれない

ゲリヨスいるのは高台の上、俺ではなかなか登れない位置にいた

絶対的優位な位置にいるのが嬉しいようで、勝ち誇ったようなたた
ずまいだ

それからまた挑発が始まるのだが、はつきりいつて慣れた

冷静さが戻った俺の頭に、ゲリヨスを叩き落とす戦法が浮かぶ
単純な実力行使だが：

俺は口を大きく開き、何もかも吹き飛ばすような雄叫びをあげる

ヤツはビクつき、一瞬のスキが生じる

俺は下顎を地面に突き刺してえぐり、首を振りかぶって巨大な岩を投げ飛ばす

えぐり取った岩石はきれいな放物線を描き、毒怪鳥に直撃した

強力な攻撃を受けた毒怪鳥は転倒し、そのまま気絶したようだ

俺は勝利の余韻にひたった後、迂回してゲリヨスのいる高台へと回る
小柄なモモなら簡単に高台を登れるが、気絶していて戦線離脱中

迂回して通っている道も決して楽ではないが、図体のデカイ俺には
この道しかない

「（はぁ…はぁ…こんな荒れた道、歩かせやがって！
ぶちのめしてやる…あれ？）」

苦勞して登った高台には、毒怪鳥の灰色の姿は無い
違う高台に登ったのか と不安に思ったが、その高台にはさっき
投げた岩石の破片があったので、ここで合っているようだ

「ギヤギヤー！」

「（…あ？）」「

あの憎たらしい金切り声が沼地に響く
高台の下、岩石も届かない安全圏にヤツはいやがった

「（一体何だつてんだ！？
確かに仕留めたはずだぞ！）」

苛立ちのあまり声に出してしまう

言ったことを理解したのか、ゲリヨスはうなずく

すると、ゲリヨスはさっきの場面を再現する

岩石にぶつかってよろける様子、少し大袈裟な演技で倒れる

しばらくした後、ゲリヨスは何食わぬ顔で起き上がり、一声鳴く

なるほど、その手があったか……って、ふざけんなー！！
絶妙な場面で”死んだふり”してんじゃねえよ！
もう、ぶっ殺す！！

激怒した俺は高台から一気に飛び降りる
超重量の巨体が着地した瞬間、大きな振動と風圧が生じる

怒りの赴くままに突撃するが、ゲリヨスは飽きたのか翼をはためか

せて飛翔する

距離は絶望的で、俺が半ばあきらめかけた時だった：

ゲリヨスの体が空中で不自然に止まり、いきなり地面に墜落した
無理な体勢で落ちたために、ゲリヨスは翼を痛めてしまい、しばらくは飛べない

何が起きたのか知らないが、俺はこの好奇心を見逃さない
しかしゲリヨスも負けてなく、すぐさま起き上がって大量の毒液を吐き散らす

毒液は着弾した場所で噴水のように吹き出し、無数の毒の噴水が俺の接近を拒む

毒液が当たれば死ぬ危険があるため、岩石をえぐり出して砲弾のように放つ

一発だけでなく、連続して岩石を投げ飛ばす

さっきの岩石弾と違い、水平に放つために威力は比にならない
その岩石を、ゲリヨスはなんとか横に跳んでかわしている

その膠着状態が続くかに思われた時、俺の頼れる相棒が現れた

「…オイラがここまで怒ったのは初めてニヤ！！
旦那さん、頼んだニヤ！！」

ゲリヨスを倒す大役を託したモモは、ゲリヨスに向かって何かを投げつけた

キラキラと光るそれは”ライトクリスタル”

毒怪鳥は光るものを集める習性があるため、視界に映った鉱石に反応し、注意を逸らしてしまった

次の瞬間、高速で放たれた岩石弾が頭に直撃する

ゲリヨスはふらふらとよろめき、派手に転倒した

ピクピクと痙攣し、目を回してる様子から、今度こそ倒せたようだ

ゲリヨスの口から、盗まれたピュアクリスタルがこぼれ落ち、モモはそれを回収して俺の元にやってくる

「（良いアシストだったぜ、相棒。）」

「ニヤハハハ！」

旦那さんも良い攻撃してたのニヤ！..！」

実際、モモの行った行動は素晴らしいものだ

ゲリヨスの習性を見抜き、それを利用したのだから

もしかしたら、モモは洞察力が優れてるのかもしれない

「（バカ鳥叩き落とししたのもお前の仕業だろ？」

「一体どうやったんだ？」

「…ニヤ？」

「一体なんのことニヤ？」

「オイラは旦那さんが岩石投げ飛ばしてる時に駆けつけたのニヤ。」

「（え…ウソつくなよ。）

「お前以外に誰がアイツを叩き落としたってんだ？」

「しかしモモは首を横に振る

「どうやら本当に知らないようだ

「どうも腑に落ちないが、ゲリヨス追跡の疲労がどつと来たので、考えるのを止めた

「（…疲れたから、今日のところは帰るか。）」

「そうした方がいいニヤ。」

「運ぶ鉱石もたくさんあるしニヤ。」

「予定では森丘にも足を運ぶはずだったが、大量に採掘した鉱石があるので、今日のところは帰還だ

「俺とモモは、走り回ってくだびれた体に鞭を打ち、その場をあとにしたのだった……」

竜と猫の消えた沼地の一角には、時折呻く毒怪鳥以外に何者の姿もない

しかし、毒怪鳥の呻き声に混じって、水をはじく音が沼地に小さくこだまする

地面の水溜まりに大きな波紋が広がるが、奇妙なことにそれを生み出す者の姿は見えない

やがて水をはじく音は止むが、水面に浮かぶ波紋はまだ存在した

しばらくすると、何も無かったはずの場所に、謎の輪郭が浮かび上がる

次第に鮮明になっていき、その姿が露わになる

目をギョロギョロと動かすが、目は左右別々の動きを見せる
その目は、竜と猫が消えた場所に向けられた

しばらく見つめた後、長い舌で眼球を舐め、視線を戻した

そして体を揺らしながら歩き出し、現れた時と同じように、徐々に風景に溶け込んでいった…

第十七話：熾烈苛烈激烈！！毒沼狂走連盟！！（後書き）

天使「ねえ、ちゃん。

ちよつと手伝つてくれないかな？」

神「なんや、自分からお願いなんて珍しいやないか。

よっしゃ、手伝つたるわ。

ほんで、クエストはなんやねん？」

天使「えへへ、火山の素材ツアーなんだけどね。

お守りとりに行きたいの。」

神「はあ？

お守りなんぞどうでもええやないかい。

んなことより、ハチミツ集めてた方がええわ。」

天使「ちゃん、お守りバカにしちゃいけないよ？

お守りの質が強さを左右すると言っても過言ではないのだ！

見たまえ、これが私がとつたお守りだよ。」

神「どれどれ……。」

剣術+5に罾師+8……しかもストックが二つやと！？

待て待て、ウチこんな高性能なお守り持ってへんで！？」

天使「 ちゃんあまり採掘行かないもんね。
だから、一緒に行こ？」

神「よつしゃ！！」

「なんや燃えてきたで！！
待ってるやお守り！！」

天使（…単純。）

第十八話：マリナ街に行く No. 1 (前書き)

バトル無し

これからしばらく主人公は空気と化します

ただマリナが暴走しますWW

第十八話：マリナ街に行く No.1

沼地で一騒動やらかした俺たちは、深夜遅くに住処へと帰ってきた久しぶりに激走したのと、帰り道に補食したことで猛烈な睡魔に襲われたので、俺はサツサとあなぐらにこもって横たわる

マリナにプレゼントを渡しておきたかったが、睡眠欲に負けたので、明日渡すことにした

俺の睡眠時間は短い

どれだけ疲労がたまっていようが、眠りについてから数時間で起床する

理由はよく分からないが、危機管理と異常な食欲がそうさせているのだろう

今日は深夜遅くに寝たために、明け方に起床した

といっても、他の者と時間を合わせるために、いつも深夜に就寝しているので、いつもと変わらない

習慣化した朝の水浴びをするため、俺はあなぐらを抜ける

そして……地面が抜けて、俺の半身が埋もれた

突然の出来事にパニック状態になっていると、首筋に冷たいものが触れる

恐る恐る目をそちらに向けてみると……なんといか、無表情の能面のようなマリナがいた
手にしているのは”鬼神斬破刀”、切れ味は良いし付加した属性は俺が苦手とするもの

手が滑って首を斬られでもしたら、笑い事では済まない事態になる
冗談だとしても許し難い行いだ、マリナのあまりにも怖すぎる無表情を前にして、俺の怒りの炎も小さな火種と化す

「兄ちゃんが勝手に連れて来た蟹を片付けて戻ったら……ふざけた伝言残してくれたじゃない。」

声にまでその様子が現れていたが、その奥には身も凍り付くような憤怒と憎悪が感じられる
恐怖で声を発せられずにいると、首にあたる太刀の力が強まる

「(ま、待て！プレゼントだ！
マリナにあげる贈り物を探すために、ちょっと出掛けたんだ！
伝言は…ちょっとした冗談だ！
たちのわるい冗談だと思って、笑い飛ばしてやってくれよ！)」

すると、マリナはニッコリと笑ってくれた

マリナの表情がほころんだのを見て安堵するが

「笑ったよ…気がすんだ？」

もう思い残すことはないよね？」

「（ストップ！！待てっ、待てだ！！」

プレゼントがあるんだ、死んだら渡せないだろ！！」

俺の最後の弁明を聞き、マリナは首にあてる太刀を離す

「（モモが持つてるから、アイツのところに行かなきゃ！）」

穴から抜け出そうとすると、太刀を向けられ制される

どうやら、逃がしてはくれないようだ

マリナはたまたま近くを通ったアイルーに、モモを呼んでくるように頼む

しばらくして、上機嫌のモモが堂々とやって来る

モモが上機嫌なのはいつものことだが、この状況で見るとかなりイラつく

そればかりか、モモは俺のこの姿を見て、腹を抱えて笑い転げた

うん…死刑確定だ

落ち着いたモモに、プレゼントの”ピュアクリスタル”のことを話すと、とんでもないことを言った

「鉱石は竜人のじいさんに全部あげたのニヤ。

ピュアクリスタルは特にスゴいと言って、すぐ使った気がしたニヤ。

」

「（なにやってんだお前！！

アレはプレゼント用だぞバカ野郎！！）」

「プレゼント用なんて、一言も聞いてないニヤ。

オイラは悪くないニヤ。

そういうわけで……バイバイなのニヤ。」

モモはまるで逃げるように立ち去っていった

ヤツは火山の火口に縛り付けて放置する刑に決まりだ

だが、失態を犯した相棒の処遇よりも、この怒れる夜叉の方が大事だ

なんとか弁明しようとする、マリナは呆れたような、可哀想なヤツを見る目で俺を見下ろす

少し喜ばしいことに、下から見上げる形となるために、マリナのきわどい部分が見えてしまった

おもてに出さないよう興奮していると、マリナは大きなため息をつく

それから踵を返し、なにやら荷物の入ったポーチを手にする

「（ど、どこか行くのか？）」

「ここを出て、ドンドルマの街に行く。」

マリナはなんでもなさそうに言うが、俺には大きな衝撃だった

「（んなっ！？家出か！？）

ダメだぞ、街にはお前に手を出す不貞な輩が大勢いるぞ！」

「家出じゃないよ…猫ちゃんたちに頼まれたから、私が買い出しに行ってくるの。」

なるほどそれなら安心…じゃない！

街に行くまでには、危険なモンスターが大勢だ！

怪鳥や桃毛獣なんか比ではない、恐ろしい飛竜がいるぞ！

俺はマリナに、外界に行く危険性を話してみせる

ここら一帯は俺のテリトリーなので、あまりにも危険というモンスターはいない

しかし、街に行く道はおそらく縄張りの外、どんなモンスターがい

るか分かったものではない

「ご忠告ありがとうございます。」

「ただ移動手段は馬車だから問題ないわ。」

マリナは実家の村に戻り、そこからポツケ村に向かって、そこから街に向かうための馬車に乗るとのこと

「少し離れば、私のありがたみも分かる……でしょ？」

「ということで、さようなら。」

「(ま、待てえ!!」

「せめて…せめて穴から出してくれえ!!」

立ち去るマリナの背に向かって叫ぶが、俺の声は聞き入れられなかった

「はあ………なんか無駄に疲れたわ。」

後ろで兄ちゃんが何かわめき散らしてる気がするけど、たぶん気のせいよね

荷物の入ったポーチを肩に下げた私は、ため息をしきりにこぼしながら洞窟の外に出る

毎度恒例ながら、洞窟の入り口には鍋で何かを調合するモモがいる”私も調合上手になりたいな”と思っていると、モモが私に気付く

「旦那さんには悪いことしてしまったのニヤ。

プレゼント用だと分からなくて、じいさんにあげてしまったニヤ。」

言葉とは裏腹に、全く反省している素振りはない

それから、兄ちゃんが私にあげるはずだったプレゼントについて話してくれた

沼地で体を張ってクリスタルを見つけたこと

毒怪鳥に盗まれたクリスタルを、私のために必死で取り返したこと

モモの話を聞いた私は、自然と笑みを浮かべていた

あの怠け者で馬鹿で間抜けで、後先考えないで行動する阿呆が、そんなに真面目になれるんだ…

そう思うと、兄ちゃんの一連の行動も許しなくなってしまふ

「…似合わないこととして。

ねえモモ…兄ちゃんに、伝えといてくれない？

さっきは怒ってごめんなさいって。
帰ってきたら、疲れて動けなくなるくらい、たくさん遊んであげ
し、一緒に寝てあげる…ってね。」

「分かったニヤ！」

早速伝えてくるのニヤ！」

モモはそう言つと、鍋を放り投げて洞窟に走つていった

別に今すぐでなくていいのに…

「(テメエ、モモ!」

何しに来やがった!」

「マリ姉から伝言ニヤ。

怒ってごめんなさいってにや。」

「(はは…マリナが許してくれたのか。)」

「それと、帰ってきたら…。

一緒に寝てあげるって言ってたのニヤ。

疲れて動けなくなるまで遊んであげるとニヤ。」

「(んなつ!」?

マリナが…そんなことを!」?

一緒に…寝る?」

疲れ果てるまで…遊ぶ…グハアッ！！」

「……なんか、ものすごいことになってる気がする。
フウ…気のせいよね。」

嫌な感じがするが、私はそれを気のせいだと片付け、実家のある雪山へと向かう
歩いていっても構わないが、鍛錬代わりに村まで走って行くことにした

村を出て三年経つが、実は年に数回帰郷している
帰郷するたびに私の成長過程が分かるため、村人たちは自分のことのようにはしゃぐのだ

あと同年代の男たちが寄ってくるが、外の土産でも期待してるのだからだろうか？

休まず走りつづけたおかげで、昼前には村へと到着
前もって来ることを伝えていたので、村人たちは驚くことなく迎えてくれた

それからママにお昼ごはんを誘われたので、ご馳走になった
久しぶりのママの料理はとても美味しかった

ポツケ村からドンドルマに向かう馬車の時間は正午
時間に余裕はあるが、慌てて駆け込むのはイヤなので、村を発つこ
とにした

村を発つことを聞いた男たちは残念そうな顔をした

ついて来られても面倒なので、私は青年の一人の手をとり、燃えな
いゴミを渡す

燃えないゴミを受け取った青年は歓喜したが、すぐに他の男たちに
ポコポコにされた

みんな燃えないゴミが欲しかったのだろうか？

不思議に思いながらも、関わり合いになりたくないので、サッサと
ポツケ村への道を進む

ポツケ村には、幼少期の頃一度訪れたことがある

訪れた時には大きな印象も無かったが、当時珍しい存在だった”轟
竜・ティガレックス”雪山に現れ、それを討伐したのがポツケ村の
ハンターということで、はつきりと覚えている

それからポツケ村にハンターが集まり、結果として私の村も安全圏
に入っているというわけだ

ポツケ村と私の村は似たような雰囲気なので、特に驚くようなこと
は無い

露天や工房を横目で眺めながら、私は馬車のある所へと向かう

雪山の村では異彩を放つ黒い馬車に近付き、操縦するアイルーに挨拶を済ませて馬車に乗り込む

しばらく馬車の中から外を眺めていると、二人のハンター風の女性が乗車し、ゆっくりと馬車が動き出した
どうやら、ポツケ村からドンドルマに行くのは、この三人だけのようだ……

「ま、待ってくれえ〜!!」

訂正、遅刻者一名

停車した馬車に、息を乱れさせた一人の若者が乗車してきた
年齢はたぶん私に近い、身なりを見るかぎりハンターのような
といってもこの若さなら、新米ハンターだろう

先に乗車していた女性の一人が、若者に”大丈夫か”と声をかけている

もう一人の大人びた女性は、私と同じく若者に興味を示さず、手に持つ資料を眺めていた

ここで三人についての身なりを紹介したい

遅れて乗車した青年は”チェーン一式”に片手剣の”ハンターカリ
ンガ”という装備で、損傷の無いあたり実戦はまだ経験してなさそ

うだ

次に青年と話す少女

彼女は”ハンター一式”で、青年と同じく片手剣の”ポーンククリ”だ

装備にいくつか損傷が見受けられるが、傷は少ないために実戦経験は浅い

最後に大人びた女性についてだが、彼女の装備は私が知らない防具だ
防具は綺麗な蒼色で額に鉢金を付けている

武器は私と同じ太刀だが、それも初めて見るものだ

防具の損傷は少女よりも少なかったが、実戦経験の少なさのためではない

無意味に攻撃を受けずモンスターを倒してきた、本当の強者なのだろう

他二人はどうでもいいが、彼女には興味が湧く

それと同性の私が言うのもどうかとは思うが、彼女のその稟とした佇まいはとても美しく、魅力的だった

「どうか…いたしましたかな？」

無意識に彼女を直視してしまっていたようで、彼女は資料を見るのを止め、私に声をかけてきた

「あ…いえ、アナタがとても綺麗でしたので……って、私は何を！
？」

いきなり声をかけられたために、焦ってとんでもないことを言ってしまった

恥ずかしさに顔を赤らめっていると、彼女は私に優しく微笑みかける彼女の優しげな笑顔に魅入ってしまい、私は恥じらい以外の理由で赤面した

「ふふ…お褒めいただき、光栄に思います。
そうおっしゃる貴女も、とてもお美しいですよ。」

「は…はわわ…美しいだなんて、そんな！」

彼女の褒め言葉と凜々しい口調に、私は頬に手を当て身悶える

いけない！！

彼女は女性…ときめくなんていけないわ！！

で、でも……愛に性別は…

ああ、兄ちゃん！

私はどうしたらいいのよ！

私が危険な妄想しているとは知らず、彼女はクスクスと楽しそうに笑う

「貴女はなかなか面白い御方ですな。
名を名乗らせてもらってもよろしいですかな？」

「は…ひゃい…！」

あうう…囁んじやったよ

言葉を囁んだ私に対し、彼女はやはりクスクスと小さく笑う

「本当に面白い御方ですな。

私はドンドルマとある猟団の団長を務める”カナメ”と申します。

」

「は、はい…！」

あの…えと、わ私は…！」

「ハハ、落ち着いてお話しなされ。」

「はい…！」

えと…私は、マリナと申します！

よ、よろしくお願ひします！」

緊張で半ばパニックにおちいりながら、私は彼女に自己紹介を済ま

せる

彼女が微笑みながら手を差し出してきたので、私は慌てて握り返す
カナメさんのすべすべした肌に感嘆の声をこぼすと、彼女は再び微笑む

「これも何かの縁、以後お見知りおきを…マリナ殿。」

「は…はい！」

よろしくお願いします！

カナメ様！」

「うむ……ですが、様とはどういうことですか？」

「カナメ様は運命のお方です！」

ですので、カナメ様と呼ばせてください！」

期待に目を輝かせる私に、カナメさん…カナメ様は困ったように苦笑する

美人は喜怒哀楽全ての表情が美しい

カナメ様の困った表情も、私にはとても美しく見えました！

恋は盲目とはよく言ったものだ

人生において初のときめきを抱いた相手は、まさかの同性

それから私は、ドンドルマへと到着するまで、カナメ様にベツタリ
でした

他二人は啞然としてたけど、カナメ様に愛でてもらえるなら構いま
せん

はう……カナメ様のお肌、すべすべでとっても柔らかいですっ

第十八話：マリナ街に行く No.1（後書き）

《カナメ・設定》

武器

龍刀【隴火】

防具

稟・皇一式

発動スキル

???

知る人ぞ知る、ドンドルマの大きな猟団を率いるかなりの実力者

街でのハンターでは上位に位置する実力を持つが、決してかなわな
いというハンターが一人いる

面倒見の良い頼れる姉御

マリナは執心だが、同性愛者ではない

第十九話：マリナ街に行く No.2（前書き）

相変わらずバトル無し…

しばらく無し…

ドンドルマ編が長くなりそうなので、サブタイトル変わりました

スミマセン…

自分の無計画さに呆れています

第十九話：マリナ街に行く No.2

カナメside

はて…この状況は如何なるものか？

私の右腕を抱き締め、うつとりとした表情で甘い喘ぎを零す少女がいる

かれこれ数時間、このなんとも言えない状態が続いている
別に悪い気はしないのだが…この娘の…私を見る目が、何やら危ない気がするのだ

ヴラドよ…私は一体どうすればよいのだ？

カナメside out

馬車に揺られること数日…

ドンドルマに向かう馬車は、途中ある村に何度か停車して休憩、新たな乗客を乗せて出発を繰り返していた
もつとも、馬車内のマリナの様子を見て、大抵の乗客はひきつった顔で立ち去っていく

ドンドルマの街にはもうすぐ着く

マリナは下車する準備を済ませた後、愛しのカナメに抱き付くのだ
った……

「ところでマリナ殿は…街で何をなさるおつもりで？」

「市場で色々お買い物したいと思ってます。

村に配送してもらおう必要がありますから…時間がかかりそうです。」

「ほう……マリナ殿は村のために都市部まで来られるのですか。
感心いたしますな。」

そう言うと、カナメ様は私の髪を優しく撫でてくれました

私は彼女の包容力のある、優しい愛撫…コホン

彼女に撫でられると、どこか落ち着きます

「カナメ様は、街に帰ったら何をするんですか？」

私はちょっといたずらっぽく上目で見つめましたが、逆にカナメ様の真っ直ぐな瞳に見つめ返されてしまい、恥ずかしくなって顔を背けてしまいました

カナメ様反則です……そしてとても美しいです

「私はギルドに向かい、いろいろと報告しなければなりません。おそらくその後には何かしらあるでしょうから、休みはあまりとれないでしょうね。」

苦笑いを浮かべながら窓の外を眺めるカナメ
その顔には、これから街で行わなければならない、数々の仕事への憂いをおびていた

彼女も苦勞人なのだろう

「お時間がありましたら、一緒に街を歩きたいと思っただけ……仕事なら仕方ありませんね。」

「最近では外界に出てハンター業に勤しむ者ばかりですね……。いや、元気があつてよろしいのですが……執務をこなす者がいない分、私の方に回ってくるのですよ。」

一人有能な方がいますが、諸事情で手を貸してくれません。」

「む……ならその者を私がぶっ飛ばしてきます！！」

カナメ様の助けなら、喜んでやりやがれ！

……ハ、すみません！」

興奮し過ぎたマリナは、自分の口から出た乱暴な言葉に気づき、慌てて陳謝した

幸い、カナメは特に気にしてはいなかった

「マリナ殿も元気があつて良いですな。」

ですが、彼に手を出すのは止めておきなさい。

街のハンター全てが認める、歴戦の狩人ですから。」

「歴戦の狩人……そんなに強い人なのですか？」

「ええ……私など小さくみえるくらいです。」

ギルドでも手に負えないモンスターが現れば、ギルドが彼に直接依頼するくらいですから。

十年程前に古龍が襲来してきましたが、事実上、彼が一人で撃退させました。」

古龍がいかに強大な存在かは、遭遇したことはないマリナでも熟知している

それを一人で撃退するなど、にわかに信じられない

カナメの話では他にもハンターがいたそうだが、強大な古龍に対してなすすべもなかったらしい

人々が諦めていく中、その英雄が現れて、死闘の末撃退したらしい

最後にはお互い満身創痍だったが、カナメが言うには撃退させた英雄の勝利だという

「その……その人の名前はなんですか？」

珍しく真剣そうな表情で尋ねるマリナ

カナメもその真剣さを認め、ゆっくり頷いた

「彼の名は”ヴラド・ウルバヌス”…。

又の名を”異名殺しの英雄”…。
モンスターに付けられた二つ名が、霞む程の勇猛さを誇るが由縁です。」

「異名殺し…ですか。」

マリナはまだ見ぬ狩人の姿を想像し、身震いする

兄ちゃんと呼び慕う恐暴竜の元では、二番目に強いと自負していたしかし外界に出てみれば、自分よりも遥かに強いカナメに出会ったそしてそれをも超えるハンターがいるというではないか

マリナはここに来て、自分が井の中の蛙の一匹だったということを知った

しかしマリナが震えたのは畏怖のためでなく、強者を前にする武者震いだった

今の自分は未熟だった、それを知れただけでも大きな収穫だ自然界で生き抜くためには今以上に強くならなければならない
それがひいては、兄ちゃんのためである

自分が自然界に出てここまで成長出来たのは兄ちゃんのおかげであり、彼のために自分が一人前になった姿を見せたい
兄ちゃんの足手まといにならないためにも、自分はもっと強くなりたい

ではどうするか？

簡単だ

目の前にこんなにも、経験豊かな先輩がいるのだから、教えを乞えばいい

勝利を得るためには手段を選ばず、強くなりたければ教えを乞え…

…兄ちゃんの教えの一つだ

悪い兄ちゃん…帰ってくるの、時間がかかりそうだよ

だけど我慢してね？

立派に一人前になれば、真っ先に兄ちゃんに会いに行くから！

私はかたく決心した

兄ちゃんの力になれるよう、強くなることを…

窓からは見える先には、ドンドルマの街が見える

新米ハンター二人がはしゃぎ声を発する

道中やかましい彼らだったが、この時ばかりは彼らに同調する

ただの買い出しに来たわけだったが、こんな決心をすることになる
とは…

人生何があるか分かったものではない

第十九話：マリナ街に行く No.2（後書き）

次話、作中最強となるハンターが登場します…するはずす

ヴラド・ウルバヌスの由来ですが、

ルーマニアの”串刺し公””ドラキュラ公”と言われた、ヴラド・ツェペシュからと

第一回十字軍遠征の必要性を演説した、ウルバヌス二世からもじりました

作者は名前を考えられないので、歴史上の人たちから引用させていただきます

第二十話：マリナ街に行く No. 3 (前書き)

いまだにバトルは無し、次の次くらいかな？

ドンドルマの旅長引きそじ…

第二十話：マリナ街に行く No.3

ドンドルマの街に到着したマリナは、長く座っていたために鈍ってしまった体をならしながら、馬車から降り立った

それから、驚嘆の声を発する

今まで村や自然界を飛び回っていたマリナには、このドンドルマの街がとても雄大で圧巻に思えた

連なる建造物と整えられた道路、そこを行き交う人々、露天の賑わい…

マリナの目に映るのは全て真新しく、感動的なものだった

マリナは急務があるとするカナメと名残惜しそうに別れる

後の二人とは一言で済ませ、マリナも当初の目的だった必要物資の買い出しに、市場へと向かった

市場にやって来たマリナは、早々に物資を買い上げ、街の配達業者にポツケ村を経由して自分の村に送るよう依頼した
村に送られた物資は、引き取りに来た兄ちゃんかアイルーの手に渡り、住処へと運搬される手はずだ

マリナが街に来るにあたって、アイルーの村長から余分にお金を貰

っていた

それは、自分たちを助けてくれるマリナに対する純粋なお礼の気持ちであり、街に着いた時にマリナが好きなものを買えるようにはか
らったものだ

マリナもこの時は素直にその気持ちにあずかった

街ではレックス装備がゴツくて違う意味で目立つ

ちよつと目先に衣服を扱う店があったので、マリナはその店に入っ
ていく

目を輝かせて衣服を眺めるその姿は、まさに年頃の女の子の様子だ
った

今は服のセンスが分からないマリナの変わりに、店主に選んでもら
っている
だが……

「な、なら……この服は!?!」

「絶つつつ対にイヤ!!」

そんな丈の短いスカートはけるか!?!」

「じゃあこの服は!?!」

「さっきのよりお断りよ!!」

っていうか、なんでさっきから露出が多いやつばかりなのよ!?!」

もう何回このようなやり取りが続けられたか分からない
マリナと店主の周りには、脚下された衣服が散乱している
中には衣服と呼べないような、異常な露出度の服もある

マリナと店主の騒ぎを聞きつけ、店の前には大勢の見物客が集まっ
てきている

今ではその見物客も店主に味方し…

『いいぞいいぞ！』

『けしからん、もつとやれ』

『はあはあ…あんな服きたら彼女の肌が露わに…』

などといった…まるで兄ちゃんみたいなやつが騒いでいる

田舎育ちで無知な私をいいことに、彼らはさらに白熱する

野次馬の一人が『街ではみんなやってる』と言ってから、他のヤツ
らも口々にそう言うのだ

右も左も分からない私は、皆が言うことを馬鹿正直に信じてしまい、
やがて言われるがままに様々な服を着せられた

「うう…なんでこんな目に。」

「とっってもお似合いですよ。」

マリナは泣く泣く試着室にて、渡された衣服に袖を通す
流石に試着を手伝うのは、女性の店員だ

最初店主が入ってきたから、怒りの鉄拳で退場させたからでもあるが…

出来るだけ試着の時間を長くしようとしていたが、店員の慣れた手つきであつという間に着替えさせられる

マリナが観念すると、店員は笑顔で試着室のカーテンを開く

途端にマリナの姿を見た野次馬が、大きな歓声をあげる

「おおう！！めっちゃ可愛い！！」

「絶世の美女たる受付嬢が降臨したー！！」

マリナが試着させられたのは、ギルドの受付嬢が着用するという”メイド服”なるものの、店主改良型だオリジナルのスカートをギリギリまで短くしたもので、野次馬たちはしゃがんでアレを見ようとしている

不快感を露わにして睨んだが、逆効果…

涙目で睨んだことにより、かえって興奮を助長させてしまった

熱狂した野次馬が次に提案してきたのが、これまでで一番露出が多いもの

店主が言うにはハンター装備のレプリカらしいが、露出度が高くてマリナが必死で避けていたものだった…

「最後はこの店主自慢の”ノワール”装備でどうだ!!」

「いや待て、この”キリン・X”をかたどった装備を着せるべきだ!!」

野次馬たちの熱狂ぶりに、マリナはおろか女性店員まで表情をひきつらせる

しばらく口論を続けてきた野次馬たちだったが、何か納得したような表情でマリナに迫る

「話し合いは解決した!

君にはどちらも着てもらおうことになった!!」

「いや解決してないよ!

私の意思の尊重ってものはないのかよ!？」

マリナが抗議したが、興奮が最高潮に達した野次馬たちは止まらないマリナは怖くなって女性店員に抱き付き、助けを求めた…

『すまないが、どいてくれないかな?』

この喧騒の中心にいるマリナにまで聞き取れるような、存在感のある声が響く

その刹那、先ほどまでの熱狂ぶりが嘘のように、野次馬たちが静まり返る

マリナが分けも分からずにいると、奥の方から野次馬たちが左右に別れていき、一人の人物が近付いてくる

最後の一人が退いたとき、その人物の姿がマリナの目に映る

身長は高く筋骨隆々とした肉体に、丈の長い黒色の布を纏う

何より目をひくのは、布の下の白い包帯…よく見れば頭部や指先まで白い包帯に巻かれ、あるはずの素肌は見えない
おそらくは、全身を包帯に覆われている

「頼んでいたものを取りに来たのだが…大丈夫かな？」

包帯の男から発せられたのは、常人とはかけ離れた、あまりにも枯れた声だった

男の声を聞いて少しした後、女性店員がハツとして立ち上がり、男に頭を下げる

「し、少々お待ち下さい。」

そう言うと店員は店の奥に駆け出していく

店員がいなくなると、店の中を重い沈黙が包む

いつの間にか大勢いた野次馬たちも消え、今はマリナとその男のみ

男は店員を待つ間、赤いカバーに金色の刺繍が入った本を開き、それを読んでいる

店員はすぐに戻って来て、男は本を大事そうに胸ポケットにしまう

「注文の品です。」

「ふむ…。」

男は頷くと、店員から渡された品と引き換えに、代金を支払った

「ところで…店主の姿は見えんが、何処に？」

すると店員は恐る恐る、マリナの脇に転がる店主を見る

男がつられて視線を移すと、偶然マリナと目が合う

男はそこで初めてマリナの存在に気付いたようで、少し驚いていた

「……ふむ、店主の悪い癖が出たようだな。」

男はゆっくり歩を進め、倒れる店主の元に近寄る

男が店主を立たせ後頭部をつくくと、店主はようやく目を醒ました

「は…私は何を!？」

こゝ、これはこれは”ヴラド”様!

いつの間にお越しに!？」

「ついさっきだ…。」

それより…店主のせいで、一人の娘が面倒事に合ったらしい。

何かしら、詫びをすべきだろうな。」

男はマリナに一度視線を落とした後、店主にマリナへの謝罪を促す
店主が頷くと男はローブを翻し、店の外に向かう

その折に男から何か落ちて、マリナはそれを拾い、男の背に向かつて声をかけた

声を聞いた男が振り返り、マリナは近寄って落とし物を手渡す

それは何かのカードのようで、光を反射して煌めく水色の表面に、
何やらたくさん文字が書いてあった

「すまないな…ギルドカードを落とすとは。」

男は謝礼の言葉と共にカードを受け取ると、マリナの顔をマジマジと見つめる

「街に来るのは初めてのようだな…。」

名を聞いても……っと、名を聞く時は先に名乗るのが礼儀だな。

私の名は”ヴラド”、街の一角でハンター業をする男だ。」

「…は、はい。」

私はマリナと申します。

あの…あなたのことはカナメ様よりうかがってありました。」

「カナメ？」

ああ……あの腕の立つハンターのことか。

しばらく会っていないから、忘れていた。」

「はい…カナメ様から、アナタが街で尊敬を集めるお方だと聞いております。」

間近で話しをしていて気付いたことがある

ヴラドの包帯から微かに覗かせる肌は、火傷に覆われていたのだ
赤黒く焼け爛れた素肌は、まるで最近になって出来たような火傷に
見えた

マリナの視線に気付いたヴラドだったが、特に隠そうともしない

「気になるか？」

昔…古龍につけられた火傷でな、ほぼ全身が醜い火傷で覆われている。

…カナメは他に何か言っただけでなかったか？

例えば…街の人々からの噂とかな。」

「いえ、それ以外は特に…。」

カナメが言っていたヴラドへの評価は、主にハンターのもので街の人々からの評価は、特に聞いてはいなかった

「そうか…。」

ところで、その”斬波刀”はどこで手に入れたのだ？」

ヴラドが尋ねてきたのは、マリナの背にある”鬼神斬破刀”
マリナは斬破刀をとると、ヴラドに見せながら説明する

自分が雪山のとある村の娘であり、父がハンターだったこと
そして父の形見である斬破刀を、自分が譲り受けたことを…

マリナの話しを聞いたヴラドは、納得したように頷く

「名を聞いてもしゃとは思ったが…。」

君はメルヴィスの娘か？」

「　　っ!？」

「パ、パパを知ってるんですか!？」

マリナが急に食いつくと、ヴラドは少し驚いてたじろぐ

「この活発さ、やはりアイツの血を引いているだけはあるな。
私は君の父、メルヴィスのハンター仲間であり、友だった。

君とは前に一度会ったが……あの時は幼かったから、覚えていない
だろうな。

それに……今ほどハンサムではなかったからな。」

ヴラドは火傷のある顔を撫でながら笑う

事情を知ったマリナから見れば、笑えない冗談だ

「ふむ……マリナ、君に渡しておきたいものがある。

メルヴィスの遺したものだ……家に来てくれるかな？」

皮肉った冗談を聞いて苦笑していたマリナだったが、父の遺品と聞
いて表情を変える

「父の遺したものですか？」

「ああ……メルヴィスの家を片付けている時に出て来たもので、今
まで渡せなかったものだ。」

「そうですね。」

ありがとうございます、父の遺したものはこの斬破刀だけかと思っ
てましたが、ヴラドさんが守っていてくれたんですね。

お願いします、父の遺したものを見せて下さい！」

「フッ……そう言っと思ってたよ。」

その前に……そのよく分からない服装を直した方がいいんじゃない
か？」

「あ……。」

途端にマリナは羞恥し、顔を赤らめて俯く

ヴラドは一つ頷くと、やり取りを眺めていた店の店主に目を向けた

「店主、何かくれてやれ。」

店主は身震いすると、先ほどの店員以上の速さで店の奥に消え、す
ぐさま戻ってくる

「あいにく……マシなのはこの”アスール装備”しかありません……へ
へ。」

レプリカではなく本物ですが、詫びに貰っと思ってくださいませ。」

「うう…なんか嫌な予感するけど、仕方ないか。」

ガックリとうなだれながらも、マリナは試着室に向かっていったのだった…

「あうう……なんでこんなに胸元開いてんだよお…。」

「に、似合っていますぞ…！」

「店主よ…お主も真面目にしていれば、完璧な人間性なのにな…。」

マリナは街で、骨董品のアスールFを手に入れたのだった…

第二十話：マリナ街に行く No.3（後書き）

なんか試着会みたいな雰囲気になった…

動画見てたらアスール発見したので、マリナの装備にさせていただ
きました（笑）

主人公の夢は潰えそうでせね、マリナの好き嫌いでWW

第二十一話：マリナ街に行く No.4 (前書き)

ちよいしリアス？

第二十一話：マリナ街に行く No.4

マリナ side

私は自分の役目である仕事を済ませた後、前々から欲しかった新しい服を見に、たまたま見つけた服屋に入っていたのだけど、雪山育ちで俗世間に乏しい私でも、この服屋が異常なのに気付いたよ…

だって、展示されてるほとんどの服が、マニアックな服が露出の多い服ばかりだったんだもん！！

そればかりか店主や他の客も変だったよ！

反抗しないことをいいことに、恥ずかしい格好させて…コノヤロウ！

そんないかれた試着会を助けてくれたのが、前にカナメ様が教えてくれた最強のハンター”ヴラド”さんだったのだ

ヴラドさんを見た時は、黒装束で包帯姿だったからとても怖かったんだけど、予想外に気さくに話しかけてくれた

それになんと、ヴラドさんは私のパパの友人だったんだって！

それを聞いて私がはしゃぎだすと、ヴラドさんは少し驚いたみたいだった

さらに会話をすると、ヴラドさんはパパの遺品を所持しているから、家に誘われたの

家に行く前に気をきかせて服を貰うよう働きかけたのだけど、正直貰った服も…危ない気がする

店を出たら案の定、街の人たちの視線が集まったけど、ヴラドさんと話しているのを見ていきなり顔を背けた

カナメ様の話しでは凄い人らしいけど、凄過ぎて目を合わせられないのかな？

最初はそう思っていたけど、賑やかだった場所をヴラドさんが通ると、ヒヤッとするくらい静寂につつまれる
人々はひそひそと何かを囁き合い、ヴラドさんを指差していた

流石に不審に思った私がヴラドさんに尋ねたけど、”黙して語らず”っていう感じだった

結局その異様な光景が街の外に出るまで続いていた

っていうか、ヴラドさん街の外に住んでるの？

マリナ side out

街の門から出て数十分ほど移動した先、草原にポツンと建つ農場に、

マリナは連れて来られた
農場の周辺には、家畜化されたいい”アプトノス”がおり、和やかに草を食べている

マリナは少々呆気にとられた

街を救った英雄とは思えない、あまりにも質素な家だからだ

普段洞窟で暮らすマリナから見たら幾分マシだが、それでも嵐が来たら軽く倒れそうな、悪く言えば廃屋にしか見えない

煙突から出る煙と、飼われた家畜がなければ、人が住んでるなどとは考えられないだろう

ヴラドが農場に近付いていくと、数匹の犬が出迎える
ヴラドは後ろ足で立ってすり着く犬を一撫ですると、その鋭い目を農場の玄関へと向けた

「また君らか……何度来ても答えは同じだ。」

「いいえ、今日こそ満足のいく返事をいただきますわ!」

玄関の前にいたのは、学者風の衣服を着た二人
片方は男性、もう一人は眼鏡をつけた女性だ

眼鏡の女性はヴラドの前まで詰め寄ると、威張るように腕を組む

「もう今までのような回答はごめんですわ!!」

アナタはまだ自分の立場を理解されていないようですから、話しに付き合ってもらいますわ!」

「何度も言うように…来るだけ無駄だ。

あいにく先客がいるのでな、今日はお引き取り願う。」

眼鏡の女性は絶句すると、ヴラドの背後にいるマリナを見つける

女性はマリナに何か言おうとするが、ヴラドに遮られ、はぶかれた

女性は背後でヒステリックを起こしたように叫ぶが、ヴラドは無視、マリナもそれにならって続く

玄関の前にはもう一人の男性がおり、近付いてきたヴラドたちに—
礼する

眼鏡の女性よりは、幾分マシなようだ

「アナタが来てくれれば、組織の内部もまとまり、アナタのカリスマ性が組織を強くしてくれます。

ヴラドさん、どうしても考えは変わらないのでしょうか?」

「変わらないな。

君が私を評価する理由も分からないでもないが、君が思うように優秀ではない。

それに、組織の重役には興味が無いし…私が上に立つべき人間だとも思わん。

はるばる訪ねて来て申し訳ないが、私を説得するのは時間の無駄だ。

「

ヴラドは男にそう告げると、マリナを先に入らせ、二人に黙礼して戸を閉めた

家屋の中は、予想外に良く整っていた

必要最低限の家具と飾り付けの無い室内は、やや殺風景だったが、定期的な整理整頓・掃除がされているようで、小綺麗な内装だった

そんな殺風景の中で目立つのが、唯一飾り気のある小さな祭壇

「へえ…ヴラドさんは、神さまを信じているんですか？」

振り返って尋ねてみると、ちょうどヴラドが黒装束を脱いだところだ
黒装束の下にも衣服は着ていたが、痛々しく巻かれた包帯がさらに露わになった

「私の生まれ故郷で信仰されていてな…幼い頃から信仰心は持ち続けていた。この地域では、私のような者は珍しいようだがな。」
小さく笑いながら言うと、ヴラドは隣室へと入っていった

マリナは脇にひかえる子犬を撫で、もう一度祭壇へと目を向ける
蝋燭に灯る炎が、窓の隙間から入る風に揺られ、金細工の祭壇を煌々と照らしている

祭壇の隣には、ヴラドが持っていたのと同じ、赤い刺繍の入った本が置かれていた

興味本位で本を眺めてみたマリナだったが、難しすぎる文字の並びに顔をしかめ、読むのを諦める

祭壇を眺めて待っていると、隣室から木箱を抱えたヴラドが来た
木箱をテーブルに置き、中身を丁寧に並べていく

それが父の遺品だということが分かったマリナは、そっとテーブルに近寄っていった

「メルヴィスの遺品を見るのは久しぶりだ。」

ヴラドは懐かしそうに遺品を並べていくと、一つ取り出して、それをマリナに手渡した

それはマリナの父、メルヴィスの日記帳だった

日記帳には狩りの様子やその日の出来事が記され、随所に家族への言葉が書き残されていた

日記帳の始まりはマリナの誕生日、そこから毎日欠かさず日記を書き続けていた

自分でも詳しく知らない父のことを知れて、マリナは嬉しそうに頁を捲っていく

日記には時折ヴラドのことが書いてあり、どれも仲の良さが伝わってくるような内容だった

そして父の、自分に対する言葉を見つけた時には、自然と涙が浮かんでいた

そして頁を捲っていくと、何も書かれていない空白の頁が続く…最後の日記の日付は、父の訃報が届いた1ヶ月前だった…

先ほどまでの歓喜は沈み、マリナは酷い喪失感を覚えた

日記帳をテーブルにゆっくり置くと、ヴラドの手で並べられた遺品の数々に目を向ける

父の衣服・財布・食器など、ほとんどが日用品だった

その中で、マリナは小さな御守りに目がついた

手に取ってみると、まるで何か特別な力が働くような、不思議な感覚を感じた

「それは力の護符…メルヴィスが最期まで身に付けていたものだ。持っているだけで、力を得られることのできる、神秘的な護符だ。」

父が最期まで所持していたもの…
持っているだけで、父が見守ってくれるような気がする

「ヴラドさんはパパの…父さんの最期を知っていますか？」

日記はおそらく、帰宅してから書いていたものだ

なので日記には父がこの世を去る前については書かれていない

ヴラドは知っているかと思ったが、彼は首を横に振った

「残念ながら…詳細は知らない。」

分かっているのは、考古学者から護衛の依頼を請けたこと。

そして”シュレイド地方”にある、とある古城で…メルヴィスは命を落としたということだけだ。

「すまないな…。」

「いえ…。」

落胆してないといえれば嘘になるが、ヴラドが謝る理由は無
同行していなかったのなら、仕方のないことだ…

そこから会話が無くなり、室内に重い空気がのしかかる

しかし意外にも、その空気を打ち破ったのはマリナだった

「父さんのことはだいたい理解出来ました！」

なので、今度はヴラドさんのことを教えてもらってもいいですか！
？」

「…ああ、構わんぞ。」

最初こそヴラドは戸惑ってはいたが、やがて優しいな笑みを見せた
(目元しか見えないが)

「ヴラドさんって、いつからハンターに？」

「ふむ…最初からハンターだったわけではない。

元は第三王女付きの王国騎士だったのだよ。

まあ…二十歳の時に辞めて、依頼ハンター生活だな。」

あっさりとんでもない経歴をこぼしたヴラド

王国騎士といえば、エリート中のエリートで、知識に乏しいマリナでも分かることだ

辞めた理由を尋ねてみると、ヴラドは苦笑しながら答える

「第三王女のわがままっぷりは、私の手には負えなくてね…。

せめて第一王女様のような、聡明な御方に仕えておれば、もう少し長続きしていたかも…。

まあ、本当の理由はたくさんの人々を助けたいと思ったからだかな。

」

「エリートへの道を捨てて、人助けに生きるですか…なんだかカッコイイですね！

そういえば、さっきの学者さんみたいな人たちは、ヴラドさんに何て？」

「あれは…ハンターズギルドの職員だよ。

私にギルドで重役を担ってほしいらしいが、権力渦巻くような所には行きたくないのな。

こうやって…悠長に暮らしていた方が、遙かにいい。」

のんびりとしたその口振りから、本当に権力や金といったものには興味が無いらしい

狩りで得た報酬は、日々を暮らしていけるだけのお金を残し、後は寄付をすることのこと

本当に欲の無い英雄だ…

最後に気になっていた、愛用の装備を尋ねてみると、ヴラドは頷いて地下室へと案内する

薄暗い地下室の松明に火を灯すと、明かりに照らされ壁に立て掛けられた武具の数々が浮かび上がる

自分の鬼神斬破刀と同等の武器の数々を眺め、マリナは感嘆の声をこぼす

大剣、片手剣、双剣、弓…ボウガンなど、数多くの武器が並ぶ

ヴラドが手に取ったのは、マリナが見たことがない形状の武器

「とある任務を帯びてユクモ村という場所に行つててな、この”スラッシュアックス”というものを造ってもらった。

扱いは難しいが、なれば強力だ…。」

興味深くその武器を見つめた後、もう一度壁を見回してみる

多様な武器が並ぶ中で、圧倒的な存在者を放つ防具が一式あった…

漆黒の装甲で出来、赤い模様がある

防具の各所に見受けられる鋭い棘や牙らしきものからは、素材となつたモンスターの獍猛さが伺える

マリナは防具を見て、あまりの威圧感にブルツと体を震わせた

「それは”黒き神”と謳われし覇竜を討伐した折に、街の有名な工房で加工させた防具だ。

その防具は妙に馴染むのでな…それしか防具は無い。

ふう……炎王龍と対峙した時にコレがあつたならば、結果は幾分変わっていたのかもな…。」

防具を眺めてシミジミと語るヴラドは、どこか後悔と自責の念が感じられる

「ふむ…マリナよ、君はこの後何か予定があるかね？」

「いえ…特にありません。」

街には数週間ほど居残る予定ですが？」

「なら、狩りに行ってみないか？」

メルヴィスの娘がどこまで成長したのか、見てみたいのな。」

マリナは少し思案したが、返事はすぐに決まる

「ぜひ！！」

できれば、強くなれるよう御指導お願いします！」

マリナの快い返事に満足するヴラド

「良い返事だ。

指導となると……ヤツを連れていくといいな。」

「はい！！」

……えと、誰をですか！？」

「まあ、そのうちヤツの方から来るだろう。」

ヴラドの言う人物が気になるが、地下室を出て行くので、マリナは

慌ててついて行った…

ドンドルマの”悲哀の英雄”…

最強と最凶がぶつかり合う日は、着々と迫ってきている
そのことを知るのは、誰一人としていない…

第二十一話：マリナ街に行く No.4（後書き）

次話で、ヴラドがとんでもない戦闘力を発揮する予定です

伏線っぽいのはりすぎましたね

第二十二話：マリナ街に行く No.5 (前書き)

久しぶり？に長い話しになりました

戦闘描写良く分からないので、このくらいです

第二十二話：マリナ街に行く No.5

マリナが街に来てから数日…

滞在している間、街の宿とヴラドの農場を、何度も行き来していた農場に来るのは優秀なハンターであるヴラドに、狩りをするための訓練を受けるのが目的だ

訓練といっても、マリナは身体能力や戦闘技術が出来上がっているので、その他ハンターに必要な知識や立ち回り方を学ぶだけだ

モンスターの生態や素材の有用性、そしてマリナの唯一の欠点…”
調合”だ

知識を覚えるのは良かったが、調合については…適性が皆無なのでは、と思えるくらい下手くそだ

ヴラドは課題としてマリナに、初級中の初級の回復薬の調合をさせてみたら、燃えないゴミが出来上がった

試しに難しい調合をさせてみたところ、怪しい煙を立ち上げ、爆発が起きたのだった…

間近で指導を受けながら調合するが、マリナがやると何故か失敗…
爆発する要素も無いのに、爆発する…

どうやらマリナには、調合の才に悪霊の加護がついているらしい

「まあ…練習を積み重ねれば、いつか上手くなる。」

今日も調合の練習をしたのだが、やはり失敗…

回復薬に蜂蜜を混ぜただけなのに、毒々しい色に変色……ゲリヨスの毒液みたいな色になった

「大丈夫だ。」

むしろ毒液を調合出来たんだから、素晴らしい才能じゃないか？」

「グスツ……フォローになってません。」

毒液？を怨めしげに見つめ、マリナは肩を落としている
ツッコミをいれられるぶん、まだ元気はあるようだ

マリナとヴラドとは、天と地の差があった

マリナが調合書とにらめっこしながらするのに対し、ヴラドは調合書も見ずに実際良く調合していく
先ほどからヴラドが調合しているのは、暑さ対策のクーラードリンクと、治癒力を高める活力剤だ

古龍に付けられた火傷の後遺症により、ヴラドの体は今でも炎熱に侵されているようで、苦痛を和らげるためにその二つを常用しているのだという…

マリナはヴラドの達人並みの調合術を、羨ましげに見つめる
回復薬すら満足に作れない自分に腹が立ち、何度も悔しい思いをし
た…

今までに成功した調査は無かったが、負けん気の強いマリナは諦め
ず、再び調査の訓練を再開しようとした

「今日はここまでだ。

その代わり、今日は狩りにいくぞ…。」

行動を遮られてムツとしたマリナだったが、狩りという言葉を聞いて、表情を明るくする

狩りはヴラドと出会った日以来行ってなかったのだから

ヴラドはいつの間にか防具に着替えていたので、マリナも急いで狩りに行く準備をするといつても、常にアスール装備なために、斬破刀を手にするだけで用意は済む

太刀を手にしたマリナを確認すると、ヴラドは玄関に手をかける生身の姿でも威圧感があったが、防具を着用したその後ろ姿はさらに威圧感が増している

今回は軽い狩りなために、ヴラドの本気の武装は見れなかったが、今回はヴラドの完全武装を目に出来た

背に差す大剣は”封龍剣・真滅一門”

マリナにはそれがどれだけ価値あるかは知らなかったが、防具同様それからも強い力を感じていた

ヴラドは大剣だけでなく、腰に重量のある片手剣を差し、自作の皮ベルトでライトボウガンを左肩にさげている

一度に三種類の武器を装備するなんて、ずいぶん欲張りなハンターだと思ったが、見た目がカッコイイので気にしないことにした

ガチャッ ウワッ!?

ヴラドが玄関を勢い良く開くと、何かがぶつかる音と小さな悲鳴が聞こえた

「……何をしているんだ貴様は。」

「玄関を叩こうとした時に勢い良く開けられたら、誰だって転ぶと思うが?」

玄関の向こうにいたのは、蒼い防具姿の女性…カナメだ
扉を開いた時に弾き飛ばされたようで、草の上に尻餅をついて、ヴラドを睨んでいる

「あつ、カナメ様!?

お久しぶりです!!--」

「え、マリナ殿　わわっ!？」

立ち上がるうと地面に手をついた時に、マリナが弾丸のように体当たりしてきて、今度は草村に押し倒される形となった

「カナメ様あ、クンクン……はあ、やっぱりカナメ様だ!！」

「うう……頭が……。」

「えっ!?!どこか怪我をしているのですか!?!
誰ですか、カナメ様に手を出す不届き者は!！」

「キミだあ!！」

マリナの天然ボケに激しくつつこむカナメ
それでもマリナが周囲をキョロキョロ見回していたので、諦めた

「そういえば、お前ら知り合いなんだってな?
どういう関係だ?」

「はい!乙女と乙女の関係です!！」

「そっだ……って違う!！」

マリナ殿、少しの間お静かに願いたい!！」

「はあ〜い。」

マリナの気の抜けるような声に、つついカナメの厳しい表情も綻んでしまう

ハツとして表情を締まらせ、カナメは用件を伝えようとしたのだが…

「丁度良い…貴様もついでに来い。」

「…一体何のことだ？」

それより大事な案件が。」

「その案件は断る。」

これで貴様の用件は済んだ、よって一緒に来い。」

「私の意思は無視なのか!？」

ええい、そのような勝手な真似はさせんぞ!」

「…いいから来い。」

抵抗しようとしたカナメだったが、マリナに抱きつかれて上手く動けない

もがいているうちに捕まり、ヴラドの手で二人まとめて引きずられていった…

さすがに街中を引きずられるのは嫌なので、諦めてヴラドの言葉に従う

カナメは呆れ、疲れ果てたようにため息をこぼす
右腕に可憐な少女がしっかりと抱きついているせいで、カナメは歩きにくそうだ

そして街の人々は、その異様な光景に目を奪われていた

美女が美女に抱きついてれば嫌でも目立つが、主な原因はヴラドだ
黒い防具にたくさんの武器で武装した姿は、街の景観の中ではかなり浮いている

まるで戦争か、大掛かりな狩りに挑むような雰囲気だ

人々のそういつた視線を感じたカナメは、途端に不機嫌そうな表情に変わる

マリナがキョトンとしていると、カナメはヴラドに一言何かを告げる
ヴラドは黙って頷くと、歩く速度を上げ、街の集会所へと向かった

集会所に着く頃には、ヴラドに集中していたイヤな視線が消え、代わりに好奇心と尊敬の眼差しが増えた

街の人々と違う反応を見せるのは、全てハンター及びギルドの職員だ
皆が皆ヴラドに憧れの目を向け、中には手を振ったり名を呼んだりしている

「ヴラドさん、人気者なんですネ。」

ヴラドが手を振り返すと、ハンターたちは嬉しそうに騒ぎ出す
街を救った英雄に反応され、よほど嬉しいのだろう

「同業者にはな…。」

街の住人からは、忌み嫌われている。

まあ、当然だろうな。私の力が及ばないばかりに、街は古龍に破壊
されたのだから。」

「何を言うのだ！」

アナタがいたからこそ、炎龍を最小限の被害で退けられたのだぞ！
覇竜だって、アナタが討伐したではないか！！」

「多くの犠牲のもとにな…。」

この話しは終いだ…それより、お前の獵団のヤツらが見ているぞ。

「

大きな声を出したために、ハンターたちの注目はさらに増えた
何より、普段冷静で物腰の柔らかいカナメが、珍しく取り乱すのだ
から

カナメが少し目を離していると、ヴラドはいつの間にか受付嬢の所
に行き、クエストを受注していた

「カナメ様、一体どういうことなのですか？
街の人々がヴラドさんをあんな目で見えたのは、何か理由が？」

「……うむ。」

カナメの歯切れは悪く、やはり難しい表情をする
カナメだけでなく、マリナの言葉をたまたま聞いた他のハンターも、
同様に暗い表情を浮かべる

「我々ハンターは…彼が街を救った英雄と認めています。
ですが…街の人々は…彼を。」

「疫病神、死神と呼ぶ…か？」

そこへちよつと戻ってきたヴラドが、言葉を詰まらした先を言う

「このことはもう忘れる。」

私の評価など考える意味は無い…。」

それ以上何も言うな

そう付け加えた後、ヴラドは態度を一変させて、受注した依頼書を
二人に見せた

カナメは見せられた依頼書に注目し、それまでの憤りも消えた

「黒狼鳥の討伐：場所は森丘か。
なるほど、アナタとマリナ殿とで行くには、ちょうど良いクエスト
では？」

カナメが笑みを浮かべると、二人は何を言っているんだ？

…というような表情をする

何かおかしなことを言ってしまったかと、微妙に焦るカナメに対し、
ヴラドは一言言う

「お前も行くんだよ。

付いて来い。」

自分を連れて来た意味をようやく知ったカナメだったが、既に手遅
れで、マリナの緩みかけた抱き締めが強くなった

「待ってくれヴラド！！

いくらアナタの言葉でも、私にだって予定というものが！」

「貴様は書類の上で死にたいってのか？

貴様もハンターなら、死に場所は自然の中とは思わんのか？」

「ちよっ…危うく肯定しそうになったではないか！

それに死ぬのが前提って、何かおかしくないか！？」

「人はいずれ死ぬんだ、その中でやりたくもないことをするのは、
時間の浪費だ。」

もちろんカナメとしては、書類整理などよりは、狩りに行きたいと思っっている
それでも返事を渋らせるカナメは、良くも悪くも真面目な苦労人なのだ

唸るだけのカナメに対し、ヴラドは抱き付くマリナに視線を向ける
後は任せた

マリナはウィンクして返すと、早速カナメの顔を覗き込む
その時マリナが火照ったような表情を浮かべたのを、ヴラドは無視しておいた

「カナメ様、ヴラドさんもそう言っているんですし、一緒に行きましよう?。」

「…し、しかし私にはやるべき事が。」

「ダメ……ですか?。」

「うっ……!?。」

少女の涙で潤んだ上目を受け、カナメは明らかにたじろいだ
同性で”その気”が無いカナメでも、マリナの小動物のようなソレには、耐性が無かった

おまけに周囲には、獵団のメンバーも何人かいて、少女を泣かせようとするカナメに、非難の目が向けられている

二つの選択肢に葛藤したカナメは、恨めしげにヴラドを見る

明らかに、楽しんでいた

「ヴラド…帰ってきたら、仕事を手伝えよ？」

「お安い御用だ。」

結局はヴラドの手の内で、カナメは弄ばれていた
ため息をこぼして、自分に非難を浴びせたハンターを見ると、冷や汗を流して目を背けた

全員を訓練の名目でシバき倒すことを決めたのだった…

《森丘》

「それで……コイツをどうやって討伐する？」

呆れ声で呟くカナメ

「貴様らに任せよう。」

投げやりな言葉のヴラド

「ハイ、私がやります!」

元気に名乗りをあげるマリナ…

黒狼鳥を討伐するために、三人は森丘にやって来た

黒狼鳥を探すため、ヴラドの勘とやらで移動し、見事黒狼鳥を発見出来ただが…

その黒狼鳥が何故か、段差にしゃくれた嘴が刺さった状態でもがいていたのだ

気付かれないよう、三人は背後から接近していく
一番槍は誰にするか、マリナは自分がやりたいと言っていたので、
カナメとマリナの二人でかかることにした

ヴラドは岩場に登り、胡座をかいて高みの見物だ

「…私はあの毒を持つ尻尾を狙う。
マリナはそれ以外を、効率的に攻めて欲しい。」

「分かりました。
ですが、一撃目は私にお任せ下さい。」

そう言うとマリナは斬破刀を抜き、地面と水平に構える刺突技の構えをとる

マリナの珍しい太刀の構えに、カナメは興味をひかせるが、すぐに自分の龍刀を構える

「マリナ、任せたよ。」

マリナは頷くと、一気に地面を蹴る

地面に転倒してしまうのではないかというくらい、駆け出した時の体勢に不安があったが、それが黒狼鳥の目にも止まらない速度を生む

狙うは、黒狼鳥の頭を支える首

攻撃の動作に入った瞬間、予想外の動作が起きる

黒狼鳥は突き刺さっていた嘴を引き抜く、つまり首があるべき位置が変わった

対象の一点を狙うマリナの剣術にとって、それは一大事だったが、
だがマリナは瞬時に目標を変え、嘴を引き抜いたために浮き上がった下あごに、鋭い刺突を突き刺した

斬破刀の切っ先は黒狼鳥の嘴を貫き、深いヒビをつくり、大量の出

血を起こさせた

黒狼鳥は嘴を砕かれた痛みにも叫ぶが、すぐに持ち直し、襲撃してきたマリナを睨む

黒狼鳥が目の前の標的に釘付けになっている時、カナメが動き出す
無防備な尻尾を龍刀の鋭い太刀筋が襲う
一撃必殺の一閃だったが、流石黒狼鳥といったところで、堅い甲殻が尻尾の切断を防いだ

それでも尻尾は切断寸前で、あと一太刀いければ、完全に切れる

襲撃者が二人いることを知った黒狼鳥は、激痛と不意打ちによって激怒する

マリナとカナメを遠ざけるために、切れかけた尻尾を闇雲に振る
その際に赤い鮮血の他に、色の違う液体も飛ぶ

その正体に気付いたカナメとマリナは、飛んでくる体液をかわす

「誤算だな…。」

毒腺のある場所を斬ってしまうとはな。」

カナメが斬った尻尾の位置に、運悪く毒腺があったのだ
切断面から毒液が流れ、尻尾を振る度に毒液が飛び散る

となると、もつと根元の位置で尻尾を切断しない限り、毒液が飛び散ることになる

カナメが思案する中、マリナは果敢に敵を攻めていた

危険をかえりみず、黒狼鳥の懐に潜り込み、平突きで攻撃

刺突技が堅い甲殻の間を貫き、かわされても平突きを横に振り抜き、
微々たるものながら確実なダメージを与えている

カナメも負けじと、黒狼鳥に突撃する

振り返った黒狼鳥の顔面を斬り、そのまま股をくぐって尻尾の位置
に行き、斬り上げる

根元に近い尻尾はやはり固かったが、龍刀の切れ味が勝る

最初の一撃ほどではないが、血液が流れ出し、毒液も流出していない

立て続けに攻撃を浴びた黒狼鳥は、距離を保つ意味で、背後に羽ば
たく

その時の風圧が、二人の体勢を崩した

間髪入れずに、黒狼鳥がマリナに突進する

マリナは横に大きく飛んで、突進を回避する

「危ない危ない…やばっ！！」

マリナが振り返った先から、黒狼鳥が再び突進してきた

黒狼鳥は走り抜けず、かわされた位置で立ち止まり、体勢を崩したマリナに攻撃してきたのだ

迫り来る衝撃に身構え、目をつむっていると、横から引つ張られた

「うう…ありがとうございます、カナメ様。」

「構わん、次が来るぞ！」

黒狼鳥はまた立ち止まり、再びこちらに突進する
ただし、同じ手はくらわない

突進間近で左右に分かれた二人は、黒狼鳥の脚を左右から斬りつけた

脚へのダメージによって転倒し、大きな隙が生まれる
倒れ込んだ黒狼鳥に容赦ない剣撃を浴びせると、深追いせずに離れる

その行動は正しく、黒狼鳥は立ち上がりざまに尻尾を振り乱した

お互いに距離をとって見据えるが、黒狼鳥はお構いなしに突進

同じ動作には慣れていたが、黒狼鳥は立ち止まって再び突進ではなく、金属音のような咆哮をあげた

耳を裂くような痛烈な咆哮に、マリナの動きは泊まり、黒狼鳥はそこへ必殺の一撃を浴びせようとする

尻尾はまだ切れていなく、鋭い甲殻と猛毒は健在

全力の力と憤怒のこもった、最強最悪のサマーソルト

逃げようにも、予備動作に入った黒狼鳥からは、逃げられない

「そう来ると思ってたぞ？」

黒狼鳥の凶悪な尻尾が迫ったと思った時に、カナメの不敵な声が聞こえ、次の瞬間には尻尾があらぬ方向に吹っ飛んでいった

尻尾を失った黒狼鳥は体勢を崩し、地面に墜落する

「危ないところだったな。」

半分賭けみたいなところだったが、うまくいって良かった。」

「い、一体何をしたんですか!？」

マリナの疑問に頷くと、どこか誇らしげに語る

黒狼鳥の咆哮には自分も怯んだが、前もって耳を防いだために、大した被害は無し

狙いをマリナに定め、サマーソルトを敢行した時に、最高の一太刀を尻尾に合わせたそうだ

皮肉にも、黒狼鳥の強力な力が尻尾を切断させることになったそうだ

説明をしていると、黒狼鳥に動きがあつたために、気を引き締める

しかし、黒狼鳥の目を見たカナメは、静かに武器を下ろしたマリナも同じく、構えを解いた

黒狼鳥の目は先ほどまでのような獰猛さは無く、幼竜のような弱気な目だ

二人は今まで、このような目をするモンスターを、何度も見てきたかなわないと悟り、逃げ出そうとするモンスターの目だ

中には最期まで諦めず、大きな怒りを持って反撃する者もいたが、それは稀少な存在だ

だが依頼を請けた以上、弱ったモンスターであろうと、命乞いをするようなモンスターであろうと、仕留めなければならぬ

武器を構え直した二人を見て、黒狼は脚を引きずりながら、反対の方向に振り返る

「黒狼鳥の呼び名も形無しだな。

弱さを知った貴様は、デカいだけのただの雛鳥だ。」

『ギヤ！？』

突然黒狼鳥の前に立ちはだかったヴラドは、驚愕する黒狼鳥の顔面を、大剣で殴り倒す

嘴は完全に砕け散り、殴りつけられた顔面は、大きく陥没した

瀕死とはいえ、一撃で死に至らせたヴラドに、マリナは心の中で賞賛した

「どうだヴラド、初めてとはいえ我々の連携はなかなかのものだったろう？」

カナメはマリナの肩を抱き、誇らしげに言う

マリナも彼女に認められたようで、とても嬉しそうだ

「確かに”連携”だけはな…。

高台で見物していたが、お前たちの欠点はだいたい分かった。」

大剣わ地面に刺し、ヴラドは腕を組む

「マリナ、貴様は無闇やたらに攻めすぎだ。

持久力と俊敏性を持って戦うのはいいが、その荒削りな攻め方は見直していった方がいい。

多少の傷は覚悟しているつもりだろうが、黒狼鳥のような、毒のあるモンスターには気をつける。」

「あう…す、すみません。」

ヴラドの厳しい言葉に落ち込むマリナ

「だが、自分に合った戦い方をしているのは良いことだ。突きを主体とした攻撃は威力に欠けるが、敵の弱点を的確に攻撃するのは賞賛にあたいする。ごり押し気味を解消すれば、ずいぶんと良くなるはずだ。」

最後に頭を撫でてもらい、マリナはぱっと表情を明るくする

「なかなか良い指摘だな。私には何か指導することはないか？」

カナメも期待したような表情をし、ヴラドに教えを請おうとしている

「…貴様には何も無い。自分で考える。」

「えええ！？な、何故だ！？」

マリナにも教えたんだから、私にもアドバイスしてくれてもいいじゃないか！」

「お前はハンター歴が長いんだから、一人で考える。」

「グスツ……マリナと私の差、酷くないか？」

「こんなにも可憐な少女が泣いて頼んだいるというのに。」

カナメは以前、マリナにくらったような、涙目＋上目を試してみる

「お前は少女と呼べるような歳ではないだろう。」

「そんな嘘泣き見たところで、私の心は少しも歪まん。」

ヴラドに容赦なく一蹴させられ、カナメは怒って涙を吹き飛ばす

「私は十代だ！！」

よってまだ少女と呼ばれる権利は持っているはずだ！！

そんなんでは、女性にモテないぞ！！」

「心配無用。」

私には妻がいるし、子どもたちも世に送り出した。

よって、私の男としての役目は終わった。」

「ウググ……。」

ヴラドの整然とした態度に何も言えなくなり、カナメはワナワナと震える

もはや最初のアドバイスをもらえなかったことより、女性として扱ってこないヴラドへの怒りだけだ

「もう、ヴラドさん!!」

あまりカナメ様をからかってはいけませんよ、アドバイスくらいあげて下さいよ。」

「ふむ…貴様がそう言うのならな。」

「おい、なんだその私との差は!!
酷すぎないか!？」

ヴラドはカナメの抗議を無視し、腕を組んで思索する
真面目に考えてくれてるのが分かったので、黙っている

「貴様は…難しいんだよ。」

ほぼ完璧だからな…。

自分に合った戦いもするし、的確な行動もするし…。

お前は、自分の何が悪いか分かるか？」

「完璧というのに、欠点などあるのか？」

「質問に質問で返すな。」

やはり突き放されるような口調で言われ、カナメはたじろぐ

自分の欠点は何か？

カナメは必死に考えるが、欠点という欠点が見当たらない
それでも、何かしらあるはずだと悩み考える

それに対しヴラドはため息をこぼし、自分の頭を指差す

「貴様は何事も真面目に考え、物事の表面だけを捉えすぎなんだよ。言うなれば、人に右を向いてると言われたら、一生右を向いてるよ
うなヤツだ。」

だから、もし不測の事態に陥った時、貴様は焦って使いものにならなくなる。

だからお前は、もっと馬鹿らしくなれ。」

「ば、馬鹿？」

カナメは面食らったようになり、横のマリナはもはや話しが分からず、虫を追い掛けて遊んでいる

「お前はマリナと一緒に、しばらく訓練を共にしろ。」

そうすれば、お互いに足りないものが何か…自ずと分かるはずだ。」

そう最後にまとめると、地面に刺さった大剣を肩に担ぐ

「さて、ここからは私の出番だな。

マリナを連れて、少し離れている。」

「何故だ？」

カナメの問いかけに、ヴラドは大剣の切っ先を、森丘の中心にそびえる山に向ける

「お前ら…騒ぎすぎだ。

飛竜のつがいが、私たちに気付いたじゃないか。」

不敵なその言葉のすぐ後に、山の方角から大きな雄叫びが響き渡った

山から赤い竜と緑の竜が、一直線にやって来た

「な、火竜のつがいだと!？」

依頼書にはそんなことは書いてなかったぞ!？」

「だからお前はダメなんだ。

敵が黒狼鳥だけなど、誰も言っではない。

さあ、貴様らは邪魔だから隠れている!！」

カナメは混乱しながらも、マリナの手を引いて草村に飛び込む

「まずは、雌火竜に死んでもらおう。」

皮ベルトで下げられたライトボウガンを左手で掴み、銃口を空中の雌火竜へと向ける

引き金を引くと銃口が火を吹き、弾丸が雌火竜の顔面に直撃し、時間を置いて弾丸が爆発した

爆発に驚いて雌火竜は墜落した

リオレウスは空中から火球を放ちまくるが、ヴラドはそれらを無視し、雌火竜に接近

立ち上がった雌火竜の脚を、一撃で切断した

脚の支えを失った雌火竜は再び倒れ、ヴラドはその頭に封龍剣を根深く突き刺した

しばらくもがいていた雌火竜だったが、大量の出血と強力な龍属性により、絶命する

ヴラドは雌火竜を仕留めたことに慢心せず、次なる火竜へと目を向ける

リオレウスは地上に降り立ち、雌火竜が殺されたことに激怒していた

火竜は怒りのままに、ヴラドに向かって突進する
先ほどの黒狼鳥などとは比べ物にならない、直撃したら即死するよ
うな勢いだ

それに対しヴラドは、腰に差してあった片手剣を抜き、火竜に向か
って投げた

片手剣は回転しながら飛んでいき、火竜の右目へと突き刺さる

右目を奪われながらも、火竜はそのまま突進

しかし、ヴラドは動じない

封龍剣を両手で持ち、肩に担いで最大限にまで力を溜める

火竜が範囲に踏み込んだ時、ヴラドの封龍剣が溜められた力から解
放され、空を斬る音と共に振り下ろされた

しかし、肉が斬れるような音ではなく、鈍い音がエリアにこだました

目の前の火竜は斬れていなく、代わりに大剣の威力を受けた地面が
割れていた

「怖じ気づきやがって…」。

貴様ももはや、空の王者などという、大層な存在などではない!!」

火竜は封龍剣が振り下ろされる瞬間、立ち止まっていたのだ

ヴラドは地面を割った封龍剣を持ち、身を捻って火竜の側頭部を殴りつける

火竜は脳震とうを起こしてよろめき、雌火竜の亡骸近くに倒れる
ヴラドは火竜の片翼を封龍剣で刺し貫き、身動きが出来なくした

それから火竜の右目に突き刺さったままの片手剣を引き抜き、ボウガンの銃口を頭部に向けた

「汝がため、安寧なる死後を迎えられるよう神に祈ろう…。」

安らかに眠りたまえ。」

今までの激情を感じさせない、穏やかで透き通るような声で呟く

そして、ボウガンの引き金を引き、弾丸が火竜を苦痛から解き放った…

「あの……なんだか分からないけど、凄かったです!!」

マリナがはしゃぎながら飛び出していくと、ヴラドはちょうど、火竜の開いた目を閉じさせてやっているところだった

「優しいんですね……。」

「神を信仰する私が勝手にやってることだ……。」

火竜の目を閉じさせると、ヴラドはゆっくりと立ち上がった

「飛竜のつがいか……もうそんな時期か。

私も今より忙しくなりそうだな。」

「そうだな……。」

「え?どんな時期がくるんですか?」

自分が知らない話題で置いて行かないよう、カナメに尋ねる

「モンスターの繁殖期がやって来るのだよ。」

納得したような顔で頷くと、頬に指を当てて空を仰ぐ

（つてことは、兄ちゃんも繁殖期なのかな？
いいお嫁さんでも見つけるといいのよね。）

「なあ、ヴラド…。」

時間が空いた今だから言うが…。

密林地帯で、外来種と思われるモンスターを発見した。

ギルドにそれを報告したところ、私が再び調査に向かうことになった。

出来れば、協力してくれないか？」

封龍剣を肩に担ぐヴラドは、高台から草原を見下ろしながら聞いていた

それからため息をついて、背後のカナメに振り返る

「残念ながら、私はまた古龍観測局と行動を共にする。
街にはしばらく帰らない。」

「そうか…残念だな。」

ではアナタがいない間、犬や家畜たちの面倒を見よう。」

良き回答を得られず肩を落としたが、すぐに立ち直る

「すまん、助かる。」

報告ではシュレイド地方で、老山龍が動きだしたらしい。私もそれに参加しなければならない。」

「いえ、大丈夫です。」

ただ外来種が自然界にどう影響を与えるか、少し不安でしてな。」

「心配するな…。」

そのモンスターが自然の秩序を乱すようなら、私が神の名の下に裁きを下さす。」

カナメにそう約束すると、マリナに視線を向け、話題を変える

「アイツは優秀なハンターになるだろう。」

私がない間、あの娘を鍛えてやるといい。」

「フツ、元よりそのつもりだ。」

そういえば、アナタが珍しく彼女に目を止めているのは、どういった理由ですか？」

「なに…：友との約束を守っているだけだ。」

火竜の素材は全てやる…：私は一足先に帰る。」

そう言うと、ヴラドは火竜の亡骸を横目に、その場から立ち去っていった

「あ、カナメ様！

ヴラドさん、どこ行ったんですか？」

「彼なら、用事があると言って先に帰ったよ。」

「へえ……。」

ポーツとヴラドが消えていった方を見た後、マリナは満面の笑みを浮かべて振り返る

「なら……カナメ様と二人きりですね。

そっだ、疲れたことですし……キャンプでお休みしませんか？」

「うむ……そっだな。

いろいろあつて、私も疲れたな。」

マリナはニッコリ笑うと、カナメの手を引いてキャンプへと帰っていった…

第二十二話：マリナ街に行く No.5 (後書き)

ヴラド・ウルバヌス 設定

武器

- ・封龍剣【真滅一門】
- ・マスターバング
- ・クロノスパンツァー

防具

アカム一式

発動スキル

- ・見切り+3
- ・切れ味レベル+1

天賦のスキル

- ・心眼
- ・業物
- ・風圧【大】無効
- ・火事場力+2
- ・装填速度+3

e t c

本作最強のハンター

主人公はチートじゃないけど、コイツはチート

大剣を軽々と振り回し、片手剣を投げナイフのように投擲し、ライトボウガンを片手で撃ちまくる剛腕を持つ

昔、炎王龍の火焰を身に浴び、以来ずっと火傷の後遺症に苦しめられている

カナメはヴラドといると、いじられ役になる…

第二十三話：再戦（前書き）

サブタイトルの通り、ヤツと再戦です

主人公の隠れた力が開花？します

第二十三話：再戦

マリナが街に行ってから、二週間が経とうとしていた

獣人たちの村は、相変わらず和やかでのんびりとしていて、いかにも平和を満喫しているような雰囲気だ
ただ忘れてはいけないのが、その平和を維持していられるのは、一匹の竜がいるおかげだということだ…

モモside

マリ姉が帰ってこないと知った旦那さんは、それはもう、何て言うていいか分からニヤいくらい暴れたニヤ

まあ、暴食期の時よりは幾分マシだったニヤ…

でも二、三日暴れたと思ったら、急に大人しくなったニヤ
旦那さんが壊れたのニヤ

今旦那さんは、西の方角を眺めてるのニヤ
砂漠しかない景色を見て、旦那さんは何が楽しいニヤ？
オイラの旦那さんは、痴呆症なのニヤ

「(さて、そろそろ行くか。)」

ん？旦那さんどこか行く気がニヤ？
まあ、オイラの知ったことじゃないのニヤ

旦那さんの言葉を見殺して居眠りしてたら、頭に物凄い衝撃が来たニヤ
痛かったニヤ

「(さて、そろそろ行くか。)」

ニヤ？旦那さんがまた同じこと言ったニヤ
いよいよ認知症になったのニヤ！

ゴツンッ！
ブニヤ！？

「(おいコラ、何か言つことあんだろ。)」

旦那さん何か言つて欲しそうに見てるけど、痛くてそれどころじゃないのニヤー！

でも無視してまたやられるのは嫌だから、聞いてやるニヤー！

「えと…旦那さんはどこ行くニヤ？」

「(昔、あるやつと決闘してな…お前覚えてるか？)」

「んなもん知らないニヤ、そんな下らない話し…。」

決闘なんてバカバカしいニヤ、そんな暑苦しいことは御免だニヤそれに、オイラは覚えが悪いから、昔のことなんて忘れたニヤ

「よし、お前の部屋のマタタビは全部燃やしてやるよ。」

「ニヤァー!!ごめんなさいニヤァー!!」

もう言わないから、許してニヤァー!!」

オイラは慌てて地面に額をこすりつけて謝ったのニヤ
プライド?

そんなもん、旦那さん相手にはゴミクズでしかないニヤ
なんたって、言ったことは本当にやるからニヤ!

「分かったニヤ、話しを真面目に聞いてやるニヤ!」

「(オイ、なんだその態度は?)」

「うっ……それで、旦那さんはどこに何をしに行くニヤ?」

「(うむ…だがこれはヤツと俺との因縁、他人が知ることはない。)
」

うん…とりあえず言わせてなのニヤ

最初から話す気ないなら、オイラに話しをふるなーなノニヤ！！

モモside out

《砂漠》

「（相変わらず…バカみたいな暑さだな、ここは。）」

今俺は、獣人の村から西に広がる砂漠に来ている

ギラギラとした太陽と、どこまでも広がる熱砂の海…数年前来た時と一緒だ

壮大で過酷な大自然は、今も昔も変わらない

だけど、俺はだいぶ変わった…

数年前の俺とは比べ物にならないくらい、俺の戦闘力は上昇したし、過酷な気候に対する適応力も身に付いた

俺の身体は、親父並みに大きくなり、今では水竜や鎧竜に匹敵する巨大にまで成長した

喰えば喰う程に、鬪えば鬪う程に俺は最強に近付き、連戦連勝の毎日…

ただし、無敗ではない

俺は数年前に、砂漠の暴君と謳われる角竜に、完膚無きまでに叩きのめされた

当時は未熟だったとはいえ、負けは負け…

だが、やられっぱなしの俺ではない

今日はヤツに再戦を挑み、汚名を返上する時だ…

「（といっても、どこにいるのかねえ？）」

俺の周りには砂丘しかなく、小型のモンスターも、砂竜の姿も無い

俺はその理由を知っている

ここを縄張りとする角竜が、その絶対的な暴力をもって、あらゆる肉食獣を寄せ付けないからだ
数年前に訪れた時には、群れの首領を失ったゲネポスや、餓死寸前の砂竜がいたが、今はそれもいない

どこまで広がる砂漠しかない、殺風景な景観だ

砂漠をしらみつぶしに探すのもいいが、俺には食料事情があるので、
却下

ヤツと闘うとしたら、村の位置に近いこの場所で闘いたい

そこで俺は一つ、角竜についてのことを思い出す

確か…プライドが高かったはずだ…

モモとは大違いだな

俺は空気を大量に肺に吸い込み、大きく口を開けた

「（オラ出てこい！！）

脳筋片角猪突野郎！！）」

「（誰が脳筋じゃああ！！）」

「（うおっ！？）」

こんなにうまくいくとは思わなかった

俺が罵声を飛ばした瞬間、目の前の岩場付近から、大量の砂塵が巻き上がった

砂塵から姿を現したのは、朱色の甲殻に覆われた角竜、角は一本し

かない

前回、俺が最後の最後でつけてやった、唯一の傷痕だ

角竜の希少種？っぽいやつは、派手な登場とは裏腹に、穏やかに近づいてきた

「(ほう…デカくなったな、小僧！)」

「(お前はどこの聖帝だ！

というか、お前脳筋のくせに話せるのか！？)」

「(脳筋言っんじゃねえ！

話す程度のことなら、我輩には朝飯前だボケ！！)」

どうやらコイツは、脳筋という単語に過敏らしい
あれ？コイツってこんな性格だったっけか？

「(テメエ…だいぶキャラ崩れてんじゃねえか！)」

「(ええいやかましい！！

元はといえば、貴様が全部悪いんだ！！)」

「(責任転嫁か！？)」

「(黙れ、とにかく死ねえ！！)」

コイツの怒りの理由はまったく分からないが、行動が早くて助かる俺はコイツと話すためではなく、闘うために来たのだから

角竜のあの重厚な尻尾が、勢い良く振られた

速度・角度・威力、それら全てが合わさっている

怒りで冷静さに欠けているというのに、こんなにも最高の一撃を繰り出せるとは、賞賛に値する

だが今の俺には、かわせない攻撃ではない

俺は後方に素早く退き、姿勢を低くする

俺の頭上を尻尾が通り過ぎたのを感じ、俺も同じように、尻尾をなぎ払う

角竜は俺の攻撃に驚いていたが、そのまま回転し、俺の尻尾に自分の尻尾を叩き付け、威力を相殺させた

「（どうやら、見かけ倒しの雑魚とは違うようだな。）」

「（ああ、油断してると大怪我するぜ？）」

俺の攻撃をかわした角竜の雰囲気が一気に変わった

先ほどまではどこか余裕感が感じられたが、今の角竜からは、油断を廃した鋭い殺気が放たれている

「(ほざくな！貴様如きにおくれを取る我輩ではないわ！)」

凄まじい怒気に突き動かされ、角竜十八番の突進が迫る

俺が横に回避すると角竜が側面をかすり、勢いのままにそのまま突進、数十メートル先でブレーキをかける

徐々に速度を緩めていったが、角竜は突如反転、勢いが消されないうちに再び突進

虚をつかれた俺は完全に反応が遅れ、角竜の堅い肉体が激突する
角竜は激突する寸前に、頭を下げて俺の体に潜り込ませ、一気に突き上げた

激突の威力と角竜の筋肉が合わさって、重量級の俺を宙に浮き、口々に受け身もとれぬまま地面に墜落した

「(フハハハハ！)」

その程度の力で我輩に勝とうなど、夢のまた夢よ！」

「(まだまだ、テメエの遅い動きが可哀想だから、ワザとくらってやったんだよ！

さあ来い、脳筋野郎！)」

「(だから脳筋言っなー！！)」

角竜は再び高威力の突進をする

バカの一つ覚えと言いたいところだが、コイツのは磨き上げられた、最高の突進だ

だが、真っ直ぐに走る突進の欠点は、改善されていない

俺は角竜の激突を前に、素早く横に跳んで回避する

巨体で重量のある恐暴竜には、本来無理な動作だが、俺は鍛錬と日々の戦闘である程度の身軽さを覚えた

素早い動きのモンスターには劣るが、コイツ相手には十分だった

横に跳んですぐ、俺は跳んだ先の地面を再度踏みしめ、横の角竜に渾身の体当たりをぶつけた

砂漠の砂に足をとられ若干威力が下がったが、側面からの攻撃を受けた角竜は、見事なまでに吹き飛んだ

すかさず追い討ちをかけようと接近したが、素早く立ち上がって角を振り回す角竜の動きに、追撃は失敗する

「（おのれ…やってくれるじゃないか貴様!!」

我輩を地面に伏させたこと、後悔させてやる!!」

プライドが高い角竜は、案の定激怒した
怒りで身体能力が上昇したために、今度は上手くはいかない

俺は突進を連発される前に、至近距離にまで接近する
近距離でも角竜は強力だが、俺は近距離なら力を発揮出来る

立ち上がったばかりで安定していない角竜は、俺の二発目の体当たりで、大きくよろめく
よろめく角竜に、尻尾の一撃を浴びせるが、かろうじて角竜は踏みとどまる

攻撃を受け続けた角竜は、もはや言葉を発さず、血走った目で俺を睨んでいた

その怒りに満ちた目を直視した俺は、一瞬動きが鈍ってしまった

俺に出来た一瞬の隙を見逃さず、角竜は身を捻って角を振り上げる
角の先端が俺の目の上を切り裂き、血が血飛沫となって噴き出す

攻撃でひるんだ隙に、角竜はそのまま角で砂を掻き分け、その巨体は砂中に姿を消した

突如静けさに包まれる砂漠

俺は次に来る攻撃に備え、周囲を警戒した
付近に砂塵が巻き起こることも、砂中を移動する振動もないため、

どこから襲ってくるか分からない

周囲を警戒していると、前方の砂原で動作があった
砂塵が舞うそれは、次の瞬間に弾丸のように飛び出してくるものだ
特攻に備える俺だったが、飛び出して来たのは角竜ではなく、大量
の岩弾

岩石は空高く吹き飛んでいき、俺の近くに降り注ぐ

意表を突かれた俺は混乱し、その俺に対し角竜は砂中から一気に飛び出し、全重量をのせた体当たりをぶつけてきた

俺の巨体は砂の上に転倒し、大きな衝撃音が響く

「（やはり本気の闘争は心躍るものがある！！
さあ立ち上がれ！
立って怒りのままに、我輩に全力を出し切ってみろ！！）」

「（この…戦闘狂が！！
調子に乗るなよ！！）」

肉体に感じる激痛に意識を持っていくと、沸々と俺の感情が煮えたぎっていく

それに伴い、全身の筋肉が隆起していき、一回りデカくなる

「（ハハハハ！もつとだ、もつと怒れ！！
激情を力に変え、我輩に全てを見せ付ける！！）」

「（テメエ、ぶち殺す！）」

怒りはまだ浅く、身体の傷痕は開いていない
だが、怒りによって力は上昇している

角竜は初めて見る俺の異様な変異ぶりを見て、ひるみもせずむしろ、
心底楽しそうに狂喜した

俺と角竜はほぼ同時に走り出し、勢い良く衝突する
爆発音にも近いような、形容し難い凄まじい衝撃音が響き、俺と角
竜は後ずさる

それから、至近距離で互いの乱撃が起こる

角竜が自慢の角を突き、俺はそれを首の動きでかわして噛みつく
俺が大口を開けて噛み付こうとすれば、角竜は角で俺の動きをいな
して、角を突き上げる

激しい乱撃をいなし合いながらも、たまに攻撃が抜けて血肉が飛び
散る

お互いに傷が増えれば増えるほど、鬪いの激しさはましていき、ま
た、怒りの絶頂に近付いていく

そしてソレは、同時に達した

俺は傷の痛みと苛立ちにより、角竜は戦闘の興奮により全力を発揮する

「（素晴らしい、最高の気分だ！！

貴様と闘うに小細工は不要！

真つ向勝負の誇り高き死闘を試してみたわ！！）」

「（御託はいいからかかってきやがれ！！

お望み通り、本気の力でデメエをボコボコにしてやる！！）」

闘いに酔いしれる角竜が狂ったように叫び、俺は身も竦むような唸り声をあげて再び激突する

俺は大口を開けて突進して角竜の肩に喰らい付き、角竜は片角を俺の肩に深々と突き刺した

極度の興奮状態が互いの痛覚を鈍くしているが、傷からは大量の血が流れ出ている

俺が顎の力を強めれば角竜は負けじと、首を動かして角をねじ込んでくる

お互いに膠着状態が続き、どちらの体力が尽きるかの勝負になる

互いのサイズの体力は互角だったが、ジワジワときた激痛に対し、

俺の怒りは限界点を超えようとしていた…

シュー…シュー…

膠着状態で何の動作音もない中、液体が蒸発するような音が鳴り出す

（ム？この音は一体？）

その不思議な音に角竜の興奮が鎮まり、冷静になった角竜はその音の原因を探る

そして、ソレが何なのかをすぐに理解した

自分が相対する恐暴竜の体に流れる血が蒸発し、赤黒く凝固していたのだ

それだけでなく、恐暴竜に突き刺さった角から伝わる熱は、生きている生物が持つものとは思えないくらい熱かった

角竜は驚愕のあまり角を引き抜いてしまう

そして次の瞬間、恐暴竜の筋肉が更に隆起し、凝固していた血液の塊が弾け飛ぶ

隆起した筋肉は多数の古傷を開くが、それだけでなく、古傷が開きすぎておびただしい血が流れ出た

血は高熱の体温により凝固し、すぐさま傷は塞がる

その際、水の中に焼け石を入れたような、大量の蒸気が生まれた

今の恐暴竜は定期的に来る暴食期など比にならない、凶悪な状態と化している

限界を超えた怒りが理性と知性を無くし、目に映る敵を抹殺する”
恐王”となった

恐王と暴君の死闘：

苛烈を極める第二戦が勃発しようとしていた

角を外してしまった角竜だったが、恐暴竜は恐るべき力で肩に噛み付いたまま

角竜は外しにかかるうとしたが、恐暴竜は単純な力のみで角竜を投げ飛ばした

「（又ウウウ！！なんとという力だ！！）」

投げ飛ばされた角竜は、かろうじて受け身をとって威力を軽減させていた

顔を上げて恐暴竜を見れば、堅い何かを噛み砕いて喰っていた
それは角竜の肩の甲殻、及びその下の肉だった

自分の肉体を喰われた角竜は怒り、必殺の突進の構えをとる

肉を飲み込んだ恐暴竜は、次に大きく息を吸い込み出した

その動作からブレスが来ることを予感した角竜は、突進を停止させ、回避行動を取る

恐暴竜は極限まで吸い込んだ後、一瞬動作を止め、次の瞬間前方に向かつて赤黒いガス状のブレスを吐いた

既に回避行動をとっていた角竜は、恐暴竜のブレスを見て戦慄した

恐暴竜の口から放たれたブレスは、前方に扇状に広がる

ブレスは広範囲でいて、放たれたブレス自体の長さも尋常ではないそれで恐暴竜はブレスをなぎ払うのだから、前方180°。全てが射程に入っている

424

ブレスを吐き終えた恐暴竜は、再び息を吸い込む

今度は角竜を正面に見据えているため、回避行動は無意味だ

一か八かで角竜は恐暴竜に向かって、突進を敢行する

この距離なら、ガス状のブレスすらも突き破り、強力な一撃を与えられるはずだった…

もう少しで角が恐暴竜の顔面を刺し貫くところで、角竜は耳をつんざく程の大咆哮が襲う

それと同時に、凄まじい衝撃をくらって角竜は後方に吹き飛ばされた

予想外の攻撃を受けた角竜は、信じられないといった表情を浮かべる

（我輩は何をされたのだ！？）

プレス？体当たり？

否：あれは正しく轟竜の、もしくは…。

いや有り得ん、ヤツ以外にアレをなせる者はおらんはずだ！！）

角竜の頭は混乱していたが、前方の恐暴竜が動き、直ぐさま戦闘体勢を取る

しかし、先ほどの強力な攻撃により、意識もろろつとなっていた

恐暴竜と角竜は睨み合うように視線を交わしていたが、やがて……

恐暴竜が大地に沈んだ

そして…スースーと、気が抜けるような呼吸音が聞こえてきた

かくいう角竜もまた、体力消耗によって砂原に崩れ落ち、恐暴竜と同様に意識を失った……

熱砂の闘争ここに終結

この死闘は引き分けという形で幕を閉じた

しかし、この死闘を見つめていた一部のモンスターたちによって、

悪食の恐王と片角の暴君の闘いは永久に語り継がれることになる…

第二十三話：再戦（後書き）

主人公が途中圧倒的に強くなったのは、とてつもない怒りのため…

激しい憤怒が体内のエネルギーを熱に変え、圧倒的な力を生み出す
高熱の体温は、体外の血液を一瞬で蒸発させる

身体能力、恐暴性、肺活量などが上昇

その力は角竜の巨体をも投げ飛ばし、ブレスを広範囲に放つという
尋常でない戦闘力を発揮する

反動として怒りが過ぎれば深い休眠状態になり、休眠でエネルギー
が回復しなかったら、高確率で暴食状態となって目覚める

427

この小説内では、この状態を第二段階目の怒り状態と設定しますWW

これを考えついたのは、ラージャンみたいになったらいいなあと思
ったからです

この怒り状態になる前動作としては、咆哮をあげて一瞬で古傷が開
き、血が蒸発する姿を想像してもらえれば…

あと主人公の最後の1撃ですが、

轟竜の咆哮+

覇竜のソニックブラストの小型版を併せ持ったものであります

ちなみに予定では、もう一段階の怒り状態を計画しております

第二十四話：義兄弟の誓い（前書き）

主人公と角竜は仲良くなっちゃいます

第二十四話：義兄弟の誓い

スピ〜…スーサー…パチンツ！
フガッ！

何かがはじける音と呼吸が苦しかったことで、俺は突然深い眠りから醒めた

起き上がろうとしたが、ものすごいけだるさに全身に力が入らない心なしか、空腹感もある

無理して動くのも面倒なので、俺はそのままの姿勢でジツとする

だんだんと意識がはつきりし、今までの経緯を思い出していく

自分は確か、あの憎たらしい角竜をぶっ飛ばすために、砂漠に来た闘いの途中に意識が無くなったが、自分がこうして倒れているということは、リベンジならずに負けたのだろうか？

そう思うと、虚しくなって大きなため息がこぼれる

「（オイ……なにため息なんかついてんだバカ者）」

はて…おかしな声が聞こえるぞ？

俺は声のした方向を向いてみると、あら不思議……
自分と同じように、傷だらけで倒れている角竜がいた
俺が驚いたような表情をしていると、あからさまに不機嫌になった

「（ジロジロ見てんじゃねえぞコラ……。）」

「（なんだこの野郎。）

テメエがぶっ倒れてるってことは、俺がボコボコにしてやったって
ことか？」

「（寝言は寝て言いやがれバカ野郎。）

俺が倒れてんのは、足が滑ったからだボケ。」

目が合った瞬間に、お互い罵声を浴びせ始める
しかしどちらも倒れていて、その状態で罵り合う姿はおかしな光景
だった

「（いいか、貴様は我輩に勝ったわけではないぞ。）

貴様の方が最初に倒れたのだから、勝者は我輩だ。」

「（ケツ……小せえ野郎だなテメエは。）

そんな下らねえこと言ってるから、俺にやられちまうんだよ。」

「(何だとコラ！もう一度言ってみや ガッ！?)」

「(上等だ！何度でも言ってみや アガッ！?)」

お互いにいきり立って無理やり立ち上がったが、体に残る激痛が響いてまた崩れ落ちた

しばらく悶絶した後、また睨み合いが再開される

「(忌々しい…この痛みが無かったら、お前を八つ裂きにしてやるのにな。)」

「(貴様に我輩を超えるなど、一生涯かけても不可能だ。)

そうやって言い訳してるのが、いい証拠だ。)」

「(負け犬が偉そうに講釈垂れてんじゃねえよ、この脳筋野郎！。)

「(脳筋って言うんじゃねえ！)」

やはり脳筋という言葉には、過剰に反応してきた

そんなあからさまに否定したのでは、自分でもそれを認識しているのが分かる

脳筋という言葉を始めに、またまた罵り合いが再開された

やがて罵声のネタが尽きたのと、闘いの疲労とでお互いの口数は減

つていき、最後はただの睨み合いになる

その睨み合いも、やがては飽きて止めてしまった

「（はあ…貴様とのやり取りは疲れる。」

「（全くだ……だけど全力でぶつかり合った後に、こうやっているのもなんか心地良い気がするな。」

今の俺には鬪いに勝てなかったことへの悔しさなどなく、むしろ全力を出せた清々しい気分でいっぱいだった

「（フツ…同感だ。」

我輩がここまで本気になったのは、貴様が初めてかもしれない。」

暴言・誹謗を飛ばしながらも、俺たちはお互いの健闘を讃え合っていた

それを素直に口にするには無いが、言わなくても通じるものが俺たちにはあった…

「（全く…貴様に噛まれた肩が未だに痛むではないか。」

「（それを言うなら、お前が角をねじ込んできたせいで、肩の感覚が全くねえよ。」

俺たちは互いの傷を見比べ、苦笑した
怒りと興奮で我を忘れていた俺たちは、まさかこんな大きな傷を互
いにつけたのかと驚いた
それから俺たちは、同じタイミングで大笑いした
もはや俺たちに私怨や確執などなく、互いに傷を付け合い、力を認
め合った好敵手となった

「（お前となんか闘ってたら、命がいくつあっても足りないな。）」

「（貴様とはよく考えが合うのう。）

……なあ、貴様さえよければ我輩と兄弟分にならないか？」

「（は…辛気くさい面して、何言ってるやがる。）」

「（我輩は真面目に言ってるのだぞ？）」

俺は角竜の真剣な面もちと声色に、浮かべていた笑みを引っ込めた

「（いいぜ…ただし、上下のない五分の兄弟分だぞ？）」

「（最初からそのつもりだ。）」

俺たちは不敵な笑みを浮かべると、痛む体を無理やり起こす
まだ癒えていない傷から出血するが、真剣な場面に俺たちは激痛を

無視する

「（我輩たちには互いに付け合った傷痕がある。以後、これが我輩らの兄弟としての証となる。

貴様が危機に陥ったり、助けを必要とした場合、地の果てであっても駆けつけよう。

絶対にだ…。」

「（へッ、地獄の果てでも…だろう？

地獄から来た兄弟、ここに誕生つてな。」

「（地獄から来た兄弟か…どこかで聞いたことがある気がするが、良い呼び名だ。

っ!?!?）」

角竜は突然体勢を崩して砂の上に倒れる

傷だらけの体で無理をしたせいで、体が動かなくなったのだろう

もっとも、俺の傷はあらかた癒えているおかげで無事だが

「（勘違いするなよ!!」

砂に足を取られて滑っただけであって、耐えられずに転倒したわけではないぞ…!」

「（はいはい分かってるよ。

俺は腹減ったから補食しに行くが、しっかり休んで体癒やしな…”兄弟”。」

俺は不敵な笑みを残し、岩場の方角へと走っていった

後には傷だらけで砂上に伏せる朱色の角竜だけ

「(ケツ…化け物めが。
貴様の攻撃痛すぎるんだよ。)」

角竜は一言ボヤくと、目を閉じて再び深い眠りについたのだった…

翌朝……

「(ふう〜腹一杯だぜこのやろっ…)。
にしても、最近喰う量が多いな……そろそろハンターか何かに狙われそうだな。

ム？あの野郎、まだ寝てるのかよ。」「

朝日が昇ると共に、角竜のもとに戻ると、なんとも気持ち良さそうに寝ていた

近付いて叩き起こそうとしたが、悪戯する前に起きてしまった

警戒心の強いヤツだ…

角竜は寝ぼけ眼で起き上がったが、欠伸一つかいたら眠そうな様子が消えた

その後、角竜の朝食とやらに付き合わされる

角竜は飛竜の中では珍しく、草食のモンスターだ

砂漠での食料となると限られるが、角竜は乾燥に強いサボテンなどを食べる

鋭い針をモノともせず角竜に俺はヒヤヒヤするが、本当に何ともないみたいだ

それにしても、殺風景な砂漠だ…

俺が向かった岩場に草食獣はいたが、やはり肉食獣の姿は無い前に訪れたことのあるゲネポスの巣にも足を運んだが、生物の痕跡は無く、地面には無数の白骨化した骸があった

ある意味、角竜は俺なんかよりも生態系を破壊しまくっている肉食獣がいなければ草食獣は安泰だが、エサとなる植物は涸渇してしまう

この砂漠では食物連鎖の頂点である、肉食獣が存在していなかった

俺が深刻に考えていると、食事を終えた角竜が振り返ってきた

俺は考えるのを止めたが、角竜が口にしたのは俺が危惧していたこ

とに関わる話しだった…

「(さて…貴様に一つ頼みたいことがある。

一人でも出来るが、貴様も連れていきたいのでな。)

「(まさか人間の村を襲うなんて言うなよ?)」

「(ワハハハハ！！心配するな！

人間の村など、とうの昔に全て壊滅させてやったわ！)」

冗談で言った俺に対し、角竜はとんでもないことを笑いながら告白する

「(お、おい…お前本当にそんなことを!?)」

「(我輩の領を何度も侵すから、ハンターごと村を滅ぼしてやった。下郎共が泣き叫んで逃げ惑う姿は、正に圧巻であったな！

おっと、話しが逸れたな。

我輩が遠出していた時、身の程をわきまえぬ下郎が巢くいおった。

我輩と兄弟とで愚かな愚物を抹殺しようぞ。)

人間を抹殺したことをサラッと流す角竜

少しの罪悪感も後悔もしない口振りに、俺は言いようもない不安に

駆られる

とんでもないヤツと兄弟分になったものだ…

「（モンスターの一匹、二匹くらいいいじゃないか。

それに…自然界では自分一人で生きてるわけじゃないんだし、上手く共生しないと。」

「（兄弟…本気で言ってるのか？）」

角竜は意外といった感じで見つめ返してくる

当然だ、転生してきた俺には未だに人間としての知性があるのだから

「（人間らしい考え方だな…確かに共生していくことも大事かもしれん。

だが…そんなものはやりたいヤツが勝手にやればよいのだ。）」

兄弟から返ってきたのは、予想通り否定の応え

「（人間の営みはどうだか知らんが、は鬭争に勝ち続けた猛者こそが絶対…それが我輩の持論だ。

我輩は力をもって外敵を駆除し、砂漠の支配を絶対的なものとしたのだ。

自然の営みなど知ったことか…我輩がいる限り害獣共にこの地は踏ませぬ！！）」

「(さすが、暴君と謳われるだけはあるが…兄弟は草食獣は追い払わないのか?)」

「(彼らは特別だ!!)」

彼らは孤児だった我輩を育ててくれたのだからな!

昨夜は特別許したが、彼らを標的とするなら兄弟であつても承知せぬぞ!」

急に声を荒げてきた角竜を、俺は困惑しながらなだめる

なるほど、そういう過去があつたのか…

自分を育ててくれた草食獣たちに恩返しをすべく、天敵である肉食獣を退けてきたとは…

それが本当だとするなら、まだこいつを見限るのも早いかもしれない…

「(それと群れる雑魚共を駆逐するのは気分が良いぞ!

逃げ惑う輩を追い詰めるあの感覚は素晴らしい!)」

訂正する…

やはりコイツはサディスト・バトルジャンキー・タイラントだ…

結局、あの後俺は砂漠に棲み着いた外敵とやらの討伐を強制された腹が減るが、兄弟が草食獣を喰うことを許さないの、俺もソイツを喰うという名目で向かうことにした

どうでもいいが、コイツが草食獣を食べることを許可しないなら、砂漠に進出するのは不可能になる

俺たちは標的がいるという場所まで、雑談しながら向かっている
その中で俺の暮らす拠点の話をしたら、えらく興味を持ってきた
どうやら、砂漠にある自分の縄張り以外では暴君っぷりは発揮しないようだ

こうやって話している分にはイイ奴なのだが、敵を見つけるとすぐに突進するから困ったものだ…

たった今、標的がいる場所に近付いたところで角竜が突っ走りだした

あとに続いていくと角竜は岩場に入っていった

岩場の奥にいたのは、轟竜だった

傍らには草食獣の子どもがいて、轟竜に襲われそうになってるとこ

ろだった

轟竜は突然現れた俺たちに注意が向き、そのスキに子どもは逃げていった

隣を見れば、草食獣を手に掛けられたからか、凄い殺気を放つ角竜がいる

「（下郎めが…一瞬で惨たらしく殺してやる!）」

『ガアアアア!』

突進した角竜に対して轟竜は大咆哮を放つが、角竜は無視して轟竜を吹き飛ばした

モンスターが空高く吹き飛ばぶシュールな光景に、俺は愉快的気分になった

「（まだまだあ!）」

我輩の制裁はまだ終わっておらぬわあ!」

怒れる角竜に吹き飛ばされ、踏み潰され、叩き潰される轟竜は、どんどんボロ雑巾のようになっていく

そんな微笑ましい光景の場所に、逃げたはずの子どもが戻ってきてしまった

轟竜はスキをついて抜け出し、子どもに襲いかかるうとしたが、そこは俺が阻止しておいた

「（でかしたぞ兄弟！！）

この卑怯者めが、死に絶えろ！！」

「（そくだそくだ！！）

幼児虐待未遂で、お前は集団リンチの刑だ！！）」

『ギヤアアアアアア！！』

屈強な足を持つ二体に蹴られ、さすがの轟竜もあつという間に虫の息になった

轟竜が動かなくなっても暴行は続き、何度も叩きのめされて、最後は俺の腹にしっかりとおさめられた

後には、角竜と恐暴竜の大きな大きな雄叫びが砂漠に響き渡ったという…

第二十四話：義兄弟の誓い（後書き）

ディアブロス：希少種？

通称：片角の暴君

砂漠に広範囲な縄張りを持つ、朱色の甲殻を持つ角竜の突然変異種

主人公にも匹敵する実力を持ち、主人公並みにしぶとい
脳筋と言われると激しく怒る

その通りで、頭はかなり残念なヤツ

強者至上主義なために、弱い存在には興味を示さず、どうでもいい
と思っっている

ただし、草食獣は命を懸けて守護するダークヒーロー

この角竜のモチーフは、もちろん片角のマオウ

戦闘時の性格は、聖帝サウーミみたいになります（笑）

さて…

この後の展開で少し悩んでいます

あと一体恐暴竜を登場させるのですが…

ソイツを主人公の実の妹としてか、ちゃんとした嫁として出すか迷っています…

どっちの方がよろしいでしょうか？

感想、お待ちしております

第二十五話・リア充してんじゃねえぞテメエ！！（前書き）

タイトル通りです…

第二十五話：リア充してんじゃねえぞテメエ！！

モグモグ…ムシヤムシヤ

「（どうでもいいが兄弟…：貴様はいつまで喰っておるのだ？）」

「（喰い終わるまで…ハムハム。）」

「（それはそうだろうが…まあいいか。）」

不届き者の轟竜を二人でボコボコにしたあげく、それをつまそうに喰っている俺

人間社会だったら、猟奇的殺人事件で捜査されるくらい、轟竜の亡骸は酷かった

ちなみに今、轟竜をくわえながら砂漠を移動している
いつもならサツサと喰うが、兄弟が草食獣の捕食を認めないので、
こうやって少しずつ喰っているのだ

どうでもいいけど、轟竜の肉美味しいな…

俺たちがどこに向かっているかというところ、角竜の寝床だ
理由は、義兄弟となった俺を信頼して寝床とある者を見せたいとの
こと

乱暴者だが、ここまで俺を信頼してくれるのなら、俺も家に招待し
なければならぬ…

移動している最中、ふと砂漠に似つかわしくない光景が見え、俺は
それに視線を向けた

「（兄弟…あれはもしかして？）」

「（ああ…我輩が滅ぼした村だな。
勘違いするな…人間が先に手を出した。
やられたらやり返す、人間の自業自得だ。）」

コイツなら、肩ぶつかっただけでも因縁つけてきそうだ
それにしても、この廃村は土台がある以外、村だった面影はない

角竜が襲撃してきたことを想像すると、俺は恐ろしさに身震いした

俺たちが砂漠を移動して数時間経つ
いいかげん移動に飽きてきたところで、角竜は岩場の方に入っ
った

入っていった先には、湧き水が溜まって出来た小さな湖があり、そ
こにはたくさんの草食獣がいた
草食獣は俺たちを見ても逃げなく、のんびりと散歩などをしている

角竜に守られているおかげで、ずいぶんと警戒心が無くなったらしい
やろつと思えば、この場の全ての草食獣を仕留められるくらいだ

「（これだけいると、肉食獣も頻繁にやって来るだろう？）」

「（ああ…だが不届き者共は我輩によって砂漠の塵と化す。）」

「（納得だ……そうだ。）

肉食獣を殺すだけなら、死体はとつといてくれよ。

飛竜はなかなか美味いからさ。」

「（構わんが…あまり長くは置いておけぬぞ？）」

これで砂漠における食料調達は、いささか楽になる

他人が倒した生物を喰うのは少し悪いかもしいが、ライオンや
ハイエナも普通にやっていると聞く

ただしハイエナのように腐肉食ではないので、腐った肉は遠慮する
雑談をしていると、角竜は岩場にあるほら穴の前で立ち止まった
穴は俺でも入れる大きさで、中はよく見えないがけっこう広く感じ
られる

ほら穴の奥には何かがいるらしく、足音が聞こえてくる
足音の大きさからして、草食獣などではない

俺はくわえていた轟竜を地面に置き、角竜に尋ねてみる

「（奥には何がいるんだ？

この足音からして、大型の生き物だろうか？）

「（ふむ…家内だ。）

「（いやそうじゃなくて……って、なんだと？）

俺が情けない声を出すと、角竜は意味が分からなく首を傾げる

「（だから我輩の家内だ。

別の言い方なら、妻もしくは嫁だ。）

「（なにぃー！?!?）」

俺が大声を出して叫ぶと、ほら穴の奥からガタツと音がした
角竜は俺に静かにするよう戒める

「（大声を出すな…家内は体調が優れないのだ。）」

「（うっ…すまん。）」

俺が素直に謝ると、角竜はほら穴へと俺を招いた

ほら穴の奥にいたのは、もう一匹の角竜
体の大きさは兄弟を二回り小さくした感じで、体の色は黒…亜種だ

「（お帰りなさい、あなた。）

さっきの大声は…あの…そちらの方は？」

雌の角竜は俺を見て、少し怯えたような声で尋ねる
恐暴竜を初めて見れば誰だって怯えるが、怖がられるとへこむ…

「（我輩の義兄弟だ。）

心配するな…強面だが根はいいヤツだ。）」

角竜がそう説明すると、雌の角竜は警戒心を解いたよほどコイツを信頼しているのだろう…

「（あの…はじめまして、私はこの方の妻です。

主人の御兄弟に対し、失礼なことを…。」

「（い、いえいえ…お気になさらずに。」

ぺこりと頭を下げてきた角竜の嫁さんに、俺は慌てふためくとりあえず頭を上げさせると、嫁さんは首を傾げて見てきた

なにこの子…メツチャ可愛らしいやん！

兄弟には勿体ないくらいよく出来た子じゃないか…！

と思ったが、他人の嫁に手を出すゲスじゃないし、まず兄弟がおっかなくてもやれるか…！

「（無理はするな、しっかり休んでおけ…。」

そういうことで、兄弟とは仲良くやってくれ。」

「（はい…主人に仕える愚妻でございりますが、どうぞよろしくお願ひします。」

「（えつと…こちらこそ、よろしくです。）」

俺が挨拶を終えると、嫁さんと視線が合う

困惑している俺に対し、嫁さんはニコツと微笑む

めっちゃ良い子じゃねえか！

兄弟の嫁さんじゃなかったら、確実にお持ち帰りしてたわ！

俺は意味不明な言葉を叫びながらほら穴を飛び出し、目の前の湖に飛び込んでいった…

「（暖まったか？）」

「（だいぶな…もう一つくれ。）」

飛び込んでいった湖の水は、かなり冷たかった

実際はさほど冷たくないのだろうが、砂漠の気候になれた俺にはかなり冷たく感じた

今は兄弟に看病され、体を温めるためトウガラシをかじっている

「（それにしても、良く出来た嫁さんじゃないか。お前には勿体ないくらいだ。）」「

「（自慢の家内だ。）

兄弟：手を出しやがったら殺すぞ？」「

「（おいおい、他人の嫁に手を出す鬼畜じゃないぞ俺は。）」「

「（どうだかな。）」「

兄弟は俺をどんなヤツだと思ってるのだろうか？ど突いてやろうかと思っただが、トウガラシを取り上げられたので謝罪した

「（黒い角竜か：亜種の娘にしては、やたら大人しかったな。）」「

「（知らないのか？

角竜のおなごは繁殖期が近付くと、ああいうふうに変色するのだ。）

「

「（ソイツは初耳だな…。」

カプコンめ…追加要素でも入れたのか？」

「(かぷこん？なんだそれは？

強いのか?)」

「(いやいやこっちの話し!)」

危ない危ない…あやうくメタ発言？的なことを言いそうだったぞあれ？なんかこんがらがってきたぞ？

兄弟が何コイツ？みたいな目で見てきたので、残りの質問を聞いた

「(ふむ…確かに変色した角竜は凶暴性が増すが…。

家内は元々体が弱くてな、普段も変色後もさほど変化はないのだ。)

話しによると嫁さんと出会った時、嫁さんはハンターに追われていたそうだ

体が弱い嫁さんはいい獲物だったらしく、たまたま通りかかった兄弟がいなかったら、確実に死んでいたらしい

どうやら肉食獣を追い払ったのも、人間の村を破壊したのも、実は嫁さんのためでもあったらし

それからなんやかんやあって、今の仲睦まじい夫婦となったようだ

「（とりあえず言わせる…このリア充野郎。）」

「（りあじゅう？貴様はさっきから何を分けのわからんことを言っておるのだ？）」

「（うるさいうるさい！」

なんだその…よく出来た出会いはコノヤロウ！チクシヨウ…俺だつてなあ、俺にだってマリナがいるんだバカ野郎！
お前なんて死んでしまえ！」

泣きじゃくって騒ぎ出す俺を、兄弟はポカーンと見つめる
やがて何かひらめいたらしく、俺の腹下に角を突っ込み…

冷たく寒い湖へと放り込んだ…

「（落ち着いたか？）」

「（おかげ様で…。」

トウガラシくれ。」

第二十五話：リア充してんじゃねえぞテムエ！！（後書き）

アンケート調査にご協力ありがとうございます！

新たに登場する恐暴竜を、

嫁にするか…

妹にするか…

今のところ、ほぼ互角であります

新しい恐暴竜が出るのはもう少し先ですが、読者様の希望をお聞かせ下さい！

とある事のお話し…

兄弟分の仲睦まじい夫婦愛を見せられた俺は、それこそ廃人のようになつて住処へと帰宅…

俺に構ってもらいたい奇面族を押しつけ、俺はさつさと横になつて寝る

角竜との激戦で疲労していた俺は、目を閉じるなり意識が薄れていった…

…き…かい…

どこか聞き覚えのある声がする

ずいぶん懐かしい声だ…

起こさないでくれ、疲れてるんだ…

「サツサと起きんかいボケ！」

「（ギャアツ！？）」

鼻先にとつともない衝撃をくらい、俺は一気に眠りの底から引きず

り出される

敵襲かと思つて周囲を見回してみると、おかしい事象に気付く

自分はさっきまで岩壁に囲まれた洞窟で寝ていたはず…

なのに、今はどこまでも続く白い空間に俺が一人ポツンという

「やっと起きたかい。

つたく、オドレみたいな寝相悪いヤツは初めてみたわ。」

「（あ！テメエは！？）」

なんとそこにいたのは、不手際で俺を事故死させ恐暴竜に転生させた偽神さまだった

「（テメエ今更ノコノコと何しに来やがった！

つてか、モンスターによくも転生させやがったな！

おかげでキリンちゃんとの野望が挫折寸前なんだぞ！）」

「（ええい、やかましい！

オドレみたいなボンクラには元から無理や！

あんま文句ぬかすと寿命縮ますぞボケ！」

今までの鬱憤を吐き出すかのように、俺は神さまに文句を吐いたが、神さまに怒鳴り返され縮こまる

「ほいで、どうや？」

第二の人生つちゅうもんは？

見た限り、青春を謳歌しとるみたいやないか。」

「いやそれは『なんやと？ウチがやった命じゃ満足やないんか？』
はい、とても満足しとります…。」

ハッ、弱いな俺…

「（それで、神さまが今更俺になんの用ですか？）」

「久しぶりやってのに、たいそうな挨拶やな。

まあええわ…。最近時間出来たからワレを見とったんやけど、ワレ
随分暇なことしとるやないか。

いつからワレは猫の警備員になったんや？

強面のワレが猫守ってんのおもろ過ぎて、爆笑しながら眺めてたわ。

」

「（なんだっていいだろ。

あれで結構気に入ってんだからよ…。）」

俺が少し怒り気味に答えると、神さまは笑いながら俺の頭をペシペ

シ叩く

「そう怒んなや！

角竜シバいた時の自分、ウチから見てもかっこよかったで！」

「（へッ…歯が浮くようなことを言いやがって。

そついや、俺なかなか強くならんか？）」

俺はここ最近感じていた素朴な疑問を投げかけてみた
転生前に神さまから力をいただいたわけだが、イマイチ強くなつて
る気がしないのだ…

「ああそれな…うん。

チツとミスったみたいなんやわ。」

神さまの脳天気な返答に、俺は転げそうになる

「いやな、全く力が無いわけやないんやで？

ふざけてたらおかしゅうなって、所謂大器晩成型になつたんや。
強くなるには時間かかるんやけど、限界もこれまたミスってな…
つまり成長限界が無いんやわ。」

「（おいおいそれって…。）」

「うん…長く生きれば生きる程、ワレは無敵と化すわな。」

頭を搔いて照れる神さま

俺は呆然として空を見上げる…この空間に空など無いが…

「って、ウチが話しに来たんはんな下らんこととちやうわ。」

コイツ…俺にかけたミスを下らんことで流しやがった

とんだ神さまだな…

「ちょっと向こうの世界にある”樹海”を探索して欲しいんや。まあ調査やな…エリア見て回って、何か異常と思うもん探してくれへんか？」

俺がワケが分からないといった表情を浮かべると、神さまはムツとする

「言っとくがな…ウチも暇持て余してるわけやないんやで？」

ウチはワレがいる世界を管轄しとるんやから、色々微調整が大変なんや。

ま…覗くだけで滅多にいじくらんけどな。」

つまり、暇なわけだ…

「(で？そのお忙しい神さまが、どうして俺を使って調査するんだ？)」

「自分のいる世界を管轄するウチやけど、実際に地に足つけては見れへんのや。」

そいでな、自分に樹海言っって何かないか見てほしいわけや。」

「別にいいけど…そこに何が『あら時間切れや、ここで別れや』えっそうなの？」

見れば、俺の体がどんどん薄れていく

消えていく体に焦ったが、夢から醒めるだけという神さまの言葉に安心する

神さまは笑顔で手を振る

最後に思い出したように叫んでいたが、薄れていく意識の俺には何も聞こえなかった

「一つ言い忘れてたわ！

自分のいる世界にはウチの力でも手に負えない奴おるから気い付け
たってな！

特に…黒い古龍に手を出したらアカンで！！

つて…いなくなってもうた。

ま…たぶん大丈夫やろな。

さ…ゲーセンでも行こうつと。」

とある事のお話し…（後書き）

胃が痛い……

嫁か妹か…一体どちらに？

小説関係ありませんが、
三連休中に親戚の子どもがやって来ました

6つ上と4つ上のおっかない兄二人いるんですが、下に弟や妹がいない私にはその子が可愛くてたまりません

そして三連休中に起きた出来事です

家で親戚のお姉ちゃんとトークしてたら、突然後ろから抱きつかれたんです

可愛い妹分だなあとと思ってたんですが、どうも風呂上がりみたいで
す…

それも生まれた時の姿です…

お姉ちゃんはニヤニヤしてたんですが、妹分で年下な子に抱きつかれたら……どうしたらいいのでしょうか？

別に女の子に抱きつかれても何も思いませんが、何かしらの反応を
すべきでした…

余談ですが、妹分の髪がとても艶々してるんですよ……
うらやましいです

第二十六話：ニューフロンティア その弐（前書き）

新キャラ登場です

なかなか立派なモンスターですけど、弱いです

第二十六話：ニューフロンティア その式

モモ side

ニヤ…帰ってきたらオイラの部屋の前で旦那さんが寝てたのニヤ
どうでもいいけど、邪魔なのニヤ

こついう時は、オイラの特性対巨龍爆弾を顔面にセットニヤ
さあ、導火線に火をつけるニヤ！！

「（おいコラ…何してやがんだテメエ？）」

今日の運勢は最悪だニヤ

モモ side out

全く油断もスキもない相棒だ

曰く、部屋の前にいて邪魔だから起こしてあげようとしたニヤ…だ

俺は相棒のそんな弁論を無視し、捕まえてコテンパに懲らしめてや
った

後でモモの特性対巨龍爆弾を安全な位置で試してみたが、相棒は俺

を殺す気だったのだろうか？

そんなわけで、モモには責任をとって俺の野暮用に付き合ってもらおう
俺たちは、夢の御告げを受けて密林の奥にある”樹海”へと向かっていった…

「ところで旦那さん、その樹海とやらには何をしに行くニヤ？」

モモはいつも通り、俺の背で昼寝をしている

「さあ…行けば何かしらあんだろ。」

先ほどから襲い来るランゴスタをかわしながら、俺はぶつきらぼつに答える

そんな投げやりな返答にも、モモはなれているので頷いて昼寝を再開する

生い茂る草木を掻き分けていくと、突如強い風を肌を感じる

高台から見据える先には、樹海の象徴である巨大な枯木がそびえ立っていた

「ニヤ、なかなか良い場所なのニヤ。

密林みたいだけど、こっちの方がジメジメしてなくて良いニヤ。」

モモはクンクンと鼻を動かしながら、周囲を見渡している

密林の湿気はモモにとって不快だったが、この樹海はどうやら気に入ったみたいだ

「旦那さん、向こうに橙色のやかましそうなヤツがいるニヤ！」

「(どれどれ、美味そうか?)」

モンスター発見!! 捕食…もう俺には当たり前のことになってきた

本日俺とモモが見つけたのは、橙色の見事な羽根を持った鳥竜種…
眠鳥だ

小型の鳥竜種は肉が少なくてお世辞にも美味しいとはいえなかったが、
怪鳥や彩鳥はとても美味だった

ならば、この眠鳥もなかなか美味いはず…と考えつつも、結論付け
を待たずに突っ走っていた

「(この阿保鳥があ!!)」

俺の腹におさめてやる!!)」

「ギャッ!?!」

名乗りを上げるのが早すぎた…

俺の存在に気付いた眠鳥はかなり驚いていたが、距離があるうちに飛び去っていく

眠鳥がいた場所に付く頃には、すでに空の彼方に消えていた…

「旦那さん…狩り下手ニヤ。」

「（調子に乗りすぎた…。）」

モモに白々しく見られ、俺は空腹と情けなさに肩を落とす

…と、その時俺たちの前の草むらから二体の獣が現れる

一体はピンと立った耳と長い角を持ち、もう片方は垂れた耳を持つ可愛いケルビだ

ケルビのつがいと俺はほぼ同時に目が合う

「「……プルプル」」

「……グウウウ……」

蛇に睨まれた蛙のように動けず、目を丸くして体を震わすケルビの
つがい

空腹の音を隠そうともせず、涎を垂らして目を輝かせる俺…

よほどのバカでもない限り、どっちが襲われようとしているか分かるはずだ…

口を徐々に開いていき哀れなケルビを仕留めようとした時、ケルビの背後に二つの赤い残光と共に、黒い大きな影が落下してきた

俺が突然のことに混乱すると、そのスキにケルビたちは逃げ去る

俺と現れた影は逃げた獲物を目で追ったが、目の前にいる存在を思い出して視線を元に戻す

暗がりの奥には赤く光る眼光があり、その姿をさらけ出してくる
全身は哺乳類のような黒い毛皮に覆われ、獰猛そうな目つきをしている

俺は獲物を逃がしてしまった怒りよりも、マトモに戦える相手の出現に歓喜した

この前の角竜との死闘以降、俺は好戦的になつてる気がする…

「（ナルガか…草食獣のつがいを襲おうだなんて、なんて意地汚いやツだ。」

夫婦の仲を引き裂くのを、何とも思わねえヤツは俺が喰ってやる！

「

「ニヤ！？旦那さんさっき喰おうとしてたニヤ！

それにしたり顔だけど、言ってること滅茶苦茶なのニヤ！」

「（細かいこと気にすんな！

というわけで…死ねや！）」

挨拶もそこそこに、凶悪な牙が並ぶ口を大きく開き不屈き者に食らいつく

しかし迅竜はそれを横に素早く跳んでかわす

その際俺の体がブレード状の翼に斬られる

もつとも、歴戦の強者である俺には深手でなく、傷もかすり傷程度深いため息をこぼし、俺はゆっくりと迅竜に振り返る

牙を剥き出しにして唾液を垂らす俺の姿が悪魔のようにでも見えただろう…

迅竜は恐怖に怯えながらも、毛を逆立てて精一杯威嚇している

野生のモンスター同士…怯えたりかなわなれないと思ったら確実に負ける野生にはそういった勘のようなものがあり、俺にもある…
その点において、この迅竜は失格だ…

これならまだ、先ほど実力の差を瞬時に察知して逃げた眠鳥の方が賢い

興醒めした俺は息を吸い込み、大きな咆哮をあげる
案の定、迅竜は大きな声に驚いてたじろぐ

できたスキを見逃さず、俺は前動作無しに接近し、迅竜に食らいつく
ただ噛み付いた場所が翼だったので、斬られる前に投げ飛ばす
それでも片翼にはしつかりダメージが残り、迅竜は投げつけられた
先で悶えている

俺は迅竜に近付いていき、迅竜の両翼を足で踏みつける
飛竜自慢の翼を封じ無防備な背面に強力なプレスを浴びせる……俺
の常套手段であり、最高の一撃

この状態になればいくら力強い飛竜でも逃れられない
この迅竜も例外でなく、必死に逃げようとするが、俺の屈強な足と
鉤爪によって徒勞となる

獲物はなぶらず、至高の一撃をもって抹殺……
俺は息を吸い込み、最強のプレスを吐く動作に移ろうとしていた……

それにしても、コイツはよく頑張るヤツだ……
結局は無意味なのに……

そう思った時だった…

「（ごう、ごめんなさい！

二度としないから、命だけは助けて！！）」

「ニヤっ！？喋ったニヤ！」

なんと、迅竜が甲高い声で命乞いをしてきた

よく暴れるとは思っていたが、命乞いをまでするとは予想外だった…

「（もうしないから、許して下さい！

まだ死にたくありません！）」

「（命乞いか？なら手短かにしてくれよ。

腹が減ってんだから。）」

強者と認識した迅竜に命乞いという情けない姿を晒され、俺はかなり失望していた

もはや迅竜をただの餌としか見ていない俺は、苛立ちから押さえる足の力を強める

迅竜の苦悶の表情と叫びを聞いていて、少し違和感を覚える俺…

殺すのはもう少し先にし、俺は迅竜の両翼を踏むのを止める
ただ逃げられても面倒なので、背中を片足で踏みつけている

激痛から解放された迅竜だったが、未だに残る痛みと恐怖に嗚咽する

「（ケツ…モンスターが泣くなんて、信じられないな。

お前本当に飛竜か？）」

俺の情け容赦ない言葉に、迅竜はすすり泣く声をさらに大きくする

「（だ、だつて…怖がったんだもん…。

それに…異性にあんなことされたの……初めてだし…。」

「（勘違いされるようなこと言ってんじゃねえ……つて、なに？）」

俺は浮かんだ疑問に戸惑い、いつの間にか地面に降りたモモと目を
合わせる

モモも俺と同じ疑問を思ったのか、頷いて迅竜の下腹部に潜ってい
った…

その際、迅竜がピクツと反応したが無視

「だ、旦那さん大変ニヤ！

この黒猫みたいなヤツ、女の子なのニヤ…！」

モモが体を震わせながら報告してきた
迅竜は羞恥心に前脚で顔を隠している

「（ああそう…ま、食い物に雄雌関係ねえな。）」

「（ま、待って下さい！」

アナタは戦闘する意の無い乙女を無情に喰うんですか！？」

「（知らねえよ。」

今まで喰ってきたモスやランポスにも雌がいたかもしれねえんだ。
今更雌だからって喰うの避けちゃ、今まで喰ってきたヤツらに失礼
つてもんだろが。）」

弁明を退けられた迅竜は、他にも命乞いの話しをするが、どれも筋
のない迅竜にだけ利のある話した

俺はそこまでお人好しじゃないし、腹が減ってイラついている

「（じゃ、じゃあ…私以外に食べるものがあつたら助けてくれます
か？）」

「（まだ自分の立場が分かってないみたいだな…だが、少しの情
けはかけてやる。」

モモ……あれを出せ。）」

俺の目配せを受けたモモは、了解したと敬礼する
モモは持ち前の四次元ポーチを漁り、ポーチに入ってるとは思えない首輪つきの鎖を引っ張り出した

それを迅竜のもとまで持っていき、迅竜の首にはめた

モモがはめたところで背中を踏むのを止め、鎖を俺の片足につけて
もらう

「（あの…これは何ですか？）」

迅竜は困ったような表情をし、首輪を前脚で撫でている

477

「（お前が逃げ出すとも限らん。
逃げないように拘束するものだ…言つとくが、俺の脚力はお前ご
ときではかなわんぞ。

首輪はキツいか？

キツすぎて死んだらたまったもんじゃない。」

「（いえ…ちようどいいです。

それに……なんか…変な気分になります。」

首輪をつけられた瞬間、迅竜は妙にしおらしくなってしまう
気にしたら負けなので、俺とモモは無視する

「ほら、お前の命乞いを聞いてやったんだ。サツサと案内しろ、黒猫。」

「は、はい……あの、黒猫って何ですか？」

「ああ？モモがさっきお前をそう呼んだからだ。不満か？」

「（いえ……ちょっと驚いただけです。）」

黒猫こと迅竜は俯いてしまったので、俺は適当に相づちを打って移動する

黒猫（迅竜） side

ケルビさんと遊びに来たら、見たこともない怖いモンスターさんに遭遇し、捕まってしまいました…

モンスターさんは私を喰いたいらしく、牙を剥き出しにして押し倒してきました

男性に触られたのは初めてです……でも、死にたくないので命乞いしました

何回か命乞いしたら聞いて下さいましたけど……これはなんでしょう？

メラルーさんに聞いたら首輪というものらしいですけど……なんだか妙に馴染みます

鎖で繋がれて自由に身動き出来ませんが、不思議な気分です……

約束通り餌場に案内しますが、私は助かるのでしょうか？

あ……

そういえば前にお母様から人間のことを聞きました

なにやら女性は目上の殿方にご主人様とおっしゃるみたいですが……

私もあの方をそう呼んだら助かるのでしょうか？

時間があつたら試してみますか……

第二十六話：ニューフロンティア その弐（後書き）

黒猫というのは、私が勝手に迅竜を呼んでいたあだ名です

これからも、こういった具合で名付けするかもです

ちなみにこの黒猫さんは、

健気な女の子

ペット

ドジっ娘

Mっ娘

を混ぜたようなキャラです

主人公の拠点には連れて行きませんが、主人公とモモの良いペットになるでしょう（笑）

第二十七話：樹海の棘には毒がある（前書き）

いよいよフロンティアのモンスター登場！

この日のために、動画を見て研究しておりました（泣）

第二十七話：樹海の棘には毒がある

「（おいまだか：早く案内しないとお前を喰うぞ。」

「（申し訳ございません…も、もう少しですので。」

イラついた声でボヤク俺の機嫌を損ねぬよう、黒猫（迅竜）はせつせと道案内する

鎖付きの首輪をされて苦しそうだが、心なしかワザとやっている気がしないでもない
特に気になるわけでもないので無視、今は空腹感を抑えるのが大変だった

一向に餌場に付かないことにつんざりする俺は、迅竜にかけた情けを今更後悔する

そんな憤りを持つことに迅竜も気付いてるのか、俺の気を逸らそうと色々話しかける

といっても俺は全て無視なので、迅竜は自分の背に移動してきたモモと会話する

迅竜の黒い毛皮は心地よいようで、モモは気持ち良さそうに横になっている

「…おい黒猫、一つ答える。」

急に発言した俺に、迅竜は足を止めて振り返るが俺に睨まれビクッとし、再び歩きだす

「（俺らは樹海で何か起きてないか調べに来たんだが…何か異常なことは無かったか？）」

樹海にいる者なら何か知っているかもしれないと考え、俺は迅竜に尋ねてみる

「（異常ですか…特にありません。」

あ…あります、それもごく最近です。」

黙って迅竜の言葉の続きを待っていると、迅竜は笑顔で振り返る

「（アナタ様のような見慣れない方がここにいるのが異常だと思います。」

「（…舐めてんのかコラ？）」

「（痛い痛い痛い！！）

ごめんなさい！ごめんなさい！

もう二度と言いません！（）

迅竜にとっては軽い冗談だったのだろうが、空腹の俺にはかなりま
ずかった

「(下らねえ返答貰うために聞いたんじゃないやねえ…次ふざけたら殺す
ぞ。)」

「(は、はい……。
うん……く、苦しいです……。)」

背を踏みつけられて苦しむ迅竜を一瞥し、俺は捨て台詞を吐いて離
れる

涙目で息を乱していたが、これも面倒なので無視…

「(もう一回聞くが…樹海に異常は無いんだな?)」

「(はあ…はあ……はい。)

あ…でも、樹海の話してはありませんが、最近古龍の目撃が頻繁
になってるみたいです。)」

「(古龍が?)

……ソイツは鬱陶しいな。)」

そういえば兄弟の角竜もそんなことを言っていたな
兄弟の場合は夜の砂漠に竜巻と共に龍が現れたらしい

その時は睨み合いで終わり、古龍が立ち去ったそうだ
兄弟のそんな体験談を思い出していると、迅竜が不思議そうに俺の
顔を覗き込んでるのに気付いた

「（なに見てんだよ…ご機嫌とりする暇あったら、サッサと餌場に
案内しやがれ！）」

「（は、はい！…
ごめんなさい！）」

怒鳴りつけられた迅竜は再び嗚咽しながら、俺を餌場に案内しだした

しばらく行つた先で、迅竜は立ち止まって振り返る
どうやらここが餌場のようだが、餌になる生き物がいない
あるとすればキノコと湖…モスでも来るのかと思つたが、モスの
気配はちつともない

「（黒猫…空腹も限界だ！
俺にこんな無駄足踏ませやがって！！）」

「（ええええ！？
食べ物ならここにあるじゃないですか！）」

迅竜が指し示したのはキノコと湖の中…湖には魚がいたが、まさかこれでも喰えと？

しばらく湖の魚を見つめていた俺だったが、ゆっくりと迅竜に顔を向けていく

迅竜に向き直った俺は獲物を前にするように、裂けた口を開き強酸性の涎を滴らせる

死を予感した迅竜は絶望的な表情をし、目を見開いて震えている

「（いるじゃねえか…最上の獲物がよお…!）」

「（イヤアア!!わ、私を食べないで下さい!）」

迅竜は顔を覆ってプルプル震えていたが、俺が見据えていたのは貧弱な黒猫ではない

俺の凶悪な眼光は、迅竜の背後に見えたモンスターを捉えていた

なかなか襲ってこないことを変に思った迅竜は、そーっと俺を見てくる

俺の視線をたどって迅竜も背後を見たが、慌てて俺に振り返ってきた

「（あの方に手を出してはいけません！！
いくらアナタ様でも樹海の主には勝てません！）」

「（うるせえな…なら代わりにお前が喰われるか？）」

「（うつ……い、いえ。）」

自分の身にはかえられない迅竜は、俯いてしまった

モモはピヨンと飛び降り、黒猫を戦いの邪魔にならないよう、草むらに引つ張っていく

邪魔者がいなくなったことを確認し、俺はもう一度標的を見据える…

見据えるモンスターは初めて対峙する存在…

俺は感情が高ぶるのを感じ、舌なめずりにソイツのもとに近づいていった

「（ようよう……ずいぶん良い面構えじゃねえか。

突然で悪いが…死んでもらうぜ？）」

「……？」

俺は目の前で寝ぼけたような表情をした、緑色の棘のような鋭い甲殻を持つ飛竜にガンつける

俺にはその飛竜に見覚えがあった…

「（お前…エ…エス、なんだっけ？
…そうだ、エビスナスだ！）」

正しくはエスピナス
俺がケンカをふっかけたのは樹海の生態系頂点に君臨する、棘竜工
スピナスだ

余談だが、フロンティア未プレイの俺には棘竜がどれほど強いか知
らず、存在を知っているだけだ
角竜よりは強くないと踏んでいた俺だったが、この甘い考えを後に
後悔する

チンピラばりの態度で絡む俺に対し、棘竜は首を動かさず目で俺を
追っていた

何度睨んでも、何度挑発しても反応を示さず、しまいには呑気に欠
伸をする始末…

問答無用で襲撃する俺がここまで待つのは、初めて見る棘竜に興味
があったためだが、棘竜の舐められたような態度に苛つく

「（無視すんな！）」

ガブツ　　堅っ！？」

俺は棘竜の首に噛み付いてみたが、あまりの堅さに逆に怯んだ
その際棘で口を擦ったが、少ししてズキズキと痛むようになった

俺にはその痛みが何なのか分からなかったが、仮にも攻撃を受けた
棘竜は襲って来ると思い身構える……が

相変わらず棘竜はのんびりとした表情で、俺を不思議そうに眺めて
いた

ここまでして怒るところか反撃もしない……自尊心を傷つけられた
俺は、逆に怒ってさらに攻撃する

ただし棘竜の棘に気を付けているため、ロクなダメージは与えてい
ない

攻撃をものともせず棘竜が欠伸をかいていり時だった…

たまたま尻尾を振ったら棘竜の横顔に直撃し、大きな衝撃音が響く…
棘竜の棘が何本かへし折れ、森の地面に赤い血が飛び散る

棘竜は尻尾にぶたれて横を向いた頭部を前方に向ける
手心えを感じてほくそ笑んでいた俺だったが、棘竜の表情がだんだ

んと豹変していったのに気付き、一気に血の気が引いた

「グルルアアアア！」

「（ギャー！ー！）」

鬼のような形相に豹変した棘竜が咆哮をあげると、空気の大砲が俺を退かせる

完全に意表を突かれた俺は、とりあえず逃げ去っていく

…が物凄い怒気を放つ棘竜は轟竜もビックリな、とんでもない速さで追いかけてくる

「（なんだあのナス野郎は！？」

あんなの聞いてねえぞ！）」

「ガアアアア！」

しばらく逃げ続けた俺は少しずつ冷静さを取り戻し、立ち向かうことを決めたが…改めて見た棘竜の形相が恐ろしかったので逃げた
必死になって逃げていたのだが、樹海の中央にそびえる巨木に阻まれる

焦った俺は地面にある岩を見つけ、後方の棘竜に吹き飛ばす

当たったかどうかは分からないが、俺はがむしゃらに巨木の中にぶ

ち破って入った

巨木に侵入した後、破った入り口のまわりを崩し、棘竜が入れないようにする

瓦礫の隙間から外を覗いた時、棘竜が同じように覗き返してきたのはトラウマになりそうだった…

やがて棘竜は唸り声をあげて飛び去る

安心していた俺だったが、巨木の上から侵入してくることを予想し、気を引き締め直す

ただここにおいても癩なので、自分から巨木の頂上へと向かうことにする

気合いと根性で巨木を登りきると、ちょうど棘竜が降りてくるところだった

巨木の上は強風が吹き、風に負ければ地面まで真っ逆様
その点では、重量があって風に強い俺は有利だ

棘竜は着地するなり、角を向けて突進してくる
あまりの勢いに気圧されそうになるが、俺も突進で対抗する

ただし角に刺されるのは嫌なので、ぶつかると直前に体をずらして避け、棘竜の体を巨木の頂上から吹き飛ばす

勝ちを確信したが、羽ばたいて舞い戻ってきた棘竜を見て、笑みを引かせる…

棘竜は憤怒の形相で雄叫びをあげ、上空からブレスを吐き出す

それは俺の前方に落ちたが、着弾地点で爆発したのには驚いた

「（そんなのアリかよ！
つて、どわああー！！）」
「グルアアア！」

立て続けに吐かれるブレスを必死にかわす

止むことのないブレスに、俺は巨木を食いちぎり、木の塊を棘竜に向けて投げ飛ばす

それは見事命中し、棘竜は呆気なく落下した

そのチャンスを見逃さず必殺の一撃を浴びせようとしたが、寸前に
なつて俺は戸惑う

棘竜の鋭い棘が邪魔し、下手に接触することが出来ないのだ
それにヤツの棘には、猛毒があることを俺は知ったからだ

立ち止まった俺のスキをつき、棘竜は角を突き上げる

角は俺の下顎を貫き、深い傷をつける

同時に毒までをつつけられ、傷の痛みと毒が侵してくる激痛に俺は苦
しむ

さらに棘竜は、尻尾を大きく振りかぶつて勢い良く俺の頭部にぶつ
けてきた

角竜にひけをとらない衝撃に、俺は怯んで後ずさる

「（野郎…ぶつ殺す！）」

反撃を試みた俺に、棘竜は自信の棘を盾にするように身構える

「（毒が怖くて恐暴竜なんてやってられるかあ！！）」

お構いなしに俺は棘竜の棘ごと噛み付く

棘が俺の口を傷つけ、新たな毒をつけられたのを感じたが、気合い

で激痛を打ち砕く…

しかしその毒が、俺の唾液線を刺激し大量の唾液を分泌させることになる

棘竜の甲殻は強酸性の唾液によって腐食し、さらに肉が晒されて激痛を生む

暴れる棘竜の肉を食いちぎり、口内に溜まった唾液を棘竜の背に吐きかける

広範囲に唾液を浴びた棘竜の甲殻は、腐食して自慢の毒の棘も機能しなくなる

それでも戦うことを止めない棘竜だったが、勝敗は決まっていた

俺は棘竜を巨木から叩き落とすべく、体当たりをする

棘竜は最後の抵抗を見せるも、勢いにのった俺の力には負け、あえなく落とされる

落とされてもまた戻ればいい……棘竜はそう考えていたが、一緒に落ちてきた俺に驚いていた

俺は落下した直後に、仰向けになった棘竜の両翼を鉤爪で捕まえていたのだ

落下の力と俺が抑える力によって、棘竜が立ち直ることは不可能

それでも諦めない棘竜は口を開き、ブレスを吐く動作をした
しかしそれすらも予測していた俺は、棘竜よりも先にブレスを吐いていた

風の抵抗で長くは吐けなかったが、棘竜のブレスは阻止出来た

最後に棘竜は鬼の形相を浮かべたが、この時の俺は不敵な笑みをみせていた

高所からの落下と俺の全体重が加わり、落下した時の衝撃は凄まじかった

落下の衝撃をくらった棘竜は大量の吐血をし、即死した

返り血に汚れた俺は、大きく息を吸い込み…勝利の雄叫びをあげた

「(樹海最強はこの俺だぁあ!!)」

黒猫 side

し、信じられません…

あの樹海の生態系頂点に君臨すりエスピナスを打ち倒すなんて!

エスピナスといえば、太古に樹海の古龍に打ち勝ったといわれる猛者…

それをあんなにまで…

上には上がいるとは知ってましたが、ここまでとは…

お母様……決めました…

私はあの方……いいえ、ご主人様に付いていきます!

お母様は伴侶となる殿方は強者を選べとおっしゃってましたが、ご主人様こそこの世の強者です!

ご主人様なら……私……身も心も委ねられます……！

黒猫 side out

第二十七話：樹海の棘には毒がある（後書き）

主人公の最後の技は、

高所から敵をおさえつけて地面に激突させる超荒技

炸裂すれば全身強打により打撲・骨折・内臓破裂を起こす高威力の技だが、体勢を崩せば自分も同じ目に合う危険な技である

ただ恐暴竜の力と重量があれば、少しの高所でも驚異的な一撃になる

別名、

恐暴竜版メガトンキング落とし（笑）

ちなみに、キン肉マンから勝手にとりました

さて、黒猫こと迅竜ちゃんは勘違いしてますが、主人公が迅竜を見る目はあくまで餌です
良くてペット…

頑張れナルガちゃん！

第二十八話：ナルガちゃん頑張る！（前書き）

健気に頑張るナルガちゃん！

ただし急ピッチ投稿で質が…

第二十八話：ナルガちゃん頑張る！

樹海最強の生物” エスピナス” 敗れる…

その衝撃的な知らせは、瞬く間にモンスターたちの間に知れ渡った。ある者は棘竜が倒れたことに歓喜し、ある者は新たな支配者…恐王の存在を危惧するようになった…

そんな噂がささやかれてるとも知らず、勝利者は自分の住処へ意気揚々と凱旋していた…

一匹の戦利品？を引き連れて…

「やっぱり旦那さんはスゴいのニヤ。

こんな強そうなヤツをぶっ飛ばすニヤんで、もはや旦那さんの敵はいないのニヤ！」

「（ワハハハハハ！！）

どうせなら、全フィールド制覇でもやってのけてみるか？」

「それは良いニヤ！」

旦那さんなら、古龍でもぶっ飛ばせるニヤ！」

「ニヤハハハハハ！」

エスピナスを倒した俺とモモは、未だに残る勝利の余韻に浸って大笑いする

俺とモモがふざけて言った野望は叶いそうにないが、やろうとしたら大変なことになるだろう…

「ニヤハハハ……ところで旦那さん。

アイツなんなのニヤ？」

「（うむ…俺も尋ねたいところだった。）」

互いに顔を見合わせた後、俺たちはゆっくり振り返る

そこには樹海で捕まえた迅竜がいたのだが、草花に止まる蝶を見つめている姿は、やはり飛竜とは思えない

この迅竜とはエスピナスを倒した後に解放したのだが、何故か俺たちの住処まで付いて来てしまった…

一応首輪を外そうとしたが、えらく首輪を気に入ったらしく、結局外したのは鎖だけだ

途中何度か追い払おうとしたが、意地でも迅竜は付いて来たのだ。一度強く脅したら寂しそうに去っていったのだが、しばらくしたら

戻って来た

それ以降面倒に思ったので放置し、今に至るといっわけである…

「旦那さんやっぱり黒猫のヤツは恨んでるのニヤ。

オイラたちが寝込んでるスキに、オイラたちを暗殺する気ニヤ。」

「（アイツがか？）」

モモは黒猫を危険視しているが、俺は全くそうは思えない
黒猫を信用しているわけではないが…

樹海から住処へ移動している時に分かったのだが、黒猫は超がつく
ほど……弱い

例えるなら……いや例えるどころか実際に起きたことだが、ランポス
数匹にいいように攪乱されるのを見てしまった

ランポスにつつかれ泣きながら俺に助けを求めるのを見て、もはや
失望を通り越して哀れみしかない…

あの調子なら、ランゴスタが10匹来たらやられるだろう
それくらい、黒猫は弱かった

モモは黒猫のことを気に入っているのだが…（フカフカ毛布として）

俺は黒猫のことは何とも思っていない…せいぜい非常食として意外、何の利用価値もない

黒猫はマリナのように働けないだろうし、角竜の兄弟みたいに強くない

単なる穀潰し…いやそれにすらならない

この迅竜は言った通り弱く狩りもロクに出来ないので、飛竜が普通喰うような肉にはありつけない

ではどうしているかというと、黒猫は自生している山菜やキノコを食べるのだ

タンパク質は湖や池に棲む魚から…

そんな食生活を送ってるせいか、黒猫は飛竜にしては華奢な体つきで小さい…

労働力にも用心棒にも適さず、穀潰しにもならない俺から見たら、何の取り柄もないつまらない生物だ

アイルーたちの利益になるならよいが、無能を置いておくほど俺は心優しくない

「（黒猫…こっちに来い。）」

俺が呼ぶと、黒猫は蝶の観察を止めて嬉しそうに走ってきた
久しぶりに呼ばれたのが嬉しいのか、俺を期待したように見つめる

「(はつきり言う…樹海に帰れ。)」

「(え…あの…イ、イヤです…)」

いきなりの厳しい言葉に、迅竜は俯いて小さくなる
しかし迅竜は、ビクビクしながらもしつかりと意思を表示した

「(お前は俺について来て何がしたいんだ？
見る限り…お前に有用性は感じられない。)」

何回目になるのか…

実はここに来るまでに何度もこう言ってるのだが、迅竜は意思表示
をしても、ついてくる明確な理由は語らない

移動中は戦勝気分で上機嫌だったが、今は違う
これまでのように曖昧な返答をすれば、俺は無理やり迅竜を追い払
う……もしくは喰うだろう

俺のまとう雰囲気を観念したのか、迅竜はそっと口を開く

「（それは…その…えっと…。）」

「（なにい？聞こえねえよタコ！
もっとハッキリ言いやがれ！）」

歯を打ち鳴らして威嚇する俺におびえたのかなんなのか、顔を背けて小刻みに震えている

「（…き……だからです。）」

「（はあ？もう一回言ってみやがれ！！）」

迅竜の蚊の鳴くような声にだんだんと苛立ち、俺はつい怒鳴り声を発す

大声に驚いてビクツとした迅竜は、ゆっくりと涙を溜めた瞳で俺を見上げて来た

「（す…す、好きだから…です…。）」

「（なにが？）」

「（それは……あうう…イジワルしないで下さい、ご主人様…。）」

恥ずかしさに迅竜は手近な草村に頭を突っ込み、プルプルと震える

頭隠して尻隠さずというヤツだ…

目の前で震える小動物に、俺は面倒くさくなって盛大にため息をつく
そして…この迅竜を諦めさせる妙案を思いだす

モモに目配せをすると、モモは住処へと走っていく

俺とモモは以心伝心…思い浮かんだことは、言葉にせずとも伝わる
のだ

「旦那さん持って来たニヤ！」

旦那さんが思ったことなら、何でも分かるニヤ！」

「（ご苦労さ……ってそれはマリナが造った燃えないごみだろうが
！！

俺はタルと石持って来て欲しかったんだよ！
っていうか、ごみはきちんと処分しろよ！」

「それはすまなかつたニヤ。

でもごみを処分しなかつたのは、旦那さんが”マリナが造ったもの
にごみはねえ”って言ったからニヤ。

オイラは悪くないニヤ。」

「（う…うるさい！

は、早く持って来い！」

タル一個と石を数個持った俺たちは、雪山の雪解け水で出来た湖へと向かった

湖に来るとそこに棲む幼い水竜が顔を出す

「シャー？」

「（悪いな坊主、ちょっとくら湖借りるぞ。）」

幼水竜に一言そう言つと、タルを湖に投げ入れ、迅竜に向き直る

「（お前の強情さに免じてチャンスをやる。

あのタルを湖に沈め、この石を浮かせてみせろ。

この難題をクリアすれば許可するが、出来なかつたら今度こそ失せろ…。）」

モモはこのことについては知らなかつたようで、目を丸くして驚いていた

抗議しそうになるモモに釘を打ち、厳しい視線を迅竜に向ける

迅竜は俺と浮かぶ大タルを交互に見つめる

モンスターの迅竜でも、俺が出した難題があまりにも矛盾していることが分かるようだ

「（無理だと思っつか？
なら諦めてサッサと失せろ……今なら喰うのは許してやるぞ？）
」
「（や、やります！
見ていて下さいー！）」

迅竜は強がってそう叫ぶと、石ころをくわえて湖に飛び込んでいく
最初に石ころを浮かべようとするが、必然的に石は水に沈む
何度やっても石は浮くことがなく、やがて迅竜は目標を変える

しかしタルもなかなか湖の底へと沈むことはない
木で出来たタルと内部に密封された空気の浮力で、何度沈めても浮
き上がる

めげずに何度も挑戦する迅竜、俺はしばらくそれを見ていたが飽き
てその場を立ち去る…

「ブヒッ!？」

今日も哀れなファンゴが俺の凶牙にかかった
ファンゴの剛毛と硬い皮が牙を阻もうとするも、呆気なく牙の侵入
を許し、無情に肉を裂かれていく

仲間を襲われ激高するものもいたが、逃走するファンゴごと喰われる……

迅竜に構っていた時間は捕食していなかったので、俺は食欲のおもむくままに捕食を続けた…

モモは眠くなって拠点に帰って行ってしまった

今は俺だけで密林の先の沼地を練り歩き、捕食をして回っている

俺は最後の獲物であるモスを喰った後、頬に付いた血肉を舐めとる

迅竜に課題を出し外に出て半日近く、日は傾いて綺麗な夕陽が沼の水面に映っていた

周囲を見渡しても生物はおらず、腹を満たした俺は住処への帰路につく

密林を駆け抜けて住処に戻る頃には、日は沈みきって辺りは暗闇となっていた

それも木々を抜け草原に抜ければ変わった

ここ数日住処を覆っていた厚い雲が消え、空に浮かぶ満月の月光が差していた

虫の鳴き声と涼やかな夜風に心地よいものを感じながら、俺は湖面

に映る満月を間近で見るため、湖へと向かっていった

湖に近付くとほとりで幼水竜が水面に半身浸かり、ある一点を見つめていた

その様子と水が跳ねる音に、俺は忘れていたことを思い出すと共に、不本意ながら感心してしまった…

あの単純でいて難解な課題を半日も続けていたのだろうか…

迅竜はタルに覆い被さって沈めるも、残り一つとなる石を浮かせることは出来ていなかった

「（お前は馬鹿か？）」

「（ご、ご主人様…？
わわっ！？）」

俺に気を取られたことでバランスを崩し、迅竜は水面に落ちていった

俺はため息をついて湖へと入っていき、ずぶ濡れになった迅竜を陸に引き上げる

「（頭使って考える。
こうやるんだよ…。」

迅竜に見せられるようにタルを引っ張ってきて、石を数個口にくわえる

俺はまず最初にタルを沈め、その上に一個ずつ石を慎重に乗せていく石を全部乗せると、ちょうどタルが水に沈み、また石は水面に浮くようになった

多分この課題はコイツでなくても、モンスターには分からなかっただろう

仮に解いたとしてもそれだけ、特に心に響くものはない

だが、迅竜が諦めずにやり続けていたのは素直に賞賛出来る

迅竜は沈んだタルと浮いた石を見つめて感嘆の声をこぼしたが、やがて寂しそうな表情をする

「（約束ですから…私、ここを去ります。）」

「（いや…それはもういい。）

それより、悪かったな…厳しくあたって。）」

「（えっ！？そんな、止して下さい…！）

元とは言えば無理を押し切った私が悪いんですから！」

頭を垂れて詫びる俺に、寂しい表情から慌てた様子に変わる

慌てる迅竜を無視し、俺はその横に寝そべる

その際、迅竜がさらに慌てたのは今まで通り無視だ

「（あの…ほ、本当によろしいんですか？

私…ご主人様の課題を解けなかったんですよ？）」

「（いいって言うてんだろ……それに、最初から解けねえって分かってたわ。）」

「（うう……酷いです。）」

俺の言葉に迅竜はすすり泣く
本当によく泣く飛竜だ

「（お前よく半日以上も続けてたな……ありや馬鹿の一つ覚えっていうんだぞ？）」

「（あ、あれしか思い付かなかったんです！
それと馬鹿って言わないで下さい！！
情けなくなります！）」

「（じゃあ単なる阿呆だな。）」

「（…ヒグツ…ご主人様…私を虐めて楽しんでませんか？）」

前脚で涙を拭く迅竜は、恨めしげに睨んでくる…全く怖くないが

俺が寝そべりながら幼水竜と遊んでいると、迅竜がすすり泣くのを止めた

「（私…情けないですね…。」

ご主人様の課題も解けずに…ちょっと同情されて喜ぶなんて…。何も出来ない私って…生きる意味ないんでしょうね…。」

自嘲気味にしみじみと迅竜がつぶやきだす…

迅竜はまだ何かを言うつもりだったのだろうが、俺はその前に頭をど突いた

軽くやっても脳が揺れる一撃に、迅竜はクラクラしている

「（痛っ…な、なんですか！？）」

頭をおさえながら悶えた後、迅竜は俺をキョトンと見つめる

「（生きる意味が無いだと？）」

気弱なこと言ってるんじゃないやねえよテムエ。

お前が課題をやり抜こうとしたあの根性はどこいったんだ！？
俺はテムエの弱音聞くために引き入れたんじゃないやねえぞ！！」

「(で、ですが何も出来ない私に生きる意味は…。)」

「(聞くが…生きていくのに意味など必要なのか?)」

迅竜は途端に言葉を詰まらせる

自分が今まで聞いたことのない言葉に…

「(親父曰わく…生き物が毎日を生きるのに理由など不要。

喰って寝て暴れて、そこから散歩するのにいちいち理由なんていらねえとよ…。

俺らは人間とは違うんだ…毎日生きてられりゃ、それでいいじゃないか。

無意味な人生…結構なことじゃねえか。

俺にいたっては無意味どころか、他のヤツには有害な生き方してんだぜ?」

迅竜は笑顔で語る姿に、胸の高鳴りを感じた

「(それでも納得しねえなら…これから探せばいいじゃないか。

どうしようもないなら俺を頼れ…乗り掛かった船だ、生き方を探し

てやるぜ?」

最後の言葉に迅竜の胸の高鳴りは強くなり、それは感情となって表に出た

落ちこぼれ飛竜の迅竜がこんなに温かい言葉を貰ったのは初めて
迅竜は高まる感情を制御出来ず、自分を認めてくれた者にすり寄った

「(嬉しいですご主人様あ!

私、こんな風に言われたの…こんな…。

ふうえーん…。)」

「(調子に乗んな!!

そしてくっつくな!!)」

泣きつく迅竜を引き剥がそうとするも、寝そべってるために力が出
ない

迅竜もこの時ばかりは、何故か力が強かった…

なんてこったい…

流れで迅竜を拾っちゃまったぞ！

非常食にしようか迷ったけど、なんかねえ…
仕方ないからペットにでもしよう

それにしてもよく泣くヤツだな…

飛竜がバカみたいに涙こぼして泣くなよな

……ん？

よく泣く？涙？

迅竜の涙？

飛竜の涙？

竜のナミダ…？

ハハハハ！！

役に立つことがあったじゃないか！！

こりゃしばらく資金に困らないぞ！！

ワハハハハハ！！！！

マリナまだ来ないのか（泣）

第二十八話：ナルガちゃん頑張る！（後書き）

ナルガちゃんがいれば、お金とポイント溜まり放題です（笑）

さて、そろそろ嫁さんか妹かも決めませんかね…

今のところ、あと五体モンスター出ます
といっても三種ですけどね

一体は恐暴竜・雌

一体は主人公・角竜と並ぶ三強となる予定

三体は戦闘狂の三姉弟です（笑）

ご期待あれ！！！！

第二十九話：もう一つの最凶（前書き）

主人公、角竜に並ぶ三強出演！

モンスターの名だけを見るなら、コイツが最強かもしれません（笑）

第二十九話：もう一つの最凶

気分とその場のノリで、とんでもないものを引き取ってしまった…
過ぎてしまったものは仕方ないと思ひ込むも、納得仕切れない部分もある

そんな思いも、目の前でアイルーたちと無邪気に戯れる迅竜を見ると薄れるが…

そして兄弟分の角竜がやって来たのは、迅竜を俺たちの住処に置くことを決めてから数日経った時だった

「（よう兄弟、来てやったぞ。）」

兄弟は笑顔で俺のもとに訪れて来たのだが、この時はコイツの笑顔に無性に腹が立つ
挨拶もそこそこに、角竜は駆け回る迅竜について聞いてくる

「（おい兄弟…あの迅竜、お前の嫁か？）」

「（お前の目は節穴か…。
あんなチビスケが俺の嫁なわけねえだろが…ただのペットだよ。
で…お前は何しに来たんだよ、用がねえなら帰れ！）」

「（心外だな…まあいい。
そろそろ繁殖期になるが、見た限り兄弟には花嫁がいらないような
でな。）」

「（うつせえこのやろう、余計なお世話だ！）」

痛いところをつかれた俺は、足下の石を蹴り飛ばす
角竜は俺をなだめ、俺もしぶしぶ心を鎮める

「（心配すんな兄弟。

我輩が貴様の嫁探しを手伝ってやる…ここから遠いが、だいたいの
場所を把握してある。）」

兄弟は俺のために言ってるのだろうが、正直別にいい

俺にはマリナがいるし、モンスターに心ときめくはずがない

だがここで無碍に断るのも兄弟に悪い

最悪、見つけても気に入らないといって拒否すればいい…

「（分かった分かった…お前に手伝ってもらおうよ。

しかし兄弟、今日はいつになく協力的じゃないか？）」

俺はふとした疑問を兄弟に投げかける

コイツの性格から考えれば、他人に協力するなど有り得ない
となると、コイツは何かとんでもないことを企んでるか、物騒なこ
とを仕出かすに違いない
そう考えていたが……

「（実は妻の体調が良くなってきてな！

繁殖期は我輩も忙しくなるから、今のうちに手伝って……って、どう
した兄弟？）」

俺は久しぶりに戦闘以外ではらわたが煮え立つ

「（このクソリア充が死にやがれ！！

砂漠で野垂れ死にやがれ！）」

「（グハツ！？何をする！）」

体当たりをあびた角竜は怒るも、すでに俺は泣きながら洞窟を飛び
出していた

モンスターに転生したばかりに……

モンスターじゃなく人間だったのなら、今頃愛しのマリナと結ばれ
ていたのに……

やっぱり全部あの胡散臭い自称神さまのせいだ！！

現実逃避して駆け回っていたら、俺はいつの間にか雪山の奥地に入り込んでいた
雪山の寒さを感じないで駆け回っていたとは、俺もいよいよ危険かもしれない…

しかし極寒が俺の頭を冷静にさせ、同時に寒さを感じさせた

寒さに震える俺は辺りを見回し、ぽっかりと空いたほら穴を見つけた
俺はすぐさまそのほら穴に入っていったのだった

ほら穴の中も変わらず寒かったが、ブリザードが吹き付ける外よりはマシだった

俺は出来るだけほら穴の奥に入り、体を丸めて体温が逃げないようにした

吹き荒れる猛吹雪がおさまるまで、このほら穴にいるようだ…

俺がため息をついて横になった時、ほら穴の奥でガタツと音がした

俺は驚いて飛び起き、ほら穴の奥に目を向ける

まだほら穴の暗さに目が慣れていなかったが、奥からは暗闇に浮かぶ二つの赤い目だけは見えた

「（礼節がなっちゃんねえな、先客がいたら挨拶するってもんだろが。）」

「（な、何者だテメエ！）」

姿の見えぬ相手に叫ぶと、深いため息が聞こえた

「（何者だつていいだろ。

警戒すんな…お前さんぶっ潰すつもりなんざねえからよ。」

謎の生物からは敵意が感じられないが、俺はまだ安心出来なく警戒する

そのままお互いに言葉を発さず、ほら穴には外の風の音以外音は無かった

次第に暗闇に目が慣れていき、相対する生物の輪郭が見えて来る

その全容が確認出来た時、緊張に心臓の鼓動が高まった

「（ツいてねえな…。

牙獣種最強のアンタに出会うとは、俺の命もおしまいか?）」

山羊のような二つの角、筋骨隆々の肉体、巨木のような剛腕……どれも一撃必殺の威力を発揮する

ハンターであろうがモンスターだろうが、転生前は絶対にコイツに会いたくないと思っていた

超攻撃的生物と呼ばれ恐れられる生物だが、不思議なことにコイツからは全く敵意が感じられない

「（金獅子にしちゃ大人しい…ってか？）」

「（うつ…あ、ああ。）」

俺の疑念をピタリと言い当てられ、緊張感は更に高まる俺が一挙手一投足に注意深く見つめていると、意外なことに地面に寝転んでしまった

俺が目を丸くしていると、ソイツはダルそうにため息をつく

「（お前さんの持ってんのは偏見ってもんだ。）

全員が全員、目に映った者にケンカふっかけるようなド阿呆じゃねえんだよ。

もつとも、俺以外はそんなド阿呆ばかりだがな。」「

寝転んでにやける姿に、俺も一瞬気が抜けてしまった

「（全く…アンタ一体何者なんだ？

穏やかなラージャンなんて聞いたことねえぞ？）」

「（ハッ…若造が知った風な口きくんじゃねえよ。金獅子に出会ったのは初めてだろう？）」「

なんともない表情を浮かべているが、見透かされた俺は内心かなり焦っていた

それすらも分かっているのか、金獅子はケラケラ笑う

「（俺くらいの老いぼれになると、若造の考えなんざ手にとるように分かんだよ。

といつても、若い頃みたいに暴れられもしねえがな…。）」

「（老けたからアンタは穏やかなのか？）」「

「（まあそういうことだ。

それから俺のこたあ、敬意を込めて親方って呼べや。

それが長幼の序つてもんだ。）」

俺はとりあえず頷いておくと、親方も満足したように頷いてくるしばらく会話もなく黙っていると、親方がゆっくりと起き上がる

「（うるせえな…そろそろ息の根止めとくか。）」

親方はイラついたように歩を進める

何か機嫌を損ねることをしたか、と焦っていたが、親方はほら穴の

外に出て行った

ポカーンと親方が消えた方向を見ていると、しばらくして親方が戻ってきた

ズルズルと何かを引きずってるようで、俺の近くにくると目の前にそれを放り投げてきた

いきなりのことで驚いたが、よく見るとそれは雪獅子”ドドブランゴ”だった

「（お前さん腹減ってんだろ？ソイツ喰って元気だしな。）」

「（お、親方…この短時間でコイツを仕留めてきたのか？）」

親方はなんでも無さそうに座り、そしてさっきと同じように横になる

「（雪猿なんざ赤子みてえなもんだ。）

コイツあ仲間呼ぶのにいちいち叫びやがるから、いつかぶっ潰してやるうと思ってたんだ。」

老齢なる金獅子恐るべし、俺はそう思いながらドドブランゴを食べる

猿肉はとても美味しいな…

「(にしても親方、アンタはどうしてこんなところにいるんだ?)」

腹も満たしたことで、親方に素朴な疑問を投げかけてみた
どうやら親方は遭難したみたいだが、何故雪山に来ていたか気にな
った

ただのラージャンなら気にならないが、俺は親方と仲良くなれそう
なので、コミュニケーションをとる意味でも聞いてみたのだ

「(それはオメエ…あれだよ。

………なんだっけ?)」

「(いや、俺が聞いてるんですよ。)」

親方のボケに冷静にツツコミをいれる

「(ああそつだそつだ。

最近はボケまで出て来た…歳はとりたくねえな。)」

自然に出たボケかよ!と声にだしそうになったのをこらえ、心の中
でツツコミをいれる

「(俺あ古龍の脱皮した皮見に来たんだが、さっぱり見つからねえ。
探し回ってたら吹雪にあつて、こんな薄暗えほら穴にいるってわけ

だ。」

「(古龍の脱皮?)

それなら山頂にあるんじゃないのか?」

「(山頂だあ?)

吹雪が強過ぎてさっぱり見えなかったぜ。」

古龍の脱け殻は実際に見たことは無いが、そんなに見たいものなのだろうか?

俺としては、ポポを探し回ってた方がマシだ

「(お前さん恐暴竜だよな?)

やっぱり最近あっちから逃げて来たのか?」

「(俺は数年前だけど…逃げて来たってどういうことだ?)」

親方の言葉に違和感を感じていると、親方は頭をポリポリと掻いた

「(それじゃあ知らねえわな。

あっちの…温泉がある村の近くにデッカい嵐が来てな。いろんな地域に被害出してんだよ。)」

「(それって…アマツマガツチの嵐か?)」

「(なんだよ若造…知ってんじゃないか。)」

「（いや風の噂で名前だけは…。）」

俺は笑いながらごまかし、親方もそれ以上は聞いてこなかった

アマツマガツチか…

そのうちハンターが集まって、霊峰で討伐するんだろっな…

アマツマガツチがユクモ村に接近し、ギルドが総力をあげて撃退
それを知るのは、親方から話を聞いた数ヶ月後のこととなる

「（そうだ親方…あんたこれからどっか行くのか？）」

「（そうだなあ。）

俺もいい歳して動き回ってるところじゃねえんだよなあ。

そろそろどっか住処見つけて、老い先短い暮らしをのんびり味わい
てえもんだ。」

それならばと、俺は目を輝かせて提案をする

「（なら俺たちの住処に来ないか？

のんびりしたところだし、俺らに馴れたアイルーたちがいるぜ？
親方みたいに強いヤツなら大歓迎だ！！）」

「（若造、出会ったばかりの俺を招待するってのかい？）」

「（親方みたいなヤツなら信用出来るさ。
それに大先輩の教訓つてのも教わりたいしな!）」

「（へッ…若造が生意気なこと言いやがる。
…いいだろう、頭の固い老いぼれ使いてえってんなら、好きにし
やがれ。」

親方は呆れたようにため息をついた

こんな無邪気で青臭い若造は、十数年前のせがれ以来だ…
長寿の果てに牙が丸くなった金獅子は、この若造の力となることを
決めたのだった

恐王のもとに集まりし暴君と金獅子…

来るべき二つの戦争は、刻一刻と迫っている…

第二十九話：もう一つの最凶（後書き）

金獅子 ラージャン

ひとよんで”親方”

加齢による老化の影響で、ラージャン本来の凶暴性が薄れている
自分を老いばれと称し、言動にも落ち着きはあるものの、ドドブ
ラ
ンゴを瞬殺するなど戦闘力は高い

老いの影響はただ身体能力の低下だけでなく、判断力と洞察力を高
めた

主人公と角竜のブレインとなる予定

言動からはかなり高齢を思わせるが、人間に例えるなら40〜50
代のダンディーなオジサマ

コイツはスーパーサ ヤ人3にまでなれます（笑）

…調子によって主人公たちのこれからを想像してたのですが、

私の脳に何があったのか、とんでもないバッドエンドになりました
「。。。」

マズい、マズいぞ!?

あんな終わり方はいけない!

というわけで、とんでもないバッドエンドが浮かんでしまったので…

頭整理するのに更新速度下がるやもしれません…

第三十話：嫁さん探しの旅（前書き）

ハンター出現！！

シリアス…かな？

第三十話：嫁さん探しの旅

吹雪が止んだ雪山から下山し、俺はラージャンを連れて住処へと戻る
戻るなり体当たりをくらわせた兄弟に捕まり、お返しとばかりにボ
コボコにされた
たとえ兄弟だろうとやられたらやり返す、コイツはそんなやつだ

「(テメエ…殺す気でやりやがったな?)」

「(ああ…。
んなことより、貴様何者だ?)」

殺意を当然のごとく認め、話題を変える
兄弟にとって俺の命は、そんなこと…で済ませられるらしい

「(俺かい?)」

俺あその若造にスカウトされてな…残りの余生を若造のもとで無駄
にするんだよ。」

「(それは気の毒にな。

金獅子をスカウトするとは、貴様も命知らずだな。」

兄弟は俺に振り返り、ニヤリと笑う

好戦的な兄弟のことだから、親方を見てケンカをふっかけると思っ
たが、意外に態度は普通だった

「（これだけ豪勢な顔ぶれが集まったら、人間共も我輩らを倒しに来るだろうな。）」

兄弟は苦言をこぼすように言うが、目は輝いている
どうやら兄弟はそれをお望みのようで、人間の討伐隊を楽しみにしているようだ

俺にとってはいい迷惑だ

「（つたく、せがれ共みてえに好戦的だな。
……ところでお前さん、ありやなんだ？）」

一息つけた親方が、洞窟の入り口を指差した
俺と兄弟がそちらに目を向けると……涙で目を潤ませた迅竜がいた

俺の視線に気付いた迅竜は、勢い良く走り寄ってきた

「（酷いですご主人様！
私を差し置いて……こんな……こんな！！）」

「（意味不明なことほざいて近寄んじゃねえ。
喰い殺すぞ？）」

「（イ、イヤです！！
……あ、でも……私を食べていただければご主人様と一つに……）」

最後の方は聞き取れなかったが、危険な気を感じて後ずさった
迅竜の方も、ハツとして首をブンブン振る

「（おい嬢ちゃん…夢中になるとこ悪いが、お前さん若造とど
ういう関係だい？）」

「（はい！私はご主人様の所有物です！）」

「（ただの餌ですから気にしないでください。）」

俺は迅竜の言葉をかき消し、親方と兄弟に笑顔を向けて迅竜を洞窟
の奥に引きずっていった…

「（私…ようやくご主人様と結ばれるのですね？」

あの…私初めてですので…その、優しくしてください…。）」

誰もいない洞窟に放り投げるなり、迅竜は恥じらいながら分けの分
からないことをほざく

「（黒猫…テメエにはちつと仕置きが必要だ。

出て来いモモ！）」

「はいニャ…！」

俺の呼び声と共に、地面からひよこつとモモが顔を出す

モモは俺の表情から全てを察し、道具を持って迅竜に駆け出す

その手際は圧巻で、モモは首輪に鎖をつないであつという間に縄で縛っていく

鎖は洞窟の柱に縛り付けられ、迅竜は文字通り動けなくなる

「（ん……ご主人様、キツ……い……です……。」

「（後は頼んだ。）」

面倒くさい俺はモモに全権を託し、ダルそうにその場を去った

兄弟と親方のもとに戻ると、まず最初に大爆笑する兄弟が目映った
イラついた俺は兄弟と取っ組み合いになり、洞窟をグチャグチャに
してしまう

最後は親方の拳骨をくらい、兄弟仲良く外でのびるハメになる

親方に水をかけられて覚醒した俺たちは、住処をのそのそと出て行く

こうなったのは角竜の兄弟のためで、前に話していたとおり嫁さん探しの旅をすることになった

というか、アマツマガツチが現在進行形で襲撃している土地になど行きたくない

そのむねを兄弟に伝えたら…

「（古龍なにするものぞ！我輩の力で返り討ちにしてくれる！）」

親方に助けを求めたら…

「（別にいいんじゃない？）」

だそうだ…

539

脳筋一直線な兄弟は仕方ないとして、親方事情分かってるよな？
アマツマガツチだよ？
ばったり遭ったら死んじゃうよ？

それに対する返答が…

「（細げえこと気にすんな。

嵐ん中かいくぐって嫁さん探したあオメエ…熱い展開じゃねえか。）

だそうだ…

どうやらこの金獅子のオッサン、老化で頭がイかれてるらしい
もしくは、老いてなお盛んといった具合だろうか？

兄弟の縄張りである砂漠を横断し、砂漠を抜けて森の中に入っ
った

ただ兄弟が慣れぬ気候に苦しんだため、今は兄弟の体調が戻るまで
休憩している

その間俺は消耗した体力を補うために、その場を離れて捕食に出か
ける

本日の獲物は、俺が初めて見る草食種：分厚く垂れ下がった薄緑の
皮を持つモンスター

不思議なことに俺が近づいても逃げなく、容易に喰うことが出来た

なかなか体が大きいので、数体腹におさめると満腹感が感じられた

「（ズワロポスカ……俺、こっちに帰って来たんだな……）」

俺が捕食したのは垂皮竜ズワロポス

このモンスターがいるということは、俺は2ndのフィールドから

3rdのフィールドにまで来たらしい

そしてこのフィールドは”水没林”……思えばあの嵐さえなければ、俺はこの場所に上陸する予定だった

といつても嵐で漂流したおかげで、マリナと巡り会えたのだから、あの漂流は運命だったのかもしれない……

「（運が良かったな。

ここじゃアマツマガツチはいねえみたいだ。」

体調不良の兄弟を看病していや親方が、水面をはじきながら現れる親方は食い荒らされた垂皮竜を見て一瞬顔をしかめるが、すぐにもとの表情に戻す

兄弟は？と聞こうとする前に、親方は先に言う

「（あのガキは吐いてやがるよ……。

砂漠暮らしのガキにや、ここの湿気はキツいらしい。」

親方は水で体毛が濡れるのもかまわず、ドシツとその場に座る

水没林の湿気にやられて嘔吐する角竜…想像するとついにやけてしまっ

無理やり俺をこんなところに連れて来た罰だ…

「（そっぴやオメエ…女口説く方法は考えてんのかい？）」

無論そんなものは考えてなどいない

最初から乗り気では無かったし、口説くどころか、見付ける方法すら考えていない

「（その様子じゃあ…考えちゃいねえな。）」

親方は小さく笑う

「（いつの時代も、どんな女も…自分を守ってくれる強いナイトには惚れんのさ。」

お前さんは十分強い、後は成り行きに任せちまえば大丈夫だ。」

そっぴやと親方は俺の頭をバシバシ叩く

一発一発が脳に響くからたまつたもんじゃない…

「（とってもただでさえ恐暴竜は珍しいんだぜ？

それも運良く雌だな　ズドーンッ！！　……泣けるな。）」

「（行ってこいよ…プリンセスはナイトをお待ちだ。）」

「（親方も来るんだよ！）」

他人ごとのような親方を引っ張っていき、俺は派手な音が鳴った方向へと駆け出した

その方向に近付いていくごとに、戦闘音と怒号が大きくなっていく俺はとつさに茂みの中へと飛び込み、そつと戦闘の様子を覗く

引っ張つられた親方も俺と同じように、しかし楽しそうに覗く

幸か不幸か、見つめる先のモンスターは恐暴竜だった…
俺は歯ぎしりをし、緊張感をあらわにした

緊張感の原因はもう一体の恐暴竜がいたからではない
その恐暴竜が戦っている相手が問題だった…

「(な、なんで…なんでハンターなんだよ!)」

確認出来る限り、男性二人女性一人のハンターが確認出来る
一人はランス、一人は双剣、女性ハンターはボウガンだ

ハンター三人はかなりの腕前のように、恐暴竜の攻撃をかわして反撃を仕掛けている

恐暴竜は尻尾を振って応戦するも、確実に追い込まれているのが分かる

元人間だった俺、だが今は恐暴竜……俺の目の前では同族が人間の手にかけられようとしている……

二つの思いに葛藤しているが、どちらにも容易に決められない

恐暴竜がハンターの攻撃を受けて嘶いた時、俺の体は勝手に動いていた……

ハンター三人は突如恐暴竜との間に割って入った俺に驚愕した
最初に相手していた恐暴竜よりもサイズの大きい俺に、ハンターたちは混乱する

無策で飛び出してしまったことを後悔し、俺はハンターたちを全力で威嚇する

俺の威嚇に怯えて撤退してくれることを祈っていたが、それは裏切られた

ハンターたちは各々の武器を構え直し、俺に向かってくる

焦る俺はハンターを退けるため、ブレスをなぎ払う

剣士装備の二人は退いていったが、背に小さな痛みを感じた

ボウガンを装備した女性が、俺に弾を撃っていた

平和的にいけないと感じた俺は、牽制のつもりで下顎を地面に突き刺し、岩石をガンナーに向けて投げ飛ばす

ガンナーは予想外だったのか、回避行動をとれないでいた

俺が焦りを感じると、剣士の一人が盾となって岩石を防いだが、そのハンターは吹き飛ばされた…

吹き飛ばされたハンターは倒れた先でピクリともせず、頭からドクドクと血を流していた

仲間の二人が何事か叫んでいる…おそらくはそのハンターの名前…

呆然とする俺に、もう一人の剣士が敵意の目を向ける

怒りと憎しみに染まったその目に、俺は気圧される

ハンターは双剣を固く握って走り出し、俺は接近を許してしまった

双剣が振り下ろされ、俺の肉体が斬り裂かれると思ったが……双剣

ははじかれた

鍛え上げられた俺の皮膚は硬質化し、並みの武器など通さなかったのだ…

そんなことが起きてるとも知らず、俺は身をよじって尻尾を振る

尻尾はハンターに直撃し、メキメキと不快な音が生じる

ハンターは二転三転し、最初のハンター同様動かなくなった…

最初の岩石による攻撃と違い、俺には生々しい感触が残っていた吐きそうになったのを、残った女性ハンターの叫びでとどまる

女性は叫びながら俺に発砲してくるが、錯乱したままの射撃は俺を逸れていく…

俺はハンターに駆け出し、ボウガンに噛み付き、へし折った…

しかしそれ以上深追いはせず、俺は威嚇を向けながらも後ずさる

女性はへたり込んで呆然としていたが、俺が吠えたと逃げ去っていた…

小さくなっていくハンターの背を見つめていたが、そこに破壊音と共に颯爽と兄弟が出現する

兄弟は驚くハンターの前に立ちふさがり、一踏みで圧殺した

「（フハハハハ！！
人間恐るるに足らず！
このような軟弱な生物は、自然界から淘汰されるべきなのだ！！
フワハハハハ！！）」

兄弟は足下の死体をゴミでもあしらうように蹴飛ばし、俺に近寄る

「（クツククク…兄弟もなかなかの殺しっぷりであったぞ？
この世は弱肉強食…雑魚をどうしようが、強者の自由…。」

兄弟はゆっくりと視線を下ろしていく

それをたどると、最初に仕留めたハンターがいた

そのハンターはピクピクと動き、まだ息の根はあるようだ

「（このようにな！！）」

角竜の脚がハンターの体を踏み潰す

グシャツという不快な音と、流れ出る鮮血に俺は顔を背ける

角竜はすり潰すように脚を捻り、さらにバキバキと骨が砕ける音が響く

「（お前……っ！）」

兄弟の残虐な行動を責めようとするも、でかかった言葉は喉に止まる
結局は自分も殺した……俺に兄弟を責める資格はない

俺は歯ぎしりをし、その場を去る

「（おい兄弟どこに行くんだ？

……ったく女ほつたらかしにしゃがって。）」

「（若造にや気持ちの整理つてのが必要なのさ。

……いずれ乗り越えなきやなんねえことなんだよ。

それが今か先かの違いだよ……お前さんにもそういつのあつただろ？」

「

「（はあ？知らねえな。）」

「（そこはうなずいとけど阿呆……。）」

角竜に一発拳骨を叩き込み、金獅子はゆっくりともう一体の恐暴竜
に目を移す

「（嬢ちゃん……悪いがあのお若造を元氣付けてやってくれ。

ヤツにや俺らから言ってもききそつにねえからな……。）」

雌の恐暴竜は戸惑っていたが、やがて力強く頷いて駆け出していった

「（若えっつてのはいいもんだな…体がカユくなるぜ。そう思わねえかい？）」

「（一緒にするな、我輩はまだジジイではない！）」

「（口のきき方には気を付けやがれド阿呆！）」

「（ギャアッ！）」

第三十話：嫁さん探しの旅（後書き）

嫁or妹……嫁さんとなりました

妹希望していた読者様、たいへん申し訳ございません

ナルガちゃんが出て来たおかげで、これ以上甘えキャラを出すわけにはいかなくなりました…

不甲斐ない私ですが、どうぞこれからもよろしくお願いします…

さて主人公ですが…

並みの飛竜は相手にならないどころか、並みいる上位ハンターでは討伐が困難な程強くなりました

もはやG級です

そろそろ、最強ハンターのお出ましになるかもしれませぬ…

第三十一話・遠い日の思い出……邪魔するは狂える三姉弟（前書き）

真面目な会話は難しい……

第三十一話・遠い日の思い出……邪魔するは狂える三姉弟

目の前には穏やかな海がどこまでも広がっていた……

夕陽が沈んでいく海はとても綺麗で、潮の香りは幼き頃の記憶を思い起こさせる

ただその美しい景観も、懐かしい潮の香りも……俺の心を癒やすことは出来なかった……

親父……この海の前にいるんだろう？

聞いてくれよ親父……

俺……今日、初めて人間を手に掛けたよ……

今までたくさんの命を奪ってきたけど……こんなに苦しくて……辛いのは初めてだよ……

今まで仕留めたヤツらも同じ命なのに、どうしてこんなに重苦しいんだよ……

覚悟していたはずなのに……

親父……教えてくれよ……

この辛い思いをどうしたらいいんだ？

この胸の苦しさをどうしたらいいんだ？

教えてくれよ……親父……親父……

胸が締め付けられる…
親父にすがりつきたい…
親父に慰めてほしい…
親父に励ましてほしい…

だけど親父はこの大海原の先…俺を支えてはくれない…
いつそ死にたい、そうすればこの苦しみから解放される…

でも死にたくない…命を奪う以上に、死ぬのは怖い…

俺は気付いたよ…

結局俺は、何の覚悟も持つちゃいなかったんだ…

命を奪う覚悟も…命を捨てる覚悟も…

兄弟は冷酷で残酷だけど…俺なんかよりマシだ…
兄弟は自分の行動に覚悟を示している…

ハハ…他人と比べるなんて、俺はなんて弱虫なのだろう…？

俺は最低だ…

自分勝手に臆病者の…弱虫だ…

「（ちょっと…いいかな？）」

不意に背後から声を掛けられる

振り返れば、そこには俺が先ほど助けた恐暴竜がいた…

雄か雌か判断する前に飛び出していったから分からなかったが、声色を聴く限りでは後者のようだ…

今の俺は、親方の言うようなナイトとはかけ離れた存在…

傷つき…やつれ…病んでいる…

自分を救ってくれた救世主がこんなでは、彼女の心境も複雑だろう…

彼女は戸惑いながら見つめてくるが、俺は何の反応も示さず…大海原へと視線を戻した

彼女は声を詰まらせていたが、やがて俺に近づいてくる

そして俺の横で立ち止まり、ちょこんと座り込む…

彼女は俺の横顔を見つめ、それから同じように海を眺めた…

「（あのさ…さっきは、ありがとうね？

アタシ…アンタがいなかったら危なかったよ。）」

沈黙に耐えきれなかった彼女がおずおずと話し出す
それでも反応を示さない俺に、彼女は違ったことを話す…

「（もしかして、人間を殺したのは初めて？）」

俺の心臓が高鳴った

俺はようやく首を動かし、彼女を見つめる

彼女は失言をしてしまったのかと、気まずそうにうつむく

「（初めてだ…。）」

一言そう言い放つと、彼女は顔を上げてくる

俺と目があって一瞬目を逸らしたが、やがて視線を交わらせた…

「（実を言うと…アタシも初めてなんだ…人間に遭ったの。）」

「（そうか…。）」

やはり会話は続かない…

彼女は何かを言おうと頑張っていたが、その前に俺が口を開いた…

「（息子がこんな根性なしとは…海の向こうで嘆いてるだろうな。）
」

「（海の…向こう？）

「アンタひよっとして、孤島の恐暴竜の息子？」

「（…ああ？）」

彼女の言葉に首を傾げると、彼女は回り込んで俺の首筋を見つめる

そこには幼い日、親父との特訓でついた大きな傷痕があるのだが、
彼女はそれを見つけて声をあげた

「（この傷痕…！！）

「アンタ、ルパだったんだね！？」

「（…はあ？）」

俺は彼女のテンションの上がりようが理解出来ず、再度首を傾げる

「（覚えてない？）

「アタシだよ…ああ、でも覚えてないかな…？」

彼女はそう言うと、ため息をついて表情を暗くする

理解出来ない俺が尋ねてみると、驚くことに彼女は幼い日の俺を知
っているみたいだ

「（ルパはお父さんといつも一緒だったもんね。）

実はアタシも孤島出身でさ、アタシはいつもかげで見てたんだ…。」

「（キミも孤島の…？）

「じゃあ親父の子ども…？」

「（ううん、ルパのお父さんとは関係ないよ。

孤島もあみえて広いからさ、ルパたち以外にも同族はいるんだよ。

）」

孤島が意外に広いというのは知っていたが、恐暴竜が他にもいたとは知らなかった

親父と一緒に探検していたのに、案外知らないことは多いかもしれない…

それよりも俺は、彼女の言葉に違和感を感じていた

「（聞いていいか？

ルパって…なんだ？）」

俺の問いかけに彼女は少しうろたえたが、何かを納得したように頷く

「（アタシがアナタに付けちゃった名前なんだ。

ちなみにアタシの名前はアリシア、よろしくね！）」

満面の笑みを浮かべてくる彼女に圧され、とりあえず頷いておく

しかし…モンスターに名前があるなんて珍しいな…

俺が不思議そうな顔をしているのに気付いたのか、彼女は名前について補足する

「（起源は分からないけど、アタシの一族は代々こう名乗ってるみたい。」

男だったらルパ、女だったらアリシア…ってさ。

アタシのお父さんもルパって名前で、女のアタシにはアリシアって名前がついたんだ。」

「（それで…俺にもそういう名前を付けたのか？）」

「（うん、そうだね！

むう……嫌だったら取り消すよ。」

俺の言葉が不快の現れだと思ったのか、彼女…アリシアは低く唸った俺は、構わない…と一言だけ言い放つと、再び大海原の先を見つめる

「（お父さんに逢いたい？）」

「（ああ……意外か？）」

「（ちょっとね…。」

アリシアの素直な返答に俺は苦笑いしてしまった

不思議だ……この子と話していると……心が穏やかになる
さっきまで抱いていた苦悩も、アリシアと話しているうちに薄らい
でいく

「だって、ルパが親子とは思えないくらいスパルタ受けてたんだも
ん！

絶対お父さんのこと恨んでると思ったよ！」

まあ誰でもあんな光景見たら、児童虐待だと思うだろう
スパルタを受ける俺が親に恨みを持っている、そう思われてもおか
しくない

ぶっちゃけ、最初の頃は何度か親父へ復讐することを考えていた
その復讐劇も、親父の寝相の悪さに逆に俺がボコボコにされた
今となってはいい思い出だ…

「（そんな毎日でよくグレなかったね！
感心するよー！）」

「（我ながらよく耐えたと思うよ。
いや、そんな中でも愛情を示してくれた親父が大したもんなんだろ
うな…。）」

そう言うとアリシアは、聞いたそうに俺の顔を覗き込む

その仕草に一瞬ドキツとしたが、下を向いて地面を掻く動作で誤魔化す

「（確かにグレそうにはなったよ…反抗期もあった…。

何回も親父のもとを逃げ出したし、立ち向かっていったよ…。

その度にポッコボコにされたけどな…。」

そのむねをアリシアに話すと、彼女は苦笑いする

あのスパルタを間近で眺めていたという彼女なら想像出来たのだろう

泣きながら逃げ惑う俺を、全力で追いかける親父の姿を…

「（暴力親父だったけど、同じくらい可愛がってくれたな…。

具体的に拳げようとしたらキリがないけど、とにかくそのおかげで

…いや、素直に親父が大好きだった。」

一緒に並んで寝たこと、冒険をしたこと、一緒に狩りをしたこと…
本当にたくさんの思い出がある

どれもかけがえのない大切な宝物、なにものにも変えられない…

「（お父さん…ルパのこと大切に、誇りに思ってたんだね。）」

その言葉に満足げに頷いたが、俺の気持ちは再び沈んだ

「（だけど…親父もこんな俺を見たら、嘆くだろうな…。

人間を手に掛ける覚悟も持てないで、こんなに落ちぶれて……情けないな。」

俺の声に元気がなくなっていくと、楽しげだったアリシアも真面目な表情になる

「キミを助けようとしたのも、意識してじゃなかった……直前まで悩んでいた。

感情でとっさに行動するまで、体が全く動かなかったんだ……。

大事な場面で自分の意思で行動出来ない……弱い男なんだよ。」

こんな情けない男が救世主だなんて、彼女も報われないだろうな……

「ルパは弱くない……だって他人を守ることなんて、誰にでも出来るわけじゃないもん。

直前まで悩むのだって優しさがあるから……ルパがとっさにアタシを助けようとしたのは、本当の優しさと勇気があったからだと思う。」

暗く沈んでいた俺に、彼女は優しくさとしかけるように話す
その声に引き寄せられ、俺は彼女を見つめ返す

「ルパの苦しみも分かるよ……でも今その悩みを持ったことは無

駄ではないと思うの。
苦しみや苦悩を体験したからこそ、優しさを持てるし、幸せも感じられるから。

乗り越えるのが難しいなら、ゆっくりでもいい……アタシも一緒に手助けするから。」

最後に彼女はニコツと笑いかけ、そして恥ずかしそうに顔を背けた

俺の心に来た悩みはまだ取り除けていない
でも、彼女のおかげで乗り越えられそうな気がする

俺はなぜこんなにも感情が高まるのか理解出来なかった……今は彼女に心の底から感謝した

「（アリシア…俺頑張ってみる…。
だけど人間を殺す覚悟じゃない…自然界を生き抜く覚悟を身に付ける…！）」

「（うん、一緒に頑張ろ！
アタシもルパの支えになるから！）」

俺たちは互いに微笑みあい、笑い声をあげた
彼女がソワソワしている理由も気になるが、俺は気にせず笑顔を浮かべ続けた

やがて笑い声が止まり、不意に目が会ってしまふ
冷静になって今まで続けてきた会話が恥ずかしくなり、お互いには

つと顔を背ける

嫁さん探しの旅：俺がここに来た本来の理由は頭に無かったが、彼女と一緒に居たいという思いが生まれた

何度も口を開いて声に出そうとするも、緊張感が高まりすぎてなかなか言い出せない

成り行きに任せちまえ…

親方が前に言っていたこと

今言わなければきっと後悔する……おそらく、彼女も待っているはず…

「（ア、アリシア！）」

「（は、ひゃい！？）」

勇気を振り絞って彼女の名を叫び、彼女に振り返る

アリシアは混乱しているようで、目を回してかなり慌てている

「（アリシア…お、お前…：俺と一しょ　ガサガサ！　っ！？）」

「（あつれえ？なんかいるぜ姉ちゃん。）」

突如草木を掻き分ける大きな音が響き、俺とアリシアは飛び跳ねる

「（はあ？なにが？

ほう…恐暴竜たあ良い獲物じゃねえか！！

よし、引っ込んでる武蔵！）」

現れたのは青白い光を纏った蒼い狼のような三体

光る小さな球体が体の近くを浮遊し、地面を踏む度にバチバチと音が鳴る

三体のうち一番デカイヤツが舌を垂らしながら、中央のモンスターに何事か話している

「（姉貴、アイツらいい雰囲気だけどぶっ殺していいよな？
駄目っていつてもやるけどよお…。」

「（引っ込んでる大和…。」

あのバカツプルはオレがぶち殺すんだよ！）」

「（でしゃばんなよ姉ちゃん！

アイツらは僕が仕留んだ！邪魔なんだよ！）」

現れるなり三体は険悪な雰囲気となり、場は殺気に包まれる

「（おいコラ…：テメエら何者なんだよ。）」

俺が睨みをきかせると、三体のうち姉扱いを受けるヤツが視線を受ける

獰猛な鋭い眼…まるで視線だけで生物を殺せそうだ…

「（オレの名は長門、無双の狩人ってのはオレ様のことだよ！死ぬ準備は出来たか？んじゃ、行くぜー！！）」

狂える無双の三狂雷見参

狩るか狩られるか…

生死を賭けた戦いの火蓋はきって落とされた…

大事な場面を壊す空気ブレイカーには、キツイお灸をすえねばならない

第三十一話・遠い日の思い出……邪魔するは狂える三姉弟（後書き）

恐暴竜・雌

名前：アリシア

主人公が水没林でハンターから助けた女の子

主人公は覚えてないが、同じ孤島の出身……つまり幼馴染属性を持つた女の子？

名前を持つ珍しい個体だが、親が代々名前を引き継いでるとか……理由は謎

狂える無双の三狂雷

別名：ムードデストロイヤーズ

長女

名：長門

性格：狂気

一言：暴虐

長男

名：大和

性格：強気

一言：暴力

次男

名：武蔵

性格：生意気

一言：暴走

次話にて大乱闘勃発！！

ご期待あれ！！

第三十二話・狂気こそ凶器…恐るべき狂狼（前書き）

いつもより長くなった…

文章が難しい…

第三十二話・狂気こそ凶器…恐るべき狂狼

「（長門見参！！）

テメエの首貰ったあ！！」

身も凍るような叫びと共に、雷狼竜が向かってくる
その勢いたるや、角竜の突進に匹敵する脅威を感じさせる

とつさに防御の体勢をとつた俺だが、雷狼竜は別の者に体当たりを
受け阻止される

「（テメエ何しやがる！

テメエから殺されてえのか大和！！）」

吹き飛ばされた雷狼竜、長門はすぐさま立ち上がって牙を剥き出し
に怒りを露わにする

対する弟、大和は舌を垂らしてこちらにも怒りを見せる

「（一々しゃしゃり出んなクソ姉貴！

この馬鹿は無双の狩人たるこのワシが仕留めるのじゃ、引っ込んで
る！！）」

「（ちよつと待てや！！

僕を差し置いて話し進めてんじゃねえよ！

アイツ仕留めんのは無双の狩人の僕なんだよ！！）」

もう一体の弟、武蔵も内輪もめに加わり、雷狼竜たちは俺をそっちのけで口論する

これはチャンスだと思ったが、姉の雷狼竜が弟二人を無視して俺に目を向けてくる

「（愚弟共が：おい、テメエ今逃げようとしたな？）」

姉のその言葉に、罵り合っていた弟たちも振り向く
雷狼竜三姉弟はともお怒りのようだ：

「（どうでもいいけどよ…無双の狩人つてのはどいつなんだ？
無双が何体もいたら矛盾してるだろうが。）」

三体の気を逸らすために、俺は彼らの放った言葉を追求する
見た限りこの三姉弟はとてつもなく協調性がなく、食いついてくれれば時間を稼げるはず…

「（疑問の余地もねえだるバカが：無双の称号はこのオレにのみ許されてんだよ！）」

姉の雷狼竜が自信満々に宣言したが、弟たちは豹変して姉を睨む

「（ふざけた事を抜かすでないわ！）」

無双の称号はこの大和にのみ許された称号ぞ！」

「(テメエらふざけんなよ！)

僕を差し置いて、無双なんざ名乗れるわけねえだろが！！)」

「(うつせえんだよバカ共！)

オレが無双だつて言つてんだろが！！)」

作戦成功…

俺の言葉に雷狼竜たちは食い付き、不毛な争いを起こす

「(アリシア、あのバカ共が争つてるスキに！)」

「(あああ！！しゃらくせえ！)

この際、あの恐暴竜仕留めたヤツが無双の狩人だ！！)」

時間稼ぎにもなりはしなかった…

頭がいいのか考えるのが面倒になったのか、姉の長門が怒鳴り声を放つ

弟たちもそれに同意し、姉と並んでニヤリと笑う

「(姉貴：早い者勝ちでいいよなあ？)

あのメスは美味そうだ…ワシが殺していいよなあ？)」

長兄大和はアリシアを指差し、長い舌を出して気味悪く笑う

威嚇するアリシアを俺はかばい、雷狼竜を睨みつける

「（おい兄弟いつまで……。なるほど…無粋な輩をぶちのめす必要があるみたいだな。」

「（違いねえな。若造の青春を邪魔するド阿呆は俺がひっぱたいてやる。」

俺にとって頼もしい声がある。その場に響き、雷狼竜三姉弟は来訪者に目を向ける

大和と武蔵は目を輝かせ、予想外の敵の出現に歓喜した

「（兄弟！親方！）」

「（若造助けに来てやったぞ。」

「（その方ら…兄弟の恋愛劇を邪魔したこと、後悔させてくれる！）」

親方はともかく、兄弟が関わるととんでもないことになる

兄弟は早くも雷狼竜にケンカを売り、売られた雷狼竜の弟たちは牙を剥き出して威嚇している

「(なんだテメエ?)

テメエがワシの相手をしてくれるってのか?」

「(貴様ごとき我輩の相手などつとまらぬわ。)」

挑発を挑発で返された大和は、さらに怒りを高め、大きな雄叫びをあげる

「(テメエ許さねえ!)

朱いの! テメエはワシが殺してやるわ!!」

怒れる雷狼竜を角竜は高笑いで迎える

暴君対暴狼ここに始動…

「(ケツ…バカな兄ちゃんだぜ。

にしても、僕の相手はオツサンかよ…マジがっかりだぜ。)」

弟武蔵は心底残念そうに文句をたれる

「(それはこっちの台詞だ…クソ餓鬼が相手たあ、俺も舐められたもんだ。)」

「(ク、クソ餓鬼だって!?)」

餓鬼と呼ばれた武蔵は、毛を逆立たせて激高する

簡単な挑発に乗る雷狼竜を、金獅子は不敵に笑う

「（お前さんみてえなのは餓鬼なんだよ。

ケツひつぱたいて腐った根性叩き直してやるよ。）」

「（餓鬼って言うんじゃない！

姉ちゃんにも言われたことねえのに…死にやがれ！）」

武蔵は口を開いて牙を見せ、金獅子に突進していく

しかし、金獅子はそれをいとも簡単に捕らえ、武蔵を逆さまに地面へ投げつける

武蔵も負けじと宙で反転し、きれいに着地して距離をとる

「（そんなんじゃない、他のヤツも大したことなさそうだな。）」

「（おい…兄ちゃんはともかく、姉ちゃんをバカにすんじゃないよねえよ

！！

姉ちゃんは…姉ちゃんはこの世で一番、最高の姉ちゃんなんだよ！）」

「

武蔵が狼のような遠吠えをすると、無数の青白い球体が身にまとわりつき、バチバチと電気が生じる…

それでも金獅子は余裕を崩さず、今度は楽しそうに笑う…

「（俺もちよいと本気出してやっか…。）」

始まった…兄弟と親方は雷狼竜を相手に、激しい戦いを始めた

俺の前には残った雷狼竜、三姉弟の姉にあたる雷狼竜がいる

不思議なことに、彼女は先ほどとは違って妙に落ち着いた様子で佇んでいる

そんな状況でも油断出来ないのは、彼女からとてつもない殺気が向けられているからだ…

「（なんとなくだ…。）」

彼女は不意に言葉を発する

兄弟たちが激しくぶつかり合う中でも、雷狼竜の声は俺の耳にしっかりと届く

「（なんとなくだが…今日は生涯で一番楽しい一日になりそうだ。ハハハ、血がたぎる…興奮するなあ。）」

強いヤツと戦うのは至上の快感だ…そう思わねえか？」

彼女の鋭い目を見た時、心臓を鷲掴みにされるような錯覚を起こす
どす黒く気味悪い殺気が放たれ、森の木々から一斉に鳥が飛び立つ

「（ル、ルパ……アイツなんなんだよ……）」

「（離れてるアリシア。」

激しい戦いになりそうだ。」

殺気にあてられたアリシアは震え、俺の言葉にゆっくりと頷いた

「（見せつけてくれるなあ。」

楽しすぎて、笑えすぎて、ウザすぎて、憎らしすぎて壊してやりて
えよ。」

ああもう駄目だ……我慢出来ねえ、早く死合おうぜ……！）」

「（死合は一人でやりやがれ。」

俺はテメエに構ってられねえんだよ……！）」

気が縮んでしまうような殺気をはじき、雷狼竜に向けて咆哮する
雷狼竜、長門は狂ったような笑い声をあげ走り出す

最凶と最狂、血で血を洗う凄絶な死闘が始まった……

（角竜VS大和）

自分よりもはるかに巨大な角竜に、大和は引けをとらぬ力を見せ付けていた

角竜が突進すれば、大和は驚異の瞬発力で瞬間的なパワーを生み、正面からぶつかり合う

「（又ウウ……貴様チビのくせにやりおるな。）」

「（ハハッ、テメエはどんくせえ野郎だな！）」

「（ぬかせ小童があー！！）」

怒号をあげて必殺の角を振りかぶり、地面を巻き込んで振り上げる大和は狂喜し、地面を勢い良く蹴って跳び、帯電した尻尾を角竜の側頭部に叩き付けた

凄まじい衝撃音がなり、角竜は二三歩よろめく

「（ワシは姉弟の中で一番力を持っておる！

ワシの瞬発力が力を生み出し、四肢は一撃必殺の武器と化す！クハハハ、雷に弱い貴様には、ワシの”相手”は荷が重いようじゃな！）」

「

大和は長い舌を垂らしてゲラゲラ笑う
しかし、平然とした表情を浮かべる角竜を見て、明らかに不機嫌になる

「（確かに我輩らは雷に弱い……だがそれがどうした？
落雷であろうと、我輩の闘争心をかき消すことならぬ！
ましてや貴様の静電気など蚊ほども効かぬわ！！）」

「（ほざくでない！）」

突進しかのうが無い脳筋に、ワシが負けるはずなどないわ！！）」

「（の、脳筋って言うなあああ！！）」

角竜から耳が引き裂かれるような、凄まじい雄叫びが放たれる
先ほどの余裕はどこへやら、理性は憤怒に掻き消され突進する

「（それだ、それを待つておったのじゃ！！
真っ正面から全力でぶつかり合う時をなあ！！）」

大和は垂らしていた舌を引っ込め、姿勢を低くして力を溜める
それから地面をえぐれるほどの力で蹴り、最大の力を生み出す

角竜の頭と大和の弾丸と化した肉体がぶつかり合い、派手な衝撃音が響く

「（効かぬわ！！
ドリヤアアア！！）」

「（な、なんだと！？）」

角竜の勢いは大和の力を飲み込み、そのまま突進を敢行する

大和はもがいて抜け出そうとするが、角と風圧に逃げる事が出来ない

背後には巨大な樹木があり、このままいけば大和の体は勢い良く叩き付けられる

「（おのれ角竜！！）」

だがワシはただではやらぬ！

渾身の一撃を受けるがいい！！！！」

大和が角竜の首に食らいつくと、体に纏う雷光虫が眩く光り、激しくショートした

「（ござかしい！！）」

首を振り回して大和の拘束を外し、勢いによって地面を跳ぶ

宙に浮いた角竜の巨体は、突進の勢いをそのままに樹木に突っ込む

角竜と樹木の間で押しつぶされた大和は、声にならない声をあげて倒れた

「（はあ……はあ……ハハハハ。
フハハハハ！我輩の勝利だあ！！）」

勝ち鬨をあげる角竜だったが、不意に足をふらつかせる

「（い、言っただはずだ……ワ……ワシは、ただではやられぬと……！
だがワシに勝ったところで……姉貴にはかなうまい！）」
「（黙って寝てろ！！）」

角竜は足下に転がる大和を蹴り飛ばす
蹴られた大和は、きゅーと鳴いて気絶したのだった……

く金獅子VS武蔵く

一方の金獅子は、頭をポリポリと掻きながら自分の周りを飛び回る、
青白い残光を追い掛けていた

「（ヒヤハハハ、オッサンには僕の速さについてこれねえだろ！？）」
く

「（御託はいいから、とつととかかつて来いや。）」

金獅子がだるそうに言い放つと、残光が止まり、次の瞬間稲妻のごとき速さで武蔵が突っ込んで来た

振り下ろされた鋭利な爪をかわし、金獅子はため息をついて振り返る

地面は綺麗にえぐられた三痕があり、その向こうに軽快な動きを見せる雷狼竜、武蔵がいた

「（ちえっ、惜しかったなあ。）

もう少しでオッサンの喉笛を掻き斬れたのにさあ。」

581

まあいいか　武蔵は笑顔を見せてから、再び金獅子の周囲を駆け回る

走るごとに武蔵の体に纏う青白い光は強さを増し、武蔵の動きが速くなる

やがてはその姿を捕らえることが難しくなり、バチバチという電気の音と残光のみしか確認出来なくなる

「（速度……か。）」

「（そのとおり……！）」

僕は三姉弟の中で一番の速度を持っている！

僕には兄ちゃんのような力はないけど、手数が多さと類い希なる素早さがある！」

絶対的な速さ、老いた金獅子には少し手ごわい相手だったが…金獅子は何かを考えたようで、残光を追い掛けるのを止めた

それどころか、なんと金獅子は目を閉じてしまった

「(テメエ、この僕をナメてんねかよ!?)」

当然武蔵は怒り、走りながら怒声を放つ

「(なにぶん老いぼれなもんでよ…お前さんの光を見てたら目が疲れちまったぜ。」

この責任どうとってくれるんぞい。」

「(テメエの頸跳ね飛ばして責任とってやるよ!!)」

武蔵は金獅子の背後にまわってから、前脚を振りかぶって頸を狙う

「(小僧捕らえたぞ!)」

その瞬間金獅子の体毛が突如逆立ち、黒かった体毛が黄金の毛へと

変わった

それから金獅子は振り返り、武蔵の喉に剛腕のラリアットを叩き込んだ

自信の速度が仇となり、剛腕の餌食になった武蔵は一回転して地面に落下した

「(ゲホッ！ゲホッ…！

な、何故僕の速さに…！?)」

神々しい金のオーラを纏った金獅子は、くたびれたようにため息をつく

「(気付いちやいねえだろうが、お前さん…攻撃に移る時に立ち止まってんだよ。

後は音が止まった位置に向けて、コイツを叩き込めばいいってわけだ。)

金獅子は誇らしげに腕を叩き、武蔵は憎々しげに睨みつけていた

「(テメエ金色に…。)

「(これか？俺らがキレた時になる姿だよ。

俺みてえな歳になると、大した怒りもなしに変われんだよ。)

「(グググ。テメエなんが…姉ちゃんにやられぢまえばいいんだ！

死んぢまえバガ！！」

「（どうやら、しつけがなつてねえようだな。）」

泣きべそをかく武蔵をヒョイと拾い上げ、武蔵の尻を力強くひっぱたく

それはわんぱくな子どもにしつけをする親にも見えるが、はたからみたら十中八九虐待にしか見えない

金獅子の剛腕から放たれるビンタに武蔵は泣き叫ぶ

「（痛い痛い痛い！！
ウワアアアン！！）

ね、姉ちゃん助けてくれえ！」

さんざん尻をはたいた挙げ句、武蔵の頭に拳骨をくらわせて気絶させる

気絶した武蔵を眺めていると、同じく大和を気絶させた角竜がやって来る

「（お前さんも終わったかい。）

へッ、ずいぶんボロボロじゃねえかい。」

「（あやつが可哀想だから、ワザと受けてやったのだ!!
勘違いするな!!）」

強がる角竜の台詞を流し、角竜が仕留めた雷狼竜に目を向ける

雷狼竜、大和は目を回して倒れており、なにやら頭の上を星が回っ
てるように見えた

「（あとは兄弟のみか！

まあ我輩と張り合うくらいだから、あのような雌犬に負けるはずが
なかるうな！

フハハハハ!!）」

「（いや…そうでもないみたいだぜ…見てみな。）」

「（む……なんだと?）」

先ほどまで騒がしかった水没林が静かだ…

兄弟たちの戦いが終わったみたいだけど、俺は一瞬の気を抜くこと
を許されない…

額から目の下にまで深い傷ができ、そこから血が流れていた
眼球は傷つけられてはいないが、出血で瞼を開けず、視界の半分が
封じられた

「（考え事か？

ずいぶん余裕あんじゃねえかよ。」

雷狼竜、長門は、爪にこびりついた俺の血を美味そうに舐める

彼女は息一つ乱さずに佇んでいるが、俺は呼吸が乱れ体には無数の
傷がついていた

「（うるせえ……兄弟たちの戦いが終わった。

テメエの弟たちがやられてるかもしれないぞ？）」

「（だろっな……）」

どうでもよさそうな台詞を放ち、長門は自身の爪を愛おしそうに舐
める

「（オレは孤高の雷狼竜……戦いの時は仲間なんざいらねえ。

標的と、オレのこの凶器さえありゃいいんだよ。」

危なっかしい発言だが、それが彼女の真意なのだろう

まさしく戦闘狂…

それだけをとったのなら、おそらく兄弟をも凌駕する

「（さあもう無駄話は終いだ！）」

長門はサツサと話しを切り上げ、俺ぬ向かって走り出す
傷の痛みを無視して俺も走り出すが、不意に長門の姿は消える

そして次の瞬間、俺の横腹が切り裂かれ血が吹き出す

「（遅え遅え、遅過ぎて欠伸がでるぜ！？）」

「（グツ…こんちくしょう！）」

まただ…また消えたと思ったたらいつの間にか切り裂かれている
どれだけ眼を凝らそうと、長門は寸前で俺の前から姿を消してくる
姿が消えるなんて決してありえない、出来るとすれば霞龍だけだ…

長門は再び走り出す

今度は目にも止まらぬ速さでジグザグに駆け、着地点から着地点へ

残光が靡く

あまりの速さに俺は混乱し、長門の接近を容易に許してしまった

「（壊れな！！）」

ジグザグに跳んだ先から凄まじい力で地面を蹴り、雷と速度が合わさった強靱な尻尾を叩き付ける

雷光ほとばしる尻尾の一撃をあび、俺の巨体は大きくぐらつく

長門はそのスキを見逃さず、長門は次なる大技を繰り出そうとしていた

低い姿勢から高く跳び、そこから宙返りをし、俺の脳天めがけ尻尾を振り落とす

「（そう何度もやらせるか！）」

「（ハッハハー！！
遅っせえよバアカ！）」

俺が大口を開けて噛み付こうとすると、長門は空中にいたにもかかわらず、巧妙な身体操作で回避する

長門はキレイに着地し、少し乱れた息遣いを深呼吸で落ち着ける

「（ルパ！しっかりして！）」

アリシアが傷ついた俺に駆け寄ろうとしたが、長門から放たれた殺気に阻止される
殺気にあてられ身動きが出来ないアリシアに、長門はイラついたように近付く

「（お前…さつきから五月蠅いんだよ…。
彼氏の前でその面グチャグチャにしてやるつか？）」

「（ル、ルパは…やらせないよ！）」

アリシアは涙をためてプルプルと震えるも、長門の威圧に抵抗していた

それが長門の気に触れ、長門は凶悪な爪をゆっくりと振り上げる

「（止める！彼女に手を出すな！）」

「（うっ！？）」

俺は咄嗟に走り出し、爪を振り下ろそうとした長門の体を吹き飛ばす

軽い長門の体はゴロゴロと転がったが、すぐに立ち上がって鋭い視線を向けてくる

「（アリシアは関係ない！

お前の相手はこの俺だろうが！）」

アリシアの前に立ちはだかる俺を見ながら、長門は爪を静かに舐めるそれから静かに微笑んだ

「（そんなに大事なら、守ってみせなよ……。

彼女を死なせたくなかったら、体をはってでもさ……。）」

長門が一瞬浮かべた笑みが、どこか物哀しげに見えたが……すぐにどす黒い殺気によってかき消された

アリシアを離れさせ、長門の動きに合わせて俺も動き出す

長門は直前で上方に跳ぶ動作を見せ、俺は上方からの攻撃に備える

「（若造！上じゃない！

ヤツは下だ！！）」

フィールドに親方の怒鳴り声が響いた

その声に驚いたが、親方の言葉を理解し下方に目を向ける

そこには親方の言葉通り長門がおり、姿勢を低くして俺の目を欺いていた

焦りから長門の攻撃は外れ、逆に俺の反撃を受けて吹っ飛ぶ

「(チツ…バレたかよ。)」

「(なるほどな……フェイントかよ。)

それもスピードが合わさって、高度に発展した。)」

ようやく長門の謎の攻撃方法を理解することが出来た

長門がしていたのは、俺の意識を欺く巧妙なフェイントだったのだ

長門は左に行くと思せかけて右に、上に跳ぶと思せかけて地に伏したりしていたのだ

しかし、それだけなら俺もここまで追い込まれない

長門のフェイントを完全なものにしていたのは、纏う雷光虫のおかげだ

雷光虫の力で体が青白い光りを帯びているが、それがフェイントを行う際に離れれ、注意を向けさせた方向に残光を残す

雷光虫を解除した長門が逆方向に隠れ、再び雷光虫を纏って攻撃…
雷光虫を活用した恐るべき戦法だ

「（これでもう惑わされねえ！
反撃開始だ！）」

「（上等だよ！！
フェイントはあくまで雑技、本領発揮と行くぜ！）」
長門の体に無数の雷光虫が集結し、所謂、超帯電状態へと移行する

「（お前は全力の力でぶっ飛ばしてやる！
覚悟しやがれ！！）」

長門の変異に合わせ、俺の身体は筋肉の隆起で一回り巨大化する
正真正銘、全力の死闘が再開される

「（さあ行くぜ！）」

長門が尻尾を振り乱すと、帯電した雷光虫が放たれる

俺は雷光虫を回避し、長門にショルダータックルをぶつける

攻撃の動作で停止していたため、ロクな防御もとれずに吹き飛ばされた

しかし長門は飛ばされた先で立ち直り、大ジャンプをして頭上から襲いかかる

その動きをギリギリまで見据え、首を動かして爪を紙一重でかわし、強靱な首を打ちつける

連続で攻撃を受けた長門は、ここにきてようやく苦悶の表情を浮かべた

「（仮にも…女のオレに対して、容赦ねえな。危うく惚れちまうとこだったぜ…。」

「（戯れ言ほざくなボケ！！）」

にやける長門に罵声を浴びせ、体当たりをぶつけるべく走り出す

「（来いよ、全力でぶっ飛ばして　ガッ　ああ？）」

一緒になって走り出そうとした長門だったが、脚が何かを抑えられていた

慌てて足下を見てみると、脚に蔓状の植物が絡まっていた

吹き飛ばされて受け身をとった時、たまたま蔓が脚に絡み合ってしまったようだ

「（な、なんてついてねえんだ!!
ふざけんなよ!!）」

必死になって蔓を引きちぎろうとするが、焦りはかえって仇となる
そうこうしているうちに、俺の渾身の体当たりは炸裂しようとして
いた

その時、長門は蔓を解くのを諦め俺に目を向けてきた

「（お前も最高の強敵だったぜ…）」

「（へへ…当たり前だバァカ…）」

最後に彼女は不敵な笑みを残す…
それは戦闘狂の笑みでなく、精一杯の力を出し切り、心の底から出
た表情…

俺は大きなうなり声をあげ、最高の一撃をもってこの…熾烈な戦い
に幕を下ろすのだった…

負けたぜ……

今度はもう負けないうって決めてたのに……
ごめんよ和泉……約束、守れなかったわ……

だけど清々しい……
負けたら悔しいはずなのに、全然悔しくねえ……

和泉……こんな姉ちゃんでも、許してくれるよな……？

第三十二話・狂気こそ凶器…恐るべき狂狼（後書き）

三狂雷

別名：ムードデストロイヤーズ

長門

・長女

・無双の狂犬

最狂にして最強の雷狼竜三姉弟の長女

姉弟の中で一番戦闘への執着が強く、また一番の戦闘力を誇っている
戦闘時は周りを見失い、敵を倒すことのみしか考えられなくなる

596

追記

・実は面倒見がいい？

・和泉という名の妹がいた…

・ある意味フラグ立てが一番難しい子

助けたり可愛がったくらいでは、決してなびかない

・擬人化したら、とんでもなくバケる可能性大

頼れる姉御肌

大和

・長男

・剛力の狂犬

雷狼竜三姉弟の長男

平常時も戦闘時も、相手を嘲り笑うかのように、常に長い舌を垂らしている

姉弟の中で一番パワーがあるらしい…

追記

・ワガママ

・舌を何度も噛んでいるが、垂らすのは意地でも止めない

・シスコン

武蔵

・次男

・神速の狂犬

雷狼竜三姉弟の次男

とにかく生意気でウルサイ姉弟一のお喋り野郎
姉弟の中で一番速さに自信があるらしい…

追記

・小さい体長にコンプレックスあり

・極度のシスコン

姉に対してツンデレ

第三十三話：狂犬から番犬へ…恐妻覚醒

あの空気を読まないとんでもない雷狼竜三姉弟を退けた俺たちは、来た道に戻って愛しき我が家へと帰って来た

早々に水没林から帰ったのは、親方の提案によりもの

親方曰わく、帰還しないハンターを不審に思っ**て**必ず調査しにくる…とのこと

またまたハンターの襲撃を受けたらやってられないので、角竜の兄弟の意見を無視し、帰路についたのだ

これは俺の想像だが、兄弟がハンターに襲われたら、追いついてクモ村を襲撃しそうだ…
今までの経歴から考えても、兄弟ならやりかねない

もう一つ…俺が助けたアリシアのことだが、彼女も付いて来てくれることになった

あの三バカの襲撃のせいで、お互いの気持ちを告白し合っていないが、親方の配慮でとりあえずなんとかなった…

親方恐るべし…

住処に帰った今はアイルーたちにアリシアを紹介しているのだが……

「（なんでお前らがいるんだよ……。）」

洞窟の傍らには、あのムードデストロイヤーズこと、長門・大和・武蔵の三姉弟がいた

長門はぼうつと洞窟の天井を眺め、大和は舌を垂らして寝そべり、武蔵はアイルーたちを興味津々に見つめる……。なんとも凶太い態度で佇んでいる

600

「（別にワシらがどこでどうしようが勝手じゃろ。」

ワシはこの気候が気に入ったのじゃ……。グウ……。グウ……。）」

「（あれだけのことをしでかしたのにか？

ってというか勝手に寝るな！）」

戦闘時も平常時も自分勝手な姉弟に、早くも振り乱される

こんな時に兄弟や親方が助けられればいいもの、兄弟は砂漠にとつと帰ったし、親方はいびきかいて居眠りしてやがる……

「（僕は反対したんだぜ？
アンタみたいな大食い野郎に付いてきたくねえってさ…。
だけど、姉ちゃんがさ…。」

話しを引き継いだ武蔵がうんざりしたように、無心状態の姉に目を向ける

アイルーたちもつられて長門を眺め、たくさんの視線が集まる

「（……………。）」

「（……………何か言えよ！）」

黙ったままの長門に強いツッコミをいれ、ようやく長門が異変に気付く

どうやら今までの話しは頭に入っていないようだ…

「（……………オレ？）」

「（そうだ！」

お前はなんで付いて来たんだよ！？）」

戦っていた時とは違い、長門の態度はなんともしおらしい

長門はポーツと上を向いて言葉を探し、ゆっくり俺に目を向ける

その眼も前の鋭さは無く、力が抜けそうな穏やかな目つきだ

「（うん…なんでだろうな。」

それより武蔵…可愛いアイルーたちがたくさんいるぞ。

柔らかかそうだなあ、本当に可愛いなあ。」

長門から放たれた無邪気な言葉に俺はずっこける

武蔵の方も頭をかかえて苦しそうに唸り声をこぼす

それまで初めて見る雷狼竜に警戒していたアイルーたちだったが、その優しいげな声に警戒を解き、みんな長門に寄っていった

「ニャー、すごい爪なのニャ。」

「ちょっとビリビリするけど、なんか気持ちいいのニャー！」

「ニャツ！？この体毛とってもフワフワなのニャー！」

アイルーたちはまるでおもちゃを貰ったかのようにはしゃぎ、長門は柔らかい笑顔を浮かべている

戦闘時の時とは似ても似つかない、長門のフワフワとした雰囲気、俺の高ぶっていた感情も冷めてしまった

「(チツ、姉ちゃん普段も活発だといいのに…。
いつもはああいうふうに、無気力というか…かなり大人しいんだよ。
)」

「(し、信じられん。)」

「(見てろよ…。)

姉ちゃん、敵がいたぞ!!)」

「(なんだと!?)

どこだ!どこにいやがんだ!)」

武蔵の嘘に長門はすぐさま反応し、打って変わって戦闘狂の表情に豹変する

その豹変に場のアイルーはおろか、俺もアリシアもとびあがるほど驚いた

「(ごめんごめん!)

やっぱいなかったわ。)」

「(むう…そうなのか?)

武蔵、ウソはダメだぞ?)」

「(ね、姉ちゃん可愛すぎるよこんちくしよっ…!)」

武蔵は勝手に壊れて何かを叫びながら姉に駆け寄る

「（なんだよ武蔵。

ギョツとしてほしいのか？）」

「（ね、姉ちゃん！）」

サイズの小さい武蔵を長門は優しく抱き、愛おしそうにペロペロと舐めてやる

武蔵は…嬉し過ぎて恍惚の表情を浮かべてくれたばつてる

「（アハハ……なんか、とっても意外だね。）」

アリシアは苦笑いを浮かべる

同様の反応を俺もし、深いため息をこぼす

「（はあ…俺のイライラも吹っ飛んじまったぜ。
にしても…どうしたもんかねえ。）」

「ニヤァー…！」

旦那さんその悩みはオイラに任せるニヤー!!」

「（ギヤアアアア!!」

…ってモモかよ、ビビらせんな。」

俺の目の先の地面から飛び出したモモは、偉そうに胸をはる

「旦那さん、あの戦闘狂三バカ姉弟は使えるのニヤ。」

俺はモモのその態度が気になり、胡散臭さを感じながらも耳を傾ける

「あの三バカに用心棒の仕事を任せれば、旦那さんの仕事が減るのニヤー！

そうすれば…。」

「（なるほど…そうすれば俺は自由に動けるわけか！
いい考えだモモ！

これならマリナに叱られずに遊びまわれんぜ!!」

思い立ったが吉日…俺は早速雷狼竜三姉弟のもとに向かう

ちやうど居眠りしていた大和も起き、いつものように舌を垂らして
俺を眺める

「（お前らがこの場所に棲むことは許してやるよ。」

ただ条件があるんだ。」

「（条件じゃと？」

ふざけた要件ならワシはのまぬぞ。」

「（心配すんな、これはある意味お前らにも利があることだ。」

大和は怪訝な目つきで俺を眺めていたが、俺の話を聞いたらニヤリと笑い目を輝かせた

長門のほうも悶絶する武蔵を起き、話しに耳を傾けてきた

「（ねえ大和…どういうことなんだ？）」

「（えつとな…ここに棲んでもいいけど、条件として外からやってくる侵入者を退けてくれだとさ。」

大和が丁寧に説明したが、長門はいまいち話しをつかめずポカーンとしている

「（はあ…。」

棲んでいい、敵来たらぶっ飛ばす！

これだけ。」

「（…うん…分かった。」

俺とモモは盛大にずっこける
もうつつこまないぞ…

「(ってなわけで、住処の用心棒は任せたぞ。)」

「(任せて…ちなみにオレ長門な。
よろしくな…。)」

ちよこんと地面に座って微笑む長門…

戦闘時のギャップもあいまって、俺の心にとんでもないダメージを
与える

「(な、なんだこの小動物みたいな態度はあ!!
あれか!?)

これが世間一般で言う、ギャップ萌えっていうやつか!?(?)

「(どうしたんだ?
もしかして、オレと戦った時の傷が痛むのか?)」

長門は心配そうに俺の頭をさすり、目の上にできた切り傷を舐めた

「(おいコラー!)

姉貴になにしやがんだ!!

ふざけたこと…あ、あばよ!!(?)

「旦那さん、オイラも逃げさせてもらおうニヤ！」

大和はサツサと姉と弟を回収し、モモは穴を掘って素早く逃げ去っていった

「（ルパ、ちょっとお話ししましょうねえ。）」

「（ア、アリシア!?）

待て誤解だ、俺は何もしちゃいないぞ!!

は、離せ!!

誰か助けてくれえ!!」

「（ウルサイ!!

いいから来なさい!!）」

俺はズルズルとアリシアに引きずられていき、洞窟の奥に引っ張りこまれていった…

後にその場にいたアイルーはこう語る…

「あれはボクが見た中で一番激しい乱闘だったのニヤ。

なんたつて用心棒さんの巨体が吹っ飛んでたのニヤ。

その時のアリシアさんといったら…もう恐ろしすぎて見れなかったのニヤ。

え？用心棒さんはどうなったかって？

アリシアさんが陽気に出て行った後に見たんニヤけど、それはもうひどい有り様だったニヤ。

まるでボロ雑巾ニヤ。

かわいそうに、マリナさんといいアリシアさんとい…きつと用心棒さんは嫁の尻にしかれそうなのニヤ。

たまに来る角竜さんを見習ってほしいのニヤ。」

「（なるほどねえ…。

若造もエライ嫁さん見つけたもんだぜ。

まあ……かかあ天下が平和ってこつたろうな。

さて、もう一寝入りするかねえ。」

第三十三話：狂犬から番犬へ…恐妻覚醒（後書き）

本当はこうなるはずじゃなかったのに…

まあ、悪ガキな主人公にはキツイ嫁さんがお似合いなんですよ（笑）

マリナとの修羅場が楽しみだなあ

修羅場参加者挙げときますWW

ツン10デレ0の危険あり！

最凶の妹マリナ

恐暴竜の恐妻・鬼嫁？

自称幼馴染みアリシア

ヤンデレ化の危険性大

従順なペット黒猫

戦闘時と平常時のギャップが凄い狂犬
癒やし系姉キャラ？

第三十四話：姫武者帰還（前書き）

スケジュール詰めすぎてパンクしそうだった…

ちょっとだけ力作かな？

第三十四話：姫武者帰還

どうもお久しぶりです皆さん！

買い出しついでに、街でハンター修行してましたマリナでございませす！

このたびは武者修行を終えて、はれてお家に帰れます！

カナメ様とお別れになるのは寂しかったです、兄ちゃんにも久しぶりに会いたかったから平気です！

この林をくぐり抜けたら愛しき我が家ももうすぐです！

……私誰に話してるんでしょう？

私は夢でも見てるんでしょうか？

お家がある草原を見知らぬモンスターがたくさん歩いてます…

角竜…迅竜…黒い猿みたいなのと、青い狼みたいなのが三匹…

もしかして、兄ちゃん用心棒の仕事サボった？

だからこんなにモンスターがいるの？

ハハ…頭にきました、私がないからって仕事サボって!!
絶っっっ対に許さない!!

〔被害者達〕

「スー…スー…。」

「（…姉貴の寝顔可愛すぎだろ…反則だろ!）」

大和と武蔵はため息をつき、一定のテンポで寝息をこぼす長門を眺める

「（ご主人様あ…どこですかあ?）」

首輪をはめた迅竜がキョロキョロと、落ち着きなく周囲を見渡している

ソワソワしたその様子に角竜は苛立ちをつのらせ、ついには爆発する

「(やかましいわ!!)」

ペットはペットらしく、黙って寝ておれ!!)」

「(私に命令しないで下さい!」

私に命令していいのは唯一ご主人様だけです!)」

「(下等飛竜の分際ではざくな!

この愚劣な変態女郎めが!)」

「(私は愚劣でも変態でもありません!!」

ご主人様に従順なだけです!

もう私に話しかけないで下さい、バカが移ります!)」

「(我輩こそ貴様となんぞ話しようもないわ!!」

とつとと消え失せい!)」

「(アナタが消えて下さい!!)」

「(チツ、うるせえガキ共だぜ……ったく。

おちおち昼寝もしてられねえ……ん?

なんだありゃ?)」

金獅子は視界の端から砂煙を巻き起こしながら、猛スピードで走って来る物体が見えた

金獅子はしばらく頭を掻いて眺めていたが、面倒事が起こる予感を

感じ、のそのそとその場を去っていった…

「（腹減ったなあ……あ！！

兄ちゃん兄ちゃん！！

人間がこっちに走ってくる！！）」

騒ぎを聞きつけた武蔵が飛び起き、突っ走って来る人間…マリナを指差し叫ぶ

「（人間じゃと！？

ハハハ、イキのいい獲物ではないか！！

早い者勝ちだ！）」

他の者たちも異変に気付いていく中、大和と武蔵は戦いに興奮して走り出した

「（一撃必殺サヨナラだ！）」

大和はその鋭い爪を備えた強靱な前脚を振り上げる
出遅れた武蔵は呆気ない終わりを予想したが、それは見事に外れた

「邪魔よ！！」

「（グヘアッ！？）」

襲撃者マリナは爪が振り落とされるよりも速い速度で接近し、大和の鼻っばしに強烈な跳び蹴りをくらわした

「（イッテエ…！！）」

よくもやりやがったな！！」

「サッサと…くたばりなさい！！」

「（ギャッ！？）」

跳び蹴りを当てた場所に、マリナはとんでもない威力の正拳突きをいれる

大柄な大和も鍛えようのない鼻を攻められ、大きくぐらつく

それでもなんとか倒れるのをこらえていたが…

「トドメだあ！！」

か細い足からは想像も出来ない、まるで太刀筋のように鋭い回し蹴

りがはなたれ、大和のから空きになった顎をうちぬいた
その一撃で大和の意識は遠くの彼方に吹き飛び、大柄な体は力無く
崩れ落ちた

大和を仕留めたマリナは、次に武蔵に目を向ける

「（ヒツ…!?!）」

ね、姉ちゃん助けてくれえ!!」

「逃がすか!!」

あまりの怖さに泣きながら逃げる武蔵
それを信じられない速さで追いかけて捕らえ、小柄な武蔵の首を背
後から絞め上げる

「（ギ、ギブ……!」

ぐるじい……!!）」

「聞こえないわよ!!」

武蔵の首を絞めたまま持ち上げ、背後にあつた石に後頭部から叩き
落とす

武蔵は想像を絶する激痛にのたうち回る

「次は……!!」

残るは角竜とか弱い迅竜、長門は起きずにのん気に寝ている

「次はどいつよ!」

「(ご主人様の敵、私が排除いたします!!)」

「偉そうに名乗りをあげるなあ!!」

斬破刀を手に鬼のようなオーラを放つマリナに、迅竜はサッサと逃げ去っていった

「(ええい役立たずめが!!)」

こうなれば我輩が相手だ…ぬおっ!?!」

とっさに後ろに後ずさった角竜

角竜が立っていた場所には鋭い剣が突き刺さっており、退いていなかったら足が貫かれていた

「調子に乗ってよけてんじやないわよ!!」

斬破刀の錆びにしてやるわ!!」

斬破刀を抜き払い猛然と迫るマリナに、角竜は焦りを感じて再び後ずさる

マリナは高く跳び、斬破刀を両手に持って振り下ろす

角竜はギリギリでなんとかかわせたが、マリナが大岩を一刀両断したのを見て冷や汗を垂らす

「（こ、これは手に負えぬ！
戦略的撤退を試みる！！）」

「逃げるなああ！！」

逃げ出そうとした角竜を追い掛けようとした時、この騒動の間接的な原因が出現…

「（い、一体何が起きてるんだ…？
…ってマリナ！？）」

「兄ちゃん！！」

俺がマリナを見つけて叫ぶと、マリナも同じように叫ぶ

その声に殺気が混じってるような気がしたが…くたばる雷狼竜二体と一緒に無視した

久しぶりの再会に俺は嬉しさを隠さず、マリナに駆け寄る

マリナも同様に駆け寄って来たのは嬉しいが、それはだんだんと不安に変わった…

「兄ちゃんーん！！
くたばれえええ！！」

「（なんだって！？
つて、どわああああ！！）」

すれ違いざまに斬破刀の鞘で頭とすねを叩かれ、激痛で体勢を崩して転倒する

「（イテテテ…いきなりなにすんだよ！！）」

「うるさいうるさい！！
兄ちゃんを信じてた私がバカみたいじゃない！！
これは制裁よ！」

起き上がろうとした俺の頭に跳び膝蹴り、再び倒れた俺に踵落とす……高威力の連撃に俺はたまらず湖に飛び込んで逃げる

しかし尻尾の端をがっしりと掴まれ、ズルズルと陸地に引っ張られる

「(恐暴竜の俺を引っ張るなんて、お前本当にマリナかよ!?)」

「正真正銘私よ!」

そして怒れる乙女は世界一強いの一!」

一方……

「(んん…つるさいなあ…。)」

あまりのつるさに、深い眠りについていた長門が起き出してきた

「(ね、姉ちゃん…!」

た、助けて…!)」

「(おはよ武蔵……なにかあったの?)」

寝起きで醒めきらないため、長門はぼーっとしている

「（敵だよ敵い！！）
とんでもない強いヤツ！」

「（てき……敵……敵だと！？
よっしゃー、オレがぶちのめしてやるぜ！
テメエはどきやがれ！！）」

「（ギヤアツ！！）」

目の前の武蔵を軽くふっ飛ばし、大きな遠吠えをする
すると長門の体に無数の雷光虫が集まり、一気に超帯電状態と化した

「（見つけたあ！！）
せいぜいオレを楽しませろよ！？）」

「んぎぎぎ……往生際が悪い……諦めて陸に上がりなさいよ……！」

「（い、嫌だ……！！）
それより、ゆっくり……は、話し合わないか！？）」

「……遺言？」

聞いてあげるわよ。」

マリナがパツと尻尾を放し、抵抗していた俺の体は前のめりに湖に落ちた…

それから俺は、マリナが街に行っていない間に起きたことを話し出した

角竜と古い因縁に決着をつけ、兄弟分の関係になったこと…

樹海でエスピナスと戦いペットを拾ったこと…

遠い地に行って仲間（嫁のことは伏せて）を見つけたこと…

そしてマリナがいなくなって自分がどんなに寂しかったかを、素直な気持ちで話した

話しを聞いてくれるうちに、マリナの表情から険がとれていき……
聴き終えた後目を閉じて黙した

「とりあえず…仕事をサボったわけじゃなかったんだね？」

ゆっくりとまぶたを開いたマリナの目には、うつすら涙が溜まっていた

「(う、うん……。」

お前なに泣いてんだよ……。」

「うっさい……！」

兄ちゃんがクサイ台詞言うから……欠伸が出ただけよ！

感動して……泣いてるわけじゃないんだからね……！」

マリナは湖の水で顔を洗って涙を誤魔化すと、じっと俺の体を見つめてくる

その目は俺の傷を見ているようで、マリナは俺に近寄るとソッと傷の一つを撫でた……

「ずいぶん……無茶したんだね。」

……傷も塞がらないうちに暴れてたんでしょ……？」

マリナは悲哀を感じさせる声でそつつぶやき、傷を癒やすように撫でる

それからその手を俺の横顔まで滑らせ、もう片方の手も使って俺を抱き締めた……

「寂しい思いさせてごめんね？
それと……。」

「ただいま、兄ちゃん。」

「……ああ……おかえり……マリナ。」

本当なら俺も抱き締めてやりたいが、竜の俺にそんな器用な腕はない……
それでも十分にマリナの思いを感じることが出来る……

「（オラオラオラア！！
ソイツはオレの獲物だあ！！）」

完全にヤツの存在を忘れていた……

「な、なによアイツ！？」

「お、お前……！！」

「少しは空気読めええ！！！！」

ムードデストロイヤー長門は空高く跳びあがり、俺とマリナのいる湖に落下…

大量の雷光虫が水を浴びてショートし、俺たちは仲良く感電したのだった…

「（ああん？

大和と武蔵の小僧が倒れて、恐暴竜の若造と長門の嬢ちゃんに人間の娘が浮いてやがる…。

角竜の坊主はいねえし…アイツがやらかしたのか？

そうちにちげえねえな…。

ほう…砂漠に逃げやがったか…。

とっちめてしつけてやらねえとな。（「

哀れ、もう一体いらぬ犠牲者が増えることになった…

第三十四話：姫武者帰還（後書き）

〈砂漠〉

お…親方ではないか。

ほほお、金色になって強そうではないか。
何をしにこんな砂漠にまで来たのだ？

ん……？

プレゼント？

それは楽しみだのお…。

ムツ…腕を振りかぶってなにをしているのだ？
もしや面白い手品でも見せてくれるというのか？
フハハハ、ぜひここで我輩に披露してくれ。

〈お終い（色々な意味で）〉

マリナのツンが書きたかった…
マリナのデレも書きたかった…

つまり、私はマリナが大好きということであります

これはまだ修羅場ではありません…
十分修羅場かな？

そして長門は……うん、空気読めや…

第三十五話：黒い邂逅（前書き）

独自設定・解釈あり？

第三十五話：黒い邂逅

あの後親方と奇面族たちに救出され、草原に負傷者共々寝かされていた

俺を溺死寸前に追い込んだ長門はというと…

「（敵はどこだああ！！）」

…と叫びながらさんざん駆け回った挙げ句、火山のある方角に走り去っていった

「（ルパ……大丈夫か？）」

正直に答えると全然大丈夫じゃありません…

マリナの情け容赦ない制裁と水中の高圧電気の感電で、今でもピクピク痙攣している

そしてマリナよ…なぜピンピンしている？

さっきの戦闘力といいその青い防具といい、街で一体何があったんだ？

まあ…そのチラリズムを極めたような防具はなんとも…

「まったく…とんだ帰省になったわよ。
あの狼みたいなの後でとっちめてやるわ。」

「（止めとけや…。
長門は空気読まないし滅茶苦茶強いからよ。」

「兄ちゃんが素直に言うんだからよっぼどのね。
……って、みんな何見てんのよ…?」

俺も首だけを動かしてみると、皆一様にポカーンと口を開いている
冷静沈着な親方も同様の反応を示していることから、何かとんでも
ないことが起きてるに違いない

「（あの、ご主人様…?
そちらの方は…えっと、本当に人間ですか?）」

「なによこの黒猫みたいなの！
どっからどうみても人間に決まってるじゃない!!」

「（キヤアアア!!
なんで私の言葉が分かるんですかああ!?
やっぱりお化けです!）」

迅竜は悲鳴をあげて飛び退き、大和の背後に隠れた

「誰がお化けよ!!
ちよつと兄ちゃん!
ちゃんと寐してるの!?!」

「(話しが進みやがらねえな...。)」

見ていられなくなった親方が重い腰をあげ前に出る
そしてマリナをまじまじと見つめた後、俺にみんなが慌てている理
由を話す

「(若造この人間の嬢ちゃんは俺らの言葉が分かってんのか?)」

「(はあ...?」

あ...そういえば...何でだ?)」

俺は今まで深く考えたことも、気にしてもいなかった
改めて考え直してみると普通じゃ考えられないことだ...

「(おいマリナ...なんで俺らの言葉が分かるんだ?)」

気になった俺が問い掛けてみるも、マリナも首を傾げる

今まで無自覚に意思疎通してきたので、それが何故なのかなど思ってもいなかったのだろう…

「まあ、でもいいじゃない。

困るものでもないし…むしろ面白いじゃない。」

「（いやいやめっちゃ気になるんだけど…。」

「女の子は少し謎めいていた方がいいのよ？」

「（…それ誰に教わったんだ？）」

するとマリナはぽつと頬を赤らめ、恥ずかしそうに手を当てる

その仕草に俺の心に亀裂が走り…

「（カナメ様に教わったの…。」

あの日の夜…忘れられないわ…：…はあ…。」

そして艶めいた表情で放つ言葉に、俺の心と涙腺は崩壊した…

「（うわああああん！！

マリナが…マリナが寝取られたああ！！）」

「なっ…！？」

ちよつと誤解よー！！」

マリナは慌てて説明をしようとしたが、精神をズタズタにされた俺は大量の涙を噴出させて逃げ去っていった…

「もう…カナメ様と一緒に星空眺めてただけなのに…。」

「（あのさ…ちょっといいかな…？）」

振り返ると同じ恐暴竜のアリシアがいた
マリナはもはやモンスターの声色と、微妙な外見の違いで性別を区別出来る

アリシアを女性と判断したマリナに、一つ思い浮かんだ

「もしかして兄ちゃんのお嫁さんですか？」

「（ふえ…！？）

い、いきなり何を言うの！？

あ、アタシはそんなんじゃない…！！（）」

「うふふ、可愛い…！！

私マリナっていいいます。

兄ちゃんのお嫁さんなら、私のお姉さんになりますね。」

早くもマリナの調子にながされ、アリシアはオロオロと戸惑う
とりあえずアリシアも自分の名を教えると、マリナはニッコリと笑
いかける

「いいですねえ…兄ちゃんにもお嫁さんが出来るなんて…。
でもそれだけですからね？」

「（えつと…はい？）」

「勘違いしないでくださいね…：兄ちゃんの妻としての座はあげま
すけど、それ以外は全部私のものですから。」

兄ちゃんの世話も、暮らしも、愛情も…

斬破刀を撫でながら笑うマリナに、アリシアはブルツと身震いする

「でもそれじゃあアリシアさんがあまりに不憫だから…：一つ勝負し
ましょう。」

私たちのどちらが兄ちゃんをなびかせられるか…：勝った方がはれて
愛情を受け、負け犬は潔く退くんです。

あ、今のままでいいなら結構ですよ…：その場合は私の勝ちにさせて
もらいますから。」

最後に意地悪く微笑む

「（上等じゃん……アタシは別に嫁にこだわってないけど、なにもしないで負けるのは性に合わない。その勝負受けるよ！）」

「うん……いい覚悟ですね。

それでは早速……あれ？」

振り返った先にはすでに兄ちゃんはいない……

マリナは自分の言葉のあやで精神崩壊して逃げ去ってしまったことを思い出す

「（へへ……今ごろルパの評価下がってんじゃないの？
妹のマリナちゃん……？）」

「うぐぐっ……！！」

まだ勝負は始まったばかり、それに兄ちゃんはそれくらいで私を嫌いになりません！！

っていうか、ルパってなんですか！？

勝手に兄ちゃんに名前を付けないで下さい！！」

「（マリナちゃんには絶対に負けないよ！！）」

「兄ちゃん帰ってきたらぶっ飛ばしてやるわ！！
とにかく、兄ちゃんは私のものー！！」

お互いに激しく火花を散らすマリナとアリシア

初対面の挨拶はお互い最悪の印象となった…

「（おい、テメエは混ざらねえのか？

テメエもあのクソボケのこと好きなんだろ？）」

大和が背後でプルプル震える迅雷に声をかける

「（好きですけど…あの方々に勝てる気がしません！！）」

「（ケツ…やる前に無理って決め付けてんじゃねえよ。

何もしないで諦めるより、あたって砕けるくらいの根性見せやがね。

）」

大和はダルそうに欠伸をすると、武蔵をたたき起こして洞窟へと向かっていく…

「（なんなんですか…。

言われなくてもやってみせますよ…！！）」

「（若造共が青臭え青春劇見せやがって……。にしても竜と話す人間か……。老山龍のことといい……。デカいことが起きそうだぜ……。）」

金獅子は意味深な言葉をつぶやき、ゆっくりと空を見上げる
空はどこまでも広く、澄み渡っていた…

「（あれからだいぶ経つな……。ちよっくら、シュレイドの城でも訪ねてみるかい。）」

第三十五話：黒い邂逅（後書き）

長く考えてきたことですが……ラストステージはあの場所に確定……

アイツをラストに持って来ると……高確率でバッドエンドになる気が……
マズい、せつかく再構築したストーリーが……

さて、そろそろ討伐隊を出しますかね

あと、連日の更新で内容の質が低下したのを感じられたので、内容を良くするためにしばらく更新停止、もしくは亀更新となります……

激戦の火種…（前書き）

ちよいと真面目なお話し…

激戦の火種…

「（……どいよ…？）」

あれから闇雲に火山を走り回った拳げ句、その場にいたモンスターを皆殺しにした長門

敵がいなくなつて落ち着いた長門は帰ろうとしたのだが、ここらの地理に明るくないため当然のごとく迷子となる…

ときとうに進んで火山を抜けたはいいが、今度は密林に入り込んでさらに道に迷う

「（…つたく…バカ弟共…）」

迷子になるから絶対にオレから離れんかって…言ったのに…。」

見知らぬ地…徐々に暗くなつていく密林…

勇猛な長門でもさすがに不安になるかと思われたが、のんきに欠伸をかいている

「（…ん…満月か。）」

月光に映し出される孤高の雷狼竜…

長門は湖の波がうつつ砂浜にちょこんと座り、満月に向かって一声鳴いた…

狼のようなソレは密林の隅々にまで響き、悲哀のあるその鳴き声は儂げで耳に残るような美しさを持っていた

「（嵐はまだ去らねえが…オレらの故郷は…絶対取り返してやる…。）」

長門のたたずまいに変化はない…

しかし、長門の体から放たれる殺気は増し、無数の雷光虫が集まっていた

「（月夜の殺戮劇…今夜は血の雨が降りそうだぜ…。）」

それまで穏やかだった表情を一変させ、高揚感をあらわにする振り返れば得物を構える二人の人間…

「（今夜の観客は満月…最高の殺し合い！

テメエらの鎮魂歌はオレが奏でてやる…オレ様の勝利の雄叫びでな

！」

暗闇に輝く蒼い雷光…飛び交う怒声と断末魔の叫び…

数秒後には狼のような声をあげられ、その足下には赤い物体が乱雑していた…

俺の名はシーザー…

俺たちは最近ここらで目撃情報が頻繁にあがる、恐ろしい外来種の調査をしていた

俺はそのモンスターの研究論文を読んで戦慄した

かつてそのモンスターがある地域に根付いた例がある

そこは温暖な気候でたくさんの方のモンスターがいたのだが…わずか数ヶ月で墓場と化したらしい

これが本当だとしたら、この地も生命の消えた呪われた密林と化す…

鳴き声を聞いた…俺が今まで聞いたこともないモンスターの声だ…

後輩へしていた説明を投げ出し、俺は声のした方角に走ったのだが…
遅かった…

俺が連れてきた仲間は無惨に殺されていた…
仲間の一人がかろうじて息をしていた…しかし傷は深く出血も多
い…

おそらく助からない…

後輩は彼の命を救おうとしたが、その手を掴んで首を横に振る…

代わりに俺は、彼の苦しみを和らげようと、痛覚を鈍らせる薬を投
与する

息も絶え絶えな彼は、必死に口を開き俺に何かを伝えようとする
俺は彼の手を握りしめ、その言葉に耳を傾けた…

家族を…頼む…

徐々に力が抜けていく手を握りながら、俺は力強く頷いた…
それから彼の開いたまぶたを閉じてやり、彼をそっと地面に下ろす

「連れて帰るぞ…。」

後輩は俺の言葉にすぐさま頷き、もう一人の死者をかつぐ

俺はもう一度彼の顔を見つめ、頬についた血を拭う

彼とはハンターに入門した頃からの付き合い

彼はカナメの率いる猟団に、俺は伝説のハンター”ヴラド”のパートナーとなつてからもよく狩りを共にしていた…

狩るか狩られるか…何度も覚悟しているが、別れはやはり悲しい
友に流す涙はすでに枯れたが、心はまだ廃していない…

ヴラド……どうやら…俺たちの出番のようだ

激戦の火種…（後書き）

シーザー

武器：全般

防具：リオソウル

（外見は下位、防御力はG級）

最強のハンター”ヴラド”の相棒として、主に古龍観測局の依頼を請ける

謎多きハンターだが、ヴラドと共に何度も死線をくぐり抜けてきたことから、かなりの実力を持つとされる

一言……長門なにやってんだあああ！！
死亡フラグ立っちゃったじゃねえか！！

やばいやつと戦う前に主人公ら死んでしまう！？

まあ…なんとかなるでしょう

そついえば初心に帰って転生ものを妄想してたら、面白そうな企画を思いついてしまいました(笑)

題材はすばり、数の暴力!!

転生ものは個人無双多いんで、こんなのがあつたらおもしろいかな?

って思いました…

暇さえあつたらそのうち書いてみたいですね…モンハンの数の暴力…自然な流れになると思います

第三十六話：討伐隊結成（前書き）

全てハンター視点…

第三十六話：討伐隊結成

都市には豊富な物資と各地から集まる特産品があり、それを求めて地方からも人が集まる

ドンドルマの街には多くの露店が並び、広場は活気に満ちる………いつもの見慣れた光景だ

その活気に満ちた通りを、一人の女性が通る
ストリートロングの銀髪を小刻みに揺らす麗人に、通りの人々は皆振り返る

そして彼女の背にある、鎧と同じ深みのある蒼い太刀を見て、彼女が何者なのかを知る……

彼女は真っ直ぐに集会所：街や地方から来たハンターたちが集まる場所を目指す

集会所に入ると、昼間から酒を飲む飲んだくれと、狩りから帰還したハンターが騒いでいる
これもいつもの光景だ……

彼女と初めて話す人間は、たいてい緊張するか恐れを持つ
顔立ちは整っているが、比較的長身な体とそのつり目が相手にキツい印象を与えるからだ

いつもはその後に笑顔を向けられるのだが、今日の彼女は苛立ちを抱えているためソレをさらに助長させていた

受け付けにいる新人も例外でなく、彼女に話しかけられて言葉が噛み噛みになる

彼女は要点のみを聞き出すと、軽く礼をして集会所の端の空いた席に向かう…

席に向かう途中に同業者の一人に止められる

そのハンターは食べ物を口に含んでいるようで、水を飲んで含んだものを飲み込む

彼女は表情に出しはしないものの、不機嫌さが感じられる
それに対し男性は笑顔を見せる

「いやあ、今日も可愛いねえ。」

今からどっか遊びに行かない…カナメちゃん？」

「生憎そういう気分ではありません。」

カナメは男性に冷たく言い放つと、銀髪をなびかせて席へと向かう

男性は大きなため息をつき、同席のハンターたちは大爆笑していた

席についたカナメは、腕を組んで目を瞑る

彼女は先日、自分が率いる獵団のメンバーの訃報を聞いた

任務は外来種の調査

それはかつて自分が発見したことであったが、多忙な自分に代わって団員の一人が任務に付いていたのだ

訃報を聞いてからというもの、彼女は毎日こうして集会所に足を運んでいる

ギルドでは外来種の討伐について検討している

すでにこのことは周囲に漏れており、ハンターたちも依頼として張り出されるのを心待ちにしていた

ハンターたちも未知なるモンスターに、狩人魂が奮い立っているのだろう…

当然、カナメはそのような考えを持つハンターを快く思っていない
そういつたハンターに依頼を先取りされぬよう、こうして目を光らせている

新規の依頼が張り出されるのは日が昇っているうちがほとんどだ
日が傾いて夕方に近づいた時、カナメはようやく席を立つ

「今日もなし…か。」

カナメは一言そうボヤくと、受け付けの前を通過して出口へ向かうが……ギルドの職員に引き止められた

職員に真摯な態度で挨拶をし、引き止めたわけを尋ねる

「カナメ様：たった今、お決まりしました。」

職員が差し出してきた依頼書に、カナメは目を見開く
冷静沈着で表情をあまりおもてに出さないカナメでも、今回ばかりは驚愕の表情を浮かべた……

依頼の種類はいくつかある

採集、狩猟、討伐……そして討伐には二種類ある

一般的な飛竜や牙獣種のもの、特殊なモンスター……主に古龍級の
モンスターのものだ

そして今回の依頼書の種類は後者だった

聞けばその外来種は古龍よりは研究がされ、分類もされているとか……
古龍以外で最上級の依頼に分類されるのは、正に前代未聞だった

早速カナメは依頼を請けることを口頭で伝え、装備を整えるために
出口へと走った

しかし寸前で出口が開き、カナメは慌てて立ち止まる
立ち止まったところ、顔面をガシツと捕まれた

「相変わらず騒々しい女だ…常に冷静であれ。」

逃れようともがいていたカナメだったが、聞き覚えのあるその声に、
抵抗を止める

「ヴ、ヴラド…!?!」

カナメの顔面を鷲掴みにしていたのは、黒い防具に身を包むヴラド
だった

全身を鎧で固めているが、覇竜の防具は唯一ヴラドしかないので、
一発で彼だと理解した

「久しぶりだなカナメ。」

「む…貴方はシーザー殿？
久しぶりでございますな。」

蒼火竜の防具のハンター、シーザーとカナメは互いに挨拶を済ませる
ヴラドはそれに頷くと、大股で受け付けへと向かう

「ヴラドだ……上からの命令で恐暴竜討伐に参加する。」

騒がしかった集会所はいつの間にか静まり、ヴラドの声が響きわたった

戸惑う職員だったが、仕事はきっちりこなす

カナメが覗き込んでみると、ヴラドは依頼書に名を記入していた

「ヴラド…貴方もこの討伐隊に？」

「……上から…討伐参加命令があつてな。

過去に恐暴竜とやり合ったことから、経験者として向かうことになった。

今は老山龍で忙しいというものを…。」

「ずいぶん…やる気がなさそうだな…。」

「そう思われたのなら謝罪しよう……。」

ヴラドも当然、今回の事件については聞いている

自分の態度が相手を不快にさせた知り、素直にわびたのだ

清廉潔白…それもヴラドが同業者から慕われる理由でもあった

カナメは少し戸惑いながらも平静を装い、依頼書へと目を向ける

特殊な討伐とはいえ、参加者は最大で四名
カナメとヴラド、シーザーで三人…あと一名残っていた

この依頼はギルドから直接出されたもので、成功すればそのハンターの名声も上がる
しかし、街で相当名が売れている中に混ざって行くこととする、勇気あるものはいなかった

集会所を見渡せば、一様に顔をうつむかせる
シーザーは呆れたように首を振り、ヴラドに声をかける

「ヴラド、あと一名の参加は無しのようだ。」

「構わん……強制する気はない。」

未知なる存在である恐暴竜を恐れるのは当然だ。」

「いや、みんな貴方と行くのが恐れ多いだけなのでは？」

そうツッコミをいれたのはカナメ

おそらく集会所の全ハンターが、内心でそう思っていたことだろう
シーザーが依頼書をちらつかせ、ヴラドが頷いたのを見て最終手続きに移ろうとした時だった

沈黙に包まれる集会所の中から、一人の青年が名乗りをあげた
青年は集会所の真ん中を横切り、ヴラドの正面にまで歩み寄る

「いい根性だな貴様…名は？」

シーザーは迅竜の防具に身を固めた青年を、品定めするように眺める

「シヴァです!!」

憧れのお三方と狩りを共にしたく、参加を決めました！」

「別に募集はしていなかったがな…。」

「からかうなシーザー…。」

シヴァ、君の参加を快く思うが…私に対する評価は忘れておけ。」

656

シヴァはその言葉に疑問を覚えたが、ヴラドは気にせず入ってきた場所とは違う出口へと向かう

「ま、待てヴラド!!」

今いくのか？まだ私は装備を整えていないぞ!？」

「大丈夫だカナメ。」

その龍刀のままがいい。

お前もな…坊主。」

シヴァの腰には片手剣の、封龍剣・絶一門がある

「恐暴竜には相性の良い属性だ……。
まあ…お前たちがてこずっても、私が速攻で仕留める。」

そう言うヴラドの背には、銀色の銃槍エンデ・デアヴェルトがある
ヴラドにとって使えない武器などなく、どれを使用しても達人級の
力を発揮する

中でも大剣やガンランスなどの、重量がある武器の扱いはずば抜け
ていた

今回は改造ボウガンはないが、投擲用に片手剣を装備したスタイル
は健在だ

「ヴラドさんは銀火竜も討伐したというのですか？」

シヴァは驚いた表情で、隣を歩くシーザーに質問をする

「ある日いなくなったと思ったら……一人で仕留めて来たのさ。
希少種を一人でだなんて、欲張りなヤツだったよ。」

「ハハ…いまさら恐ろしくなって来ましたよ。」

「心配するな、ヴラドはいいヤツだ。」

…アイツを倒せるのは、幻級の古龍しかいないだろうな。」

「コラ…早く行くのだ。」

日が暮れてしまっではないか。」

カナメは仇討ちとあって、かなり張り切っているようだが集会所の中で抜刀しているのはどうかと思う…

「はいはい…せいぜい気負いすぎないことだな。」

「うむ、聞いたかシヴァ君。」

「いやお前に言ったんだよ。」

まあ……その様子ならどんな敵が来ても大丈夫だな。」

集会所の出口でヴラドが三人を待っている
三人は小走りに駆け、いざ…未知なるモンスターとの戦いに挑むの
だった

人類史上最も苛烈で、最も凄惨な戦い…

大都市を巻き込むことになる討伐戦の序章が始動する…

第三十七話・出会ってはならない存在（前書き）

ふっつかーっ！

第三十七話：出会ってはならない存在

そよ風に揺れる草原の草、遠くで群れをなすアプトノスたち…いつもと変わらぬのどかな光景だ

今日は珍しく騒がしいヤツらがない

だいが俺の家に居候していた兄弟だったが、昨日帰っていったおそらく砂漠にいる角竜の嫁さんとイチヤイチャしてるのだろう…イヤなヤツだ

親方はよく分からないが、今朝少し出かけるといつてどこかに行った目的もなにもないなら、いよいよ痴呆症になったのかもしれない

660

黒猫のヤツは……鬱陶しいから遠くの森に隔離しておいたたぶん迷子になっていることだろう

長門は前に火山の方に向かってから失踪、大和と武蔵が姉探しに旅立った

曰わく、姉はすさまじい方向音痴らしい前には、迷子になって大陸の端から端までさまよっていたらしい

アリシアについては、さっき張り切ってどっかに走って行ってしま

った

マリナがガッツポーズを決めていたが、何があったのだろうか？

まとめるなら、今は俺とマリナしかいないということだ

といってもアイルーや奇面族はいるが、彼らは基本のんびりと過しているのだ

「（マリナ、森丘に行かないか？）」

昔に森丘へ向かったことはあるが、その時は自分が未熟だったのと、飛竜がいたことで諦めていた
最近飛竜のつがいがいなくなったらしく、縄張りを広げるチャンスだった

俺だけで行くのも虚しいのでマリナ誘ったわけだが……快く頷いてくれた

マリナの笑顔を見て、久しぶりに生きてて良かったと思った…

「ヴラド…恐暴竜は密林で目撃されたというのに、なぜ森丘を通っていくのだ？」

ドンドルマを出立した四人は目的地に移動していたのだが、何故か密林に真っ直ぐ向かわず、森丘を通っていたのだ

これはヴラドの命令によるもので、行動の真意が読めないカナメが質問したのだった

「うむ…目撃情報を整理すると、恐暴竜は密林のベースキャンプに近い位置に出没している。

ヤツがキャンプを襲わないとも限らるのでな…この地を經由して密林へと入る。

そのために、物資をたくさん所持してきたのだ。」

四人の後ろには、ヴラドの家畜であるアプトノスが二匹いる

アプトノスに多くの物資を背負わせており、長期間の狩猟にも対応できる

たかがモンスター一匹に大げさでは？

…と青年ハンターシヴァが呟くと、シーザーが軽い笑みをこぼす

「ヴラドはほとんどのモンスターと戦ってきたんだ。ソイツが言うんだから、そうなんだろう。」

シーザーの言葉にシヴァは頷く
ただのハンターなら信憑性は無いが、ヴラドの経歴を知っていれば
例え嘘でも信じられる

「たわごとだ…私はたんに慎重な行動をしているにすぎん。
実力があるものは他にも…これは…」

「む…どうした？」

ヴラドはなにかを見つけたようで、突然しゃがみこんだ

三人もヴラドが調べる地面を見てみると、草が踏みしめられて出来
た大きな足跡があった

「よくこんなの見つけたな。」

「たまたまだ…」

それより…これはごく最近出来たもの、そしてこれは恐暴竜の足
跡だ。

「…いるな…ここに。」

ヴラドは立ち上がり、草に出来た足跡を辿っていく
しかし足跡はいくつもあり、それが様々な方向に向いていた
それも何度も行き来しているらしく、足跡から探していくのは困難

だろう

「手分けして搜索するぞ。

恐暴竜を見つけたら報せる…決して単独で挑むな。

カナメ：お前は私と来い、シーザーとシヴァで森の方を搜索しろ。」

「よろしくな坊主。」

シーザーはシヴァの頭をペシペシ叩く

当のシヴァは憧れのハンターと二人きりになれ、かなり喜んでいる

「いいな…絶対に恐暴竜を甘く見るなよ。

見つけたら必ず報せる。」

「分かった。

では行くぞ坊主。」

「はい！！」

「さて…我々も搜索を開始するぞ。」

「了解した。」

二人を見送った後、ヴラドとカナメの二人は搜索を開始する

カナメは仇討ちとあって張り切っている

恐暴竜を早く見つけたい一心で、草地に残る足跡を睨んでいる

対してヴラドは穏やかに空を眺め、クーラードリンクと活力剤を飲んで

しばらくは足跡を辿ることに専念していたが、ヴラドの気楽な様子に不満をこぼす

「ヴラド、やる気はあるのか？」

貴方も手伝ったなどうなのですか？」

「静かにしている。

空気が乱れ…鳥のさえずりが聞こえぬ…。」

「貴方は…いいかげんにしてください。」

言動に怒ったカナメは足跡を辿るのを止め、抗議しようとヴラドに向き直る

するとヴラドは、人差し指を立ててカナメの抗議を遮る

「鳥のさえずりが止まった……何かいるぞ。」

「なに……？」

カナメもならって耳をすませてみる

確かに、鳥のさえずりはいつの間になくなっていた

それからヴラドはゆっくり前方の岩場を指差し、小声でつぶやく

「あそこだ……備えろ……。」

ヴラドは腰の片手剣を抜き、投擲の構えをとる

カナメも音を立てないよう龍刀を抜き、いつでも攻撃出来るよう構えた

「来るぞ……。」

その言葉に気が引き締まり、カナメは緊張感を感じた

「もう……兄ちゃんだったらどこ行ったのよ……。モスさん知らない？」

「……フヒ？」

岩場から姿を現したのは恐暴竜ではなく、モスを伴う見覚えのある

少女…

「マ、マリナ!？」

「ん……？」

えっ……カナメ様!？」

それにヴラドさんまで!？」

マリナはヴラドたちに気付くと、オロオロと慌てだした
そばのモスも一緒になってオロオロしている

「ほう……確か君は雪山出身のはずだったが、ここらでも活動していたのか。」

「いえ、ここに来たのは今日が初めてで、兄ちゃんの付き添いです……。」

「それはそれは……だが、お前に兄はいないはずだが？」

マリナは笑顔を浮かべているが、内心かなり焦っていた
ヴラドは父と親友だった……自分が一人っ子だということも知っている

「そ、それよりヴラドさんたちは何をしにここに来たのですか？」

「恐暴竜を討伐しに来た……ここらで大きなモンスターを見なかつ

たか？」

覇竜の頭装備で見えないが、探るような声で尋ねてきた

「大きなモンスター…ですか？」

わ、私を知る限りでは見ませんでした…。」

「…本当か？」

猜疑心をもって問い詰めるヴラドに、マリナはできるだけ平常心を保つ

恐暴竜の存在がバレたら、きっと彼らは命を狙う

どちらにも関係を持つマリナには、この危険な遭遇を回避させなければならなかった

マリナは恐暴竜の存在を否定する

それを聞いたヴラドはしばらく黙し、それからため息をこぼす

「何故…貴様は嘘をつく？」

その言葉に、マリナは明らかに動揺した

「微表情というものだ…貴様は嘘を付いた時、僅かに目をそらして

いた。

恐暴竜の存在を隠すとは…よもや手柄の独り占めを狙っていたのか？」

ヴラドがあげたのは例の一つ…そこからさらに探るうとしている

もはやへたな言葉ではヴラドの気をそらすことは出来ない
カナメも腕を組んで成り行きを見守っている

「ほ、本当に恐暴竜なんていません！
ここには何もいません！」

「貴様が何故隠したがるのかは知らんが…。
邪魔立てするなら貴様であろうと容赦はしない。」

「そんな…！
カナメ様！」

マリナは最後の希望である、カナメに目を向けた
しかし、カナメの表情は固く、首を横に振るだけだった

「周囲の観察から恐暴竜の居場所は把握出来ている。
…行くぞ。」

この成り行きに飽きたヴラドが背後のカナメに声をかけた時…

「…どついつつもりだ？」

「ひ、退いてください…。」

今すぐここを立ち去ってくれれば、手は出しません。」

斬破刀の銀色の切っ先がヴラドに突きつけられていた
斬破刀を握るマリナの手と、忠告を放つその声は震えていた…

「マリナよすんだ！

一体恐暴竜に何があるというのだ！？」

「…カナメ様、お願いです！

何も聞かず立ち去って下さい！」

「マリナ…！！」

カナメはこの状況を打破する方法を考えていた
なんとかマリナを説得しようとした時、ヴラドに止められた

「もついい…。」

私はコイツを買いかぶりすぎていたようだ…どんな事情なのかは

知らんが、もはや邪魔者以外の何者でもない。」

興味が失せた…失望した…ヴラドの口から放たれた言葉には、なんの感情も込められていなかった
ヴラドの視線はマリナを捉えていなく、恐暴竜がいるであろう先を見ていた

「サツサと消え失せる。」

冷たい声と冷ややかな視線を向け、ヴラドは歩を進めた

マリナは意地でも止めようと斬破刀を向けて立ちほだかる

「ヴラド……！」

まるで獲物を殺すような雰囲気のヴラド
モンスターならいざしれず、対人の一対一でヴラドにかなうはずがない

元王国騎士に所属していた実力と、日々潜り抜けてきた死線が、ヴラドを怪物じみた存在へと変貌させていたからだ

一歩一歩近付いてくるヴラドに、マリナの足はガクガク震えた
斬破刀を握る手や足には感覚などなく、肺が押し潰されるような錯覚に襲われる

それでも、自分が兄と慕う恐暴竜を守るため…
涙を溜めた目だけは、力強くヴラドを見据えていた

「ヴラドさん…すみません！」

動かない足に鞭を打ち、マリナは斬破刀の切っ先を向けて走る
その平突きはあえなくかわされたが、そこから刃を返し、峰で横に
薙ぐ

しかしヴラドにはわずか指二本で止められ、もう片方の手で斬破刀
を握る腕を掴む

そこから背負い投げの容量で、マリナの小柄な身体を地面に叩き付
けた

「…うあっ…うう…！」

「関節を外した…。」

激痛に襲われているにもかかわらず、マリナは左腕をおさえて立ち
上がる

それから右手で斬破刀を掴み、再びヴラドに切っ先を向ける

「やああああ…！」

「無駄なんだよ。」

決死の行動もむなしく、ヴラドの手がマリナの首を鷲掴みに捕らえる
そこから足を地面から離され、苦しみに斬破刀が手から離れた

「…よしみで見逃してやろつと思っただが。

二度目はない…。」

「ヴラド！！止めるんだ！」

その時、大地が震撼するような凄まじい雄叫びが響き渡った
ビリビリと肌が痺れるのを感じた後、ヴラドはゆっくりとその声の
主を見据える

673

「捜す手間がはぶけなたな。」

「うっ…兄ちゃ…来ちゃ…！」

拳がマリナの腹部にめり込み、マリナは意識を失う
マリナを後ろのカナメに投げ渡し、得物のガンランスを手に持つ

「ずいぶんお怒りのようだな。」

だが…炎王龍ほどではないな。」

重量のあるガンランスをもともせず、ヴラドは勢い良く走り出す
振られた尻尾を地面を滑り込みかわし、その体にピンク色の玉を投
げつけた

そこから同じ色の煙と、独特な臭いが生じる
恐暴竜発見の合図だ…

恐暴竜もそれに気づき、不快そうな仕草をとる

「気持ち悪いか？
だが死ねば何も感じない。」

銀色の銃槍を恐暴竜に向け、不敵に笑う

全ての狩人の頂点に君臨する最強の人間
全てを喰い散らす最凶の恐暴竜

互いに相容れぬ出会ってはならない存在…

出会ってしまったが最後、どちらかの命が散るまで死闘は続く

空は、この死闘の行く先を予言するように……夕陽で赤く染まっていた……

第三十七話・出会ってはならない存在（後書き）

次話、恐暴竜とハンターが戦います

とりあえずバッドエンドは回避されました

どこが？でしょうかね

第三十八話・恐王墮ちる時…（前書き）

これ書いてる時、なんだか涙が…

主人公…可哀想…

カナメも可哀想…

第三十八話・恐王墮ちる時…

「（テメエ、マリナになんしてくれてんだ!!）」

「ふん…騒がしい恐暴竜だ。」

その怒りが大切な者を傷つけられたことによるものだとは知らないヴラドは恐暴竜の怒りの原因を考えていたが、やがて考えるのを止めた

考えたところで同情する余地もないし、結局はただの骸と化すのだから

雑念を振り払い、ヴラドは後方にジャンプして距離をとる
しかし激昂した恐暴竜にすぐに距離を詰められる

大きな口から繰り出される噛みつきを盾でいなし、恐暴竜の横つ面を盾で殴打する

怯んだところで恐暴竜の懐に潜り込み、その屈強な脚を斬り裂く

「すまんヴラド！」

今加勢する!!」

カナメは気絶したマリナを安全な位置に運んでいた
口入した時間を埋め直すため、背の刀の柄を握りながら走る

「（ちくしょう新手か！

しかも美人じゃねえか！）」

「なにを吠えてるのだ！？」

恐暴竜が抱いている心境とは反対に、カナメは龍刀を抜き払って今にも斬りかからんとしていた

カナメの目には恐暴竜の動揺が見え、歴戦の猛者たる彼女はそれを見逃さなかった

「最高の一撃だ、カナメ。」

「まかせろ！！」

ヴラドが恐暴竜の脚に銃槍を突き刺し、身動きがとれぬよう地面に固定する

激痛によって叫び声をあげる恐暴竜、恐暴竜は振り上げられた刀を目にし唸った

「一刀両断!!」

縦に振られた龍刀の切れ味、速度、角度は申し分ない
このまま当たれば恐暴竜の頭殻を叩き割ることができる

しかし寸でのところで恐暴竜は頭を下げ、致命傷になることは避ける
刀を振り切ってしまったカナメは身動きができず、恐暴竜の大きく
開かれた口を見て焦ったが…

次の瞬間、恐暴竜が異常な叫び声をあげて苦しみだした
痛みにかまわず暴れる恐暴竜に、脚をおさえていたヴラドはその場
を離れる

恐暴竜はしきりに頭を岩にぶつけ、なおも苦痛の叫びをあげる

その様子に面食らうカナメに、ヴラドは頷く

「あの恐暴竜…龍属性の一撃をくらったことがないんだろう。
弱点といっても、ある程度は耐性がつくものだ。
チャンスだ…ヤツにはそれがねえ。」

未だかつて味わったことのない、今まで感じた痛みとは違う痛み
怒りとその苦痛により、恐暴竜は正気が保てないでいた

岩に頭をぶつけるのは鈍っていき、叫びも徐々に小さくなっていく。その頭は切り傷と岩にぶつけたことで、流れた血に染まっていた。

「こんな短時間で耐性はつかない。そして我々はそれを見逃さん。」

「うむ…可哀想だが、これも自然界の摂理だな…。」

二人はそれぞれの武器を持ち直し、手負いの恐暴竜を見据える。そこへ、わきの茂みから何者かが飛び出してきた。

「みる、ヴラドたちがいたぞ！」

やはりあの最短コースは合っていたのだ！」

「だ、だからといって崖から俺を巻き込んで飛び降りないで下さい
！！」

現れたのはリオソウル装備のシーザー、ナルガ装備のシヴァだった。

「さてさて恐暴竜は…？」

おいおい、ずいぶん手痛く痛めつけたじゃねえか。」

シーザーは大剣を肩に担いで、恐暴竜に哀れみの目を向ける。シーザーとシヴァの二人は、初めて見る恐暴竜に興味津々だ。

「しかし…なんで襲ってこないんだ？」

恐暴竜は新手の敵が現れたにもかかわらず、威嚇するだけで手を出してこない

他のモンスターにもあまり見られないその行動に、ハンターたちは困惑した

「ヴラド…もしかしたら、アイツに戦意は無いのではないか？
そうだとしたら、マリナが必死に止めようとしていたのにも説明がつく。」

「(……………ん？」

マリナ……………？

アイツが俺を？」

疑問を抱いた恐暴竜をよそに、カナメはさらに続ける

「マリナはもしかしたら、恐暴竜と共存していたのかもしれない！
もしそれが本当なら、人間とモンスターが共存出来るかもしれないぞ！」

「なるほどな……………誰もが考えたかもしれない、夢物語だな。
あいにく私は理想主義者ではない……………まずすべきことは、依頼通り

「恐暴竜を抹殺することだ。」

結果・合理主義者…甘い理想など決して抱かない、孤高の狩人
彼はカナメの考えた理想に共感などせず、己の信念をつらぬく
その非情さもまた…最強たる由縁…

「誰かを守るなんてものは、強者にこそ許される特権。

弱者が誰かを守るうだなんて、時間稼ぎにもなりはしない。

あの愚かな娘もまた弱者…誰かを守るなんて、身の丈に合わない
下らんことだったのだ。

そう思わないか…恐暴竜？」

「(……………っ!!!)」

彼の最後の言葉によって、今まで押さえ込んできた感情が解き放た
れる

血に濡れた顔から覗かせる眼はぎらつき、唸り声は雄叫びへと変わ
った

初見のハンターたちが驚いたのは、恐暴竜の肉体的変化だった

激高によって筋肉が隆起し、それによって浮かび上がった無数の傷痕
治っていない傷も、治りかけの傷もそれによって大きく開きだし、
そこから血が滲み出す

このように、怒りが肉体に顕著に現れるのは今まで見たことがなかった

恐暴竜の突然の豹変に、ハンターたちは恐怖を感じた
ただ一人、ヴラドを除いて…

それから恐暴竜は耳が裂けるような咆哮をあげる
三人は気を引き締め直し、まとめて攻撃されないよう散開する

「いい判断だ……カナメ、覚悟は決まったか？」

「……ああ。」

それ以上は追求せず、黙って銃槍を恐暴竜に向ける
恐暴竜の殺意はヴラドにだけ向いており、その眼は憤怒と憎悪に満ちていた

「なるほど…都合だ。」

お前たちはスキを見て攻撃をしかける！！」

指示を出した直後に恐暴竜は突撃し、ヴラドは横に転がって回避する
すぐさま立ち上がり、恐暴竜の側面に向けて砲撃、振り返った恐暴
竜の横顔を、槍先で斬り裂く

重量のあるガンランスを軽く扱つヴラドに、青年シヴァは目を奪われた

「坊主、身のこなしは上手いほうか？」

「ええ…自信はあります。」

不安げにシーザーを見上げると、シヴァはヒョイと担がれてしまった

「なら恐暴竜の背中に乗ってこい！！」

おらよっ！！」

「ちよっ待っ…っわああああ！！」

投げられたシヴァは弧を描いてとんでいき、恐暴竜の背に激突した
必死にしがみついて登るが、暴れまわる恐暴竜の背は乗り心地最悪
だった

「ハツハハハハ！！」

いい気分だろう！？」

小さいとき竜に乗ってみたいと思ってたんじゃねえのか？」

「そりゃ思いましたけど！」

この竜だとは思ってませんでしたよ！！」

背の異物に不快感を持ち、恐暴竜は振り落とそうとさらに暴れる

「ちょっとヤバいか？」

ヴラド、頼む！」

「盾でいいか？」

「願ったり叶ったり!!!」

走った勢いでジャンプし、ヴラドの盾を踏む

それをヴラドが盾でふっ飛ばし、シーザーの体は恐暴竜の背よりも高くあがる

「うわっシーザーさん!？」

「しっかりつかまってる坊主!

大・切・断!!!」

高所から振り落とされた大剣、轟断剣は恐暴竜の背にめり込むそこから盾に横腹を斬りきる

「チツ…恐暴竜って堅いな!

薄皮一枚だけかよ!!!」

それでも恐暴竜に与えたダメージは大きく、斬られた箇所からはおびただしい血が流れた

しかし憤怒の恐暴竜には痛みなど感じなく、ギロリとシーザーを睨む

「いいねえ…さあかかってきやがれ恐暴竜…！」

「グガアアアア…！」

「ハハハハハ、戦略的撤退をするぜ…！」

「ちょっとシーザーさん…！」

この、止まれ…！」

背にのるシヴァは片手剣で背を斬り刻む

しかし武器が小さいのと、鋼の筋肉にはじかれることによって、深い傷は付けられない

それでも、封龍剣の龍属性は確実にダメージを蓄積させていた

「動くなシーザー…！」

恐暴竜が暴れて攻撃出来ん…！」

「無茶を言つなヴラド…！」

俺は恐暴竜があんなのだとは知らなかったぞ…！」

「報告書を読んだろ!？」

あれが全てだ、分かったらサッサと止まれ!!」

「お前とコンビを組めて俺は幸せだぜ!!」

無我夢中で恐暴竜から逃げていると、目の前に龍刀を握るカナメが立ちふさがる
退くよう言おうとしたが、龍刀を上段に構えたのを見て冷や汗を垂らす

「(……………っ!?)」

強大な龍属性の太刀を見て、恐暴竜は接近を躊躇った
しかし勢いにのった巨体は止まらなく、カナメの間合いへと入ってしまった

「許せ…マリナ…!!」

上段から振り下ろされた一閃は、恐暴竜の逞しい首筋を斬り裂いた
一撃目より深くきまり、威力も一撃目をはるかに凌駕していた

恐暴竜は怒りとは違う、苦痛による叫び声をあげた
突進は失速し、脚を集中して攻撃したかのように転倒した

「いやはや、助かったぜカナメ。」

「ううう…さ、流石ですカナメさん…!!」

龍刀をゆっくり持ち直すカナメ

その背は微かに震えていた

「泣いているのか…?」

「ヴラド……。」

その目は赤く腫れており、目尻からは雫が垂れようとしていた

「なんでもない…。」

なんでも…ないんだ…。」

カナメはギョツと目をつむり、小さな嗚咽をこぼす

それでもしつかりと龍刀を握るのは、戦わなければならないという使命を感じているから…

カナメの心はハンターとしての使命と、妹のような存在のマリナとの間で揺れ動いていた

良くも悪くも真面目…カナメはどちらも遂行しようと努力したのだらう

しかしそれは相容れないこと……彼女はここらが潮時だ…

ヴラドはカナメの頭に手をポンと乗せ、サラサラした綺麗な銀髪を撫でた

「ここからは我々にまかせろ……お前は、マリナのそばにいてやれ。」

「ヴラド…私はまだ…。」

開かれた目から一筋の涙が零れ落ちる
それをそつと指で拭ってやり、静かに呟く

「二度と泣かせない……あの時の約束、守れなかったな。
さあ……行け。」

カナメをマリナがいるであろう先に向けさせ、ゆっくりと背中を押してやる
数歩歩いた先でカナメは振り返る

「行け……終わったら…迎えに行く。」

カナメは何も言わずに頷き、後は振り返らずに走り去った

「待たせたな…恐暴竜。」

苦しみもがいていた恐暴竜めまた、同じタイミングで立ち上がったハンターたちの強力な攻撃で満身創痍だが、闘争心はかえって増していた

シーザーとシヴァは後方に退き、ヴラドの左右をかためる

「やつこさん、坊主の攻撃でお怒りのようだ。」

「たぶん俺のせいじゃないと思いますよ？
というか、最初から怒ってませんでしたか？」

「そうだったか？」

カナメちゃんは戦線離脱だし、ちょっとだけ忙しくなるか？」

シヴァのツツコミにとぼけたように笑う

しかそのしふざけたような態度からも、強い殺気が感じられた
仇討ちはカナメだけではない…仲間を討たれたシーザーにも同様の
気持ちがあった

「ヴラド、俺がいかせてもらおうぜ！..」

「俺も行きます！..」

二人は一緒のタイミングで走り出す
恐暴竜も雄叫びをあげて走る…

「攪乱させる！
合わせろ坊主！！」

二人は恐暴竜の目の前で左右に分かれ、恐暴竜が戸惑うスキに攻撃をしかけようとした

……が、二人の武器は空を斬った

「分かっている…貴様の狙いは最初からこの私だろうか？」

恐暴竜は真つ直ぐにヴラドを指し、攻撃を仕掛けていた
恐暴竜がヴラドに食らいついた時、シヴァは目を背けそうになった

しかし恐暴竜が噛み付いたのはヴラドの盾
ヴラドは盾から左腕を抜くと、恐暴竜の口に何かを放り込み、ガンランスで口めかけ砲撃を放つ

次の瞬間、恐暴竜の口内で大きな爆発が生じ、恐暴竜は大きくよるめいた

「えげつねえな……」。

爆薬放り込んで爆発させやがった……」

ひるんだ恐暴竜の口から盾が落ち、ヴラドはそれを左腕に再度装着する

「生き残った者が勝者だ。

そして勝つためには、常識にとらわれてはいけない。」

ヴラドは腰に提げてあった水筒をとり、ガンランスの切っ先……そして頭から自信の身を濡らした

「シーザー……クーラードリンクがアプトノスの背に積んである。

活力剤と一緒に持ってきてくれないか？」

「分かった……俺の水もやる。」

シーザーは自分の水筒を投げ、シヴァを連れて後退する

「シーザーさん、ここは森丘なのになんでクーラードリンクを？」

「アイツは、昔戦った炎王龍に致命的な傷をつけられてな。

冷却剤と活力剤を常用してないと、正常な状態を維持出来ないんだ。たぶんアイツは本気を出す気だ……俺たちがいたら、全力で戦えな

い。」

「そんなに……。」

「分かったらサッサと来い。」

巻き込まれるぞ。」

シーザーはシヴァの首根っこを掴んで退いていく

「時間が無いんでな…本気でいかせてもらおう。」

シーザーから貰った水筒を傾け、防具の隙間から水を流し込む
水分は湯気へと変わり、隙間から外へ出て行く

恐暴竜は一声吠え、ヴラドを喰い千切るべく口を大きく開いて突進

「賢いんだか馬鹿なんだからわからんな。」

寸前で左サイドへと回避し、恐暴竜の首筋へと銃槍を突き刺す
そこから砲撃も一緒にしながら、尻尾の付け根までを一直線に斬り
裂く

龍刀ほどではないにしろ、ヴラドの銃槍にも龍属性は付加してあるので、恐暴竜には手痛いダメージとなる

おまけに肉体に刺された状態で砲撃されたため、斬り裂かれた箇所
の肉が吹き飛び、炎で黒く焦げ付いていた

追撃しようとしたが、恐暴竜はヴラドを近付けまいと、地面をえぐ
って岩石を飛ばす

恐暴竜はそのうちの一つを真上にとばし、落ちてきた岩石を尻尾で
打つ

岩石は木っ端微塵になり、小さなつぶてが散弾となってヴラドを襲う
意表をつく攻撃は効果をなし、つぶてに当たったヴラドは大きく吹
き飛ばされる

攻守逆転の機会を見逃すまいと接近する恐暴竜に、ヴラドは腰の片
手剣を投げつける

恐暴竜は飛んできた剣を噛み付いて止めたが……さらにもう一つ小
さな物体が投げられていた…

それは目の前で炸裂し、強烈な閃光が生じて恐暴竜の視覚を奪った

「一瞬ヒヤツとしたが……やはり神はこの私を勝者に選んだらしい。」

何が起きたか分からないでいる恐暴竜の顔面前に、銀の銃槍を向ける恐暴竜の背後は断崖絶壁……正確な高さは分からないが、落ちれば確実に死ぬ高度……

恐暴竜は一步下がれば落下する位置におり、最高の一撃をもって仕留める確信を抱いた

片足を後ろに引き、脇をしめて銃槍を水平に固定する

銃槍の先からは青い炎が吹き、動作音が鳴る……竜撃砲の予備動作だ

「ガアアアア!!」

「……なに……?」

目が見えないはずの恐暴竜が突如吠え、竜撃砲が放たれんとする銃槍に食らいついた

窮鼠猫を噛む……恐暴竜に目は見えなくても、聴覚と嗅覚のみを頼りに銃槍を探り当てたのだ

「チツ……最後の最後に面倒なことを……!!
地獄の業火に焼き殺されよ!」

「……………!?!」

ヴラドは銃槍を一度引き、恐暴竜の口内へと突き入れる
腕は伸びきり、後も通常時のように開いたまま……その状態でヴラドは竜撃砲を敢行する

銃槍の先から巨大な炎が吹き、凄まじい衝撃に恐暴竜は後方へと大きくぐらつく

そしてヴラドの予想通り崖から脚を落とし、さらには巨体を支えられなくなった地面の一部が崩れる

「…チツ…しぶといな。」

恐暴竜の上半は崖の上に残っており、前脚で地面を引っ掻き落ちま
いとしていた

口内で放たれた竜撃砲により、恐暴竜の顔半分の肉が吹き飛び、頭蓋骨が剥き出しとなっていた
憎悪に満ちた目はヴラドを睨んでいる

そこへ頭蓋骨が剥き出しという、グロテスクな形状も合わさり、勇猛なヴラドが恐怖を感じた

「恐王…堕ちる時だ…。」

撃ち尽くした銃槍の装填をし、恐暴竜と地面の間に向け、全弾発射

のフルバーストを放った……

恐暴竜を支えていた地面がえぐれ、その巨体が崖からずり落ちていく

最後に……おぞましい憎悪の咆哮を叫び、恐暴竜は落下していった……

崖の下は崩れ落ちて出来た砂煙が舞い、恐暴竜の姿は確認出来ない煙が生じていない箇所を見る限り、この高さでは生きてはいられない……

崖下を見据えた後、ヴラドは自分の手が震えていることに気付く

「恐怖を感じるなど久しぶりだ……。
最後のあの眼……状況が変わっていたら、私が死んでいたかもしれないな……。」

震える手をギュッと握り締め、踵を返してその場を立ち去る
いつの間にか戻ってきた仲間三人がおり、彼らに頷いて終わったことを伝える

「ヴラド……！」

そのまま立ち去ろうとするヴラドを、カナメが止める
その腕には気を失っているマリナが抱かれており、彼女は不安げに
ヴラドを見つめていた…

「見捨てていくわけにもいくまい……連れて行ってやれ……。
ただし私の前には連れて来るな……苦しみが増すだけだ。」

それからヴラドは何も言わず、その場を立ち去っていく

「俺が担いでいこうか？」

「ありがとう……だが、マリナは私が運ぶ……。」

マリナを背負って歩くカナメを見届けた後、シヴァに軽い笑みを向
ける

「ふられちまったな。」

お前を運んでいってやるうか？」

「遠慮しときます……！」

「（こりやずいぶん酷くやられたもんだな……。）」

外出をしていた親方は、イヤな予感がして帰ってきていた
それからアイルーにマリナたちが森丘に行ったことを聞き、親方も
森丘にやって来た

そして瓦礫に埋もれる恐暴竜を見つけ、のん気に軽口を叩いてたの
だが…

恐暴竜の体に出来た無数の傷を見て、その笑顔を引っ込める…

瓦礫をどかしてやると、恐暴竜はヨロヨロと立ち上がった

顔半分の肉が無くなっており、頭蓋骨から剥き出しとなっていた
そしてその眼には、未だかつて見たことのない憎悪が映っていた

「（マリナを……よくも……！！
必ず……殺してやる……！！）」

恐暴竜はおぞましい声で呪詛のような言葉を吐き、意識を失って崩
れ落ちる

「（こりや大変だ…。
と、とりあえず治療が先だな。）」

金獅子は恐暴竜の体をヒョイと抱え持ち、自分たちの住処へと大急ぎで向かっていった…

第三十八話・恐王墮ちる時…（後書き）

もはや何も言ひまい

第三十九話：角竜の策謀（前書き）

しばらく主人公は暴れます

第三十九話：角竜の策謀

夕刻の草原にポツリと立つ山…そこにある洞窟の一つから、おぞましい竜の叫びが響いていた

憤怒・哀愁・憎悪…負の感情がこもったその叫びは、聴く者に悪寒を感じさせ、気を失わせそうな恐ろしさがあった…

金獅子が傷だらけの恐暴竜を運んで来た時、住処にはアリシアと迅竜、雷狼二姉弟がいた

アリシアと迅竜は恐暴竜を見て泣き叫び、三姉弟は目を疑っていた

金獅子は彼女らに構わず、洞窟に恐暴竜を運んだ

それから治療知識を持つアイルーを募り、恐暴竜の傷を治療したのだ
その際恐暴竜が暴れ出し、金獅子がおさえつけながらの治療となった

しかし暴れ出す度に傷口が大きく開き、また、尋常でない体温上昇
が起こり治療は中断されていた…

そんな時に空気を読めない三姉弟が、気楽な様子でノコノコとやって来たのだ

姉弟はとりあえず恐暴竜の手助けに来たようで、目の前に大量の肉を投げた

すると恐暴竜は金獅子の拘束を抜け、肉に喰いついた

三姉弟は高らかに笑って肉を次々放り投げ、その様子を心底楽しそうに眺める

肉を半分以上喰った時、恐暴竜は突然ドサツと倒れた

慌てた金獅子が駆け寄ったが、ただ眠りについたことが分かり胸をなで下ろした

深い寝息をたて、上がっていた体温も恐暴竜の平熱にまで低下…
とりあえずはアイルーたちも安心する

「（このド阿呆共が!!
勝手な行動してんじゃねえ!!」

「（……………ツ?）」

「（ギヤアツ!!）」

「（イダイツ!!）」

洞窟を出て行くなり、金獅子の強烈なげんこつが三姉弟の頭に落とさた

ケロッとしている長門をのぞき、二体は激痛に悶絶している

「(テメエも痛がりやがれ!)」

一体だけピンピンしている長門に再度げんこつをいれたが、相変わらずの様子だ…

それどころか、げんこつの衝撃が気に入ったのか、笑顔でせがんでくる

「(イテエ……無駄じゃ。

姉貴は痛み・疲労・恐怖を感じねえからな。

ただダメージはあるから、あんまりブツ叩かないでくれ。)」

大和はサイズがあるだけに、耐久力があった

チビの武蔵は気絶している…

金獅子が追い払うと、長門は肩を落としてトボトボと去る…

「(あ……親方……なんか来るよ?

……敵……かな?)」

長門が指し示す先は西……砂漠がある方角だ

その方角からは、草原をえぐりとばしながら向かってくる、朱い巨大な物体があつた

「（きょーだーい!!）

我輩が来てやつたぞ!!）

「（ありやオメエ……敵だろうがよ。）

「（ツシヤアアア!!）

ブツ殺してやるぜ!!）

その一言で長門は疾風の如く走り出し、向かってくる角竜に一気に接近…

「（覚悟しやが…あれ……なんだ、角竜か…。）

向かってくる物体の正体に気付きブレーキをかけたが……最初から止まる気の無い角竜に、思い切りぶっ飛ばさた

しかししっかりと綺麗に着地し、何事もなかったように戻ってくる…

「（敵…いないな…。）

…うん…眠い。）

長門は大きな欠伸をかくと、弟の大和に声をかける

「（大和…一緒に寝よ。
今日はとってもいい日…。）」

「（悪い姉貴…用があるから武蔵と寝てくれ。）」

「（……ん…残念…。」

行くよ…武蔵…。）」

気絶した武蔵を引きずっていく姉を見届けた後、大和は金獅子たちに目を向ける

姉の一連のやり取りを見ている間に、アリシアと迅竜が恐暴竜の安否を尋ねていた……

「（とりあえずは一命をとりとめたが……会うことは絶対に駄目だ。）」

「（ど…どうしてでしょうか…？）」

迅竜がそう尋ねると、金獅子は自分の二の腕を見せる
二の腕は噛まれた後があり、そこから血が出ていた

「（若造は正気を失ってやがる……俺でなけりゃ、頭から喰われてたぜ…。）」

「（それは”アレ”によるものだな…。
して…兄弟を襲った者の正体は如何なる者なのだ？
兄弟がそんじょそこらの獣に負けるとは思えん…。」

「（ソイツは若造の傷を見りゃ分かる…：人間の仕業だ。
ただそうなるとマリナだ…：もしかしたらアイツが手引きしたのかも
しれない。）」

しかし金獅子が抱いたその疑惑は、アリシアの否定の言葉に打ち消される

「（アイツは…マリナはそんなことするわけない！
第一、彼女にはルパの命を狙う動機が無いじゃない！）」

「（分かってる分かってる…：例えばの話した。
老いぼれになりゃ、疑りやすくなんのさ。
…：たく、若造の恋敵を助けるなんざいい嫁御だぜ。）」

「（ア、アタシはルパの…：お、お嫁さんなんかじゃ…：！！
…：って、余計なこと言わないで下さい！
怒りますよ！？）」

金獅子は苦笑いを浮かべ、脱線しかけた話を引き戻す

「マリナが手引きしたわけじゃないなら…アイツはどこに行ったんだ？」

若造から聞こうにもあの調子だしな……。」

「(ううん…ご主人様を置いてどこに行ったのでしょうか?)」

みな唸って頭を悩ませていると、再びアリシアが何か思いついたようだ

「(もしかしたら…人間に攫われたのかも。それで助けようとしてやられたのかもしれない。)」

「(なるほど…それなら全て説明がつかない。流石は鬼嫁…旦那のことはなんでも知ってるってか?)」

「(エへへ、それほどでも……ってまたアタシをからかう!! それに鬼嫁って何ですか!! 私はまだお嫁さんじゃありませんし、鬼でもありません!!)」

こんな状況でも軽口を叩く親方に、その場の者たちは呆れかえっていた

唯一……迅竜だけが目をうるうるさせて親方を見上げていた
どうやら、嫁候補にいれて欲しかったらしい……

「（概ね理解した…もちろん兄弟は反撃を考えてるのだろうか？）」

「（それはどうだか知らねえが、今まで以上に好戦的なのは確かだ。だが…あんな体で暴れても、返り討ちに遭うだけだろうぜ。）」

金獅子は遠い目で洞窟を見つめる

恐暴竜の肉体は文字通り傷だらけ…傷もロクに癒えない間に再戦しても、勝機は零に近い

「（なれば我輩が兄弟と共に行くぞ！！
前々から人間共を駆逐したいと思っておったからな！）」

「（小僧…正気か？
人間に反撃するということは、敵地に入り込むということだぜ？
しかも、若造を襲った人間がどこのヤツかも分からねえだろ。）」

「（兄弟とまともに戦える人間は、ヤツ以外おらぬわ。
敵地に入り込むと言ったが…人間に出来ることを、我輩らが出来ぬ
道理が無いわ！！）」

義兄弟の契りを交わした角竜には、兄弟がやられたことに我慢ならなかった

角竜は一刻も早く、兄弟に手を出した人間に制裁を加えることを望んでいる

「（角竜に賛成じゃ。」

やられたらやり返す…やられる前にやるのがベストじゃがな。」

大和は賛成したが、金獅子はまだ悩んでいた

長年生きてきた金獅子には、それがどんなに無謀なことなのかを理解している

若く血気盛んな彼らに対し、この世の理を理解している金獅子には、負け戦に参加することは出来なかった

「（先に言っておくが、ワシら姉弟全員は参加出来ない。人間共がこの地を狙わないとも限らぬ。

この地を守る者が必要なはずじゃ。」

「（む…今日は珍しく冴えておるではないか。」

「（意外か？

姉弟で一番まともなのはこのワシじゃぞ。」

クツクツと笑う大和

「（ワシと武蔵が残ろう。」

姉貴を連れていくといい…姉貴は手に負えないが、頼りになるはずじゃ。」

無双の狂犬・長門の参戦が決まった

これで確実ではないにしろ、勝てる確率は大きくなったはずだ
そして角竜には、ここ最近耳に入った出来事を思い出していた

「（親方よ…兄弟のこと以外で、人間が今最も警戒しているのは何か知っておるか？）」

角竜の確信に満ちたような台詞に、一同の視線が集まる

「（最も警戒してること？
それはシュレイド地方から目覚めて動き出した…まさか、テメエ。
）」

角竜の言葉を理解したのか、金獅子はハッとす

新参者のアリシアたちにはチンプンカンプンだが、迅竜も少し遅れて気付いた

「（そう……」老山龍”だ。

ヤツを利用して砦を陥落させ、人間共の街に進撃させる。

…どうだ親方、だいぶ勝率が上がったはずだ。」

「（テメエは人間を殺してえだけじゃねえか。

だが若えもん見捨てるわけにもいかねえ……やってやるうじゃねえかい。」

親方の参戦に、角竜は完全な勝利を確信した

後は機が熟すのみ…

老山龍が砦に到着するであろう日までは時間がある

その時までには、恐暴竜の傷は治り、彼をさらなる復讐鬼へと変貌させるであろう

角竜は、兄弟への仁義と、己が嫌悪する人間の抹殺を想像する
人間の死ぬ姿を想像する度、角竜の感情は高ぶる

空はまだ蒼く…嵐の前の静けさがあった…

第三十九話：角竜の策謀（後書き）

反人間連合群VSハンターズギルド

さてどうなることやら…

唯一理性を持っていた主人公…しかし怒りでそれは無くなりました

歯止め役は金獅子だけ…全員好戦的なヤツら

しばらく亀更新になります

それと、このハンターとの戦いで何かアイディアありましたら、ご提供をお願いします

流れとして、<砦>は陥落

その次に<街>での戦闘です

第四十話：要塞陥落（前書き）

独自設定アリ

第四十話：要塞陥落

老山龍動き出す…その一報が知れ渡ってから、街の緊張は高まる
すでに砦には大勢のハンターが集結し、静かにその時を待っていた

「気をつけてくれ…。」

ドンドルマの集会所…そこは珍しくハンターの数はまばらで、賑わいはなかった

巨大モンスターが迫ればハンターは駆り出され、残りは防衛に出かけているハンターの穴埋めだ

そしてそこには…霸竜の防具を装備したヴラドと、普段着姿のカナメがいた

「老山龍の亜種が相手だが、なんとか…ゲホッゲホッ!!
…チッ…」

咳をする時に背を向けたが、カナメは吐いた赤い液体を見逃さなかった

「やはりその身体では無理だ、肺をやられてるのだろう!？」

かつて古龍との戦いで焼け爛れた肺、そこに先日の恐暴竜との一戦で受けた攻撃により、ヴラドはかなり肺を痛めていた

普通なら激痛で動けるはずがなく、安静にしていなければならなかった…

ヴラドは限界量を超える治療薬を服用し、そのハンターとしては致命的な欠陥を抑えたのだ…

肩を支えようとしたカナメを止め、ヴラドは血をぬぐい去る

「この程度の傷…大したことはない。

それより、早く砦に向かい準備をしなければならん。」

大剣を背に背負い、ヴラドは集会所の出口へと向かう

これ以上言えることはない…カナメは静かにヴラドを見送った後、踵を返して街の中へと向かっていく

露天でいくつか食料を買い、カナメは自宅へと戻る

カナメの自宅はドンドルマの中心街にあり、二階建ての立派な家だ。家に住むのは彼女だけが、読書好きな彼女が集めた本を収納するため、自然と家が大きくなってしまったのだ…

最近になって、家には彼女以外の者が住むようになった…

住むというよりは保護した…であり、事情により新たな住人の存在を知る者は少ない

カナメが帰宅すると、彼女をすぐに見付ける

彼女の肩には毛布がかけられており、両膝を抱いて静かに暖炉の前に座っていた

「ただいまマリナ……」。

焼きたてのパンを買ってきたのだが、食べるか？」

買ってきた食料をテーブルに広げ、出来るだけ明るい声で呼びかける
しかし…返答が返ってくることはなく、カナメは静かにため息をこぼした

それからゆっくりとマリナのそばに歩み寄り、そつと肩を抱いてやる
彼女のなめらかな金髪を優しく撫でてやる

すると…マリナの小柄な体が微かに震えた

あの日の出来事依頼、カナメは毎日のようにこうしているのだ
慰めの言葉を言うのではなく、ただ優しく抱き締め、髪を撫でてあげる

「兄ちゃん……いなくなっちゃったの……？」

何度目だろうか……少女はこうして抱くたびに、はかなげな声で尋ねてくるのだ

今にも泣き出しそうな表情に、カナメは何も答えることが出来ない
苦しそうな表情で抱くカナメを見て、マリナは泣きじゃくるのだ…

泣きつかれて眠るまでカナメは少女を抱き締め続ける

カナメは…何も出来ず、少女の悲しみをやわらげられない自分に失望していた…

《砦》

草木もろくに育たない荒れ地の岩場にある砦

ある目的以外に使われないこの場所は、普段群れからはぐれた小型モンスター以外、何者もない

しかし今日は、物々しい雰囲気ハンターが大勢集結していた

弾薬庫と宿舎を兼ねた区画と、最終防衛区画を結ぶ補給路は、たかさんのハンターが行き交っていた

「ガンナーは城壁にて待機！

もたもたするな、少しの時間も惜しむんだ！！」

弾薬庫の区画でしきりに指示を飛ばす、ギザミZ装備のハンター弓やボウガンを装備したハンターは、城壁に向かって走っていく

その様子を、覇竜装備のヴラドは静かに見つめていた

ヴラドは今し方此方に来たばかりで、配置された副官の仕事ぶりを腕を組んで眺めていたのだ

ギザミ装備の男は、ヴラドに気付いて挨拶をしながら歩み寄りヴラドも片手をあげて挨拶に応え、組んでいた腕を解く

「君が副官のベインか。

なかなかの指揮能力じゃないか…それなら、軍隊でも通用するぞ。」

「お褒めいただき光栄です。

到着早々すみませんが…状況の説明をさせていただきます。」

「かまわん…説明してくれ。」

ベインは頷くと、机の上に広げている地図を示す

砦の地形が事細かに記載された地図には、ハンターを表す小さな駒がいくつか置かれている

「古龍観測局によりますと、老山龍は荒れ地を移動中。夕暮れにこの砦に現れます。」

「決戦は今夜か…。」

濃霧が発生するかもしれん…ガンナーの流れ弾に気をつけるよう言え。」

それからヴラドは、弾薬庫にある大砲の弾や、討伐用爆弾を確認してまわる

弾や爆弾は強い衝撃で爆発してしまう
老山龍の起こす地響きで転がらないよう、弾や爆弾はしっかり管理しておくことを指示する

次にヴラドが向かったのは、最終防衛区画とを結ぶ補給路

既に発生している霧で、崖下は黙視が困難なほど

そして崖上には…戦いの香りに誘われた、イーオスたちがいた

「ここに来る度に思うが…この補給路はもっと整理出来ないのか？」

もしここを分断されたら、この砦は陥落するというのだ。」

暇なガンナーは崖上に向かって弾を撃っているが、イーオスはその度に隠れ、そしてまた顔を出す

「大丈夫でしょう。」

イーオスごときにしてやられる我々ではありませんし、モンスターの接近も確認されておりません。」

「どうだかな…。」

確実に来ないわけではない…人の目が届かない場所なんて、いくらでもあるからな。

実際……ユクモ村近くの水没林で、調査を怠ったために他のモンスターの乱入をゆるし、壊滅した例もあるからな。」

崖上のイーオスから目を離し、ヴラドは腕を組む

「ベイン…調査隊を至急組織して、周辺の調査にあたらせる。どんな小さな事でも報告させる…。」

「いくらなんでも大袈裟では？」

古龍観測局の協力もありますし…。」

「それだけ重要なことだ。」

私は最終防衛区画を指揮する、君は調査隊の編成を至急済ませるのだ。」

そう言うと、ヴラドは防衛区画方面へと歩いていく
ベインはついていた部下に向き直ると、とりあえず調査隊の組織を指令する

「まあそこらを軽く見てきてくれ…老山龍が来たら、直ぐに戻って迎撃の準備をするんだ。」

ヴラドの深い忠告…ベインも部下も、深刻には受け止めていなかった…

日が傾いていくにつれ、岩場に出来た砦は影に覆われて暗くなっていく
月光が夜の砦を照らしていたが、深い霧が発生して最悪の見通しとなる

ハンターたちは篝火を焚き、手に松明を持って城壁についていた…

刃を研ぎ、弾を確認して装填…最後の準備を済ませたハンターたちは、迎えるその時を想像して緊張する

拠点防衛が初めてなハンターもいるようで…そのハンターたちは落ち着きがなく、人によっては顔を真っ青にしていた

そこへヴラドが現れ、緊張するハンターの肩を叩く

「深呼吸をしろ…最初の狩りをいかに乗り越えたかを思い出せ。それと同じだ…」。

「は…はい、ありがとうございます…」。

老山龍の姿はまだ見えない…しかし、先ほどから地響きと大地が震撼するような咆哮が聞こえている

あと数十分もすれば…巨龍はその姿を現すだろう

「ベイン、準備は出来ているか？」

「はい、調査隊の報告では他のモンスターはいないとのこと。全てのハンター、配置についております。」

「ふむ…上出来だ。」

人々の命運は我々の働きにかかっている…ベストをつくすんだ。」

ヴラドは踵を返し、宿舎の中へと入っていく

副官であるベインもまた、彼と一緒に最終防衛区画へと向かった…

大地が激しく振動する…その咆哮は堅牢な砦を揺るがす…

ついにその巨龍は姿を現した

夜間がため、昼間以上に濃い霧で隠れているが、蒼い甲殻をもつその巨大な体はハッキリと見えていた

老山龍が現れたと同時に、城壁のハンターたちを率いる者は、叫びに近い声で命令をとばす
剣士はすぐさま城壁から宿舎へと入り、巨龍の進行ルートへと向かう…

城壁に残ったガンナーは、霧で隠れた老山龍に向けて一斉に攻撃を仕掛けた

しかし、遠距離からの射撃は巨龍の蒼甲殻を貫くことは出来ず、巨龍は悠々と進行していく

確認できる巨龍の体が尻尾だけになると、ガンナーたちは次なる迎

撃場所へと走った

「（ケツ…霧が濃すぎて状況が分かりやしねえ…。）」

「（だがそのおかげで、人間共の目を欺けるのだ。）」

招かれざる襲撃者たちは…この濃霧に紛れて無謀にも、険しい岩場を登ってきたのだ

その背後には、眠たそうな表情でついてくる長門…さらにその後ろには、大口が開けないよう鎖で巻かれた恐暴竜がいた

「（人間共もついてねえな。）

兄弟は今までにないくらいお怒りであるし…年に数回の暴食期までかぶってやがる。

今夜は血の雨が降りそうだな…。」

理性が無くなっていても…一応は仲間意識があるのだろう
今のところ恐暴竜は大人しい

一行は岩場から降り立ち、造られたような道を辿っていく

その道はすでに老山龍が通ったらしく、踏み固められた大きな足跡

と、龍と人間のが入り混じった血溜まりがあった…

血の匂いを嗅ぎ取った長門は、心なしか興奮気味に見え…角竜は明らかに高揚していた

「（あの穴は人間の通り道のような。とりあえず、塞いでおくか。）」

金獅子は近くにあった岩を穴の前に起き、穴の上を殴って崩落させる。穴は瓦礫で埋まってしまい、しばらくは通れないはずだ

そこからさらに進むと、一直線の通り道が続く。そしてそこは、巨龍と人間との戦場の最前線だった…

「（デツカい龍は…味方…？）

小さい人間は…敵……だよな？

敵は…ぶっ殺す…！！

無双の狩人長門…行くぜええ…！！」

人間を見つけた長門は興奮し、一気に超帯電状態へと移行する

「（そら若造…お前の敵はアイツらだ…。」

金獅子が鎖を外してやると、凄まじい咆哮をあげて恐暴竜は走り出した

怒りと暴食期の凶暴性が合わさり、恐暴竜の戦闘力はかつてないほど上昇していた

すでに筋肉は隆起し、怒りの第二段階へと変貌しようとしている…

奇襲を受けて狼狽する人間を、恐暴竜は何の躊躇いもなく餌食にするそこに、かつて人間を殺して自暴自棄になっていた姿はない…

目に付く人間を、赤子を捻るかのように殺し…怒りの原動力の糧にしていく

「（アツハハハハハ！！）

最っつ高だぜ…おっと！？）」

無意識に振られた老山龍の尻尾が迫ったが、長門はジャンプしてそれをかわす

かわしたただけでなく、尻尾に乗ってそのまま背まで走っていく

老山龍の高い背から下を覗くと、たまたま一カ所にハンターが固まっていた

「（まとめて片付けてやるよ！
あばよ人間！！）」

長門は背から跳び、空中で半回転して地面に尻尾を叩きつけた
尻尾に巻き込まれたハンターは吹っ飛び、長門の追撃で仕留められる

「な…なんだこのモンスターたちは！？
どっから現れたんだよ！？」

「と、とにかくヴラドさまに報告をするんだ！！」

賢いハンターの何人かが、不利を悟って宿舎へと通じる穴へと走る
しかし次の瞬間、勢い良く投げつけられた岩弾により、穴は崩落し
て塞がれた

「（悪いな…逃がしやしねえよ。）」

「ラ、ラージャンだと！？
一体どうなってやがるんだ！」

追い詰められたハンターが、金獅子に立ち向かっていく

しかし、老山龍の体に道を大幅に占拠され、金獅子にはとても有利だった

限られたスペースから攻撃してくるハンターを、虫でも払うかのようになぎ倒していく

腕の立つハンター数人が持ちこたえ、その場から離脱する

「（我輩から逃走することなどかなわぬわ！）」

老山龍の側面を駆け抜け、前を走るハンターたちを蹴散らす…

身近なところは恐暴竜と金獅子が、遠距離の人間は角竜と長門が追いついて倒す

これは金獅子の作戦によるもので、自分らの存在を報告されないよう、一人残らず戦闘不能にしているのだ

「（ここはあらかじめ片付いたか…この先の穴は角竜の小僧に塞いでもらうか。）」

金獅子の足下には、殴られて気絶したハンターたち積み重ねてある金獅子はハンターたちを草村に放り投げると、老山龍の背に登って一休みする

ふと下を見れば、腹を満たして落ち着きを取り戻した恐暴竜がいる

「(若造、気分はどうだい?)」

「(胸くそ悪い最悪の気分だ。

……このイラつき止めるには、アイツを殺すしかねえ……!)」

彼は人間を殺す罪悪感など感じていなかった

それは暴食期によるものなのか、戦闘時の高揚状態によるものなのか……確実に言えるのは、精神を蝕む激しい憎悪によるものだろう

「(つたく…若えもんをこつまで変わらせるたあ…酷え世の中だ。)

老山龍の背で寝転びながら、金獅子は大きなため息をこぼす
そして何気なく崖上を見た時、ある場所が目についた

「(ありゃあ……通路か何かか?)

一応潰しておくか。)

金獅子が見付けたのは…宿舎と最終防衛区画を結ぶ補給路だった
金獅子はその道がどんな役割を持つのかは理解していなかったが、
勘でそこが重要な道であることを理解した

補給路に人間の姿はなく、左右に人が通れる穴があるのみ…
金獅子はそこからさらに崖上へと跳び、崖の瓦礫を補給路に落とす
補給路はたちまち瓦礫で塞がれ、道も穴も埋められてしまう

「（こんなもんだろ…。」

……ああ…？」

背後に無数の気配を感じ振り返ってみると、数体のイーオスがいた
イーオスは何度か小さな鳴き声を出し、首を傾げる

「（おこぼれが欲しいってのか？

好きにな、後に残ってるのは全部くれてやる。」

イーオスたちは嬉しそうに軽くジャンプすると、崖から飛び降りて
いった

金獅子は黙って眺めていたのだが、後から続く者たちに驚く

最初のイーオスに続き、大規模なイーオスの群れが霧の奥から出現
し、なだれのように崖から飛び降りていく

「（ハッ……チリも積もれば山となるってか？

こりゃ余裕で突破出来るぜ。」

絶えそうにない群れを少し見つめた後、金獅子自身も崖下へと跳ぶ

《最終防衛区Ⅱ画》

石に腰下ろすヴラドの周囲では、大勢のハンターたちが騒ぎ立てていた

先ほどまで老山龍の動向を知らせる報告が途絶え、次いで弾薬庫へ通じる補給路が閉ざされた

討伐隊の4割はこの場所にいるが、残りのハンターたちも未だ戻ってこない

この異常事態に討伐隊は混乱したが、今はベインの指示で補給路を塞ぐ瓦礫の撤去作業をしている
もつとも、瓦礫の重さと量がたくさんあるので、たいしてはかどっていない

「考えられるのは皆の老朽化……あるいは……新たなモンスターが現

れたか。」

ベインに指示をあおがれたヴラドは、一言そう呟く
その猛禽類のような鋭い眼光は、ベインの不安を射抜くようだった

しかしヴラドは何も言わず、ゆっくりと立ち上がる

城壁の下にも数十人のハンターが展開している
そのどれもが、この異常に不安感を抱いていた…

「蛇竜の群れ…不吉だな。」

空を飛び交う無数の蛇竜…霧と暗闇の中でもその姿は見え、死肉を
待ち望んでいる

蛇竜はよく古龍の襲撃した街などに出現する
そのため、古来より災厄の使者として忌み嫌われていた

「あれは……ヴラドさま、進行ルートから何者かが来ます！」

城壁で物見をしていたハンターが何かを発見した
そのハンターから双眼鏡を受け取り、進行ルートを眺める

霧の奥に影が見え…それが人間だということはすぐに気付いた
しばらくそのまま眺めていると、進行ルートから続々とハンターた
ちが入ってきた

ヴラドは双眼鏡を投げ返し、城壁の梯子を滑り降りる

そして先頭の傷をおったハンターを捕まえ、何が起きたのかを尋ねる

「モンスターが現れました！！」

見たこともないモンスターも二体、それから大規模なイーオスの群
れが迫っております！！」

「見たこともないだと？

まさか…いやありえん。

とにかく、お前たちは城壁の上へと撤退するんだ。」

逃げ帰ってきたハンターたちに指示し、ヴラドは最後尾へと走る

帰ってくるハンターに無傷の者はいなく、何かしらの怪我を負って
いた

中には、仲間に担がれて早急な治療を必要とする者も…

最後尾にしんがりとして付くが、遅れて二人のハンターがやって来た
一人は足をズタズタにされ、仲間に支えられてなんとか歩いている

ヴラドが駆け寄ろうとした刹那、二人は突如現れた蒼いモンスター
に潰された

「ジンオウガ…な、何故こいつがここにいる…？」

「ヴラドさま…！」

背後からベインと数人のハンターが駆け付ける
ベインたちもまた、ジンオウガを前にして固まる

ジンオウガは血で染まった爪を舐めると、ヴラドたちを品定めする
ように見つめる

そしてその背後から、巨大な地響きを起こしながら巨龍が進撃して
きた

「総員城壁に撤退せよ！」

大声を出して指示を飛ばす

その言葉に全員が我にかえり、慌てて城壁へと走り出した

ジンオウガ…長門の目は、逃げ出したハンターに移っていた
舐めて綺麗になった爪を下ろし、長門は追撃をかけようとしたが…
ヴラドの大剣によって阻止される

「（へえ…お前が遊んでくれるってのか？）」

「何を叫んでるのか知らんが……貴様の強さなど数年前に通り過ぎた。」

来るなら来い…冥府の底へと叩き落としてやる！」

「（……ケツ、遊びになりそうにねえな。）」

長門はただならぬ雰囲気を察知し、余裕の表情を引っ込める

「（コラ長門、抜け駆けは許さぬぞ！）」

霧の奥から朱い角竜が突進してくる

角竜は真っ直ぐにヴラドに突撃するが、ヴラドは動かさず大剣の先を長門に向けていた

一直線の突進をかわすのは簡単だが…長門もヴラドも動かない

（コ、コイツに背を見せたらヤベエ！！

かといって動かなかつたら、角竜の突進をくらっちゃう！）

長門は次第に焦りだし、角竜もよけようとしないうちに彼らに疑問を抱いた

ギリギリで長門がその場を飛び退く…そしてヴラドの空いた左手から、角竜に向けて何かが投げられた

次の瞬間それは炸裂し、強烈な閃光を放った
同時にヴラドは動き出し、目が眩んだ角竜の前に出そうとした脚を
切りつける

角竜は体勢を崩して前のめりに倒れ、ヴラドはすぐさま長門に狙い
をつけた

「（や、やるう…!!）」

長門が爪を振りかぶって接近すると、ヴラドは顔面を貫こうと大剣
を突き立てる

いくらモンスターでも、中枢となる頭部を貫かれれば即死する

長門は攻撃を中止して左に跳んだが、ヴラドの攻撃はそれで終わら
なかった

ヴラドは突き立てた大剣を平らにし、それを右になぎ払った

「（やってられっかバカ!）」

「叫ぶな騒々しい。」

長門はなんとか大剣をさばいたが、ヴラドの左腕にはボウガンが握
られており、銃口は真っ直ぐ顔面を向いていた

「（見つけたぞテムエー！）」

老山龍のソレに匹敵する咆哮が轟き、気をとられたヴラドは弾を外してしまふ

「……私を殺すために地獄の底から這い上がったか。」

顔面半分の頭蓋骨が露出し、まさに悪鬼のような恐暴竜
恐暴竜の怒号が平原ひ轟いたと同時に、多数のイーオスがなだれ込んできた

「（逃がさねえ、マリナを返しやがれ！！）」

大剣を長門に、ボウガンを恐暴竜に向けながらヴラドは後退る
その背後には、先ほど転倒した角竜があり、閃光から回復して立ち上がろうとしていた

「（おのれ我輩を地につけたこと後悔させてやる！）」

「読み通りだ。」

前方から迫る恐暴竜、後方には角を突き上げようとする角竜
ヴラドは自分の体で角竜の視界を遮り、お互いにぶつかり合うギリ
ギリのタイミングで、横にとんで回避した

恐暴竜はヴラドだけを見ていたため、角竜は視界を遮られていたた
めに…角竜の振り上げられた角は恐暴竜に命中し、勢いが消えな
った恐暴竜の巨体は角竜に激突した

「所詮恐暴竜…扱いやすい竜だ。」

ヴラドが時間稼ぎをしたおかげで、逃げてきたハンターはだいぶ城
壁に撤退した

目的を達成したヴラドもまた、城壁に向けて走る

「雑魚は退いてろ!!」

「ギャオツ!？」

群がるイーオスを一太刀で斬り殺すが、それは氷山の一角…イーオ
スはまさに腐るほどいた

「む…あれは…!？」

その中で、逃げ遅れた女性が一人…複数のイーオスに押し倒されていた

ヴラドはとつさに、大剣を横なぎに投げ飛ばす

大剣は回転しながらとんでいき、組み付いていたイーオスの首をはねとばした

そのスキに女性のもとに駆け寄り、急いで抱えていく

「う、後ろ!!」

「（オラオラ、長門さまからは逃げられねえぞ!）」

「ジンオウガ…っ!」

飛びかかってきた長門を跳んでかわしたが、人間一人抱えていたヴラドは体勢を崩した

チャンスとばかりにイーオスが群がってくるが、ヴラドは片手剣で喉を斬り裂いて脱出する

「ヴラドさま、こちらです!」

ベインがガンナーを率いて援護射撃をし、イーオスと長門の追撃を

妨げる

「すまん、助かった！」

「いえ…それよりも早く彼女を城壁の上に！」

「分かった、お前も早く撤退しろ！！！」

ヴラドは城壁に走ったが、返答がないのに気づき、立ち止まった

「ベイン……！！！」

「行ってください……！」

我々が時間を稼ぎます！」

「バカをいうな……！」

早く来るんだ……！」

その時、荒れ狂う戦場に金色のオーラをまとった獣が降り立った
倒した恐暴竜と角竜も復活し、城壁に向けて進撃していた

「こうなったのも、ヴラドさまの忠告をしつかり聞き入れなかった
私の責任！」

ヴラドさまは早くお逃げ下さい！」

行くぞ、モンスターを蹴散らすのだ……！」

ベインとその部下たちは、近接武器を装備してイーオスの群団へ飛び込んでいく

「ヴラドさま…！」

「くっ…行くぞ…。」

ヴラドは齒ぎしりをし、彼女と共に城壁へと向かう

城壁にかかる梯子にたどり着いたが、この惨状で彼女は力が抜けてしまったようだ

ヴラドは彼女を背負い、落ちないように紐で自分の体に縛り付けて梯子を登る

「キャアッ!？」

「なんだ…!？」

「イ、イーオスが！」

状況を確認出来ないヴラドは、急いで梯子を登る
城壁の中腹で段差があり、ヴラドはそこによじ登る

どうやら女性の衣服にイーオスが食らいついていたようで、イーオ
スが一匹ついて来た

「鬱陶しいヤツだ！」

「ギャツ!？」

イーオスの細い首を掴み、横の岩壁に頭を叩き付ける
動きが鈍くなったイーオスの首を折り、城壁の下に投げ捨てる

それから残りの梯子を登ろうとしたが、突如投げられた岩弾に遮ら
れた

目を開けると、梯子が岩弾によってへしまがり、途中で折れていた

「ヴラドさま、無事ですか!？」

城壁の上からハンターが顔をのぞかせる

「ああ、ロープを一本よこしてくれ…。
それから弓矢一式も。」

城壁の上からロープが投げられると、ヴラドは女性の体に縛り付け、弓矢を構える

「ありがとうございます！」

「どうかご無事で！」

女性は礼を言うと、城壁の上にも引つ張られる

そこへ、空を飛び交っていたガブラスが狙いをつけてくるが、ヴラドによって撃ち落とされる

女性を引き上げたロープが投げられ、ヴラドはすぐにそれを掴んで城壁に駆け上がる

そして城壁から見下ろすその光景に、改めて目を疑った

中央の老山龍を囲む大規模なイーオスの群れ、霧と闇で確認は難しいが、数十匹いる

上空のガブラスも混ぜれば、ゆうに百は超えるはずだ

そんな壮大な光景の中でも、恐暴竜を筆頭とするモンスターたちは異様な存在感を放っていた

「……っ！！伏せろ！！！」

金色に輝く金獅子の口から、同じく金色の球体状のブレスが放たれる
ヴラドの警告が早かったために犠牲者はいなかったが、直撃を受けた
城壁は粉碎された

ゆっくりと目を開けると、老山龍が後ろ脚で直立していた
何度見ても、何度戦っても、老山龍のこの姿には畏怖する

老山龍の赤黒い眼を見据えた後、ヴラドは構えていた弓を下ろした

平原は様々なモンスターの鳴き声が飛び交い、進行ルートや上空からは、
なおも小型肉食獣が迫っていた

「総員撤退……だ。」

「ヴラドさま……！」

城壁に避難していたハンターの目が集中する

ヴラドはその場で振り返り、ハンター一人一人の顔を見た

「命を投げ出すことは許さん。
今は命を惜しめ、その時が来るまで……死ぬ覚悟は潜めておけ。
もう一度言う……総員撤退だ。」

一斉に、ハンターたちは非常用の出口へと詰めかける
最悪の場合……つまり砦が陥落する場合のために作られ、めったに使
用されない出口

それは非常用ということもあり、狭い道だったが、ヴラドの指示で
落ち着いて脱出していく

最後はヴラドで、出口に向かう前に、もう一度城壁から下を見下ろ
した

「油断したぞ恐暴竜……だが、次は確実に殺す。
決戦は……ドンドルマだ。」

その夜、難攻不落の城塞は陥落した……
城塞が崩落する音と共に、人ならざる者の歓喜と勝利の雄叫びが響
き渡った……

第四十話：要塞陥落（後書き）

今回は、ラオシャンロン戦を夜間の戦いとしました

夜の闇と濃霧により、主人公らは人間たちにバレずに襲撃出来たわけです

ドンドルマ攻防戦は、次の次のお話し…

その時になれば、主人公や金獅子の暴れっぷりが出るでしょう

これが終われば、この小説も一つの節目を迎えるでしょう…

引き続き、感想をお待ちしております

それにしても、シリアスな展開は書いててムズムズしてきますな

息抜き…で思い出したのですが、もう一つ小説投下しました
そちらはお遊びですが、
こんなのもあったんだ、という程度に…

もしくは、

こんなの書いてないで恐暴竜更新しろ！！

という具合に思っていたら、と思えます(笑)

第四十一話・集結（前書き）

独自設定あり

戦いはまだなし

第四十一話：集結

城塞が陥落してから数日…

老山龍は進行ルート上の木々、障害物：時には人間の住む村を破壊しながら進んでいた

砦が落ちてすぐに緊急避難命令が出たため、人間に死傷者は出ていなかった

それでも、人間が数十年以上もかけ積み上げてきた営みを、巨龍やモンスターたちが一瞬で破壊するさまは、人々に深い悲しみと怒りを植え付けた…

「（ずいぶん規模が大きくなりおつたな。）」

角竜が小高い丘から見下ろすと、老山龍から離れた位置で、大規模な群れをなす鳥竜種が見えた

さらにその上空には、鳥竜種ほどではないがガブラスも集まっていた

砦を陥落させてからというものの、最初のイーオスの群れ以外も集まりだしたのだ

血の匂いに誘われて、イーオス以外にも、ランポスやゲネポスも加わった

さらに、群れを持たないドス級の鳥竜種もいつの間にか加わっていた…

「（これが全部敵だったらなあ……そしたらオレ、一生分の幸せだぜ…?）」

角竜の隣で、眠そうな顔で長門が呟く

実をいうと、先日の戦いの功労者は長門であった

彼女が迅速な速さで人間を倒したために、奇襲は成功し、砦を陥落させることが出来たのだ

自分以上の戦闘狂に苦笑し、角竜は老山龍の少し後ろを行く恐暴竜と金獅子を眺める…

彼は砦襲撃前のように、暴走防止のために口を鎖で拘束されていたしかも口だけでなく、首に二重に鎖を巻かれ、金獅子がそれを握る

こうなってしまったのは、砦陥落の際、自身が狙う復讐相手を目の前で逃がしたから

眼前で逃走をゆるし、恐暴竜は激しい怒りによって、戻りかけた理性が消えてしまった…

今では角竜、もしくは金獅子がいなければ、彼は怒りの赴くままに暴れ回ってしまう

そんな自分でさえも手に負えない、狂獣と化した恐暴竜に、角竜は期待感を覚えた
しかし同時に……兄弟分のこの怒りが、彼の精神と肉体に多大な負担をかけてるのでは…と、大きな不安感も覚えた…

「遠路はるばる、ドンドルマの街へようこそ。」

集会所の一室、重要な会議を行う部屋には数十人のハンター、及びギルドマスターが集まっていた
見覚えのある防具の者もいれば、珍しい防具を装備するハンターもいた

部屋の上座付近には、包帯姿の上に黒装束を纏ったヴラドと、防具姿のシーザーがいる
彼らの向かいの席には、幽鬼のような装束のハンター…彼は得物のポウガンの手入れをしていた

今日この場に集まった面々は、新米でも名を聞けば分かるような、凄腕のハンターたちだ
ミナガルデ、ポツケ村、ココット村……遠くはユクモ村まで

砦がモンスターの群れに攻め落とされて直ぐ、ギルドマスターによつて緊急召集がかかった

それは各地のギルド支部長からギルド員に伝わり、実力のある者の多くがドンドルマ防衛のために駆け付けた

「そんなことはねえよマスターさん。

朱角竜がいるってんだ…オレは大満足だぜ。」

ヴラドの向かい席に座る異形の男は、磨き上げたボウガンを肩にかけ、楽しそうに笑みをこぼす

彼の名はバルガス…ミナガルデで一番の狙撃手として有名で、自称世界一の冒険家だ

砂漠の狩猟において彼の右に出るものはなく、常識を逸脱した戦術を得意とするらしい

初見の者が目を引くその防具は、砂漠の遺跡を探索して発掘した、“禍々しい布”を加防具に応用したものだ

彼が参加した理由は、過去に因縁がある朱色の角竜がいるから…砂漠にあった、いくつもの村や街を破壊した朱角竜を倒すため、わざわざ依頼をキャンセルしてまで来たのだ

「頼もしいことじゃな。

頼りにしておるよ、バルガスくん。」

「任せろ、オレが角竜の眼球を撃ち抜いてやるぜ。」

…っと、どうやら目立ちすぎちゃったようだな。」

バルガスは腕を組んで周囲を見渡すと、ヴラドを見て肩をすくめる

ここに集まったハンターたちのほとんど、全くといっていいほど接点がない

そのため、ハンターたちの間で張り詰めた空気があった

「マスターさんよお…オレたちは長旅で疲れてんだ。

サッサと決めること決めようぜ?」

末席に近い位置のハンターが、少々乱暴な口調で話す
彼の態度を隣の者が注意するが、まったく意に介さない

「おお…君たちはユクモ村からやって来た者じゃったな。
言うことはもつともじゃが…お互い顔を見るのは初めてじゃ。
まずは自己紹介をしようではないかの。」

「そんな悠長なことやってていいのか?
そこの包帯男の失態で、皆が陥落したんだろ?」

彼は黙って腕を組むヴラドに狙いを付ける

ハンターはヴラドやカナメのように、礼節をわきまえ良識ある人物だけではない
むしろ、ヴラドのような者は少なく、たった今突っかかる彼のよう
な荒くれ者の方が多い

「ドンドルマ最強だかなんだか知らねえが、おかげで長旅するはめ
になったぜ。」

しかし、ヴラドは相変わらず腕を組んだまま黙している
番犬のように吠える彼の姿に、シーザーは思わず笑い声をこぼす

それは彼の耳に入り、シーザーを睨む

「何が可笑しいんだテメエ。」

「いや失礼……昔弱い犬ほどよく吠えると教わったものでね。
君はまさにそれだよ。」

シーザーが侮辱をして返すと、男は顔を真っ赤にして立ち上がる
そのまま机の上が上がってシーザーに殴りかかるうとしたが、最初
に彼を注意した女性が彼を引き留める

「ダージ、お前は一々うるさいんだよ……もっと静かにしねえか！」

「アイツムカつくんだよ！！」

「発殴らねえと気がすまねえ！」

「女に止められてなさけねえ野郎だな…バカはお家に帰りな。」

シーザーに再びバカにされ、男は激しく怒る

それを止める女性は大変そうだったが、ヴラドが立ち上がると男は鎮まった

「無礼申し訳ない…シーザーの代わりに謝罪しよう。」

マスター…これ以上の時間の浪費は、彼の言う通り無駄です。

早急に作戦を立案いたしましょう。」

「待て待て待てい!!」

そのまま進めようとしたヴラドに、男は女性に羽交い絞めにされながら異義を唱える

「納得がいかねえ、失態犯したお前がなに仕切ってたんだよ!」

「そのことじゃが、今回の防衛戦はヴラドに指揮をとってもらおう。」

「なんだって!?!」

それには彼だけでなく、部屋に集まっていたハンターも驚いた
ギルドマスターではなく、一介のハンターであるヴラドが指揮を取るといふことに…

マスターのその言葉に、会議室がざわつく
ヴラドを知る者は認めるが、彼を知らず、今回の皆陥落のことだけ
を聞く者は反対した
それはやがて、ヴラドを支持する者と反発する者との、激しい口論
となる

シーザーまでもそれに加わり、参加していないのはマスターとヴラ
ド、居眠りするバルガスのみだ

そんな激しい口論も、ヴラドが机を叩いた音で止まる

「諸君らの言う通り…私は皆において大敗を喫した。
予想外の事態に遭遇したとはいえ責任重大…諸君らが私を認めない
のも理解出来る。」

だが…私自身、今回ハンターたちを率いるに相応しい人物の一人だ
と自負している。」

口論をしていた者たちは口を閉じ、賛成派も反対派もヴラドの言葉
に聴き入っていた…

「私はこの街で育ち…一時離れていたが、今までこの街に住んでき
た。」

そんな街を、そこに住む人々を私は絶対に守りたい…そのためなら
鬼にも修羅にもなろうし、命を捨てられる。

だが人間一人の力などたかがしれている…だから、諸君らの力を私

に貸してほしい。」

そう言うと、ヴラドはギルドマスターに向けて頷いてみせる

「いやはや……いいスピーチだったね。

どうだ皆さん、ここはヴラドさんのもと力を合わせないかね？

実際彼の指揮能力は高いわけなんだし……。」

静まり返ったその場に、バルガスが調停のための発言をする

バルガスが発言をしなくても、先ほどのスピーチでヴラドの本気・

真剣さが伝わっていたが、その発言でわずかに残る反対の意を一掃した

先ほどまで文句を言っていたユクモ村の男も、渋々ながら席についた

「ありがとうバルガス。

では…防衛戦に向けての作戦会議といこう。」

ヴラドの声色が変わる

普段は冷静沈着で寡黙な男だが、任務が始まれば冷酷ともとれるほどに最善の作戦を模索する

ハンターたちもまた、つられて真剣な態度へと変わる

「まず問題の老山龍だが…皆から進んでこの荒野を移動中だ。」

「ちよい待ち！質問いいか！？」

話しを続けようとしたところ、先ほどの荒くれ者が拳手する

「君の名はダージだったな。

質問とはなにかな？」

「大したことじゃないんだけどよ…その、老山龍ってのはどんなやつなんだ？」

峯山龍みたいなもんなのか？」

ユクモ村出身のダージには、老山龍がどんなものなのか分からなかった

見回してみると、数人同じような表情をしていた

「そんなこともあるのかと、老山龍の爪を持ってきた。」

ヴラドが目配せすると、シーザーは机の下から大きな爪をあげる

「この爪を見てもらえば、老山龍の大きさがある程度想像できるはずだ。

標準的な老山龍はジエン・モランよりわずかに小さいが、今回の老山龍はそれよりも大きい。

その規格外の大きさもまた、敗因の一つだろう。

理解出来たか？」

ダージは首をかしげながらも頷いた

「老山龍が街に到達するまでにおよそ一週間。ただし座して待つわけではない…進行ルートにて襲撃をかける。」

ヴラドは移動し、壁に貼られた地形図を示す

「ヤツの進行ルートと思われるのは、この森林地帯だ。ここで地理を活かして襲撃をかけ、ヤツに集まる戦力を削る。」

「はいはい！アタシも質問！」

今度はダージを押さえ込んでいた女性が拳手をした

「君はユクモ村のマキだな…どんな質問かな？」

「えつとな、その老山龍つてのに集まる戦力はなんなんだ？モンスターが群れているのは聞いてるけど、どんなのがいるんだ？」「百を超える鳥竜種、角竜、金獅子…雷狼竜と恐暴竜がいる。」

「なんですと？」

マキは冷や汗を垂らし、苦々しく笑う
たった今知った者もいるようで、群れたモンスターの面子に恐々と
していた

「鳥竜種は言わずもがな…他のモンスターと一緒にいる理由は知ら
ん。

雷狼竜と恐暴竜は外来種だ。」

「うっひゃー…そりゃ大変だな、遺書残しとかねえと。」

「なお、今作戦は軍と共同での戦いとなる。
狩猟技術は諸君らに及ばないだろうが、鳥竜種を片付けてくれる。
幾分かは諸君らも戦い易くなるはずだ。」

「ヴラド……軍にまで協力を要請したのか？
オレたちだけでは頼りないというのか？」

軍の参加というヴラドの言葉に、意外にもシーザーが声をあげた

「私が頼んだのではない。

彼らもまた、街を守るべく立ち上がった同志だ。
討伐隊に参加した兵士も何人かいるようだから、我々の助けとなっ
てくれるはずだ。」

意地をはるなシーザー！街を守れなければ我々の敗北だ。」

シーザーは渋々だったが、納得してくれた

ヴラドは地形図が離れ、元の席にまで戻る

それからギルドマスターと二言、三言、言葉を交わしてハンターたちを向ける

「森林地帯での戦いの目的は、住人の避難を兼ねている。

戦力を削ればなお良いが、最終決戦に向けて我々も戦力を温存したい。」

それからヴラドとギルドマスターは、森林地帯で敵を迎撃するメンバーを決める

議論の結果、迎撃に向かうメンバーはバルガスらミナガルデのハンター

ポツケ村のハンターたちと決まった

ユクモ村出身のダージなどは、地理に明るくないということで留守番
バルガスらが時間を稼ぐ間、ダージらには街での要所を覚えてもらい、迎撃準備にあたらせる

その日の深夜、バルガスらは出撃する…

街の外で軍隊と合流し、老山龍の群団を迎え撃つべく出撃した

第四十一話：集結（後書き）

バルガス

（ミナガルデ出身）

デスギアシリーズを装備し、手にするクロノスパンツァーで圧倒的な弾幕をはる

射撃は百発百中…デスギア装備のスキルも合わさり、奇襲や不意打ちを得意とする

角竜とは何度か戦ったことがあり、お互いに仕留められていない因縁の間柄

更新遅れてしまい、申し訳ありません！

ただいま私自身忙しい状況となり、なかなか執筆ができておりませんこの状態はしばらく続きそうですが、行方不明にはなりません！！

第四十二話・赤き森林の戦い（前書き）

雷狼竜について、独自の解釈あり

第四十二話：赤き森林の戦い

森丘ののどかな草原と安定した気候、密林の多種多様な植物とモンスター……この名も無き森林はそれらを合わせたような場所だ

普段は近くの村人くらいしか入らないこの森には、数十人のハンターと百人強の兵士が布陣していた

ハンターと兵士たちは協力して土塁を築き、樹木の陰に爆薬や罠を仕掛ける

皆懸命に迎撃準備をしていたが…全員が全員、困惑を隠せないでいた自分たちが今まで経験してきたのは、砦での防衛戦だ

しかし皆は陥落し、老山龍にとって障害もなにもない、このような森林地帯で戦わなければならないのだから…

この森の樹木はしっかりしているが、老山龍の進撃を止めるには心もとない

さらに彼らにとって気が気でないのは、老山龍だけでなくたくさんの鳥竜種と、恐ろしい大型モンスターが存在があるからだ

そんな彼らが逃げ出そうとしないのは、ここを簡単に突破されたら、市民が避難しきれないドンドルマが攻撃されるためだ

「ケッ……森が揺れ動いてやがるぜ。」

高い木の上にいるデスギアの男は、双眼鏡を片手にぼやく
彼が双眼鏡で眺めている先では、大きな森のざわめきと一斉に飛び
立つ鳥たち…そして木がへし折れる乾いた音が響く

木々の枝かり微かに見える地面は、赤や黄、青の小さな物体がしき
りに動いている
さらにその上空には、災厄の兆候として忌み嫌われる、大勢の蛇竜
が飛び交っている

バルガスは苦笑いを浮かべ、木の上から飛び降りる

「バルガスさん、爆薬の設置は完了いたしました。
土塁の方も直に完成しますが、罨に少々時間が…」

木から飛び降りてきたバルガスに、同じミナガルデ出身のハンター
が報告をする

土塁は慣れた兵士の動きであらかた完成していたが、罨の作成は、
地面に生い茂る雑草のために滞っていた

「罨はもういい…今あるだけの数でいいよ。
どのみち、あの規模には役に立ちそうもないしな。」

「はあ…。」

「それよりも、全員戦う準備をするよう指示してくれ。予想よりも老山龍の進行が速すぎるからな。」

男にそう告げると、バルガスは木に寄りかかって葉巻を口にする…
…デスギア装備のままなので、死神が葉巻をふかしているように見える

「煙草は体に良くないぞ。」

「こんな状況ならなおさらな。」

大きなランスを背負うグラビド装備の大男が、葉巻に火をつけようとするバルガスに声をかける

…が、バルガスは忠告を無視して紫煙を口に含み、ゆっくりと吐き出す

まるで死神が死の煙を吐いてるような光景に、周りの人間はギョッとしていた

「樹海産だ…吸うか？」

「遠慮しよう。」

断られたが特に気分を害したわけでもなく、バルガスは再度葉巻を

ふかす

「ところで…誰だお前？」

「おいおい冗談だろ？」

さっき自己紹介し合ったばかりじゃないか？」

「マジかよ…悪いが、もう一回自己紹介してくれねえか？」

「勘弁してくれよ。」

俺はリカルド、ポツケ村のG級ハンターだ。」

自己紹介した彼の言葉に頷き、葉巻を地面に捨てて向き直る

デスギア装備のバルガスを正面に見て、リカルドは若干ビビっていた

バルガスは見慣れた反応なので、無視する

「リカルドだな…覚えたぞ。」

「死神に言われてるみたいだから、低い声で言うの止めてくれないか？」

意識してやっているわけではないので、バルガスは困ったように頭を掻く

それから二人は、今回の防衛戦の作戦を話し合う

リカルドはポツケ村の代表らしく、主だったハンターも交える

今回の戦略上の要は、ずばり土塁にある

ここでいかにしてモンスターを食い止め、時間を稼げるかどうか…
結果的には老山龍か角竜などに破壊されるだろうが、ハンターらの
目的はあくまで時間稼ぎ…小型肉食獣の数を減らせたらツいている
程度

こうして作戦を話し合っている間にも、森の奥からは地響きが轟く
バルガスは早々に作戦をまとめ上げ、自分の武器である改造ポウガ
ンを手にする

「一度にポウガンを三つもだなんて…欲張りすぎじゃないか？」

「一度に三つなんて使えるわけないだろ…俺はヴラドみたいに器用
じゃねえんだから。」

相棒に弾装填してもらって、交換しながら撃ちまくるんだよ。」

疑問の声をあげるリカルドにそう返し、バルガスは一匹のアイルー
を伴って土塁に登る

それからアイルーに火をつけてもらい、煙草をふかす

「ふう……いよいよかい。」

楽しいショーの始まうっ…ゲホッゲホッ！…」

誤って煙を肺に入れてしまい激しく咽せるバルガス
咳がおさまると小さく悪態をつき、狙撃ポイントへと移動した

「弓隊構え!!」

土塁の後ろに整然と並び、軍事用の弓を構える兵士たち
土塁の上に立つ指揮官の指示で一斉に矢をつがえ、弓を引き絞る

「引きつける!もつと引きつける!」

土塁の上では、武器を構えたハンターたちが、迫り来る肉食獣に注
視していた
スコープを覗くガンナーを一行目に、剣士たちは武器を構えて迎撃
態勢をとる

「よし今だ、やれ!」

バルガスが木の上から指示を発し、さらに指揮官の合図で一斉に矢
が放たれる
そしてほぼ同じタイミングで、ハンターらも射撃を開始する

森の奥から駆け抜けてきた鳥竜種らは、一斉攻撃によって全滅するしかし間髪入れず、さらにたくさんの鳥竜種が出現、土塁めがけて疾走する

「一発目の爆薬を起爆させる！」

バルガスは木の上から、仕掛けられた爆弾を正確に狙い撃つ
始めの爆弾が爆発すると、次々に連鎖爆発を起こし、木々や鳥竜種を吹き飛ばした

「なかなか数が減らねえ…おまけにデカイのも来やがった。」

森の奥からはさらに鳥竜種たちが出現し、その中に数体、ドス級の個体もある

ガンナーらの射撃の撃ち漏らしは剣士が倒しているが、鳥竜種は徐々に土塁に近づく

バルガスは舌打ちをし、木から飛び降りて土塁の上上がる

「頼むぜ相棒。」

アイルーから別のボウガンを受け取ると、帯状の長い物体をボウガンに差し込む

それから迫り来る鳥竜種に銃口を向け、引き金を引く

バルガスのボウガンからは、散弾が連続して放たれ、多くの鳥竜種が餌食になる

バルガスのボウガンは止まることをせず、装填せずにいつまでも散弾を発射し続ける

「バルガス、何だその規格外なボウガンは!？」

「弾帯つてのつなげて、装填数増やしたのさ!

…弾切れだ。」

バルガスは弾がなくなったボウガンを、後方のアイルーに投げ渡し、別の弾帯がついたボウガンを受け取る

少しもたついている時にドスゲネポスが接近したが、銃床で殴られ、至近距離の散弾で頭をぶつ飛ばされる

「リカルド、元気にやってるか?」

おどけた様子で声をかけるバルガスだったが、リカルドは前方を注視しているために聞こえていない

やはり悪態をつき、バルガスは鳥竜種の撃退に専念することにした

そのちょっとした油断というか、余裕がバルガスの感覚を鈍らせ、異変に気付くことを遅らせた

森の奥から紫電を纏う蒼い物体が、疾風の如く現れバルガスめがけ突っ込んできた

回避に遅れたバルガスはそのモンスターに巻き込まれ、引きずられながら土塁から落とされた

「痛つてえんだよクソが！」

自分の上に覆い被さるモンスターめがけ引き金を引くが、モンスターは後方に跳んで回避した

それだけでなく、そのモンスターは着地点で大きく跳び、反転して尻尾を叩きつけた

775

間一髪バルガスはかわしたが、ボウガンは尻尾の一撃で破壊されてしまった

さすがに焦りを見せるバルガスだった

いざという時のためにナイフを携帯しているが、大型モンスターには少しも役に立たない

どうするか考えていると、モンスターは呻り声をあげて腕を振り上げる

バルガスはとっさに脇を抜け、全力で土塁へと走り出す

そこで別のボウガンを受け取って振り返る

蒼いモンスターは目の前に迫っていた

バルガスの身体は再び土塁から転げ落ち、樹木に激しくぶつかり止まった

悪いことに、バルガスが吹っ飛んだのはモンスターが進撃してくる方向だった

「やろう…不死身のバルガス様をこうまでしてくれるなんて、朱角竜じゃなくても楽しめるじゃねえか。」

血反吐を地面に吐き捨て、ボウガンを手にはやりと笑う

「ギヤオツ！」

「邪魔すんなザコ！」

襲いかかってきたランポスの首を絞め、力任せに骨をへし折る土塁の上で蒼い竜が咆哮をあげ、バルガスめがけ走り出した

「お待ちかね、クロノスパンツァーだぜ。」

今回は弾帯は付いていない

バルガスは素早く弾を装填すると、まずは横に転がって蒼い竜の一撃をかかわす

振り向きざまに蒼い竜の横腹めがけ、弾丸を発射する
弾丸は直撃して爆発すると、いくつかに拡散して小さな爆発を起こした

爆発で体にまとわりついていた、青白く光る物体も吹き飛び、心なしか蒼い竜は動きが鈍くなった

「俺が何も知らないバカだと思ったたら、大間違いだぞ。
体についた雷光虫さえ消せば、雷狼竜は弱体化するんだよな。」

バルガスはドンドルマを発つ時、ヴラドからいくつかアドバイスを聞いていた
そのうちの一つに、雷狼竜の対策があった

雷狼竜の力の源は雷光虫との相利共生にあり、そこから雷光虫を引き離してやれば、かなり弱体化する
ヴラドからは怯ませることで、雷光虫を引き剥がせると教わったが、バルガスは体につく雷光虫を殺すことで弱体化を図った

バルガスが相対する雷狼竜は、痛覚に鈍い長門…ある意味この判断は的中していた

続いてバルガスは火炎弾を装填し、雷狼竜の背に速射を浴びせかける
火に弱い虫は火炎弾の火にやられ、みるみる雷光虫の数が減っていく

しかし雷狼竜も負けじと、新たに雷光虫を集め、怒りの雄叫びをあげる。耳をつんざく雄叫びにバルガスは一瞬硬直してしまい、雷狼竜の振り落とされた腕に吹き飛ばされる。

「いちいち痛えな…ちつと体が痺れてやがるし。」

幸いふつ飛ばされた先が土塁であり、ガンナーからの援護も受けられた。

雷狼竜は強行突破は不可能だと悟り、一声残して森の奥へと消えた。同時に鳥竜種の数もまばらになり、最後の一匹も軍人の弓によって仕留められた。

「おととい来やがれマヌケ！」

土塁に寄りかかったまま罵声をとばすと、懐から葉巻を取り出して口にすする。ただ火がないので探していると、目の前の木々が燃えていることに気付く。

火炎弾に加えて、雷狼竜が設置した爆薬を起爆させたことで、火災が発生したらしい。近場にある水は土塁の後方にある川で、この火災は消し止められないだろう。

さらについていたのは、風向きがモンスターの方角であることだ
老山や大型モンスターにはびくともしないだろうが、鳥竜種を引き
離すには効果的だった

ふと、この火災で森の環境が破壊されてしまうことに気付く
街を守るためとはいえ、バルガスは罪悪感を抱いた

「…あのボロ布野郎。

オレの弱点を的確に攻めやがって。」

撤退した長門は悪態をつきながら、傷口を舐めていた

さっきまでたくさんいた鳥竜種も、最前線での激しい戦いに怖じ気
づき、老山龍の後方に逃げ去っていた

「（餓鬼が俺の制止を聞かねえからだよ…このド阿呆が。）」

「（老山龍がノロノロ動いてるから、ムズムズすんだよ！

あの人間覚えてろよ、ズタズタに引きちぎってやる…！）」

「（女がそんな汚え言葉使うんじゃないよ。普段みてえに、おしとやかにしやがれ。）」

長門は低く唸り、忌々しく森の奥を見つめる
森は火災が起きているようで、赤い光が漏れていた

「（お、親方あ！！）」

感慨深く長門を眺めていると、角竜が慌てたように走ってきた

「（テメエ…若造の守りはどうしやがった。）」

「（それが兄弟のやつ、少し目を離れた隙に鎖を引きちぎったんだ！！！！）」

「（この大馬鹿野郎！！）」

「（テメエはここで待ってる！！）」

金獅子はすぐさま燃える森の中に入っていく
すでに老山龍は火災が起きているエリアに入り、土壘に到達するのは時間の問題だった

「（ハハッ、怒られてやんのー。）」

「（うつせえ！！）」

疼く……硝煙と血の香りが俺の衝動を駆り立て、俺は無意識のうちに鎖を引きちぎっていた

乱立した木々？肌を焼く熱い炎？

そんなもの、今の俺には何の意味もなさない

俺は目に付く者全てを、数々の強者を仕留めたこの牙で噛み喰らった利害関係のある鳥竜種も、生きていようが死体だろうが、無差別に貪り喰った…

森の奥に積み上げられた土塁が見える……俺の背丈の半分ほどもあり、その上にはこの怒りの原動力の人間がいる

食欲とは違う衝動が俺を駆り立て、大口を開けて真っ直ぐ突進する人間は俺に向けて撃ってきたが、びくともしない
しかし人間のある一発が口内に命中し、大きな爆発を起こす

口の中に広がる火薬の匂いと、口内を焦がす激痛……それは”あの時”を彷彿させる一撃……
ヴラドに爆薬を投げ込まれ、痛手を喰らったあの痛みに酷似している……

その忌まわしい感覚が、身が燃え尽きてしまいそうな激しい怒りと、正気を失う深い憎悪を呼び戻した

大きく息を吸い込み、肺に満たされた空気を全て邪悪な気へと変え、前方に向けて吐き出した

俺の身体にある傷口は開き、流れ出る血は蒸発していた……

「有り得ねえ……なんてモンスターなんだよ。」

「クソっ、負傷者の数は!？」

突如として出現した、黒緑色の翼の無い巨大な竜

竜はいきなり怒りだし、土塁めがけ赤黒いブレスを広範囲に放った

とっさにハンターたちは土塁から飛び降りたが、何人かはブレスの

餌食になってしまった

バルガスやリカルド、軍隊の指揮官など主だった者はなんとか無事だ
土塁に登って迎撃しようとして、数人の兵士が土塁に登っていった
それを驚異的な速さで、竜は兵士を食いちぎり、上半身を失った死
体は土塁から転げ落ちる

「怯むでないヤツが恐暴竜とやらだ！
矢を放て、恐暴竜を近付けるな！！」

軍人を率いる指揮官である將軍は、混乱しかけた兵士たちを一喝
將軍の統率力のもと、動揺していた兵士たちはまとまり、一糸乱れ
ぬ動きで矢を引き絞る

「放て！！」

將軍の一声で矢が一斉に放たれ、無数の矢が恐暴竜を襲う
矢は弧を描いて恐暴竜の背に突き刺さり、おぞましい苦痛の叫びが
響き渡った

「剣をとれる者はワシに続け！
恐暴竜を撃退するぞ！！」

兵士たちは鞘から剣を抜き、掛け声をあげて將軍に続いた

「あらら…ハンターよりも活躍してるぜあの將軍。」

バルガスはニヤニヤしながら兵士たちを見つめると共に、いまいち活躍出来ない自分に落胆する

「仕方ないだろ…あの方は隣国との戦いで、数々の武功をあげた猛将なんだから。
それより、オレたちも恐暴竜を叩くぞ。」

やれやれと、首を振りながらバルガスは走る

土塁の下では早くも兵士たちが交戦をしていた
しかし恐暴竜は圧倒的な力をみせ、太い尻尾を振り回して群れる兵士をなぎ倒す

ただの矢や弾などでは恐暴竜には効かず、背に刺さっている矢も深くはなかった

通常弾や散弾では肉体を貫けない…バルガスは貫通弾をボウガンに装填し、恐暴竜の太い首めがけ発射した

分厚い筋肉のせいで貫通弾の威力は激減したが、恐暴竜に浴びせた

攻撃の中では有効打となった
バルガスは一通り撃ち尽くすと、場所を変えるために走り出す

恐暴竜は自身に痛烈なダメージを与えたバルガスを探したが、デス
ギア装備の特性により見つけられなかった

やがて恐暴竜は探すのを止め、ゆっくりと片足をあげ、勢い良く地
面を踏みつけた

足下にいた人間は踏み潰され、さらに、恐暴竜の凄まじい力は地震
と衝撃波を生み出した

「化け物め!!」

「將軍、一度引きましょう!」

「うむ、全員退けい!!」

しかし恐暴竜は逃がすまいと、撤退する者に襲い掛かる

人間は牙にかかって喰い殺されるか、宙高く投げ飛ばされ、地面に
叩きつけられる

「チツ……なんて凶暴な竜なんだよ、アイツは!

その狂気の眼を撃ち抜い……ん?」

樹上からスコープを覗いていると、右側の森から何かが凄い勢いで

近付いてきた

それが新手のモンスターだと気づき狙いを定めたが…

そのモンスターは真っ直ぐに恐暴竜を狙い、なんと噛み付いて襲いかかった

「ババコンガの亜種だと!？」

なにが起きてやがるんだ!？」

リカルドは目の前で繰り広げられる、モンスター同士の激しい組み合いに驚愕していた

「グガアアアア!!!」

首を激しく振って緑毛獣を振り払い、体当たりで緑毛獣を吹き飛ばした追撃をかけようとした恐暴竜に、また新しいモンスター…リオレイアが現れ、恐暴竜に襲い掛かる

雌火竜のブレスが恐暴竜に命中するが、大して効いてはいないしかし、起き上がった緑毛獣も戦いに加わることで、恐暴竜とまともに戦っていた

「何が起きているというのだ?」

「この火事と老山龍の襲撃が、あの恐暴竜のせいだと思ってるの
でしょう。」

將軍、今の際に…老山龍が来ました。」

森に木々をなぎ倒しながら進行する、蒼い甲殻を持つ巨大な龍が現
れた

木々が倒されて、尻尾の動きで燃えた木が吹き飛ぶため、森に広が
る火災はどんどん広がっていく

火災のせいで隠されていた爆薬に引火し、激しい爆発と黒煙を生む

「（邪魔だ、どけ雑魚が！）」

恐暴竜の牙が緑毛獣をとらえ、噛み付いたまま土塁に叩きつけた
そして容赦なくコンガの体を踏み潰され、頭に噛み付いて、さらに
強烈に地面に叩きつける

レイアは空に羽ばたいて、恐暴竜の背中を足の鉤爪で攻撃する
それも、いきなり現れた金獅子のリアットをくらい、地面に叩き
落とされた

「（若造！）」

恐暴竜に目を向けると、緑毛獣を喰い荒らしているところだった。あつという間に平らげた恐暴竜は、金獅子の近くで倒れる雌火竜に目を向ける。

「（私らの森をよくも！

あんたたちは絶対に許さない！」

雌火竜は憎々しげに恐暴竜を睨んだが、次の瞬間、赤黒いプレスを吐かれて殺された。

恐暴竜は片足で死体の背中を踏みつけ、頭部に食らいつく。

ブチブチと肉が引き千切られる嫌な音が鳴り、頭部がいとも簡単に離れた。

「（若造…悪いが、少し眠っててもらっぞ。」

金獅子は恐暴竜の頭を思い切り叩き、気絶させる。

この森の住人にとって、自分たちは悪の存在だ。いきなり森に侵入し、荒らした…このままだと、恐暴竜は向かってくる者全てを喰い、この森は死者の墓場と化する。

金獅子は恐暴竜の身体を少しずつ引きずっていき、後の事は、老山龍に任せた。

全てのモンスターが後方に退き、最後に強大な老山龍の登場
傷ついた人間たちは痛んだ土塁に登り、老山龍と対峙した

すでに火災は森全体へと広がり、燃えていないのは土塁から後方の
森のみとなった

老山龍も目の前の土塁に気付き、少し動きを止めた
それから首を横に振りかぶり、体当たりと共に振り切った

振られた老山龍の首は燃えた木々や岩を吹き飛ばし、土塁に向けて
飛んでいく
燃えた木のいくつかが後方の森に飛び、さらなる火災を生む

まさしく天災級の古龍だ
その動作の一つ一つが、森を破壊し、大地を荒れ果てさせる

「この老山龍、やたら好戦的だな…クソッ。」

即席で作り上げた土塁は、先ほどの一撃でかなり痛んだ

直接攻撃が命中すれば、一撃で土塁は崩壊する

もはや時間稼ぎは済んだ……満点ではないが、当初の目的は済んだ後は退却するだけ……

老山龍は後ろ脚で直立となり、土塁を一気に踏み潰す気だ

そして退却を開始するハンターを助けるかのように、空から雄叫びをあげる火竜が飛来する

老山龍は自身の周囲を旋回する火竜を狙い、唸り声をあげて噛み付く

しかし空の王者たる火竜は、老山龍の遅い動きでは仕留められない

790

リオレウスは空中をホバリングし、老山龍の顔面めがけてブレスを放つ

目の近くにブレスを浴びたために怯んだが、老山龍にはあまり効いていない

老山龍は忌々しそくに、空を飛びリオレウスを見つめていたが、やがて諦めた

リオレウスもまた、直立を止めて炎の中に入った老山龍を睨んだ

下には金獅子や角竜がおり、降りれば簡単に殺される

自身の森を破壊され、その報復も出来ない状況に火竜は怒りを露わにした

怒りの咆哮を残して、火竜はその場から飛び去っていった…

人間たちは当初の予定に加え、鳥竜種の多くを討伐することが出来た不安要素の一つを消せたことは良かったが、代償も大きいものだった

ハンターたちにも多数の死傷者を出し、最悪の結果として、森の大部分が火災によって焼失した

この過激で苛烈な死闘がドンドルマで起こったらと考えると、人間たちは戦慄した

戦いの集結は夕方……空も大地も、真っ赤な色に染まっていた

第四十二話：赤き森林の戦い（後書き）

今回と次回の老山龍は、ちょっといつもと違います

皆での老山龍の行動は”通過”

今回と次回では、”攻撃”です

分かりづらくてすみません…

台詞でまとめるならば、

《通過》

あれ、こんなところに変な置物が…邪魔だから壊してしまえ
ハンター？

なにそれ？

《攻撃》

このやろつ、縄張りでチヨロチヨロするなよ！
死んでしまえ！

ハンター？

なんでもいいから死ね！！

あれ…分かりづらい

とりあえず、ハンター戦は次回で終わる予定です

第四十三話・ドンドルマ攻防戦（前書き）

最後に近付くことに力尽きた感が…

第四十三話：ドンドルマ攻防戦

ハンター及び兵士の死傷者数は、決して無視出来ない数だった

目下の問題であつた時間稼ぎに加え、鳥竜種の半数を駆逐した功績は周囲に賞賛されたが、部隊を指揮したバルガスの気は重かつた：

バルガスは上層部に簡単に報告をいれると、街中にある仮設宿舎に向かう

かつて賑わいをみせていたドンドルマの通りは、大多数の市民が避難したことで、驚くほど静かだ

バルガスは一つの宿舎に入ろうとすると、丁度、長い美しい銀髪を持つ女性が出て来た

女性はバルガスに軽くお辞儀をすると、小走りに街の中に消えていった：

バルガスは女性が走っていった方向を眺めながら、宿舎内へと入っていく

宿舎内に入ると真つ先に目に飛び込んだのが、全身を白い包帯で巻かれたヴラドだ

包帯姿のヴラドは、蠟燭が立てられた小さな祭壇の前に跪き、小さな声で何かを呟いていた

ヴラドが最後に胸の前で十字をきつたあと、バルガスはようやく声

をかけた

「もう聞いてると思うが…多数の死傷者を出して、目的は達成されたよ。」

包帯の男、ヴラドはそれに頷き、ゆっくりと立ち上がる

「ところで…さっきの麗しい女性はどなたかな？
あなたの愛人か？」

バルガスは少し笑いながらヴラドに問い掛ける
下らない問い掛けだが、これで機嫌を損ねるほど狭い器量は持ち合わせていない

「そのような間柄ではない…包帯を巻いてもらっていただけだ。」

「あんな美人を招いて何事も無かったってか？
にわかには信じられないな…嘘じゃないよな？」

「うむ…神に誓って。」

そう言つて、ヴラドは蠟燭と金細工で飾られた祭壇を示す
ヴラドの信仰心の強さは有名だ…彼がそのようなことを言うのだから、何も無いのだろう
期待した返答でなかったことを残念に思ったが、バルガスは彼の信仰心に興味を持つ

「アンタはかなりの現実主義者だと聞いたが、なぜ神を？」

「何者にもすがりつきたいものはあるのだよ。
家族、友人、恋人…私のように神の存在などな。」

「なるほどね。」

追求したかったが、それ以上はさすがに無粋なので、止めにした
ヴラドは防具を装備した後、バルガスと一緒にハンターの集まる城壁へと向かった…

「ただいま、マリナ。」

いつものように帰宅の挨拶をかけると、暖炉の前に座るマリナは顔を向けてくる
最近になって、少しだけ反応を示すようになってきたが、それでもまだマリナは立ち直れていない
妹のようなマリナのこの姿は、カナメにとってかなり痛ましかった

そして今は、彼女を立ち直らせるよりも、もっと大事なことがある

「マリナ、君もはやく避難をするんだ。

今ならまだ間に合う。」

老山龍が多くのモンスターを引き連れて来ていることは、カナメにも知らされていた

といっても、今までマリナにつきつきりだったので、今回の襲撃については知らないことが多い…

カナメの説得に対し、マリナは首を横に振る
優しく説得を試みるも、反応は同じだった

「どこに行っても…兄ちゃんはいない…。

お家に帰っても…思い出が辛いだけだよ。

…カナメ様も…行っちゃうの？」

カナメはマリナを避難させた後、防衛戦に参加するつもりだったが
しかしマリナは避難を拒否し、こうして泣き出しそうな表情で見上げてくる

ここでようやく気付いた

彼女にとって、心の底から頼れる存在が自分しかないということ
を…

「行くわけない…マリナを一人にしない。
約束だ…。」

「カナメ様…。」

その時、巨大な地響きと龍の大きな雄叫びが轟いた
マリナは驚いてカナメにしがみつく
巨大な揺れによって書斎の本や食器が落下した

「ついに…始まったか！」

カナメは厳しい表情で外を眺める
老山龍の呻り声以外にも、多数のモンスターの声が聞こえてきた

マリナは毛布をかぶって震えていたが、ある時、震えるのを止めて
顔を上げた

「……兄ちゃん…？」

「気のせい…だよね…。」

あの声が一瞬間こえた気がしたが、再度耳を傾けても聞こえなかった
二度目の巨大な地響きがなり、マリナは再び毛布を頭からかぶった

「チツ、なんて揺れだチクシヨウ！」

「落ち着け。」

城壁からは老山龍の姿はまだ見えない
崖の上に急遽作られた射台の者によると、いきり立った老山龍が崖に体当たりをしたとのこと…

「報告にあった通り、あの老山龍はやたら好戦的だな。
こりゃ撃退じゃなく、討伐する必要があるぞ？」

「端っからそのつもりだ。」

シーザーの問い掛けに、さも当然のように答えるヴラド
どのみち、老山龍が人の勢力圏に入った時点で、抹殺対象になって
いるのだ

今回は以前のような失態は犯さない
補給路は安全であるし、崖の上に物見を作ったことで、情報を随時
報せられる

城壁と下の平原に展開するハンターは、どれも歴戦の猛者
それ以外はガンナーや、バリスタ・大砲の射手として城壁に展開さ

せている

先ほどからチヨロチヨロと鳥竜種が現れるが、結集したハンターたちを見て、慌てて逃げ帰っていく

所詮、大型のモンスターのにおぼれを狙う雑魚であり、先日の戦いで人間に恐れを抱いたヤツらは敵ではない

上空のガブラスも戦況を見極めているようで、安全圏をゆったりと飛んでいた

この戦いは実質、老山龍と大型モンスターとの戦いになる
これも、バルガスらの戦いのおかげだ

そんな様子を、軍人たちは面白くなさそうに見ていた
理由は言わずもがな：しかし彼らが不平不満を口にしないのは、やはりヴラドの存在があった

ギルドでの人望に加え、元王国騎士の彼は今でも大きな影響力を持つ
とりわけ、王女とは今でも手紙などをやり取りする仲であり、ヴラドを王女にとって親しい友人だ

ヴラドはハンターというだけに留まらず、古龍観測局、王国軍といった組織と関わりを持っている
今では王国一頼りになる存在であると同時に、国を揺るがしかねない危険な存在として警戒されている

もっとも彼を知る者は、彼のあまりの野心の無さに、警戒感などな

い…

そんな男のもとだからこそ、ハンターも軍人たちもいざこざなく、共闘出来るのかもしれない

崖の上から狼煙が上がる…襲撃の合図だ

人間たちは武器を構えて気を引き締める

そしてまず最初に現れたのが、朱い甲殻の巨大な角竜

角竜は走ってきた勢いを消さず、地面をえぐって方向を変えハンターらに突進する

「朱角竜……とうとう現れやがったな……！！
バリスタ発射用意！」

角竜と因縁を持つらしいバルガスが、高揚感露わにして指示を下す
城壁の上には急遽増設されたバリスタが並び、それらが全て角竜に向く

「さあ、愉しめよ朱角竜！！
発射だ、撃てえ！！」

バルガスの合図で極太の矢が一斉に放たれ、さらにガンナーらも弾

丸を撃つ

角竜は飛来する矢や弾丸を横目で確認し、方向転換してかわす
なおもとんでくる矢に対し、角竜は角と尻尾を使って叩き落とす

角竜はほとんどの矢を落とす、くぐり抜けた矢や弾丸も、生じた風
圧に威力が下がり堅い甲殻にはじかれる

「(そのような攻撃、豆鉄砲にすらならぬわ!!)」

「ハツハハハハ!!」

それでこそ朱角竜、俺の宿敵は務まらねえ!!」

バルガスは高らかに笑うと、それまで持っていたボウガン捨てて
そして、緑色の異様な形の武器を手に構える

「コイツを使うのも久しぶりだ……行くぜ、朱角竜!!」

毒液を滴らせる緑色の大鎌を肩に背負い、バルガスは城壁から飛び
降りる

角竜もそれを確認し、バルガスめがけて突進する

「(死ね、下等種族めが!!)」

角竜の恐るべき突進が迫るが、雑なその攻撃は楽にかわせる横に転がって起き上がりざまに、角竜の側面を斬りつける

しかし角竜の甲殻は斬り裂けず、薄くかき傷を残すだけだった

「（面白い…だが、貴様だけに構っておれぬわ。）」

角竜はバルガスを無視して走り出し、ハンターの集まる城壁下に向かう

舌打ちをして角竜を追いかけようとしたが、後方から何か近づいてくるのを

とっさにしゃがむと、バチバチという音が頭上を掠める

「危ねえ…そっぴやお前もいたんだっけなあ。」

バルガスが冷や冷やしながら見つめる先には、唸る雷狼竜の姿…仕留められなかったのが悔しいのか、荒い息遣いで睨んでくる

「（テメエ、黙って死ねよ。）

この腐れ根性無しが！！）」

雷狼竜は速い動きで爪を振り下ろすが、バルガスは大鎌で攻撃をいなす

雷狼竜の連撃を何度もさばいていたが、攻撃力ではやはりモンスターの方が強い……さばききれなくなつたところをはじかれ、地面を転げる

「もう怒つたぞ…朱角竜の前にテメエを八つ裂きにしてやる！」

「（なにほざいてるか知らねえが、虐殺してやんぜ！）」

「始まつたな…。」

大剣を肩に担ぎ、シーザーは笑みを浮かべながら戦場を見下ろす

角竜はすぐ下で大暴れをし、バルガスは雷狼竜と一騎打ちをしている
バルガスは押されているが、増援も向かった
角竜も手を着けられないが、ハンターたちは善戦している

ここまでは順調だが、肝心の恐暴竜は姿を見せていない
砦での驚異を目の当たりにしたヴラドは、姿を見せない恐暴竜に不安を抱く

「老山龍も金獅子も未だ姿を見せずか。」

シーザー…お前がここの指揮をとれ、周囲を探索してくる。」

いきなり大任を任されて抗議しようとしたが、すでにヴラドの姿は無い

呆然としていたが、やがて諦める

「バリスタは随時モンスターに向けて射撃をしろ！
味方を撃つんじゃないぞ！」

指揮官が変わったことに戸惑っていたが、ハンターたちはすぐに順応し、迎撃を開始する

そうしていると、本日三回目の巨大な地響きが起き、何かが大きく崩れ落ちる音が鳴り響く

崖上の射台に目を向けると、崖の向こうを指差して騒いでいた

「老山龍が崖を破壊！」

多数の烏竜種が市街地に侵入した模様です！」

「なんだと…ヴラドのやつ、読んでいたのか！？
誰か迎撃に向かえ！」

シーザーはすぐにハンターをまとめ、烏竜種の迎撃に向かわせる戦力を分散させるのは拙いが、補給路を断たれては元も子もない…
それに今は持ちこたえられていた

しかしその余裕もすぐに消えた

「シーザーさん、ラージャンが出やがった！
それに老山龍も目と鼻の先です！！」

「このクソ忙しい時に！
オレが出る、何人かついてきやがれ！」

戦場に現れた金のオーラを纏うラージャン：おそらく角竜や雷狼竜よりも格上で、この場で最も警戒すべき存在

シーザーたちは城壁の梯子ん滑り降り、金獅子へと狙いを定める

「（新手か、では死ね！）」

「又オツ！？」

降りて早々に角竜に見つかり、角竜の強烈な尻尾が城壁を粉碎する
老山龍ほどではないが、城壁に亀裂を生むほどの威力は、かなりの脅威だ

見れば角竜にあたっていたハンターが多数負傷し、中には圧殺されたりして命を落とした者もいる

バルガスは雷狼竜の相手をしており、金獅子にあたる余裕は無い

角竜は目に入った人間を片っ端から狙い、その圧倒的な強さをもつてなぎ倒していく
金獅子の前に角竜を止める必要があった……シーザーは角竜の尻尾を回避した後、双剣を構える

「（下等種族の分際で我輩に楯突くか……一瞬で惨たらしく殺してくれる！）」

呻り声をあげて、角竜は体をよじって角を突き上げる

片角だがその威力は絶大……角は地面ごと抉り、抉られた無数の岩弾がハンターたちを襲う

上級ハンターたちは難なくそれを防御し、シーザーは角をくぐり抜け、角竜の懐に潜り込んでいた

「（小賢しい!!）」

「くたばれ！」

踏みつけようとする脚をよけ、その脚に双剣の連撃で斬り裂く
脚は甲殻に比べて軟らかく、角竜の脚からは多量の血が流れる

危機を感じた角竜は後方に退く……追撃をかけようとしたが、間を金色の閃光が貫く多くのハンターは射線上にいなかったが、運がな

かった者はそのプレスに巻き込まれ即死した

「ラージャン、やってくれたな！」

「（小僧が…調子に乗りやがって、バカたれ。）」

角竜が追い込まれているのを見てとつさにプレスを放ったが、おかげでハンターの注意が自分に集中してしまった…後悔したところで遅く、既にハンターが金獅子めがけ向かってきていた

金獅子は面倒そうに頭を搔くと、ため息をつきながら向かってくるハンターを眺める

「（若造のため、恨みはねえがぶん殴らせてもらっぜ。）」

拳をかたく握り固め、腕を振り上げる

そして地面を勢い良く蹴ってハンターに接近、慌てて盾を構えたハンターもいたが、そんな防御も意に介さずぶっ飛ばす

多くのハンターが脳震とうを起こし気絶し、金獅子は満足したよう

に腕を回す

「（今ので若え頃思い出しちまったぜ…。

老山龍も来たところだし、いい加減本気でも出してやるうかね。」

老山龍が遂に到着…おまけに戦況の優位を悟った鳥竜種も、ようやくその姿を現してきた

この時点で金獅子は自分たちの勝利を確信していた…しかし、彼らは知らない

この絶対的優勢を、あの男に覆されることを…

そんなことを考えもしない金獅子は、まず城壁の上へと目を向けるハンターが多く展開する城壁には近付けそうもないが、離れた位置にある城壁は、問題なく対処できる

ジグザグに駆ける走法でハンターをかわし、城壁に張り付く

金獅子は城壁に跳び乗ると、ガンナーたちをハエでもはらうかのように、城壁から落としていく

城壁から誰もいなくなると、金獅子は一呼吸し、バリスタをガシッと掴む

「（こんな邪魔なもんはこうして…ぶっ壊す！）」

城壁に埋め込まれたバリスタを力任せに引っ張り、バリスタはメキメキと軋み、遂に引き抜かれる

次のバリスタをを破壊しようとする、本元の城壁から射撃される

「（やかましい！）」

引き抜いたバリスタを無造作に投げ飛ばし、ハンターたちを黙らせるその隙にもう一つバリスタを叩き潰し、さらにもう一つを無理やり引き抜き、今度は下のハンターに投げつける

その際、手が滑ってバリスタが長門に当たりそうになった

「（テメエ、オレを殺す気か！）」

ハンターの前にテメエをブチ殺してやるのか！？」

「（わりいわりい…手が滑っちゃったぜ。）」

「（上等だバカ野郎！！）」

人間、あのクソボケぶつ殺すまで待ってる！

おい降りてこい、クソ野郎！）」

「なんだか知らねえが…同士討ち始まったぞ。

どっちも強そうだし…俺たちは老山龍を攻撃するぞ！」

突如勃発したモンスター同士の争いにより、バルガスらは急遽目標を老山龍に変える

背後で繰り広げられる、モンスター同士の次元の違う戦い……どちらにもスピードがある上に、同じ属性を持つ者たちだ

接触する度にバチバチと電撃が鳴り、一々ヒヤリとさせられる

バルガスは気を引き締め、巨大な老山龍に目を向ける…次の瞬間、目の前を巨大な物体が勢い良くよぎった

後にきた尋常でない風圧に、バルガスは後方に大きく吹き飛んだ

それが老山龍の尻尾によるものだと気付くのに、少し時間がかかった

「やっぱりコイツ、かなり好戦的すぎる…！」

コイツ縄張りの徘徊とか、障害物がどうのなんざ考えちゃいねえ！オレら人間を皆殺しにする気だ…！」

「バルガスさん!？」

ど、どうということなんですか!？」

バルガスの放った言葉に、一人のハンターが疑問を浮かべた
他のハンターも同様に、その言葉の意味を知りたいようだ

「だいたい最初からおかしいと思ってたんだ…今は老山龍が動き出す時期じゃねえし…だいいち、ドンドルマは老山龍の縄張りじゃねえ！」

襲撃かけてくんののは、せいぜいシエンガオレンか、クシャルダオラくらいだろ！」

バルガスはほとんど叫び声で、老山龍を睨み付けながら話していた。老山龍がどれだけの寿命を持つかは定かではないが、このドンドルマの歴史は長い

仮にここが老山龍の縄張りとするなら、襲撃を受けているはずだ。しかしドンドルマは今も健在…つまり大型モンスターは討伐されたか、撃退された

皆蟹はその習性からよく街を襲うが、老山龍は突破が困難と悟ればそこを縄張りから除外する

それらから考えるに、今も健在のドンドルマは、絶対に老山龍の縄張りから外れているはずだった

「老山龍…シユレイド…災厄の歴史はもういらねえんだよ！」

バルガスは息を荒げて大鎌を構える

老山龍は後ろ脚で力強く立ち上がり、その目は多数のハンターたちを見ていた

「テメエがなんなのか知らねえし、知りたくもねえ！」

野郎共、老山龍をなんとしても討伐しろ！

伝説を恐れるな、何が来ようがぶっ飛ばすぞ！」

「ヒツ……く、来るな！」

また一人、ハンターがモンスターによって喰い殺された……
ドンドルマの市街地に入り込んだ鳥竜種：それに対処するハンター
たちのもとに、恐暴竜は突如として出現した

ハンターのほとんどが、恐暴竜の対処法など無知であり、距離をと
って攻撃することしか出来ない

さらに市街地ということも、ハンターたちにはマイナスに働いていた
住宅街や商店街といった建物が並び、複雑な道や細い道があるため、
どうしても討伐隊はまとまってしまう

しかし恐暴竜は建物を破壊しながらハンターを追い詰め、細い道は
ブレスの威力を高める

散開すると、今度は鳥竜種たちが襲いかかってくる

入り組んだ道や倒壊した建物から現れ、ハンターたちに奇襲をかける

本来人間の土俵であるはずの街は、もはや人間にとって何の利点も
無かった

補給路を断たれば負けは必至……討伐隊は何か何でも守ろうと奮戦する

しかし窮鼠猫を噛めず……恐暴竜の圧倒的な強さの前に、人間は儼く散るのみだった

負傷者の治療もままならず、怪我人は続出する一方……勢いに乗った鳥竜種は本来の力以上に、その実力を発揮していた

討伐隊にどこか諦めが出て来た時、鳥竜種の侵入口である、崖の方面から大きな爆発音が響き渡った

それに鳥竜種や恐暴竜も動きを止め、一様に背後を振り返る

そして人間は歓喜の声をあげ、恐暴竜は荒れ狂う雄叫びを響かせる

「随分街を破壊してくれたじゃないか……次は、貴様が壊れる番だ。」

覇竜の装甲を纏い龍殺しの大剣をひさぐ英雄……恐暴竜は待ち望んでいた復讐相手に、真っ向から突撃した

「まずは……挨拶代わり。」

開かれた大口をかわし、横腹への一閃

「これは街を破壊したぶん…！」

さらにもう一撃を恐暴竜の横腹にいれ、大量の血がヴラドにかかる
恐暴竜は振り返って怒りの形相を浮かべたが、ヴラドは既に大剣を
上段に構えていた

「そしてこれは、貴様が奪った数多の尊い生命の分だ…！」

大剣の重量に加え、ヴラドの達人級の剣術が宿った一撃が振り下ろ
される先の戦いで頭蓋骨が剥き出しになった上に、ヴラドの大剣が
めり込み、そのまま勢いによって斬り裂く

「グガアアア…！」

「なにっ!?!」

振り切った後に恐暴竜の体当たりをくらい、ヴラドは大きくぶつ飛
ばされる
すぐさま立ち上がり恐暴竜を確認すると、恐暴竜は大口を開けて顎
を振り上げる

運悪く大砲の弾をすくい上げられ、大砲の弾が地面に降り注いで爆
発する

爆発をかわしていき、ヴラドは後方の討伐隊に向かって叫ぶ

「貴様らは退け！」

すでに侵入口は塞いだ、老山龍と他のモンスターを倒せ！」

恐暴竜と戦ったことのないハンターは、はっきり言って邪魔だったそれは彼らも理解したようで、討伐隊は怪我人を連れて撤退していった…

再び恐暴竜に目を向けると、やはり自分だけを睨んでいる静かに武器を構え直すヴラドとは対照的に、恐暴竜は今にも喰らいついてきそうな形相で唸る

「神唯一の過ちは…貴様をこの世に誕生させたこと。

人間に生まれていれば、こうもならなかったのになあ。」

「グルルル…！！！」

それが引き金にでもなったのか、恐暴竜は一気に接近する

ヴラドは動揺することなく冷静に、そして街を破壊された怒りを武器にのせる

寸前で恐暴竜は躓いたように転び、予期せぬ動きに硬直したヴラドは、巻き込まれて瓦礫に吹き飛ばされた

そのまま恐暴竜は石の階段を落ちていき、民家に激突して止まった

恐暴竜はよろよろと立ち上がり、階段の上を睨む

ヴラドはまだ起き上がっていない、今が攻撃のチャンスだった…

ヴラドに向けて走り出そうとした時、脇の路から、銀髪の女性が現れた

すぐに餌食にしようとしたが、続いて現れた者を見て、恐暴竜の動きが止まった…

「…に…兄ちゃん…?」

まるで時が止まったかのように、周囲は静けさに包まれた

恐暴竜はマリナの姿を見て、今までの凶暴さが嘘のように鎮まった…

マリナはゆっくりと恐暴竜に近付き、震える手を伸ばす

やがて恐暴竜は頭を下げてその手に触れ、穏やかなため息をこぼす

「兄ちゃ…兄ちゃん…。」

「（…マリ…ナ…!…!）」

いきなり恐暴竜が動き出し、マリナを地面に押し倒す
そして次の瞬間、恐暴竜の背に一本の槍が突き刺さった

「大勢を殺しておいて…今更一人の人間を救うだと？
神の名において…貴様には死をくれてやる！」

階段の上に立つヴラドは、手に持つバリスタの矢を恐暴竜めがけ投
げつける

矢は一直線に飛んで恐暴竜の背に突き刺さり、血飛沫が飛び散る

「止めて、兄ちゃんを傷つけないで！」

マリナは恐暴竜の前で両手を広げて立ちふさがったが、恐暴竜はそ
れを押しつけ、ヴラドを睨む

「兄ちゃんも止めてよ！」

「（ああ、マリナ…！

あの人間を殺して、みんなで家に帰るんだ…！）」

「…っ、兄ちゃん…！」

マリナの制止もきかず、恐暴竜はヴラドめがけ階段を駆け上がって
いく

バリスタの矢が恐暴竜を貫くが、勢いは消えない……ヴラドは矢を投げるのを止め、階段から飛び降りる

そして恐暴竜の背に着地し、大剣を背に突き刺した

途端に、恐暴竜は大きな悲鳴をあげ、激しく暴れまわる

振り落とされそうになるのを耐えるが、恐暴竜はただ痛みから逃れようと激走する

「兄ちゃん!!」

「マリナ、追いかけてよう!」

一緒にいたカナメはマリナの肩を抱き、頷いたマリナと一緒に恐暴竜を追いかける…

「(はぁ…はぁ…もう止めにしねえかい?)」

「(ケッ…好きにしがね。)」

金獅子と雷狼竜の不毛な争いが終了した頃に、戦況は大きく変わった街に侵入していたはずの恐暴竜が、突如城壁から落下してきて、それに混じって一人のハンターが現れた

「ヴラドさん、先ほどはありがとうございます！」

「構わん…それより、だいぶ敵を追い込んでるみたいだな。」

金獅子と雷狼竜が仲間割れしている間、討伐隊は老山龍と角竜に集中して攻撃出来た

角竜はまだ暴れまわっているが、疲労の色を見せ始めている
老山龍もまた、高い士気をもつバルガスの隊によって、かなりダメージを与えられたらしい

城壁から落下した恐暴竜は動かず、力無く倒れており、総攻撃をかければ勝利は確実だった…

「バルガスを退かせ…老山龍を城壁に引きつける。
バリスタとガンナーの射撃、撃龍槍をもって仕留める。」

すぐさま配下の者は撤退の合図をし、気付いたバルガスらは素早く退却する

老山龍は逃がすまいと追撃をかけようとしたが、バリスタを撃ちか

ける城壁に注意を向けた
老山龍は畏とも知らず、ゆっくりと城壁に接近する

「バルガス、撃龍槍はお前がやれ…適任だ。」

バルガスは頷き、手渡されたピッケルを手に持つ
そしてヴラドが片手を上げると、ガンナーたちは一斉に射撃準備を
とる

「……………撃て。」

腕を振り下ろすと、ガンナーたちの一斉射撃が始まる
バリスタや大砲も射撃に加わり、無数の弾が老山龍を貫く

「今だ、撃龍槍を撃て！」

バルガスはピッケルを振り下ろし、次の瞬間、巨大な二本の槍が老
山龍の腹部を刺し貫いた
大きな大地を揺るがす叫びをあげ、老山龍の巨体が大きく揺らぐ

「まだ死なないか…最後はこの封龍剣で仕留めてやる。」

ヴラドは城壁の端に立ち、老山龍を正面に見据える
意地なのか、老山龍は必死の形相で睨みつけるが、相当の痛手による苦悶の方が大きい

「今…楽にしてやる。」

大剣を上段に構え、一呼吸置く
そして城壁を蹴り、老山の胸部めがけて封龍剣を振り下ろした
軟らかい肉質を簡単に斬り裂き、ヴラドは落下する勢いのままに、
下の腹部までを斬り裂いた

斬られた傷からは、滝のように赤い血が吹き出し、地面は真っ赤に
染まる

それから老山龍は弱々しい雄叫びをあげ、横に向かって崩れ落ちた

「……………老山龍撃破。」

全員……………残りのモンスターを駆逐しろ！」

城壁や平原のハンターたちは大きな歓声をあげ、それまで意気消沈
していた者も立ち上がる

「（コイツはマズいな…お前のせいだぞ、長門。）」

「（うつ、すまん……。）」

素直に自分の非を認めるのはすばらしいが、これは本当にマズい展開となった

一度角竜は退かせたが、かなり疲れているようだ…

ついでに恐暴竜も引きずってきたが、彼は動かない

鳥竜種も戦況の不利を悟って逃げた…つまり、引き時だ…

「（勝敗は関係ない…これは兄弟のための戦いだ！
たとえ我輩だけになろうと、最期まで戦いぬく！）」

「（分からねえか…若造が倒れちまった今、大義はねえんだよ。）」

この状態で戦っても負けは必然…死んで全てを無くすより、生き恥に耐えて残る余生を楽しむ方がいい

そう思っていた矢先、背後に倒れていた恐暴竜がむくりと起き上がった

恐暴竜は仲間の前をよろよると通り過ぎ、真っ直ぐに、ヴラドを指す

その異様な光景に全ての人間が目を奪われ、全ての動作を止めた

恐暴竜の脚は震え、息遣いは荒いというより弱々しい…まさしく瀕死の状態だ

しかし目には、今まで以上の怒りと憎しみが宿っている

「兄ちゃん…！」

静まり返った戦場に、少女の高い声が響く

多くのハンターがその少女に目を向けたが、ヴラドと恐暴竜は互いに視線を外さなかった

限界に近付いた恐暴竜は、よろよると移動する

ヴラドはそれを目で追っていたが、ハツとして攻撃をかけようとした

恐暴竜は最後の力を振り絞って、尻尾でヴラドをはねのけ、一心不乱に……老山龍の死体を喰った

肉を喰い、血を啜ることに恐暴竜の体は隆起していき、しだいに今までついた傷口が開いていく

恐暴竜は充分に腹を満たすと、巨大な咆哮を上げた

限界まで隆起した筋肉はついに表面の皮を張り裂き、血で赤く濡れたグロテスクな筋繊維が露出する

そして体温の上昇による蒸気の発生に代わり、赤黒い稲妻を纏ったようなガスが発生する

「なんだ…これは…。」

初めて見るこの異形の姿に、ヴラドでさえ驚愕していた

全ての人間が言葉を失っていると、恐暴竜はその目をハンターたちに向ける

剥き出しの頭蓋骨もあいまって、ハンターたちの心を恐怖が支配する

「動じるな、死にたくなければ武器を構えろ！」

いち早く冷静になれたのはヴラドであり、彼は真っ先に指示を飛ばした

しかしそれが恐暴竜への刺激となり、恐暴竜は大きく息を吸い込む

恐暴竜の大口から放たれたのは、地を埋め尽くすような広範囲にわたる、赤黒いプレス

それは波のように広がっていき、城壁の三分の一の高さまで浸透した

幸い向けられたのは、ハンターが少ない方向…しかし、その方向にいたハンターは全滅した

「なんと…という威力だ…！」

さらにそのブレスは、いくつかの場所で残り火のように残り、赤黒いガスが吹き上がっていた恐暴竜はブレスを吐き終えると、その凶悪な牙を他のハンターに向ける

恐暴竜が踏みつけた場所には赤黒い噴煙が発生し、口内からはさらにどす黒い気が噴出していた

「兄ちゃん、もう止めて！」

城壁から滑り降りてきたマリナが叫ぶが、聞こえていないかのよう
に、闇雲に暴れまわる

「私の声を聞いてよ、兄ちゃん！」

恐暴竜に触れられる位置にまで近付いたが、赤黒い気に気圧される

「貴様の相手はこの私だ！」

ヴラドが大剣を手に、恐暴竜の体を斬りつけた……が、極限まで隆
起した筋肉は尋常でない堅さを持ち、ヴラドの斬撃ははじかれた

狙いをヴラドに移し、巨大な尻尾でヴラドを城壁に叩きつける
吐血したヴラドに接近し、大口を開いて噛みつく

とっさにかわしたが、間に合わず左腕を噛みつかれた

「くっ…これでも、喰ってる！」

地面に刺さるバリスタの矢を引き抜き、自分の腕ごと恐暴竜を刺し貫く

恐ろしいことに、恐暴竜の口内から出る赤黒い気が浸食し、ヴラドの左腕に激痛が走った

痛みに耐えられず、ヴラドは腰の片手剣を抜き、左腕を切り落とした

「こ、これまでか…！」

失ったものは大きく、片腕では大剣を扱うことも出来ない
それは、ヴラドが人生で初めて戦闘を放棄した瞬間だった…

誰も彼を助けようとも…否、誰も彼を助けられない

それはヴラドも理解し、目をつむり、最期に神への祈りを捧げる…

「兄ちゃん…もう…止めて。」

「マリナ…お前…！」

目を開けると、そこにはマリナがいた
恐暴竜は焦点が定まらない目で彼女を見つめ、ただ黙って佇んでいた
しかしヴラドが立ち上がると唸り声をあげ、襲い掛からんと口を開く
マリナはそれを止めようと恐暴竜に抱きつき、そして、泣きじゃく
る声で恐暴竜を説得するのだ…

「もういいのよ…兄ちゃん、もう止めてよ…。
お家に…みんなのいる家に帰ろう…？
普通に暮らして、普通に笑い合って、普通に遊び合って…だから
…ね？」

「（家に……帰る…？）」

「そう…モモやアリシアさんたちのいる家だよ…。
みんなのところに帰りましょう…？」

優しく微笑むマリナの瞳から、一筋の涙が零れ落ちる
マリナの涙に呼応したかのように、恐暴竜の赤黒い気が消えていき
…恐暴竜の目に涙が浮かんだ

「（……おかえり……マリナ…。」

「兄ちゃん…エへへ……ただいま、兄ちゃん。」

恐暴竜は首を下ろしてマリナを背に乗せると、ゆったりとした足取りで城壁から遠ざかる
金獅子や長門たちは黙ってそれを見つめ、一同頷いて恐暴竜の後をついていく

最後に長門は街に振り返って、舌を出して挑発していった……

モンスターのいなくなった戦場には、なんともいえない雰囲気包まれていた
よほどのバカでもない限り、今日の前で起きたことが理解出来るはずだ

そこへカナメが現れ、ヴラドのもとへと小走りに駆ける
そして、彼の無くなった左腕に治療を施す……

「そういうことだったのか……この惨状は、全て私の責任……か。」

ヴラドはため息をつき、無くなった左腕に手を当てた

「あなただけの責任ではない……私にも、多少の責任はある。もっと早く、マリナをあの子のもとに帰してあげられれば……。」

傷口を治療し終えたカナメは、真っ直ぐにヴラドを見つめる
ヴラドは左腕から手を離し、ゆっくりと立ち上がる

「最後の仕事をせねば……それが、彼らへの唯一の報いだ。」

第四十三話：ドンドルマ攻防戦（後書き）

恐暴竜：怒りの第三段階

瀕死・極限の怒り・身体を一気に回復出来る食物を口にして、初めてなれる状態

（今回では、老山龍の肉がそれにあたる）

隆起し過ぎた筋肉は表面の皮を裂き、露出した筋繊維が気味悪さを出す

さらに体内の内蔵器官が異常を起こすことで、本来プレスに使われるものが体外に溢れる

怒りで脳の命令系統がおかしくなり、際限なく龍属性の素を生み出すため、高濃度の属性を溢れさせる

ただし、肉体と精神にかかる負荷は尋常ではなく、力の代償は大きい…

とまあ…ハンター戦お終いで

当初予定していた展開とはズレてしまいましたが、今後の展開を考

えて、このような結末となりました

新章 伝説の存在 (前書き)

タイトル通り、新章の始まり

ケータイ投稿だから、章作りが出来ない…

新章 伝説の存在

ドンドルマを巻き込む未曾有の大災害となった、老山龍騒動
老山龍と恐るべきモンスターたちが街を襲ってから、はや一週間で
経とうとしていた…

戦いに参加していた金獅子や長門らは、この一週間で大人しく過
し、居残り組に手伝ってもらって療養をしていた
元がタフな連中だったために傷は早くに癒え、直ぐにでも戦いを行
えるようになるまで回復した…：一名を除いて…

「（姉貴いゝ見舞いに来てやったぞ。）」

「（来てやったかかねえ。）」

草原の丘でのんびり風を浴びていた長門のもとに、弟たちがそれぞ
れ見舞い品を持ってやって来る

「（ん……ありがとう。）」

でもオレは大丈夫だから……アイツにあげて……？」

「（マジかよ……せっかく姉ちゃんのためにとって来てやったのに。）」

武蔵は気に入らないようで、ブーブー不平をこぼす
長門は弟を穏やかになだめ、大和はぼんやりと遠くを見つめる

「（後で姉ちゃんが遊んでやるから…。
それはアイツに持ってこうな？）」

「（んー…：しゃあないなあ。
でも、後で僕とたつくさん遊んでもらうかね！）」

武蔵は子どものようにわめき散らすと、持っていた肉をくわえなおし、小山の方に走っていった

長門は欠伸をかいて立ち上がると、大和と一緒に小山の方に向かった

836

「（お、長門ちゃんおかえり。
武蔵ちゃんが来たから、長門ちゃんたちも来ると思ったよ。）」

小山の洞窟に入ると、恐暴竜のアリシアが迎えてくれた
何が起きたのかは分からないが、武蔵が洞窟の端でくたばっている

「（ん…：ただいま…：武蔵、何かしたの？）」

「（あぁ…：あれは、ちよっとね…。）」

どうやら武蔵が洞窟の中に荒っぽく入り込み、運が悪いことに金獅子に勢い良くぶつかったらしい
それから頭をとんでもない力でげんこつされ、ああやってのびているらしい

「（アリシア、肉を持ってきたんじゃが。アイツはいつもの場所か？）」

「（うん、そうだね。」

いつもありがとうね、長門ちゃんに大和ちゃん。」

「（姉貴はともかく、次そんな呼び方してみる。お前の頭捻りきってヤオザミの餌にしてやる。」

「（…う、ごめんなさい…。」

鋭い睨みを受けたアリシアはすぐさま謝り、大和はどうでもよさそうに鼻を鳴らしたアリシアは基本、テンションが高くノリが良いアクティブな性格だが、大和だけは苦手としている

大和は長門とは違う寡黙さで、アリシアが親しみをこめて絡んでも、冷やかかな態度で返される

仲が悪いというわけではないが、大和は仲間意識を持っていないらしく、必要なこと以外話そうとしないのだ

今回も例にもれず気まずい雰囲気となり、頼みの長門は眠たそうな

目でぼうつとしている

「（えっと…とりあえず、案内するよ。）」

「（場所は分かる、案内せずともよい。）」

きっぱりと言い放ち、大和はサツサと洞窟の奥へと進んでいってしまった

アリシアはため息をついて横を見るが、長門は目を閉じて小さな寝息を立てていた

「ニヤツ、アリシア姉！

早く来るのニヤ、旦那さんが起きたのニヤ！」

大和とは入れ違いでモモが現れ、何故か石を投げつけてきながらアリシアを呼ぶ

「（ルパが起きたの！？）」

「そうニヤ、サツサと来るニヤ！」

アリシアは投げつけられた石をよけ、慌てて洞窟の奥へと走っていった

あの日、戦いに向かったルパは角竜と金獅子に担がれ、この場所に帰ってきた…く傷つき、昏睡状態になった状態で…

以前のようにアイルーたちが治療をしたが、今回は前とは違い、少しも暴れたりしなかった

それが逆に恐ろしく、治療が終わるまでアリシアは不安でいた
そして治療が終わってから、今日の今日までずっと眠っていたのだ…

アリシアが洞窟の奥に入っていくと、そこには既に主だった者たちが集まっていた

入り口には無表情の大和、壁際には角竜と金獅子…

首輪をつけた黒猫と唯一の人間マリナのそばに、彼はいた

「（ルパ、目を覚ましたんだね！）」

急いでアリシアは彼のもとに駆け寄る

顔面の醜い傷は包帯で隠され、体は薬草をすりつぶしたものを塗られている

いつ死んでもおかしくないと診断された彼だったが、アリシアを見

てぎこちない笑顔を浮かべた

「（ようアリシア…ずいぶん待たせちゃったな。）」

「（ば…バカ野郎…本気で、心配したんだからな！）」

こらえきれず、アリシアの目からは涙が溢れる
めったに泣かないアリシアだが、この時ばかりは泣いた…

「（アリシアさんも泣いたりするんですね。

泣いてるアリシアさんも可愛いですよ。）」

「（う、うるさいな！）」

迅竜に茶化され、泣きながらアリシアは怒るが、全く怖くはない

「アリシアちゃんの言う通り、みんな兄ちゃんのこと心配してたよ
」？」

「（マリナ…。。）」

脇に座るマリナは柔らかな微笑みを浮かべ、恐暴竜の頭を撫でる
堅くゴツゴツしているが、マリナは愛おしそうに見つめていた

「（みんなに心配かけちゃったか…。）」

「（我輩は心配などしておらぬからな！！）」

「（オメエは黙ってる！）」

「（ギヤツ！！）」

頭をひっぱたかれ、角竜は大きな悲鳴をあげる

「（相変わらずだな、兄弟。

…さて、いつまでもこうして寝てられないな。）」

「兄ちゃん、まだ動いちゃ！」

ゆっくりと立ち上がる恐暴竜に、一同冷や冷やしたが、何ら問題なく立ち上がってみせる

流石は恐暴竜といったところで、実は傷の方はだいぶ治ってきていた
顔面の剥き出しの頭蓋骨は無理だが、包帯で隠していれば完治しているように見える

恐暴竜は地面を搔いたり尻尾を振り、鈍った身体の間を確かめる

「うーん、ちょっと身体が動かしにくいけど、なんの問題もないな。」

満足したような表情で頷くと、恐暴竜は視線を洞窟の外に向ける。恐暴竜は嬉しそうに歩いていったが、不意に、脚を滑らせて前のめりに転倒した。

「イタタタ…。」

「ほら言わんこっちゃない…病み上がりなんだから、無理しないでよルパ。」

「すまん、以後気をつける。」

アリシアに支えられてヨロヨロと立ち上がり、今度はゆっくりと身体を動かす。

マリナもホッと胸をなで下ろし、彼らと一緒に外に出て行く。

ようやく手にした心の平穏……マリナもアリシアも迅竜も、この時ばかりは争いなどせず、嬉しそうな表情を浮かべていた。

「(ケツ…暢気なヤツらだ。)」

大和は去っていった恐暴竜らに眩き、居眠りをする姉のもとに向か

った

大和と角竜らは、恐暴竜が転倒した時、厳しい目で彼を見つめていた……

「（オイ小僧、さっきのアレ……何が起きたか分かるか？）」

金獅子は小山から下山している途中、後ろを付いて来る角竜に問いかける

角竜は直ぐには答えなかったが、深いため息をついてから、重々しく答える

「（アリシアとかは転んだだけだと思っっているようだが……あれは、身体の負荷によるものだろう？）」

金獅子は黙ってそれを聞き、角竜同様、深いため息をこぼした

ドンドルマ戦において、恐暴竜はいまだかつて負ったことのない傷を負い、そして精神崩壊寸前のところまで追い込まれた
さらに最後に見せたあの怒りの代償として、肉体と精神にかかった負荷は計り知れない

「（……あとどれくらいかは知らねえが、確実に生命は縮んだ。）」

「（なんてことだ……やっぱり人間は全員死ぬべきだ。」

「（まあ待て…まだ死ぬと決まったわけじゃねえんだ。やりようによっては、何とかなんだろう。」

「（どういうことだ、親方？」

気になった角竜が問いかける

下山した金獅子は草原にどっと座り、額をつつきながら話す

「（俺もあんまり知らねえが…世界には幻の薬草とか、霊薬とかあるらしいんだよ。

そいつら作るのに素材かき集めて、正しく調合すりゃもしかしたら…。」

「（ケルビの角とか雪山草とかか？」

「（んなもんそこらで簡単に手に入る。

俺が言ってるのは、秘境とか魔境だとか…とんでもない場所にしかない、特効薬になる素材だ。」

金獅子は例として、雪山のさらに最深部の山頂や、砂漠の奥深くをあげる

珍しい素材といえば角竜にも記憶にあったが、幻というだけあって、どこにあったかなど覚えていない

「（ふむ…幻の特効薬を探して世界を旅するか！
面白そうではないか！）」

「（まあそれが若造のためになるかもしれないねえんだ。
気合い出してくれるにこしたことはないねえ。」

「当てずっぽうに探しても見つかるわけねえから、まずは情報を集め
ねえとな。」

金獅子は腕を組みながら、眼下の畔でのんびりとしている恐暴竜ら
を見つめる

若者のために、もう少し老体に鞭を打たなければ……しかし若者の
役に立てることを、金獅子は嬉しく思うのだった……

伝説に挑む新章ここに始動……

それは新たな冒険と、戦いの始まりとなるのだった……

新章 伝説の存在 (後書き)

というわけで、しばらく主人公らにはのんびり過ごしてもらいます
逆に、角竜・金獅子・三雷狼らイケイケ組には、主人公の治療薬探しをしてもらいます

それで、読者様にアイデアを募集したいと思います

治療薬になる薬草や素材の名前と、それを採取できる場所です
植物だけでなく、モンスターも歓迎します！

オリジナル以外にも、精算アイテムやトレジャーの素材でも

また、その素材の近くに住むモンスターもあげていただければ、戦
闘なども計画出来ます

例)

名：霊薬草

地域：雪山の山頂

内容：雪山の山頂に、数年に一度生える幻の薬草

条件：いつ生えるかは分からず、特定の条件を満たした時のみ生える

効果と加工：すりつぶして他の様々な薬草と交える

香ばしい香りが飲んだ者のストレスを癒し、自然治癒力も高める

外敵：周辺にはドドブランゴやティガレックスがいる

ってな感じですが、簡単なものでも構いません

どんなアイデアでも募集します！

01話・来訪者はあの人(前書き)

たくさんのアイデア提供ありがとうございます！

01話：来訪者はあの人

「ここをこうして…どうニヤ、前よりは随分マシニヤ。」

「（それよりも前と比べると、とんでもない顔になった気が…）」

今俺とモモは、俺たちのみが知る秘密の空間にてあることをしていた。モモは俺の無くなった顔面の組織を、ペシペシ叩きながら、そこにとり付けられた装具の感触を確かめる。

松明に照らされた水面を覗くと、顔半分を銀のプレートで覆われた自分の顔が映る……予測していたことだが、数週間前までであった自分の顔を思い出すと、悲しくてならない。

俺がモモにしてもらったのは、失った顔面の組織に代わり、表面を金属で覆い隠す治療だ。

モモ曰わく感染症を防ぐためらしく、使った素材も今日のような日のために発明したという、特殊金属生命体”バイオメタル・モモDX”とかいう摩訶不思議な物質だ。

はつきり言ってそんなもの近付けるなだ……水銀みたいにドロドロしていて、なおかつ触ってもいけないのに動く、とても気味悪い代物。なんか誰も見たくない。

というか、こんな物質を作り出すモモの正体は何者なのだろうか？一度この平原の地下に存在するという、モモの秘密研究所とやらを見てみたい。

そしてそのバイオメタルとやらを、医療の心得をかじってすらいないモモに付けてもらったが、案外自然に顔面部に取り付いてくれた最初こそうねうねしていて気持ち悪かったが、やがて固まって、今では頭蓋骨の形にそって落ち着いた

想像するなら、Tレックスの化石の頭部を銀色にしたような感じである

そんな調子で秘密の洞窟から外に出ると、寝そべる親方が出迎えてくれた

色々とツッコミをいれられたが、すべてモモになすりつけて、俺はお気に入りの湖の畔へと向かった

たった数十メートルを歩いただけだというのに、俺は脚に違和感を覚え、息遣いも荒くなる……あの日目覚めてから症状は徐々に酷くなり、たまに意識もぼんやりとする場合もある

最初こそ気のせいで片付けていたが、最近では症状が顕著に現れていき、マリナたちにも心配をかけている

そして毎日を、今のように湖の畔で寝そべって生活するようになってしまった

以前あったような食欲は無く、長門たちがくれる食料も残してしまふ時があった……

俺がそんな深刻な症状に陥っている時、俺たちの住処にある人物がやって来た

「（姉ちゃん、ちょっと起きてくれよ。）」

「（…うん……眠いから後にして……。）」

姉、長門に用があるらしい武蔵が起こそうとするが、お休みタイムの長門はうつろさそうに顔を背ける

「（姉ちゃん、起きてよ。）」

「（…やだ……眠いからやだ。）」

「（姉ちゃん！）」

「（うつせえんだよ黙ってる！）」

眠いつていつたら眠いんだから、静かに寝させるバカ野郎！！！！」

最悪の寝起きとなった長門は、苛つきの原因である武蔵をぶん殴る姉の強烈な一撃で小柄な武蔵は気絶し、目を回してのびる…

「（…つたく、おかげで眠気が覚めちゃまった……ん？）」

「（というわけで、客人みたい。
んじゃ、バイバイ。）」

「（おい突然なんだって……チツ、逃げやがった。
なんだって人間なんざ連れてきたんだよ？）」

昼寝していたところを無理やりたたき起こされた挙げ句、見覚えのない、しかも人間を長門は目の前に連れてきた

金獅子は困ったように頭を掻き、目の前の、綺麗な銀髪が特徴的な女性を見下ろす……彼女は戦う意思は無いようだが、緊張した面もちでいた

とりあえずらちがあかないので、話しがわかるであろう、マリナのもとに連れて行く…

「（おい、マリナの嬢ちゃん。
なんか変なの来たから相手してやってくれや。）」

マリナは最近洞窟にこもって薬学を勉強しているので、簡単に見つけられる

調査はかなり下手くそだが、昔に比べたら多少良くなったらしく、禍々しい煙などは出ていない

「あ、親方さん……って、エエエエ!？」

カ：カナメ様、どうしてここに!？」

「足跡を辿ってきたらここに行き着いたよ。」

突如現れた来訪者は、あろうことが先日の事件にも関わっていたハ
ンター、そしてマリナの大好きなカナメであった

突然の出来事にマリナは慌てふためき、暴れているうちにそれまで
触っていた薬草をぶちまけてしまい、そして最悪なことに、それは
カナメに飛び散ってしまう

「す、すみませんカナメ様あ!」

「いや、構わないよ。」

それより少し落ち着きなさい…ほら、深呼吸して。」

「は、はい!！」

カナメに言われた通り深呼吸をし、どうやらマリナは落ち着いたよ
うだ

「よしよし…さあ、落ち着いたところで…。」

「はい、お風呂に入りましょうカナメ様!」

「なんだって…？」

今度はカナメが驚くばんで、豆鉄砲をくらったような表情をする
マリナの頬はほんのり赤く染まり、若干興奮していよるうだ……

戸惑うカナメを半ば強引に風呂場へと連れて行った後、マリナは自分
がとんでもないことを言ったのに気付き、草むらに隠れて自分を
戒めていた

「うう… やっちゃったよお、わたしのバカバカバカ！
カナメ様のお身体を汚してしまった挙げ句… お… お、お風呂だな
んて…！！」

羞恥心で赤く染まっていた頬がさらに赤くなり、マリナは頬に手を
当てて喚く

「マリナー、お風呂に入る準備は出来たのだが。
マリナ、何を隠れてるのだ？」

「…っ、も…もしかして今のカナメ様は…は、はだ…？」

カナメは隠れている草むらに近付いていくと、マリナが手で目を覆って立ち上がる

といっても、指の間からしっかりとカナメの姿を見ている

「カナメ様…タオル巻いてる…。」

「本当に大丈夫か？」

「はい、大丈夫です……温泉はこちらです。」

マリナは安心感が半分、そしてもう半分を残念に思っていた

二人が来たのは、火山近くに存在する温泉だ

ここは以前、金獅子と角竜がふざけて穴を掘っていたら出た温泉であり、雪山の雪解け水と混じってちょうど良い温度となっている。しかし最近までこの温泉のことは語られず、最近になって金獅子の口から聞き、マリナは初めて温泉の存在を知った

カナメは行儀良く温泉水で身体を流し、それから湯の温度を確かめてつま先を浸けた

「どうせならマリナも一緒に入らないか？」

「え、あ…あの私は…。」

マリナの抵抗も虚しく…といっても抵抗などなく、むしろ身を委ねるかのようにカナメに衣服を脱がされ、体に白いタオルを巻かれる

「髪が痛んでしまうからな…それにしても綺麗な髪だな。」

「あうう…カナメ様こそ、艶やかでとても羨ましいです…。」

カナメに髪をまとめ上げてもらい、カナメはゆっくりと温泉の湯に浸かっていく

二人は温泉の心地よさに、つい、感嘆の声をこぼしてしまう

「澄み渡る空に、穏やかな草原…そして四方はそれぞれ違った風景…素晴らしい土地だな。」

「はい…目の保養にもなりますしね。」

「目の保養か…確かに、モンスターと一緒に湯に浸かる光景は奇想天外だな。」

「そうですね…へ？」

カナメの言葉に疑問を持ち、恐る恐るカナメの視線を辿ってみる…

…雷狼竜の大和がいた

「な、なんで大和くんがここに!？」

「ここは混浴じゃないんだよ!？」

「(チツ…うるせえな。

誰もお前の貧相な身体なぞ見とぅないわ……ボケ…。)」

「失礼ね、これでも毎日健やかに成長してるの!！」

怒ったマリナは立ち上がって、大和を指差して叱りつける
しかし大和は心底どうでもよさそうに、なおも続ける…

「(こんな人間の何がいいんだか……短気でチビでマヌケで、何もかも貧相な餓鬼になんの魅力があるんだ?)」

「ひ、貧相って言うな!！」

この、この…大和くんなんて大嫌い!！」

…カナメ様あー!！」

大和の容赦ない言葉に心を打ち砕かれ、マリナは泣きながらカナメに抱き付いた

状況を理解出来ていないようだったが、カナメはとりあえずマリナを優しく撫でてやる

「（泣き喚くな鬱陶しい……じゃあな、貧乳娘。）」

「う、うっさい！」

早くどっか行っちゃえー！」

温泉から出て行った大和に石ころを投げまくり、地団駄を踏んで悔しがるマリナ…

「一体なんなのだ？」

「知りませんよ…たぶん、前に鼻を叩いたのを根に持つてるんですよ！」

アイツは毎回私に会うたび、貧相って言ってバカにするんです！」

憤りは冷めないようで、怒りで肩を震わせて岩肌に寄りかかる

「まあまあ、女性の魅力というのは貧相とか豊満とか…そんなものでは決まらないよ。」

「……それ、カナメ様が言っても嫌味にしか聞こえませんか。どうやったらそんな…そんなになるんですか…。」

恨めしげに見つめられ、カナメは困ったように頬を掻く

「そ、それより…本当に君はモンスターと話しが出来るんだな。」

気まずさから逃れるべくカナメは大幅に話しを変えるが、マリナの冷やかな目は変わらない

「わ、悪かったマリナ！」

私が悪かったから、その人を殺せそうな目で見るのは止めてくれ！」

「そうやってカナメ様まで私のこと酷く言う！
うわあああん！！」

泣き出してしまったマリナにカナメはオロオロと戸惑い、結局は抱き締めて撫でてやることしか出来ない
しかしその際、マリナが小さくガッツポーズをしていたことは見ていない

気を取り直し、二人は本来話し合うべきだった話題を話し合う

予想通りモンスターと意思疎通出来る理由を聞かれたが、これはマリナ自身も分からないことであり、自分でも理解していない旨を告げた

カナメは深く考え込む素振りを見せ、何か心当たりがあるかのように見えたが、結局考えていただけであった……

「じゃあ別のことを聞くが…恐暴竜の体調は？」

カナメはいささか聞きにくそうだった
彼女も今回の事件には多少関わっており、いくらかの罪悪感を持っている

「兄ちゃんならここから見えますよ…。」

周りより小高い位置にある温泉からは、平原中央の湖を一望出来る
そして湖の畔には寝そべる恐暴竜があり、先日街を襲った姿からは
想像も出来ない、穏やかさが…いや、その姿はかなり弱々しく見えた

「当然といえば当然です…今までたくさんの戦いに加え、怒る度に
傷が開くんですから…昔からの傷も完治していない状態なんです。
それに先日のあの戦いのストレスで、兄ちゃんの心にもかなり負担
がかかりました。」

「そうなのか…それはすまないことをしてしまったな…。」

「いえ、カナメ様が悪いわけでは…！」

頭を下げようとしたカナメを慌てて止める

マリナはカナメのみならず、事件に関わった人間を恨んではいなか

つた…
恐暴竜の存在を隠し自分が言葉足らずなために、あの事件は起きた
と想像していたからだ

「兄ちゃんは前ほど元気はありませんが、金獅子の親方さんが色々
と計画してくれています。」

それより…ドンドルマの街はどうなったのですか？」

カナメの辛そうな表情を見ていられず、なんとか話題を逸らそうと
したが、マリナがふった話題もどちらかといと暗い話題だ

「ドンドルマか…ハンターの死傷者は多く、ギルドに依頼される
クエストをこなす人員が不足しているよ。
しかし思っていたより街の被害は少なく、城壁と住居区画の一部に
被害があるのみだ。」

「そうですか…あの、ヴラドさんは…どうなったのでしょうか？」

「彼か…彼はハンター業を引退したよ。」

マリナは衝撃を受けた
事件の引き金的な存在であったとはいえ、彼は師であり、亡き父を
知る数少ない人物だったからだ

「当然といえば当然だ…元々全身に受けた火傷の後遺症に加え、片

腕を失ったのだからな。

しかし私がこうして君に会いにこれるのも…彼のおかげだよ。」

「どういうことですか？」

カナメは頷くと、小さなため息をこぼす

「強硬派の軍隊は君らを追撃する計画を立てていたが、それをヴラドは説得…いくらかお金が動いたらしいが、結果君らを狙うことは無くなった。

復興計画の責任者を任されたヴラドは、街の復興対策を一通り決定した後…所持していた資産を全て復興支援に寄付し、自分で自分に追放命令を下した…。」

「自分で…自分を？」

「彼はこの一連の事件の責任者を必要と感じ、それを自分に架した。市民を納得させるべく、自分に対して街を危機に追い込んだ悪人として、周囲に公言させ…ドンドルマの街から永久追放命令を自分に下したんだ。」

その報せを聞いて彼の家を訪ねたが、彼の姿は無かったよ…。」

ヴラドが最後にハンターとして行ったのは、恐暴竜らを討伐隊から守ったことと、ギルド存続のために全ての責任を背負ったこと…誰かがしなければならぬ、誰もしたくないことを彼はやり遂げた

そして街からその姿を消した

しかし街の人々からは英雄としてではなく、街を危機に追い込んだ悪人として名を語り継がれる

マリナはどこか胸にぽっかりと穴が空くような、そんな虚無感を覚えた

再び暗くなってしまった……そうマリナが思っていた矢先、ポンと肩に手が置かれる
顔を上げると、カナメが優しく微笑んでいた

「今は辛く、苦勞の連続だろうが……それを経験した者の幸せと喜びは大きい。

辛い経験を乗り越え、希望と明るい未来を思い描き、常に前だけを見つめよ……さすれば幸福を手にするであろう……。」

「それは……。」

「ああ、ヴラドの信仰する教訓だ。

マリナも私も、彼のように強く、逞しく……そして誇り高く生きていくこと。」

カナメはマリナの手をとり、柔らかな笑顔をみせる

彼女の励ましはマリナの心に届き、温泉のせいではない熱さが、胸の奥から込み上げる

それからマリナはカナメの胸に顔を埋め、小さな幸せを感じていた

……が

「（あ…姉ちゃん、貧乳短気ツンデレ娘がいるよ！？）」

お約束、現れた長門と武蔵に雰囲気をぶち怖された

「コ、コラ武蔵に長門ちゃん！

ちよっとは空気を読みなさいよ！」

「（やなこった、誰が貧乳特攻ツンデレ娘の言うことなんて聞くか！
ベーーーーだ！！）」

武蔵は小さく舌を出してマリナを挑発し、案の定マリナは怒り出す

「（コラ武蔵…そんなこと言っちゃダメ…。）」

「そつよ、もっと叱ってあげてよ長門ちゃん！」

「（もうあれ以上の成長は絶望的なんだから、貧乳なんて言わないの…。」

嘘でも希望を持たせてあげなさい…。）」

トドメは長門が差した

「カナメ様…やっぱり、希望は持てそうにありません…（泣）」

「…とりあえず、頑張れ。」

01話：来訪者はあの人（後書き）

しかし、雷狼竜たちが言うほど小さくはない

モンスターには、人間の価値観が分からないんですよ

ただカナメは恵まれています

ここらで状況を整理しましょう

マリナ 主人公

これはたんたる兄妹愛というものです

マリナ カナメ

初恋です

まさか勘違いは無いと思いますが、カナメは女性ですよ！？
つまりガールズラ ですね

ちなみに、

カナメ マリナ

可愛い妹キャラ

守ってあげたい妹分

癒やしの妹分

頑張れマリナ！！

02話：それぞれの道

かつてない規模の嵐を従えた古龍アマツマガツチが、ユクモ村にて結成された討伐隊と激突し、ハンターたちは見事アマツマガツチを撃破…

これはやって来たカナメの口から伝わり、ほとんどの者は理解出来ていなかったが、長門ら三姉弟の驚きはとても大きかった

「アマツマガツチがどんな古龍かは知らないが、強大な古龍らしい。それを最近ユクモ村に現れたという、若いが腕の良いハンターを中心とした討伐隊によって、見事討伐されたようだ。」

温泉からあがった二人は湖の畔にて、最近起こった出来事を話し合っていた

「（アマツマガツチかあ…アタシもよく追い回されてたな。）」

その地方出身のアリシアは話題を理解していたが、逆に、迅竜や角竜などは全く理解出来ていない
しまいには聞き飽きてアイルーたちと遊び始める…

マリナや金獅子が興味津々に聞いている時、同じく話しを聞いた長

門は小さく舌打ちをした

「（胸くそ悪い…。）」

「（姉ちゃん…どこ行くの？）」

長門は見るからに機嫌が悪そうに、立ち上がるなりサッサとそこから離れて行ってしまっ…

長門は直ぐに戻って来て、その後ろには大和の姿があった

「（帰るぞ…武蔵。）」

「（どこに帰るってんだい？）」

「（ワシらの故郷に決まっておろっ…サッサと来い。）」

彼らのその突然の行動に、武蔵だけでなくその場にいた者のほとんどが驚愕する

怪我でダウン中の恐暴竜でさえも、顔を上げて彼らに目を向けた

「（我らはアマツマガツチが現れてから、長い間流浪の存在であった。）

ヤツが消えた今…我ら姉弟は本来の故郷へ帰るのだ。）」

「ちょっと、今すぐじゃなくてもいいじゃない！」

マリナは立ち去る彼らを引き止める……いくら仲が良くないとはいえ、彼らとはやっと馴れ親しめてきた間なのだから

「（今でも先でも帰るのは一緒だ、何時帰ろうがワシらの勝手だ！）」

「（大和…よせ…）」

対する大和は穏やかでないが、意地をはりそうになりかけたところを、姉の長門に止められた

「（流浪者のオレたちを…このみんなは温かく迎え入れてくれた。感謝してるよ…それこそ、ここが第二の故郷と呼べるくらい…）」

「だったらもう少しゆっくりしていけば。」

「妹が待ってるんだ…もうこの世にはいないけど…早くアイツのもとに行かないと。」

長門は珍しく、愛情の見える笑顔を見せる

それは普段ぼつととし、戦いの時には戦闘狂と化す彼女らしからぬ表情だった

「（妹かあ…：そういやかなり懐かしいなあ。
アイツも生きてたら姉ちゃんみたいに、スッゴい可愛くなってたんだろな。）」

いつの間にか武蔵も帰郷する気になり、今は亡き妹を思い浮かべている

「（つてなわけだ貧乳娘…：ワシらは故郷に帰る。」

それから角竜、貴様はいつかこのワシが倒してみせるぞ！）」

「（いきなりなんだ貴様は…：ふん、いつ如何なる時でもかかってくるがいい！

完膚無きまでに叩き潰してやろう！）」

大和と角竜の浅からぬ因縁…：負けず嫌いの大和は高らかにリベンジを宣言し、角竜は呆れながらもそれを受ける
こんな時でも戦闘狂の本性をみせる大和は、ある意味ただのバカと
いつていい

「（おい武蔵、お前さんは俺に言うことはないのかい？）」

ここは兄の流れにのってリベンジ宣言すると思われたが、武蔵は金獅子にベツと舌を見せて逃げる

「（いつか寝込みを襲撃してやっつけてやるかね！
僕をイジメたこと後悔させてやる！）」

「（野郎…生意気なクソガキが。）」

武蔵は最後に挑発した後、追いかける前に逃げ去ってしまった

そして最後に、長女長門が残る

「（オレからは改めて言うことはねえよ…あ、一つあった。

前はいいところを邪魔して悪かったなアリシア…今度こそ素直に
自分の気持ちを伝えてくれよな。）」

「（な、長門ちゃん何言ってるんだよ!？」

アタシとルパはそんな間柄じゃ……な、な、ないんだからな!）」

恥ずかしがりながら否定するアリシアを楽しげに見た後、長門は寝
そべる恐暴竜を見つめる

「（また元気になるといいな…オレもあっちで何かないか、探して
みるよ…。）」

「（長門…お前らがいなくなると、ここも少し寂しくなっちゃうな
…。）」

「（今生の別れじゃねえんだ…辛気くせえのはよしにしよっぜ。

さよならは嫌いだ…またな。」

「（ああ…またな。）」

お互い最後に笑い合う

また逢える…そう長門は誓い、別れ際、彼らは狼のような遠吠えを残し、そして去っていった…

「（ん）…我輩もそろそろ、家内のもとに帰ってやらねばならぬの。

」

長門たちが去った後、角竜がポツリとそうつぶやいたのだが、金獅子らは長門たちとは正反対の反応を示す

「（テメエそんなこと言っついて、どうせすぐ戻ってくんだろが。）

」

「（そうですね、たまには奥さんにつきっきりでいなさい！）」

「（うるせえぞ黒猫！

というか、長門たちとのこの温度差はなんだ！）」

差別だと角竜は訴えるが、はっきり言って、この手の問題で角竜は

信用がない

確かに愛妻家ではあるものの、たびたび宣言を破ってこうして遊びに来るからだ

「（そんなこと言っているのか!？」

我輩が戻ってこなかったらどうなるか分かったもんじゃないぞ!」

「あんたがいなかったら、むしろここも平和になるんじゃない?」

「（おのれマリナ…救ってやった恩を忘れおって!

もう怒ったぞ、こんなところ二度と来ないからな!）」

こんなことを言ったにも関わらず、マリナからは真剣に受け止められていない

角竜は悔しそうに地団駄を踏むと、悪態をついて西の砂漠に逃げ去った

「（あれ…親方はどこにもいかないの?）」

「（アリシア…お前は俺のげんこつをくらいてえのか?）」

「（ごめんなさい!）」

握り固められた拳を見て、すぐさま謝罪するアリシア…金獅子は拳を引っ込めてため息をつく

「（どいつもこいつも…年寄りをいたわれや。）」
「とんでもない力で暴れまくって、飛竜も簡単にボコボコにする親方を？」

「（もうそれでいいわ…。）」

やりとりに疲れた金獅子は寝転がるが、少しの休みも許されないというのも、見覚えのない蛇竜が集団の中にやって来て、金獅子に声をかけたからだ

「（なんだお前さんは？）」

「（自分は古塔の蛇竜の遣いでして…アナタに伝言任されています。）」

「（古塔…嫌な予感しかしねえのは気のせいか？）」

金獅子の抱いた悪い予感は的中する……金獅子でさえも苦手とするある者の召喚命令だった

「（伝言をそのままお伝えしますよ…。）」

”最近派手に暴れておるようじゃな…そんなに老後が暇だと申すなら、こつちに来て妾の手伝いをせい。

逃げようとしたり無視したりしたら、そなたの首がとぶと思うのじや。

あと、土産はハチミツでよいのじゃ”

……だそうです、というわけで伝言は確かに伝えました。」

蛇竜が飛び去った後、金獅子は深いため息をついて頭を抱え込むよほど嫌なことだったのだろう…マリナたちは慰めの視線を送るしかなかった

しばらく頭を抱え込んだ後、金獅子はとてつもなく暗いオーラを放ちながら、どこかに行ってしまった

結局、金獅子もこの場所を去ってしまい、マリナら女性陣はなんとも言えない表情で視線を交わす

「（ところでマリナ…その人誰？）」

沈黙を破ったのは恐暴竜で、マリナのそばで佇むカナメを示す

「この人はカナメさん、私に色々教えてくれた人よ。」

紹介されたカナメは自己紹介するが、恐暴竜は何を言ってるか分からず、頭を下げたあたりでようやく自己紹介されてるのだと理解した

「(クンクン…もしかして二人ともお風呂入った?)」

「ギクツ…ど、どうして分かるの!？」

「(硫黄の匂いがした…それより、いつの間にか温泉掘ったんだな。)
」

恐暴竜はぼんやりとした目つきだが、その言葉にマリナは少し罪悪感を感じた

以前、明確な理由は聞いてはなかったが、温泉に入りたいと言っていたのを覚えている

この様子だと、恐暴竜は温泉の存在を知らなかった…温泉に入れてあげられなかったことを、マリナは申し訳なく思った

「ごめんね兄ちゃん…いつか言わなきゃと思ってたの。
今度一緒に入ろうね？」

「(ありがと…でも傷口がしみて痛いだろうから遠慮する。)
」

その発言に、マリナ・迅竜・アリシアは驚愕した

そして慌てて彼女らは離れた位置に走り、ひそひそ声で話す

「(マリナさんの誘惑に興奮しないだなんて…ご主人様、かなりヤバくないですか!?)」

「（うん、ありやもう重症だね…やっぱり小さいからかな？）」「ちよつとアリシアちゃん！それって一体どういうことよー！」

アリシアと迅竜は声を荒げるマリナをなだめる

「（可能性の一つだよ…あれを見てみなよ。）」

アリシアに示されて見た先には、寝そべる恐暴竜とカナメの姿…マリナは絶句している

カナメは恐暴竜のそばにしゃがみこみ、頭を撫でたりしている…おまけに、恐暴竜は干し肉を貰って美味しそうに食べている

これには指し示したはずのアリシアも驚き、悔しがった

ここ最近の彼は食欲が大きく低下し、アリシアたちが運ぶ食料も残したり食べない場合がある……それなのに、カナメという女性は当然のように食料を食べさせている

「カナメ様にあつて私たちに無いもの……もしかして、兄ちゃんって大人の女性が好きなの？」

「（あるいは優しく包容力のある女性…ですね！）」

「（そ、それは確かにアタシにはないな…。）」

彼女らはここにきて、ようやく少しだが結束力を強めた
それは突如現れた、カナメという強大な恋敵？によるものだ

「むっ…なにやら悪寒が…。」

寒気を感じたカナメは身震いし、周囲を見回す
マリナらが黒いオーラを放っている以外は平穩だったので、気のせいと決め付け、カナメはせっせと干し肉を与える

「あれ…私ってカナメ様のが好きなんだよね？
勢いで敵視しちゃったけど、大丈夫…かな？」

02話：それぞれの道（後書き）

雷狼竜、朱角竜、金獅子を離れさせたのは新章の布石です…まあ、半分は行き当たりばったりですけどね（笑）

正直に言うと、キャラのインフレ警報が出そうなので、ちょっと退場させました

ただし金獅子は直ぐ戻ってきます

コラボしました…金獅子に伝言した方がそうですね
ようやく、二作品がくつつきそうですね

別小説、飛竜を束ねし転生者もよろしくです！

03話：無法都市潜入

主だった騒がしいメンバーがいなくなり、恐暴竜らの住処はとても静かになった……いや、それは静寂と呼べるほどだった
相変わらずアイルーや奇面族は楽しそうに騒いでいるが、モンスターの騒ぎに比べれば、とるに足らない小ささだ

それよりも、地下空間のモモの秘密工房から、時折爆発音や獣の呻り声のよな音、普通では有り得ない音が響いてくる

モモは恐暴竜の顔を治して以来、秘密工房にこもりつきりなり、出てきても意味不明な文字で書かれた設計図を、睨むように見つめるだけだ

「最近、モモが何かをやりそうで不安だわ。」

「そうかな…私は賢くて面白いメラルーだと思うが？
それにしても、あの設計図に書かれた文字はなんだ？
現文明にもアイルー族の文字でもない気がするのだが…。」

モモの設計図を覗いたカナメが、少し興味深そうに尋ねる
アイルー族の文字はほとんど落書きだが、その設計図は意味不明だが、精巧に造られたものと伺える

「分かりませんね…おおかた、どこかの古代遺跡からでも見つけたんじゃないですか？
それより……。」

カナメは頷き、マリナと同じように視線を恐暴竜に向ける
日に日に体調が悪くなっていく恐暴竜には、早く有効な治療薬を与えなければならぬ

少し考える素振りを見せた後、腕を組んで提案を出す

「ある都市があるのだが…そこでなら良い治療薬になる素材が見つかるかもしれん。」

「そんな場所があるんですか？」

「ただ一つ問題が…そこは王国も、ギルドナイトの法も及ばない無法都市なのだ…。」

そこに君を連れていくとなると…不安だ。」

カナメが危惧したのは、そんな無法地帯に連れて行って、マリナが拉致されることだ

あの都市では、犯罪などそこかしこで見られ、それを取り締まった
り裁く法組織も無い

そんな場所にマリナがいたら…マリナは同じ女性のカナメから見ても、とても魅力的な少女だ

そこに入ったら、十中八九目を付けられる

しかしマリナは、得意げに笑う

「大丈夫ですよカナメ様。

自分の身は守れます。ヴラドさんに教わったのは、なにもハンター
の教訓だけじゃありませんよ！」

ヴラドがマリナに教え込んだのは、自然界での戦闘法以外に、日常
に起こる荒事への対処法もあった

武器を使ったもの以外に、無手での戦い方も教え込まれた

ヴラドには格闘術のほとんどを教えてもらい、さすがに命を奪うよ
うな技は教えてもらえなかったが、それ以外は実戦で使えるまでに
上達している

「私なんかより、カナメ様に手を出す人間の方が許せません！」

もしカナメ様を穢れた手で触れようものなら、私がボッコボコにし
ます！」

張り切るマリナに、カナメは自分の心配が杞憂だと知る

もつとも、マリナより長くヴラドのもとで腕を磨いたカナメは、守
り手などほとんど必要ない

「可能な限り守らせてもらっよ……私の方もあの街に用があるし、
ちょうど良いな。」

「…ん？」

貧民、海賊、盜賊、法を犯し終われた者が作り上げたと言われる、大陸一危険な無法地帯

三方を険しい山に囲まれ、前方には大きな湾口がある……街に通じる唯一の道である湾口への入り口には、砲台と海賊船があり、訪れる者を威嚇するように佇む

一隻の船が港にゆっくり近付き、船に乗る者は一人一人降りていく……中には、足枷をつけられ生気の無い者もいる

「サツサと歩け奴隷共！
そして永遠の牢獄へようこそ！」

剣を持った髭面の屈強な男が、足枷をつけられた人間を引っ張っていく

後に続く灰色のボロ布を纏った二人組は、その様子を横目で見ながら、彼らとは違う方向に歩いていく

その方向には船乗りの格好をした屈強な男たちと、リーダー格とおぼしき、錆びたプレートアーマーを装着する人物が……街に来る者を調べる検問所だ

「薄汚い野郎だ…テメエらは何しに来やがった？」

鎧姿の男が訝しむように見つめると、二人組のうち、長身の方が懐から銀のコインを出す

髑髏の型を彫った悪趣味なコインだ…男はそれを一通り眺めると、投げて返す

「お得意様だ、お通ししろ…ようこそ、大陸一素晴らしくクソつたれな街へ。」

男がそう命令をすると、他の屈強な男たちは道を開ける

そこを、みすばらしい格好の二人組は通り抜け、街を目指す

そのちようど後、検問所を突破しようとした男が、斬り刻まれて海に投げ捨てられた…

二人組は早足に人気のない路地に入ると、うんざりしたようにフードを外した

「入って早々最悪の気分ですね、ここは本当に人間の住む場所ですか!？」

「大声を出すなマリナ…奴等が現れるぞ。」

カナメは唇の前に人差し指を立て、マリナを静かにさせる

「前も言っただろう…この場所は法から隔離された無法都市だ。殺人・強盗…重罪を犯した者が、最後に逃げ込む場所の一つでもある。

もつとも、お金を持っていなければさっきのように、入港を拒否されてその場で処刑される。」

「では、私たちはどうして入ることを許されたんですか？」

マリナの疑問に頷き、カナメは先ほど検問で見せた悪趣味なコインを取り出す

「昔、ヴラドに連れられて来た時に手にした物だ。

入国許可証みたいなもので、この街を支配する元海賊が造った銀貨だ。」

「またヴラドさんですか…あの人、何でもしますね。」

「彼は暗黒街でも有名でな…街の支配者が唯一恐れる人物でもあった。

しかし……。」

カナメは厳しい視線を外に向け、フードをかぶって顔を隠す…マリナもとりにあえずフードをかぶる

「彼がいた時にはいなかった、奴隷商人が現れた。彼の影響力が無くなった瞬間に、街での悪行が増えたよ。」

ちよつと、路地の前を奴隷を引き連れた奴隷商人が通るどこに運ばれるかは分からないが、まともな場所に行けるものはあまりいないはずだ

「…さあ、行こう。」

奴隷商人が過ぎ去ったのを見計らい、二人は街の中へと進んでいく

「賭博、禁制品、横流し品…この市場では、違法と付くものほとんどが揃う。」

二人が訪れた場所は、この無法都市にある市場だ。普通の市場では高いものが、ここでは安く買えたり、正規のルートでは何年待っても買えないような、珍しい商品もある

この場所は、支配者側のチンピラたちが睨みをきかせる場所で、比較的安全な地帯でもある

「うわぁ…怪鳥が一頭丸ごといます!」

「ふむ…ハンターも何人か関わってるのだな。」

討伐したモンスターをギルドに渡さず、ここに持って来て高く売る……ギルドナイトは何をしているんだ？」

怪鳥のオークションが始まったが、買い主からあげられる金額は、通常よりも遥かに大きかった

その他に目を向ければ、ギルドで買い取りをするはずの精算品も、多数この市場に並んでいる

「気分が悪い場所ですけど……ここなら、治療薬になりそうなものもありそうですね！」

「そうだな、ちょっと探してみよう。」

二人は片っ端から市場を見てまわろうとしたが、どの品も魅力的であり、なおかつ購入を躊躇うような値段である

極端に言えば、一般人が一生かけても買えないような、法外な額の素材もある

露天の中には、”貧乏者お断り”の看板もあるくらいだ

「なによこれ、もっと安くしなさいよ！」

「金無しはとつとと失せな。」

店主も慣れているようで、マリナのクレームを簡単に払いのけ、手で追い払う

当然マリナは怒るが、チンピラが通りかかったので、悔しそうに怒りを抑え込む

「よく耐えたな…こっちにもっと良いものがあるぞ。」

カナメに言われて反対側の露天に目を向ける
その店は主に魚介類を扱っているらしいのだが、店頭に並ぶガノトスの頭を見てマリナは気分を悪くする

「うえ…なんだってガノトスの頭が。
なんか変な魚もいるし。」

気持ち悪そうに口を抑えながら見る先には、嚴重にされた水槽に入る、とても大きなヒレの多い魚がいた

「ほう…これは”ハシリウオ”じゃないか。
ゲリヨスをこえる強走効果に加え、滋養強壮にもなる素晴らしい魚だ。」

「お目が高いね、確かにコイツはハシリウオだよ。
しかもただのハシリウオじゃねえ、10年以上生きた特上の個体だ。」

店の店主がそれまで相手をしていた客を捨て、カナメのもとに卑屈

な態度でやって来た
値段は相変わらず高いが、正規のルートで入る価格に比べれば、安い値段だ

「これは買い得だな…店主さん、この魚の干物は無いのかい？」

「干物は人気でね…在庫が少ないから高額になりますよ。」

ハシリウオの生命力は強く、それ自体とても強い
生きたまま買うより、質も落ちない干物を買った方が安全で、必然的に需要が高くなる
なおかつ、その強い生命力のせいで干物にし辛いために、需要が供給を上回ってしまうのだ

「干物はかなり高いね。」

「心配するなマリナ…店主さん、現金で買つとしよう。」

「マジですか!？」

マリナが驚いている間に、カナメはサツサとお金を支払い、ハシリウオの干物を買ってしまう

「君のお兄さんに悪いことをした詫びだよ、貰っておいてくれ。」

カナメはフードの下からウインクしてみせ、優しく微笑む
遠慮しようとしたマリナであったが、彼女のその表情に見惚れてしま
まい、つい忘れてしまった

「昼過ぎになるが、品数はほとんど無いな。」

禁制品のほとんどは数が少なく、また、商人が扱う素材も多くはない
商品の半数以上は昼前に売られ、珍しい品は無くなることが多い
カナメはギリギリでハシリウオの干物を買えた…残りの干物も、数
分後には完売したらしい

「マリナ、ちょっと私の野暮用に…って何を見ている？」

「…”惚れ薬”っていうのと、”精力剤”っていうのがあります。
カナメ様、買いきましょう！
そして一緒に！」

「しよ、正気に戻れマリナ！
ええい、やはりここは教育に悪い場所だ！」

手に持っていた品をひったくって捨て、カナメはマリナを抱えて、
早々にその場から逃げ去った

新しくカナメがやって来た場所は、石造りの、まるで牢屋を元に造
った酒場だった

カナメは息を乱しながらカウンターの席に付き、マリナをそばに座らせる

「いらつしゃい、注文は？」

スキンヘッドでマッチョなオヤジが注文をとりに来たが、カナメは”水を一杯”とだけ言い、疲れ果てたようにカウンターに突っ伏した

「カナメ様、ここには一体何のご用ですか？」

「ああ…ちょっと個人的に捕まえい人物がいてな。マリナにも少し協力してもらいたい。」

マッチョなオヤジから貰った水を飲み、カナメはゆっくりと説明を始める

「私はこれからこの場所で、ある取引をする。交渉は決裂するだろうから、その時、相手を捕まえて欲しいのだ。」

「分かりました！正義の鉄槌つてやつですね！」

「その意気だ………すまない、水をもう一杯貰えないか？」

配置はこうだ……マリナは暇な浮浪者を気取り、カウンターでマツチヨなバーテンと雑談をする

このバーテンはカナメの知り合いらしく、作戦に快く協力してくれた……彼は見かけによらず、かなり良い人だ

そしてカナメは、正体がばれないようにフードで顔を隠し、声もくぐもるよう細工をして席についている

昼の時間で酒場が少し混み合ってきた時、その人物は現れた

死神のような装束のいでたちで、大きな麻袋を持った男が、少し挙動不審な様子で入って来た

その男は酒場をぐるりと見回し、カナメを見つけるとそこに真っ直ぐに向かった

「待たせちまったな、あんたが”ヘルミス”ってやつかい？」

「俺がどんなやつだろうと構わないだろう。それよりサツサとブツを見せろ。」

「へへっ……話しが早いな。」

男は小さく笑うと、席について麻袋をテーブルにのせる
それを、カナメのもとに差し出した

中に入っていたのは、ギルドで定められた禁制品や精算品…そして
武器も追加で渡された
武器はおそらく、死亡したハンターからかすめたもの、もしくは横
流し品だろう

カナメはそれらを眺めた後、黙ってそれをテーブルの横にずらす
そして今度は自分が用意したバッグをテーブルに乗せる

「取引成立かな？」

「その前にいくつか聞きたい。
これらはどこから手に入れてきたのだ？」

「どこからかなんて、どうでもいいだろ。
取引成立ならサツサと金をよこせよ。」

「曖昧な方法でこれらを手に入れたなら、どこかでアシがつく可能
性がある。」

男は面倒そうな態度をしていたが、大金を抑えられているために、
仕方無く答える

「　　ってなわけだ。」

俺がどんな権力を持つてるかは言えないが、報告書さえ偽装しちま

えは楽勝だよ。」

「なるほど、ではこちらの契約書にサインしていただきたい。
”本名”でな。」

「おいおい、なんだってそんな面倒なことすんだ？
契約書なんか書いたらそれこそアシがつくだろ？」

「ウチのボスは慎重なんだよ。
取引の心配はいいから、とつとと書け。」

男はしばらく考え込んだが、やがて諦めて契約書にサインをする
カナメはそれを見届けた後、椅子に寄りかかり脚を引く

「最後に…この取引に関わっているのは、貴様以外に何人いる？」

「…お前一体何者だよ。
取引は中止だ、ブツは返してもらっぜ…！」

男が席を立って麻袋に手を伸ばす前に、カナメは勢い良くテーブル
を蹴り上げる

不意の動作に反応出来ず、男はテーブルにぶっ飛ばさる

カナメはフードを外し、倒れた男のもとに近寄る

「痛っ…野郎…って、カナメ!？」

な、なんでお前がこんなところにいんだよ!？」

「貴様の悪行などバレバレだ、大人しく捕まるのだバルガス!」

「…ク、クソ!」

バルガスはカナメの腕をかいくぐり、一目散に出口へ向かうが…

「真っ正面捉えた!」

「なんだっ、ウガッ!？」

いつの間にか正面に回り込んでいたマリナが、バルガスの顔面に跳び蹴りをくらわせた
倒れたバルガスを捕まえようとしたが、すぐさま立ち上がって逃げる…ハズだった

「私二任セナサーイ。」

バーテンのオヤジがすかさずバルガスにラリアットを浴びせ、その後、怪力のオヤジにあえなく捕まった

「へへっ、美女二人に囲まれるのはいいが…縄で縛られる趣味は無いぜ?」

「うっさい!!」

捕まったバルガスは、頑丈な縄でぐるぐる巻きにされ、今は二人の尋問を受けている

「なにが望みだ…俺をギルドナイトに引き渡そうってか? 止める止める、俺は脱獄の天才でもあるぜ?」

「偉そうに言うな!」

先ほどからこうやって、バルガスのポケにマリナが強烈にど突く

「お前ら…さつきから聞いてりゃ、治療薬を探してるのか? それならいい場所があるぜ?」

「ほう…なら教えてもらおうか。

言っておくが、代わりに縄を解けとかは聞かない。

話さないなら貴様の頭を叩き割る…さあ…言え。」

カナメはにこやかに笑ってはいるが、手に持つ龍刀からはどす黒い殺気が放たれている

バルガスは察知した、自分の助かる道は無いと…

「大昔、ある密輸業者の船が沈没したんだ。そこにはありとあらゆる品が眠り、中には伝説の素材もあったって。話しただぜ…そう、海底に眠る沈没船さ。特殊な海流で沈没した場所には無いが、俺は見つけたぜ…これを知るのは俺一人だ。」

「へえ、面白そうじゃない？」

「あんだ、トレジャーハンターにでもなつたら？」

「凶暴なモンスターをかいくぐってか？」

「リスクが高すぎるし、そういうガラじゃない。」

「カナメ、沈没船の在処を教えてやるから、このことは見逃してくれないか？」

「バルガスは調子にのるのは止めて、頭を下げてカナメにお願いする先ほどの脅しはかなり効いたのだろう…」

「それは結果しただ。」

「これは手厳しいな。」

「マリナからは胡散臭い人物に見えたが、バルガスは必死だった。カナメによってギルドナイトにチクられたら、ハンターとしての地位を追われるだけでなく、最悪の場合には牢屋にブチ込まれる。」

都合が悪いことに、カナメには嘘などきかず、虚言を言おうものなら怒りの鉄槌をくらう

ハンター兼密輸業者のバルガスには、選択の余地などなかった…

03話：無法都市潜入（後書き）

今回のオリジナルアイデア

”ハシリウオ”

ヨヌフさん、ありがとうございます！！

さてさて、最後のバルガスは恐暴竜との戦いからは考えられない、小悪党ぶりを見せました

彼は表はハンターとして、裏では密輸業者として荒稼ぎしている男です

次回予告

あのコラボモンスターが現れて、金獅子とバトルします！

04話：古代の猛者

「（面倒くせえ…。）」

住処を発ってから、この愚痴をこぼしたのは何日目だろうか…おそろく数え切れないだろう

これから恐暴竜のために「肌脱ぐ」という時に、あの御方から召喚命令が下り、金獅子は嫌々ながら密林をのそのそ進んでいたふと視線を上げれば、木々の間から覗ける灰色の巨塔…最後に大きなため息をこぼし、金獅子は覚悟を決める

密林の中にひっそりと存在する”塔”

何時、誰が、何のために…この塔は人間たちからも研究の対象となっており、昔はよく研究者や学者が、護衛と共によくやって来ていた…そう、昔までは…

アプトノスを横目に進んでいくと、本来あるはずの橋がなく、石造りの橋は崩壊していた

金獅子は頭をポリポリ搔くと、少し助走をつけて跳んだ

そしてその先にある塔の前の広場は、異様な雰囲気に包まれていた。山積みされた焼き焦がされた生物の死骸、見せしめのように磔にされた生物：磔にされている者は、まだ息がある者もいる。そしてそのこの広場の土は、何年も血を吸い続けてきたかのような、どす黒い赤に染まっている。

金獅子が顔をしかめていると、力強く羽ばたく音が聞こえた。現れたのはガブラスだったが、普通のサイズよりもかなり大きい。

「（金獅子の兄さん、ずいぶん久しぶりやなあ。しばらく見ない間に、えらい垢抜けたんちゃうか？）」

強面のガブラスだが、陽気に金獅子に話しかけてきた。

「（アンディ…お前は相変わらずだな。それにしてもこれは一体なんだ？）」

金獅子が周囲の残虐に処刑された生物を見回す。蛇竜のアンディもならって見回すと、少し思い詰めたような表情に変えた。

「（ワイらのボスは今遠征中なんやけど、ボスに代わって統率するヤツがあるのよ。」

強さはワイに比べたらまだまだやけど、頭の方は良いねん…せやけどちよっと過激でな、この見せしめは全部ソイツがやったんや。」

「(ヴァイキーはどうしてそんなヤツを幹部に?)」

「(賢いやツが必要やったさかい、多少の性格は無視したんやろ。エディが生きとれば、こんなことにはなつたらんやろな。)」

アンディの最後の言葉を聞いて、金獅子は明らかに表情を暗くする。アンディはそれに気付き、笑顔を浮かべる。

「(気にすんなや、昔の話しや。)

もう兄さんがエディ殺したこと、みんな恨んどらんわ。」

「(すまねえ……あの時は、自分でもどうかしてたぜ。)」

「(ハハハハ、せやろな!)

兄さんの今の姿を見たら、若い時、闇雲に暴れまわってた姿が想像できへんわ。」

いつの間にか和やかな雰囲気となり、久しぶりに会ったということ。話しを弾ませようとしたが、金獅子とアンディは強い寒気と殺気を感じる。

その殺気は、塔の頂上から発せられている……そして次の瞬間、蒼い物体が雲を突き抜けて彼らの前に落下…着地した。

「(な、なんや…何が起こったんや!?)」

「(そなたはとつと失せよ!)」

舞い上がった土煙の中から、凜とした、それでいて威厳のある声が響く

そしてアンディは疑問の余地もなく、慌ててその場を退散した

「(随分派手な登場だ…久しぶりだな、ナナちゃん。)」

土煙が晴れていくと、気品に満ちた蒼いたてがみと身体を持ち、大きな翼を2つ宿す龍が姿を現す

金獅子はとりあえず手を差し出したが、なんと物凄い速さで払われた

903

「(そなたいきなりいなくなりおつて!)

数年も帰って来ぬから、死んだかと思っただではないか!

やっと見つけたと思ったら、人間の街を攻撃したじゃと!?

このバカ者、命を粗末にするようなことをするでない!)」

口を開くなり飛び出す、炎妃龍ナナちゃんの怒鳴り声

「(ああ、とりあえずいきなりいなくなったのは謝る。

ちよつと大事な用事があったんだ…あ、これ八チミツだ。)」

謝罪の言葉と一緒に、途中採取したハチミツを渡す
するとナナちゃんの表情は一気に和らぎ、なんとも嬉しそうな表情
に変わる

ナナちゃんは前脚を少しハチミツに浸し、それをペロペロと舐める

「（ふむふむ…やっぱりハチミツは美味しいのじゃ！
でかしたぞそなた！）」

「（ソイツは良かった……それにしても、俺のこと心配してくれて
たんだな。）」

「（…なっ…なにを申しておる！
そなたの心配などこれっぽっちもしておらぬのじゃ！
そなたがいなくなるとヴァイキーが困るから、妾も仕方なくじゃぞ！
仕方なく心配する素振りを”見せてやった”…だけじゃ！！）」

再び怒鳴るナナちゃんだったが、これは全く威厳がなかった
そしてどこか馴染みのあるその態度に、金獅子は彼女らを思い浮か
べた

「（この話しは終いじゃ！
ついてまいれ！）」

「（…はいよ。）」

ブンブンしながら進むナナちゃんに、金獅子は少し楽しそうに付いていく

蛇竜の中にはアンディ以外にも、知っている者たちがいる…金獅子は数年前ぶりに会ってみたいと思っていたが、ナナちゃんはもの見事に、塔への入口をスルーした

金獅子は抗議しようとしたが、後が面倒になると考え、しぶしぶ付いて行く

結局ナナちゃんは裏手で塔を登って行く

翼で飛ぶナナちゃんに比べ、よじ登っていく金獅子はしんどそうだそこを登りきると、塔内部の開けた場所に出るが、螺旋階段は無く、濃霧で先の見えない広い場所だった

(2nd G 銀火竜のエリア)

金獅子はくたびれてその場に座り込んだが、次の瞬間、おぞましい咆哮によって飛び上がる

ナナちゃんを見ると、忌々しく地面の下を睨んでいた

「(数日前にヤツが突然現れての…意味不明なことを支離滅裂に叫ぶから、ぶっ飛ばしたのじゃ。

じゃが、ヤツは死ぬどころか少しも効いてないようで、あるうことが妾に襲いかかって来たのじゃ。

妾はなんとかこの地下に閉じ込めたのじゃが、以来このとおりじゃ。)」

「(いきなり現れた?)

それは一体どういうこと？」

しかしナナちゃんは答えず地面を軽く叩き、様子を見ている
そして次に思い切り地面を叩き、地面を崩落させる

「(さ…) なんとかしろ)」

ナナちゃんは笑顔を向けると、早々に羽ばたいて霧の奥に消えてしまふ

金獅子は絶句していたが、崩落した地下空間からぬっと姿を現した竜に、すぐさま臨戦態勢をとる

『(…)…娑婆の空気はやはりうめえ。』

数千年…いや、数万年以上もオレ様は眠ってたか。() 『』

強固な白銀の皮膚に覆われ、前足は非常に小さく、獣竜種と同じような二足歩行だが…最も大きな特徴が体右部の突起
右側のみに大きく突き出した、通常のモンスターの骨格とはあまりにも異質な突起があった

そして、金獅子にはその竜が何を言ってるのか、全く分からなかった

「(オイお前…大丈夫か?)」

『(ああ？ なんだこのエテ公は？
新種の生物か？)』

その竜はようやく金獅子に気付いたようだが、相変わらず、意味不明な言葉で話している

「(お前一体何者だ?)」

『(なるほどなるほど…数万年の時間は、意思疎通も大幅に変わったのか。)』

謎の竜は何か理解したように頷くと、少し考えてから口を開く

「(んー…おい、オレ様の言葉が分かる…か?)」

「(なんだよ言葉が分かるんじゃないか。)」

「(今覚えたに決まってるだろタコ。)

それにしてもあの眼帯ヒューマンめが…傷を癒やすのにかなり時間が経っちゃった。)」

謎の竜はイライラした口調で呟き、そして周囲を見回す

「(ここは見覚えがあるぞ。)

しかしずいぶんボロくなっただもんだ…おいエテ公!)」

「（誰がエテ公だ…ったく。）」

とりあえず謎の竜に目を向けると、何か説明を求めているようだった
しかしまだ言葉に慣れないのか、言葉が滅茶苦茶だ

「（とりあえず質問していいか？

お前さんは何者だ？）」

「（何者かだと？

他のヤツらからは”ギアレックス”って呼ばれてた。

ならオレ様の質問にも答えろ…レックスってやつはいなかったか？

」

ギアレックス、レックスとややこしくなりそうだったが、金獅子は
答える

「（ティガレックスのことか？）」

「（誰だソイツは!?!?)」

満足のいく答えを得られなかったために、ギアレックスは少しイラ
イラしている

このままではらちがあかないので、金獅子は少しずつ質問を重ねて

いく

その結果分かったのが、この竜は現代よりも遙か前に存在した竜と
いうこと

言葉の端で語られる古代の様子と、この竜が今まで見たこともない
姿だったので、そう判断した

化石で発見されるようなモンスターの特徴を言い当て、古龍につい
てもまるですべてを熟知しているかのようだった

「（クシャルダオラは分かるか？）」

「（あいつそんなイカした名前になったのか？
ハツハハハ、ジョークだな！

オレたちがあいつをなんて呼んでたか分かるか？

”そよ風ドラゴン”だ…あいつは単なるコメディアンだ！）」

「（じゃあテオ・テスカトルは？）」

「（寒い場所では重宝するが、それ以外の場所では用済みだな。

寒いところには行かないオレ様にすれば、いてもいなくても…いや
いない方がいいゴミだな。）」

このギアレックスという竜が、古代ではかなり強い部類だとい
うことが伺える

天災とまで称されるような古龍も、ギアレックスはほとんど下等に

見据え、よほどの自信があるようだ

「（お前さんはどれくらい強いんだ？）」

「（やってみるか？）」

ギアレックスはニヤリと笑い、脚を地面に踏みつけて身体を慣らす
金獅子は今更失言を後悔したが、ギアレックスはやる気満々なため、
逃げられない

「（面倒くせえ………先手必勝！）」

金獅子は機敏な動きで竜に近寄り、その前に突き出た顔面を殴る
続いて竜の下顎をアッパーで撃ち抜いた
しかし竜はぐらつくどころか、少しのダメージもないようで、余裕
の表情を見せている

「（もっと本気だせよ………退屈しのぎにもなりやしねえ！）」

「（ならこいつをくらいな！）」

金獅子は背後に飛び退き、口を開いて雷光弾を放つ
竜は少し感心したように頷き、横に素早く跳び、そしてその発達し
た脚で一気に走り出す

「(体当たりか!?)」

「(んなわけねえだろ!)」

繰り返されたのは、強靱な脚による蹴りだった
身を捻って放たれた蹴りは金獅子の側面に命中し、体当たり
に備えていた金獅子は大きくぐらつく

竜はすぐさま逆側の脚で蹴るが、金獅子はかるうじてその脚を捕らえる

「(動き止めたと思ったら……大間違いだ!)」

「(なんだとっ!?)」

竜は捕まっていない脚で跳び、浮かせた金獅子を地面に叩きつけた

「(痛つてえな…図体の割に、速い動きじゃねえか。)」

「(これでもくらえや!)」

竜は突き出た突起を金獅子に向けると、そこから赤い液体を勢い良く噴出した

金獅子はとっさに回避したが、飛び散った液体が背中に付く

「（強酸か…厄介だな。）」

竜はのしのしとゆっくり近付き、こうしている間にも強酸が背中を背中を焼いていく

金獅子は少し考え、それから毛を逆立たせる…逆立った毛は金色に輝きだし、強酸は残らずはじけた

「（金色の猿か…面白え！

見かけ倒して終わるなよ！）」

ギアレックスは勢い良く走り出し、今度は体当たりを敢行する

金獅子はギリギリまで竜を引き寄せ、首を腕で掴む

そして勢いのままに、後方に竜を投げ飛ばす

ギアレックスは塔の壁に激突し、もろかった一部が崩壊する

「（痛くもかゆくもねえ！

オレ様は打撃や斬撃では殺せねえぞ！）」

「（ならこいつでもくらつとけ！）」

金獅子の口から雷光が一直線に放たれ、ギアレックスの身体を吹き飛ばす

しかしそれでも致命傷にならず、なんと、プレスを真っ正面から受

けながら突っ込んで来る

「(死ねやエテ公!)」

プレスを放って口が開いた顎に、ギアレックスの強烈な蹴りが直撃
金獅子は横に大きく転がり、同じように衝撃を受けた塔の一部が崩
壊する

「(ちつと怒ったぞ...)」

「(そうか、オレ様は少し身体があつたまつてきたところだ!)」

金獅子は血反吐を吐き、ギアレックスはさらに戦闘態勢をとる

騒ぎを聞きつけた蛇竜がいつの間にか集まり、周囲を羽ばたいていた
そしてお互いに再びぶつかり合う時、ナナちゃんが慌てて間に入っ
て止めた

「(やり過ぎじゃバカ者!」

塔が壊れてしまうではないか!)」

「(テメエは…オレ様を閉じ込めたクス野郎!)」

「(やかましい!)」

ギアレックスは特に興味はないようで、軽く流して空の蛇竜を忌々しく眺める

「（蛇か…見てると無性に腹が立つな、殺すか！！）」

蛇竜たちは危険を察知してすぐさま逃げ去り、ギアレックスは残念そうに向けていた突起を下ろす

「（全くどうしようもないヤツらじゃ！

この塔が壊れたらどうするのじゃ！）」

金獅子はやはり申し訳なさそうに謝罪するが、ギアレックスは少しも反省していない

「（ヤツらが造った塔なんざ、どうなるうが知ったこっちゃねえ。それよりレックスはどこにいるんだ！？）」

「（何がレックスじゃバカ者！

飛べない者同士、大人しくしてれば良かったのじゃ！）」

「（空飛べるからってなんなんだ！

地上で生存競争に負けたがら、空に逃げただけだろが！）」

ナナちゃんとギアレックスは互いに罵り合い、話しの流れを掴めな

い金獅子は大人しく寝そべる

「（もうたくさんじゃ！

そなたの顔など見とうない、とつとと消え失せい！）」

「（ちょうど良いな！

テメエのその耳障りな声にうんざりしてきたところだ！）」

「（うぬぬ…そなた寝そべってないで、この不屈き者をどこかに捨ててまいれ！）」

口げんかで勝てそうもないナナちゃんは、全てを金獅子に押し付けてきた

「（捨てるってわけにもいかねえから…とりあえず引き取る。）」

「（好きにせよ！）」

ナナちゃんはイライラしながら吐き捨てると、ジッとギアレックスを睨み付ける

「（ハツハハハ、貴様に”史上最低のクズ”の称号をくれてやるよ、後世に語り継がれることだろうよ！
行くぞ金色の猿！）」

そう言うとギアレックスは走り出し、塔の端から飛び降りていった残されたのは何とも言えない表情の金獅子と、今にも泣き出しそうなナナちゃんだった

「（…グスツ…なんにもあそこまで…そこまで言う必要は無いのじゃ…。
…。
ヒグツ……ヴァイキー…早く帰って来るのじゃあ…。」

ギアレックスにメタメタにされたナナちゃんは、すすり泣きながらその場を後にする
やるせない金獅子はギアレックスの降りていった道を目指すが、一つ気付いた

「（あいつこの高さを飛び降りていったのか？）」

案の定、塔の下にはボロボロになったギアレックスがおり、結局彼を住処まで運ぶ羽目になった…

古代と現代の邂逅…

古代竜が金獅子らにとって吉となる凶となるか…

04話：古代の猛者（後書き）

核竜：ギアレックス

称号

古代の猛者、毒舌、自信家、恩恵と代償

現代のモンスターが自然界に現れる、遙か昔……有史以前の太古の時代から復活したとされる竜

イビルジョーやボルボロスといった獣竜種と酷似しているが、人間には一度も認知されていないため、分類はおろか存在も確認されていない

戦闘力はかなり高く、現代のモンスターとは一線を画す、圧倒的なまでのモンスター

金獅子の前に現れたギアレックスは、全てが謎に包まれている
現代のモンスターと意思疎通したり、自分がどれだけ眠っていたか推測するあたり、知能や洞察力は高いようだ

性格を表すなら毒舌の一言に尽きる

金獅子も恐れる炎妃龍でさえ、容赦なく泣かせた

個人的に蛇と眼帯を付けた人間が嫌いなようだが、その理由は定かではない

大昔に、レックスという気の合う友達がいたらしいのだが…
時折口にする古代文明のことといい、全ては謎に包まれている

05話・現代と古代の邂逅（前書き）

ちよつと出来が悪い…

05話：現代と古代の邂逅

悪名高い犯罪都市にて、恐暴竜のために治療の効果が期待出来る素材を手に入れた、マリナとカナメ

彼女らはずいずい、都市にて悪徳行為をしていたベテランハンター、バルガスを捕まえた

彼女らはバルガスを逃げないように拘束し、住処へと帰還したが、そこには見慣れないモンスターがいるのだった：

「ところでよ…なんでカナメは俺を捕まえに来たんだよ。」

「言うておくが、貴様が横流しをしていたことは、公然の秘密だぞ？」

住処に向かうために木々をかき分けながら、カナメはバルガスの問いに答える

「マジかよ…しばらく大人しくしないとな。」

「それは別件で、本当の理由は別にある。」

お前：請けた依頼をすっぽかしたそうじゃないか。」

悪事がバレて焦っていたところに、さらに追い討ちをかけられ、バルガスは明らかに動揺する

マリナも興味があるのか、横目でチラチラ見ている

「そうはいうがな、あんなクソみたいな依頼やってられねえぞ!? 簡単で高報酬だからって…疑ったんだが俺に無理やり押し付けやがったんだ!」

「どんな依頼でもこなすのが、ハンターの役目じゃないのか?」

「何も知らないからそんなことを言えるんだ!

第三王女からの依頼だから高報酬なのは分かるが、依頼内容がふざけてんだよ!

” 砂漠に朱角竜と黒角竜のつがいがいる。見たいから捕獲してこい

” ふざけんな!

王女もギルドマスターも、俺に死ねって言いたいのか!?」

「とにかく、仕事はこなせ。」

「そうかいそうかい!

誰もがお前みたいに仕事こなせば、俺みたいなクズは出てこねえな。」

バルガスは不満をこぼしたきり、一言も話さなくなった

一方のカナメは、やかましいのが無くなって、マリナと楽しそうに会話を始める

そうこうしている間に、森を抜けてマリナの住み慣れた平原へと出る

森から抜けた開放感にはしゃぐマリナだったが、あるものを見つけ、次の瞬間勢い良く走り出す

「（ここがお前の住処か、いいじゃねえか。最高の環境だぜここは！）」

「（正確には、俺あ居候だよこのやろう。む…早速お出ましだぜギアレックス。）」

丘の上から全速力で駆け抜けて来るマリナを、彼らはぼんやりと見つめる

「親方ー、勝手にモンスターを、連れ込まないでよ!!!」

目の前に来るなり跳び蹴りをしたが、金獅子は軽々と受け止めてみせる

「（ヒューマンか、道中いろいろ見てきたが、この時代にもいんのかよ。）」

「何がヒューマンよ！」

というか、アナタはなんなの!？」

金獅子の腕から抜け出したマリナは、ギアレックスを指差しながら

怒る

しかし初めて見るモンスターに興味もあるようで、目は好奇心に輝いている

「（親方さん、そちらの方はどちら様でしょうか？）」

騒ぎを聞きつけて、迅竜もちょこちょこやって来た

迅竜はキョトンとしているが、ギアレックスは訝しげに見下ろしている

そして隣で地面に座り込む金獅子に顔を向け、一つ質問をする

「（なにこの、レックスに悪趣味な改良施したレプリカみたいな竜？最近はこの竜が流行ってんのか？）」

「（レプリカ…まあ、迅竜は始祖竜の形をとどめてるって話しだからな。」

たぶん、お前のいうレックスに結構近い存在だぞ？）」

ギアレックスは数回頷くと、もう一度目の前の迅竜を見つめる
相変わらず疑り深い目つきではあるが、ジロジロ見られる迅竜は、
気恥ずかしそうにもじもじしているが…

「（だいたい分かった。」

一応空は飛べるけど、滑空する形でしか飛べない…。

閉鎖的な地形で中途半端に進化した、どうしようもないマヌケだな。

確かにレックスに似てるけど、たちの悪いまがい物だ！」

「（レックス…？）

ティガレックスですか？」

「（だから誰だそいつは！？）」

迅竜とマリナはわけが分からない様子で顔を見合わせる
この件に関しては、しつこく追求すると機嫌を悪くするので、金獅子は話題を変えさせる

「（こいつはギアレックスっていつてな、大昔の時代から復活したらしい”んだ。”）」

「（らしいじゃねえタコ！）

”大昔からやって来た”…だ！！

くそ、レックスさえいれば！」

「（ティガレックスなら砂漠か雪山にいますよ？）」

「（だから…そいつは誰だ！？）

どんなマヌケか知らないが、オレ様の言うレックスは”レックス”だ！

分かったか、その足りない脳みそに叩き込んどけ！」

「（…すみません、声が大きすぎて聞こえませんでした。）」

盛大にずっこけるギアレックスは、もう諦めてその話題を無視する

ことにした

そこへちようど、後からやって来たカナメとバルガスがやって来る二人はやはり同じように、初めて見るギアレックスに興味津津だ

「ほう…私も長くハンターをやっているが、最近は新発見が多いな。」

「（なに見てんだこのやろつ。）」

「コラ、カナメ様に向かってなんてこと言っの！
謝りなさい！」

しかしギアレックスは謝罪せず、それを無視して周囲を散策し始める

「（性格に難ありだな…アイツの友達でも見つけてやりゃ、何とか
なんのか！？）」

「あんな失礼なやつ、知りませんよ！！」

それより親方、兄ちゃんに効きそうな素材見つけてきました！」

マリナは態度を変えて、背負っていた荷物の中から干物にされた、
大きな魚を取り出す
それをしみじみと見つめ、金獅子に手渡してみる

「（ハシリウオかい…こいつぁ珍しい素材だ。
珍しいってより、捕りにくいって言った方がいいか？
俺あ昔、コイツが数匹水面走り回ってたのを見たぜ。」

体力の消耗した恐暴竜に合う、とても素晴らしい素材であるが、効果は劇的なので使用は慎重をようする
とりあえず金獅子らは、いつも通り湖の畔で日向ぼっこしている恐暴竜に、そのハシリウオを持っていく

「（おい若造、だるいだろぅが起きろや。」

金獅子は恐暴竜の頭をぺしぺしと叩き、少し穏やかに起こす
いびきも小さく、その他もろもろの動作も弱々しい……

「（とりあえず丸ごとやってみるか？）」

「それ劇薬らしいんで、それはまずいと思いますよ？」

マリナの冷静なツツコミに、差し出した干物を慌てて引っ込め、干物を一部割った
ついでにそれを肉と肉の間に挟み、恐暴竜の目の前へと運んでいく
……恐暴竜は迷わず食べてくれた

一同その様子を見守るなか、恐暴竜はバリバリと干物を噛み砕き、そして飲み込んだ

数十秒、数分が経過する……恐暴竜は閉じていた目をゆっくりと開き、静かに上体を上げる

「（気分はどうだい、若造。）」

「（よく分からないけど……全速力で走り回りたい気分だ……！）」

「（ようし、なら手始めにこの肉を喰えや。）」

金獅子が差し出した肉を恐暴竜は直ぐに食べたが、そのすぐ後に、よろよろと倒れてしまった

「ちよっ……なにしたのよ親方！」

「（眠り生肉喰わせてやった。）

ハシリウオは効果的だが、傷が癒えないうちにやるのは、良くはないな。

見る……とじかけた傷が少し開いてやがる。」

どうやらハシリウオの効果は劇的で、治療に役立つものだったらしいが、劇的過ぎて一部体に負荷もかかるらしい
順番は、傷を完全にふさいでからの方が良さそうだ……

「なんだ、それならまだ兄ちゃんは回復しないのか…。」

「その心配は無いのニヤ！」

例のごとく、地面から穴を掘ってモモが突然現れる
もう慣れたようだが、カナメはかなり動揺していた

「オイラ旦那さんのために、いろいろと研究を重ねたのニヤ！

そして新たに開発したのが、スカーケアGX？ニヤ！

俗に言う”人口皮膚”ってやつなのニヤ！」

「じんこうひ…何ですって？

俗に言うって、初めて聞いたわよ！

アナタ地下で何をしてるの！？」

「ニヤハハハ、それは秘密ニヤ！

旦那さんの傷は任せるニヤ、全身生まれた時のきれいな体にしてやるニヤ！」

モモは満面の笑みで穴に戻ろうとしたが、思いとどまって、マリナの足下にトコトコやって来る

「マリ姉最近暴れまわってるようだから、コイツをやるニヤ。

名付けて、”マーシャルガントレット”なのニヤ。

狩りだけでなく、冒険にも使える万能品ニヤ。

大切に使うのニヤ。」

そう言うと、今度こそモモは穴の中に消えていってしまおう
どうでもいいが、一同皆モモの地下空間を見たいと思っていた

気を取り直したマリナらは、金獅子を交えて次の治療薬探しの案を
提案する

それは、バルガスの言う大昔の沈没船に積まれていたという、幻の
素材のことであった

バルガスの話しによると、それは長い年月をかけて海底の洞窟に入
り、それがなにかの影響で洞窟の陸地に打ち上げられているらしい
情報の出どころは怪しいが、藁にもすがるマリナらは、一縷の望み
をかけていた

「(となると問題なのが…その洞窟に行く方法だな。)」

洞窟は空気が循環し陸地もあるらしいが、それでも大部分は海水に
満ちているという
それを聞いたマリナは明らかに動揺し、金獅子はそれを見逃さなか
った

「(洞窟にはマリナが行けや。)」

「(な、なんで真っ先に私なのよ!?)

親方が行けばいいじゃない!」

「（なんだお前…よもや泳げないとか言わないよな？）」

「うっ…し、失礼ね！」

泳げるわよ、波のない水辺なんてちつとも怖くないよ！」

「（そうかい、俺あ泳げねえからちようどいいな。

頼んだぞマリナ。）」

ニヤリと笑う金獅子に、マリナは強がったことを後悔した

あれだけ強気で言ってしまったので、今更言い直すことはプライドに反するため、話し合いはあつという間に決まってしまった

メンバーはマリナ、そしてお情けでカナメ、バルガスは道案内役…

…そして何故か新参のギアレックスになった

ギアレックスについては金獅子がお願いしたらしいのだが、その際、いくつか取り決めがあったようだ

詳しいことはマリナは知らないが、金獅子に頼りになると言われたので、しぶしぶ了承したのだった…

05話：現代と古代の邂逅（後書き）

第三王女：あの方のクエストは、ハンターに死ねと言ってるのでし
ようか？

バルガスでなくても、猛抗議したくなります

オーロラ見たいけど寒いから、金獅子倒してこいって……

外伝：第三王女の思い出

私は数ヶ月前まで、王都の城下町で生活していました

ある時私は、王宮に仕える姉から、侍女の仕事を紹介されました
多少の不安はありましたが、私は姉の勧めを聞き入れ、侍女になる
ことを決意しました

幸い、常日頃から目上の方に対する行動や態度を教わっていたので、
侍女になるのに苦労はしませんでした

期待と不安を胸に宿して王宮に足を運ぶと、なんと、初日から第三
王女様の侍女になるよう言われました

失礼かもしれませんが、私はその当時、王女というと第一王女様し
か、関心がありませんでした

第三王女様はどちらかというところ、わがままでいつも遊んでいる印象
を持っていました

第三王女様の侍女がつとまるか、途端に不安になった私ですが、初
めて会った時の第三王女様の印象といったら……

バルコニーで金細工が施された白い椅子に座り、端正な顔立ちに憂
いをおびたその表情を見て、同性の私でさえ見惚れてしまいました

それから私は、今日まで第三王女様に侍女として仕えてきたのです
確かに、第一王女様と比べると、政務や国民に関心を寄せるような
方ではありません

ちまたで噂になっている、ハンターに対して依頼する無理難題も何
度かこの目で見ました

しかし、第三王女様は世間一般から思われているような、典型的なわがまま王女には見えません

王女様がお遊びになる姿は見かけます…しかし、どこか寂しげであるのです

ハンターに依頼する時も、なにか思い詰めておられるようで、書き終えた時には何時も重いため息を吐かれます

私はそのご様子を見るたびに、侍女として何も出来ない自分に、もどかしさを感じています……

いつものように王女様の身の回りの世話をしていると、先輩の侍女から、王女様の寝室を掃除するよう言われました

私もようやく先輩から認められたと思い、ちよっぴり嬉しかったです

お部屋の棚やバルコニー、寝台の整理をしていると……机の上に置かれたある物に、私は目を引かれました

それは、とても上手に描かれた絵画でした

そこには、幼い時の第三王女様のお姿と、銀色の甲冑姿の青年がいました

第三王女様は今とは比べ物にならない、とても晴れ晴れとした笑顔で、その青年に抱き付く様子で描かれています

私はその青年のことが気になり、王女様に直接聞いてみることにしました

王女様はいつも通り、バルコニーにおられました…寂しげな表情を
たずさえて…

王女様に一礼をして近付くと、王女様は視線を私に移されました

「姫様、ちょっとお聞きしたいことがあります…よろしいでしょ
うか？」

「ふむ…よいぞ。」

王女様の憂いが無くなり、少しだけ微笑んでくれました

私は王女様に寝室に来ていただき、気になった絵画の青年について、
質問をしました

その際、王女様がとてもつらそうな表情をされ、私は失言だったこ
とに気付きました
重苦しい空気がお部屋を支配しましたが、王女様は先に声を発しま
した

「そなたは最近侍女になったから、知らぬのじゃな。
見ての通り…これはわらわが幼き時に、王国随一の絵師に描かせた
ものじゃ。」

王女様は懐かしそうに額縁に触れ、そしてその手を、描かれた青年
へと滑らせていく

「こやつのが知りたいのであろう？」

王女様の悪戯っぽい視線を受け、私は苦笑いをしました

王女様はクスクスと笑うと、もう一度絵画の青年に目をむけました

「こやつは王国騎士の副隊長であり、わらわの身边警護をしておった者じゃ。

十年近く前になるかの、その時のわらわは……本当に手の付けられぬ、わがまま王女じゃったと思う。

そんな時代にこの男……当時騎士だった”ヴラド”が現れたのじゃ。」

ヴラドという名には、私も聞き覚えがあります

遠いドンドルマの街で数々のモンスターを討伐し、古龍すらも撃退した強豪ハンターと聞いています

「身边警護に来る男は、騎士団の中でも随一の腕前を持ち、厳しい男と聞いておった。

その時のわらわは恐ろしくてたまらなかったのじゃが、現れたのは、健やかな笑顔のヴラドじゃった。

警戒するわらわに、ヴラドは親身に接し……身边警護以外にも、様々なことを教わったのじゃ。

幼い時父上や兄上、姉上はわらわになかなか構ってくれなかった……わらわにとってヴラドが父であり、兄であり、そして……。」

王女様はゆっくりとうつむき、恥じらいであり、頬はほんのり赤く染まっていました

「そう思ったのは、わらわが十三の時のか？

ある時わらわは周囲の警護をかくぐり、王宮を出て自然界に遊びに行ったのじゃ。

無垢なわらわは、自然界の恐ろしさを知らなかったのじゃ。」

王女様は再びバルコニーに移られ、ここから下に滑り降りたことを私に教えました

この高さを滑り降りるなんて、その時の王女様の行動力は凄まじかったのでしょう

「森丘の綺麗な野花を見に行ったわらわは、運が悪いことに、火竜に目を付けられたのじゃ。

わらわはがむしゃらに森を走り、木の陰に隠れて怯えていたのじゃ。足音が近付いてきた時には、もう駄目かと思つたのじゃが、その時ヴラドが来てくれたのじゃ。」

王女様は少し疲れたのか、バルコニーの椅子に座りました
ちよつと体力面でも、鍛えてもらわねばなりませんね

「わらわを見つけ出したヴラドは、木の陰から引つ張り出したのじゃ。

そして火竜の追撃を振り払い、安全な場所へとわらわを運んでくれ

た…。

わらわは助けに来てくれたことに嬉しくて、ヴラドに抱き付こうとしたのじゃ……じゃが、ヴラドはわらわの肩を掴み激しく叱りつけたのじゃ。」

その時の様子がよほど怖かったのか、王女様は小さく身震いしました向かうところ敵無し、王女様が怯えるなんて、ヴラドさんの恐ろしさは伝わってきます

「怒られて恐かったが、こつまでわらわを真剣に叱ってくれるヴラドが…嬉しかった。

父上は…わらわに真剣に向き合ってきてるとは思えなかった。

わらわのことを本当に理解しようとして、真面目に向き合ってくれていたのはヴラドだけじゃ。」

937

王様は名君ではありませんが、一人の父親としては、良くなかったのかも知れません

おそらく、他の御子息や御息女とは違い、第三王女様にはただ優しくただけなのでしょう

王女様はキヨロキヨロと周囲を確認なされ、誰もいないことを確認すると、ゆっくり俯かれました

「その時からわらわはヴラドに心惹かれたのじゃ……ヴラドと共にいる時間が楽しくて、わらわ自ら彼のもとを訪ねたことがある。じゃがな……彼は突然、わらわの前から姿を消してしまったのじゃ。」

「

王女様の表情が急に暗くなり、声もか細くなりました

王女様は当時のつらさを思い出されたのか、手で顔を覆い、涙を堪えています

やがて顔を覆っていた手を離されると、涙で腫れたその目を、外に向けました

「姉上たちは、ヴラドは配属転換されたと言っておったが……ウソじゃ。」

わらわは知っておる…父上が…父上が、ヴラドの影響力を恐れあらぬ罪を着せて、騎士団から追放させたことを…。

わらわは…父上が大嫌いじゃ…真実を話さぬ姉上も嫌いじゃ！」

ヴラドさんは野心無き英雄と聞き及んでおりますが、各有力者たちから、最も警戒される人物とも聞いております
王様は名君ではございますが、そんな御方でも、ヴラドさんを扱うことは出来なかったのでしょうか

「数年もの間、ヴラドは行方が知れぬ状態であった…。
じゃがある時、ヴラドという名のハンターが現れたという噂を聞いたのじゃ。」

王女様はヴラドさんを見つけるため、ハンターギルドに向けて文を書いたと…しかしそれは、返信が帰ってこなかったとのことでした

それから王女様は、ハンターギルドに向けて難題な依頼するようになったとおっしゃりました

時には自分が危険な自然界に出向き、ヴラドさんが現れるのを待ち続けていたと…

王女様が無理難題を寄越していたのは、ヴラドさんがもう一度自分の前に姿を現してくれることを、心の底から願っていたからなのです
王女様はずっと…ヴラドさんと会える日を、ずっと待ち続けていた
のですね

いつかまた会えることを信じて…

「噂では古龍と戦って、酷い火傷を負ったと聞いておるが……そんなもの関係ないのじゃ。

わらわはもう一度逢いたい…以前のようになくてもかまわぬ、ヴラドに逢いたいのじゃ…。」

王女様は零れ落ちる涙を隠そうとせず、小さな嗚咽をこぼしました
私は無礼とは承知ながら、王女様を優しく抱き締めました

王女様は少し驚きましたが、私の服を掴み、声をあげてお泣きになりました

やがて落ち着かれた王女様は私から離れ、ちよっぴり恥ずかしそうに涙を拭われました

「すまぬな……わらわに涙など、全く似合わぬのじゃ。」

「そんなことはございませぬ……私はヴラドさんに比べたら頼りないかもしれませんが、姫様を支えることは出来ます。」

「そなた……すまぬ、今少し胸を借りても良いか？」

涙を溜めた上目遣いをされれば、もちろん頷きますよ

私が微笑みながら頷いてみせると、王女様も同じように微笑まれ、ゆっくり私も胸に顔をうずめられました

第三王女様はわがままで、名君とは程遠いと言われますが、そうは思いません

王女様はこんなにも優しさを知り、哀しみを知り、愛を知ってるのですから……

たとえ世界中の人間が王女様を見限っても、私は王女様を見捨てません……そしていつか、王女様に仕えたことを誇らしく思いたいです

それとヴラドさん……王女様はあなたと逢うことを願っておられますもし、近くにいたのでしたら、どうか王女様にお逢いになってください

おや……王女様は寝てしまったようです

私ごときに無防備な姿をさらしていただけなんて、とても光栄で

すね

…っと、そろそろお夜食の準備をしなければなりませんね

名残惜しいですが…

おやすみなさい、王女様…

外伝・第三王女の思い出（後書き）

私がこの小説を投稿するにあたり、いつか書いてみたいと思っていた話です

前話にて、ちよつと第三王女が登場しましたので、よい機会だと投稿いたしました

それにしても…相変わらず、しんみりとした話しは難しいですね…

今回は海底洞窟探検であります

あと、とうぶん先になりますが、新キャラ出ます

オリジナルではありませんが、ゲームには登場しないモンスターです

942

まあ、一部の読者様にはバレてますがね（笑）

06話・海底洞窟の怪（前書き）

マリナを怖がらせてみた

06話：海底洞窟の怪

どうも……マリナです

私たちは、バルガスさんの言う大昔の沈没船を目指しています
沈没船がこの地方にあるか分かりませんが……
私たちはバルガスさんの案内のもと、道なき道を突き進んでいます
海を船で移動してますから、道なんてそもそも無いですけどね……

私、雪山育ちで今の今まで内陸で生活してきましたし、船で海上を移動するなんて初めての体験です！

水平線の彼方が太陽でキラキラ輝いていて、とっても綺麗です

船上をはしゃいでバタバタしていると、恥ずかしいことにカナメ様に笑われてしまいました

ただバルガスさんは爆笑してましたので、海に放り投げました……

うん、ロープに必死に掴まってますね

さすがに面白いそうなので、引き揚げとあげましょう……

漁に使うには大きく、黒い布地に罽毐模様の旗を掲げるそれは、正規の船とは誰の目からも見えない
察しの通り、この船は海賊船である
とはいえ、この船に海賊員など一人もおらず、乗っているのはマリナたち三人と、拠点のアイルーたちだ

この船はバルガスがあの犯罪都市で、海賊と賭博でふんだくったというものだという……というのは冗談で、王国が海賊から押収した船を盗んで改造したものだそうだが、それを聞いたカナメは、彼を一発殴り、船に掲げられた海賊旗もひたたくつて海に投げ捨てた

ギアレックスはというと、陸上生物のくせに、なんとも優雅に泳いでいる
時折海面に浮上し、大量の水しぶきをあげて潜水する……ようは遊んでいるのだ

最初こそ船の上を走り回っていたマリナだったが、今は飽きて船尾に腰掛けて釣りをしている

「……………ピクツ……………」
「……………食いついたぞ……………」

カナメに言われて竿を引く
糸の先の針には、銀色に光る魚が数匹付いており、竿を引き揚げた勢いで魚は後方に飛んでいく
それをアイルーたちが捕まえ、食事の材料となるわけだ……

そしてマリナは、調合に関しては絶望的だが、釣りに関しては達人級だ

しかし当のマリナはつまらないらしく、半開きの眠そうな眼で、黙

々と魚を釣っていただけだった

「カナメ様…面白くないです。」

「そうか…私はたくさん釣る君が羨ましいよ。」

とはいうものの、マリナほどではないがカナメもよく釣っている

「お二人さん、だいぶ釣ってるじゃないか。」

「あ…胡散臭いバルガスさんだ。」

「胡散臭い言うな。」

稀代の詐欺師って呼べ。」

「もっと質悪いじゃない。」

お互い冷静にツツコミあい、カナメは呆れたようにため息をつく

「釣りもいいが、これはもっとエキサイティングだ。」

バルガスは手に持つ弓に縄のついた矢をつがえ、それを引き絞って
水面を狙う

狙いをつけたバルガスは矢を放ち、矢に付けられた縄を引っ張って
いく

矢の先には魚が射止められており、釣り竿で穫れるよりも大きな魚であった

「面白そう、カナメ様！

私もやっていいですか!？」

「ああ、いろいろとやってみなさい。

その前に、また魚が釣れたみたいだぞ。」

カナメに指摘された通り、魚が釣れたようで竿の先が大きく揺れていた

「なかなか大物ですね……あ、ガノトトスです。」

「ああ、なら早く釣ってしまえ。

……ん?

ガノトトス……?」

「（美味そうな小魚発見!!）」

ガノトトスが水面近くに浮上したと思ったら、海底から現れたギアレックスに噛み付かれ、どこかに連れ去られてしまった

「…一体なんだったんだ？」

「地の利もクソもないな、アイツは本当になんなんだ？
…っと、目的地に着いちまったようだな。」

断崖絶壁に面する岩肌に、一カ所だけまるで隠されるかのようにある、小さな洞窟

言われなければ見落としてしまうような、存在感の無い穴であった
マリナたちは留守をアイルーらに任せ、小さなボートを漕いでその洞窟に向かう
洞窟に入る寸前、悪魔の息吹のような冷たい風が吹き、松明の火が揺れる

「ギアレックス…？」

洞窟に入る前に、ギアレックスに声をかけてみたが、彼の姿はどこにもない

マリナはキョロキョロと周囲を見回してみたが、そうしている間に、ボートは洞窟の闇に入っていた

洞窟に入ると松明以外の明かりは無くなり、明かりを受ける左右の湿った岩肌以外は、まさしくどこまでも続く闇のようだった

その静けさと暗闇に不安を覚え、マリナはそっとカナメに身体を寄せ
せる

そんな怯えた素振りを見せる少女の肩を、そっと自分の方に抱き寄せた

”まだ序盤なのだが”……そうバルガスは呟くと、松明を預けボートから降りて水中に半身浸かる

見れば、洞窟の天井が極端に低くなっており、ボートでの進行はここまでよかった

バルガスに次いでカナメがボートから、海水へ入っていく

マリナも少し躊躇った後、観念して恐る恐るボートから降りる

二人に比べて身長の小さいマリナは、この水深では溺れはしないものの、首の位置まで水に浸かってしまう

仕方なく、マリナはカナメに背負ってもらうことにし、二人の代わりに松明を持つ役目を請け負う

「すみませんカナメ様…。

あの…大丈夫でしょうか？」

「心配するな…それより、低くなっているから頭に気をつけるのだぞ。」

狭い洞窟を突き進んでいくと、少しだけ道が開けてきた

相変わらず松明がなければ暗闇になってしまふ洞窟だが、松明の明かりに照らされた洞窟内には、幻想的な世界が広がっていた

乳白色の鍾乳石が並ぶように存在し、永い年月を経て出来た鍾乳石の柱などがある

悠久の時と自然の営みが、人為的には成し得ない芸術を造り上げ、マリナらはしばし見とれていた

「一つこの洞窟の伝説を教えてやろう。」

バルガスがボウガンで周囲を警戒しながら、ポツリと呟く

「昔々…漁船や交易船を襲撃して略奪する、恐ろしい大海賊がいた。その海賊達は、当時の船のどれよりも大きく速い、血に染まる海賊旗を掲げた黒い船に乗っていた…。

彼らは自分たちを討伐しに来た軍隊を相手に、幾度となく先制攻撃をくわえ、そして常勝していた…。

海賊達は奪った金銀財宝のある場所に隠し、そして再び略奪をしていた…ある時、隠していた財宝を山分けすることにした。

しかし強欲な船長が財宝を独り占めにしようとし、怒った乗組員が寝込みを襲って惨殺した。

船長の頭は斬り落とされ、宝箱に詰められて海底洞窟にの底に沈められたという…。」

「…ちょっと…止めてよ。」

無視しようとするマリナだが、片手に松明を持っているため、耳をふさぐことは出来ない

さらに狭い洞窟がバルガスの声を反響させ、一層の恐怖心を駆りたせていた

「入江に停泊していた船に、乗組員たちが帰っていかうとしたが、帰り道に一人の乗組員が発狂した。」奴が来る、無くなった頭を探している、そしてオレたちを殺す気だ”…ソイツは叫び声をあげて走り去り、そして二度と見ることはなかった。

残りの乗組員は気にもかけなかったが、一人…また一人と消えていき、お互いに疑心暗鬼に駆られた。

きっかけはなんだったのか不明だが…乗組員たちは互いに殺し合った…血走った目で鬼のような形相、獣の叫び声に似た声をあげて。やがて全ての海賊が死に、跡に残ったのは斬り落とされた手足や、海水を真っ赤に染めるおびただしい血だ…。

以来その洞窟には、海賊の怨念…悪霊が棲み付いているという。そして部下に裏切られ凄惨な死を遂げた船長の霊が、未だに見つからない首を探し求めて……海底洞窟を徘徊しているという。」

「バルガス…お前は最低だな。」

怪談話を披露したバルガスに向けられたのは、カナメの冷やかな視線と、侮蔑だった

カナメの背には、怪談話を聞いて怯えきったマリナが、恐怖に震えて泣いていた

「ハハハハ、そうまで怖がってくれろと、怪談話の話しがいがあるつてもんだ。

大丈夫だあくまで怪談話、霊なんているわけねえ。

”ブエスガルドの嵐”に比べれば、怖くもなんともねえ。」

「お前……やはりギルドナイトに突き出した方が良さそうだな。」

その言葉にはバルガスの笑みも消え去り、数秒後には必死に謝罪する姿を見れた

06話：海底洞窟の怪（後書き）

海底洞窟…沈没船…海賊…財宝…

関係ないキーワードも混ぜて妄想してたら、こつなつた
展開進めないで、何やってんだタコ！！

モンハン以外の小説も書いてみたいと…浮気心を持ってしまつ、今
日この頃…

やるとしたら、世紀末です
どこの暗殺拳は関係ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9674v/>

生まれ変わって恐暴竜？

2011年12月21日23時52分発行